

浄願寺山古墳群

藤 井 雄 三*

The Cairns of Jogwanji-Yama Hill

要 約

昭和 8 年（1933）の発行の『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都帝国大学文学部考古学研究报告 梅原末治」は高松の中心市街地に石を積んで築造された積石塚古墳の存在を知らしめた。

それらの古墳は城下町高松の中心市街地の南西にひろがる石清尾山の山頂に位置する。その石清尾山には 200 基余りの古墳が存在する。

大部分は、上記の積石塚古墳群でなく、本稿で取り上げる古墳時代後期の横穴式石室をもつ古墳である。なかでも浄願寺山古墳群は 50 基余り集中することで知られ香川県最大の下最大の下古墳群として重要視されている。

今回、その浄願寺山古墳群について研究したのが本稿である。それによれば、古墳群において数基の古墳が並ぶ 10 グループ程度の集まりが判明した。また、外側が幾何的な構造をしている古墳も存在していることも明らかになった。

考古学の重要な手法である発掘調査を経っていない研究である。内容などが適切であるか真摯なご批判をお願いいたします。

「キーワード」 並ぶ古墳、幾何学的な構造

[Abstract]

"A Study on the Cairns on Mt. Iwaseo, in Takamatsu in the Province of Sanuki" A Report of Archaeological Research by Sueji Umehara of the Department of Literature, Kyoto Imperial University, in 1933 (Showa 8), made us aware of the existence of cairns, which were built by the piling of stones in the central area of Takamatsu.

These cairns are located on the top of Mt. Iwaseo, which extends to the southwest part of the central region of Takamatsu, a castle town. There are more than 200 mounds on Mt. Iwaseo.

Most of them are not the above-mentioned mounds, but the mounds which have horizontal hole type stone chambers from the latter part of the Kofun period. Especially, it is known that the cairns of Jogwanji-Yama Hill have about 50 mounds and are regarded as significant when viewed in light of the largest cairns group in Kagawa prefecture.

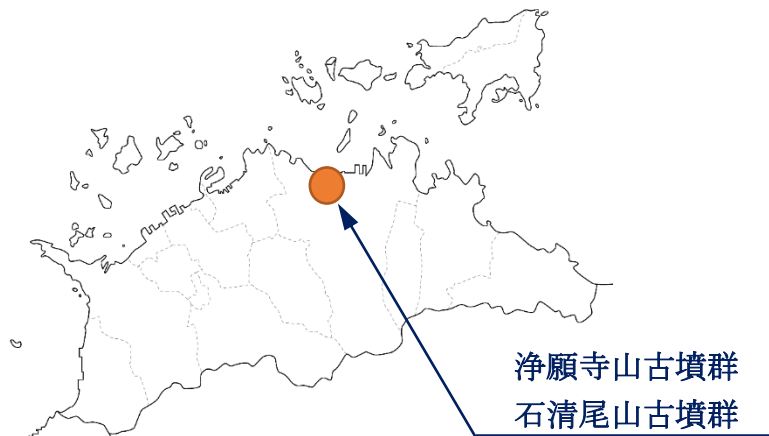
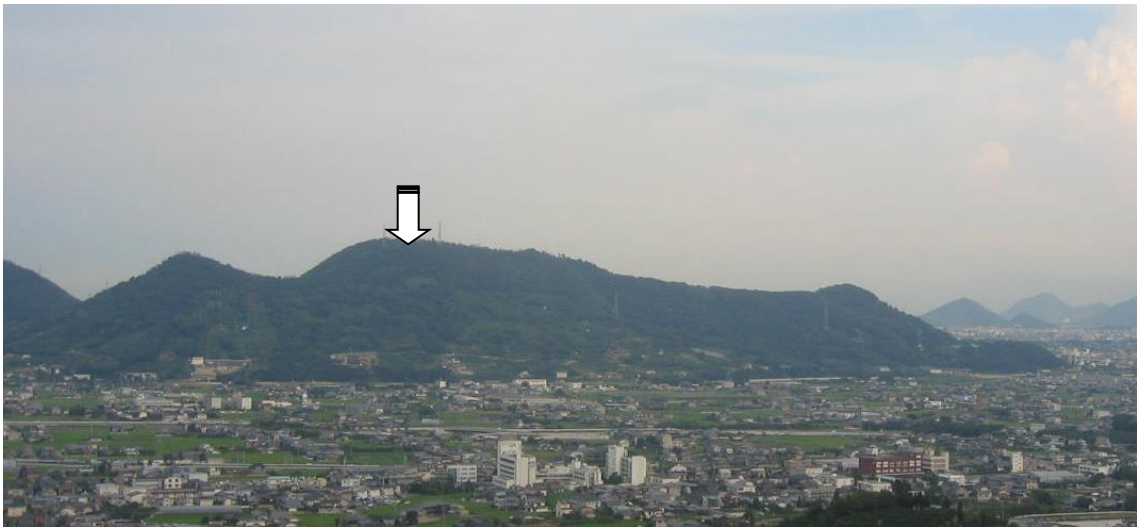
In this paper, the cairns of Jogwanji-Yama Hill are researched. According to the research, it was found that there were about 10 groups of mounds in which several were lined up in the cairns. It was also revealed that there are some mounds that have a geometric structure on the outside.

This research does not include an archaeological excavation, which is an important method of archeological research. The reader is asked to please keep this in mind when making a sincere criticism as to whether the content is appropriate.

[Keyword]

Lined up Mounds、Geometric Structure

浄願寺山古墳群



高松短期大学 秘書科
准教授 藤井雄三

凡 例

- 1 本稿は高松市飯田町・西春日町に所在する浄願寺山古墳群について、調査研究を行ったものである。
- 2 調査は高松市が作成した赤色立体図と、それを元に高松大学・高松短期大学が委託作成した等高線図をもとに行った。
「文化財資料の写真撮影及び掲載について（許可）」令和3年8月25日付高文財544号で、許可。
- 3 上記、等高線図作成委託先は「株式会社 四航コンサルタント 高松市上福岡2057番地6」である。
- 4 浄願寺山古墳群については、先行するに発行された「石清尾山塊古墳群調査報告 昭和50年（1975）」の内容を前提にして実施した。
- 5 調査の内容は主に等高線図をもとにして、TREND-POINT（トレンドポイント）を用いて求めた数値を分析することによって行っている。
- 6 また、各古墳について以下の数値を求めるために行ったのであり、現地で踏査を実施したうえで行うことが必要であるが、その作業は行っていない。従って、おのずと限界がある。それを前提としたうえで説明を進める。
- 7 分りやすい説明をこころがけるため、必要に応じて箇条書きを用いた。
- 8 協力者
本稿作成にあたり、下記の関係機関並びに方々からご教示・ご協力をいただいた。
香川県埋蔵文化財センター、高松市創造都市推進局文化財課
井上浩巳、ウィリアムズR. T.、大久保徹也、川端聡、佐藤竜馬、高上拓、西岡達哉、信里芳紀、山本英之、山元敏裕

目 次

はじめに	1 P
第 1 章 浄願寺山古墳群の現状	3 P
第 1 節 浄願寺山古墳群の定義	3 p
第 2 節 地形と地質	4 p
第 3 節 地理的環境と歴史的環境	4 p
第 4 節 民俗学から見ると	8 p
第 5 節 浄願寺山古墳群とは	8 p
第 2 章 基本情報等	10 P
第 1 節 本古墳群の立地	10 p
第 2 節 番号の付与	11 p
第 3 節 検証の一手法	12 p
第 4 節 取得データ	13 p
第 5 節 区分（平面積と体積から）	14 p
第 6 節 古墳のグループ	16 p
第 7 節 添付資料の概説	17 p
第 3 章 計測作業など	18 P
第 1 節 古墳の計測	18 p
第 2 節 求めた数値	18 p
第 4 章 標高と勾配	20 P
第 1 節 立地標高	20 p
第 2 節 勾配	21 p
第 5 章 長径・短径と高さ	25 P
第 1 節 長径および短径	25 p
第 2 節 長径÷短径比率	27 p
第 3 節 高さ	29 p
第 6 章 面積	33 P
第 1 節 平面積	33 p
第 2 節 表面積	35 p
第 3 節 表面積÷平面積の比率、表面積と平面積の差	37 p
第 7 章 体積	41 P
第 1 節 体積	41 p
第 8 章 様々なデータから	45 P
第 1 節 平面積と体積	45 p
第 2 節 体積÷平面積	47 p

第3節	四指標について	49 p
第9章	古墳の墳形	52 P
第1節	墳形について	52 p
第2節	墳形各種	53 p
第3節	古墳の築造について	58 p
第10章	古墳溝	61 P
第1節	溝について	61 p
第2節	溝を有しない古墳	65 p
第11章	多角形を呈する古墳	67 P
第1節	直線的外縁を持つ古墳	68 p
第2節	直線的外縁を持つ古墳の築造順など	76 p
第12章	横穴式石室の現状	80 P
第1節	横穴式石室の開口方向	80 p
第2節	各古墳の横穴式石室	82 p
第3節	横穴式石室と本古墳群の現状	87 p
第13章	並ぶ古墳	91 P
第1節	列の形成	91 p
第2節	並ぶ古墳の築造順序など	93 p
第3節	直列古墳	93 p
第4節	順列古墳	98 p
第5節	並列古墳など	107 p
第6節	並ぶ古墳のまとめ	109 p
第7節	グループ化	112 p
第14章	古墳群の周辺について	115 P
第1節	古墳の可能性のある地点	115 p
第2節	採土跡地について	119 p
まとめ		122 P

図版・挿図一覧

第 1 図	鏡塚古墳等高線図	1 p
第 2 図	浄願寺山古墳群の周辺／史跡・古墳等	5 p
第 3 図	片山池 1 号窯跡	7 p
第 4 図	浄願寺山古墳群 赤色立体図	10 p
第 5 図	浄願寺山古墳群 浄願寺山古墳群と山頂付近の等高線図	10 p
第 6 図	浄願寺山古墳群 調査報告記載分布図	11 p
第 7 図	浄願寺山古墳群 分布図	12 p
第 8 図	浄願寺山古墳群 グループ	16 p
第 9 図	浄願寺山古墳群 立地標高分布図	20 p
第 10 図	浄願寺山古墳群 勾配分布図	22 p
第 11 図	浄願寺山 17 号墳 等高線図	23 p
第 12 図	浄願寺山古墳群 長径短径比較分布図	25 p
第 13 図	浄願寺山古墳群 長径÷短径比率分布図	27 p
第 14 図	浄願寺山古墳群 高さ分布図	30 p
第 15 図	浄願寺山古墳群 平面積分布図	33 p
第 16 図	浄願寺山 2 号墳 等高線図	34 p
第 17 図	浄願寺山古墳群 表面積分布図	36 p
第 18 図	浄願寺山古墳群 表面積÷平面積の比率分布図	37 p
第 19 図	浄願寺山古墳群 表面積と平面積の差分布図	38 p
第 20 図	浄願寺山 10 号墳 等高線図	39 p
第 21 図	浄願寺山 13 号墳 等高線図	39 p
第 22 図	浄願寺山 23 号墳 等高線図	41 p
第 23 図	浄願寺山古墳群 体積分布図	42 p
第 24 図	浄願寺山古墳群 平面積、体積区分分布図	45 p
第 25 図	浄願寺山古墳群 体積÷平面積分布図	47 p
第 26 図	浄願寺山 34 号墳 等高線図	48 p
第 27 図	浄願寺山 44 号墳 等高線図	49 p
第 28 図	浄願寺山古墳群 50 号墳ほか	51 p
第 29 図	浄願寺山古墳群所在地付近断面図	51 p
第 30 図	浄願寺山 1 号墳 等高線図	52 p
第 31 図	浄願寺山古墳群 墳形分布図	53 p
第 32 図	浄願寺山 32 号墳ほか 長楕円形古墳群	54 p
第 33 図	浄願寺山 A の周辺に所在する古墳	55 p
第 34 図	浄願寺山古墳群 南東辺における古墳の分布状況	56 p

第 35 図	浄願寺山古墳群	15 号墳、19 号墳等	等高線図	57 p
第 36 図	浄願寺山古墳群	26 号墳	等高線図	58 p
第 37 図	浄願寺山古墳群	横穴式石室遺存状況	10 号墳、13 号墳、26 号墳	58 p
第 38 図	浄願寺山古墳群	墳丘築造工程	模式図	60 p
第 39 図	浄願寺山古墳群	赤色立体図	部分	61 p
第 40 図	浄願寺山古墳群	4 号墳、5 号墳	等高線図	61 p
第 41 図	浄願寺山古墳群	47 号墳	等高線図	61 p
第 42 図	浄願寺山古墳群	30 号墳	等高線図	62 p
第 43 図	浄願寺山古墳群	39 号墳、40 号墳	等高線図	63 p
第 44 図	各古墳の陸橋（各円内）	の状況		64 p
第 45 図	浄願寺山古墳群	直線的外縁を有する古墳	分布図	67 p
第 46 図	浄願寺山 3 号墳	直線的外縁	模式図	68 p
第 47 図	浄願寺山 3 号墳	直線的外縁関係図		68 p
		赤色立体図、直線的外縁位置図、等高線図		
第 48 図	浄願寺山 4 号墳	直線的外縁関係図		71 p
		赤色立体図、直線的外縁位置図、等高線図		
第 49 図	浄願寺山 19 号墳	直線的外縁関係図		72 p
		赤色立体図、直線的外縁位置図、等高線図		
第 50 図	浄願寺山 28 号墳	直線的外縁関係図		73 p
		赤色立体図、直線的外縁位置図、等高線図		
第 51 図	浄願寺山 32 号墳	直線的外縁関係図		74 p
		赤色立体図、直線的外縁位置図、等高線図		
第 52 図	浄願寺山 41 号墳	直線的外縁関係図		75 p
		赤色立体図、直線的外縁位置図、等高線図		
第 53 図	浄願寺山 45 号墳	直線的外縁関係図		75 p
		赤色立体図、直線的外縁位置図、等高線図		
第 54 図	浄願寺山 11 号墳、12 号墳、15 号墳、19 号墳	の状況		76 p
第 55 図	浄願寺山古墳群	直線的外縁を持つ古墳の推定築造順		77 p
第 56 図	浄願寺山古墳群	横穴式石室推定開口方向	分布図	80 p
第 57 図	浄願寺山古墳群	24 号墳、25 号墳	等高線図	81 p
第 58 図	浄願寺山 3 号墳	等高線図		83 p
第 59 図	浄願寺山 3 号墳	横穴式石室	状況	83 p
第 60 図	浄願寺山 10 号墳	墳丘		84 p
第 61 図	浄願寺山 7 号墳、13 号墳	墳丘	状況	85 p
第 62 図	浄願寺山 32 号墳	横穴式石室	状況	86 p
第 63 図	横穴式石室	の遺存状況	分布図	87 p
第 64 図	浄願寺山古墳群	A 群と B 群	の現況	88 p
第 65 図	浄願寺山 20 号墳	赤色立体図、等高線図		90 p

第 66 図	並ぶ古墳 各群	91 p
第 67 図	直列古墳 I (1号墳、2号墳、3号墳)	94 p
第 68 図	直列古墳 II (32号墳、34号墳、36号墳、38号墳)	96 p
第 69 図	順列古墳 I (3号墳、4号墳、5号墳)	99 p
第 70 図	順列古墳 II (3号墳、7号墳、10号墳)	100 p
第 71 図	順列古墳 III (7号墳、13号墳、14号墳、17号墳) 順列古墳 IV (10号墳、11号墳、12号墳、15号墳)	102 p
第 72 図	順列古墳 V (21号墳、20号墳、19号墳、18号墳)	103 p
第 73 図	順列古墳 VI (26号墳、25号墳、24号墳)	105 p
第 74 図	順列古墳 VII (30号墳、29号墳、28号墳、27号墳)	107 p
第 75 図	並列古墳 I (38号墳、37号墳、39号墳、40号墳)	108 p
第 76 図	参考 I (41号墳、42号墳、43号墳)	108 p
第 77 図	浄願寺山古墳群 並ぶ古墳模式図	110 p
第 78 図	浄願寺山古墳群 古墳候補地ほか 分布図	115 p
第 79 図	浄願寺山古墳群 候補地 i	115 p
第 80 図	浄願寺山古墳群 候補地 ii、iii	116 p
第 81 図	浄願寺山古墳群 候補地 iv	116 p
第 82 図	浄願寺山古墳群 候補地 v	116 p
第 83 図	浄願寺山古墳群 候補地点 vi	117 p
第 84 図	浄願寺山古墳群 候補地 vii	117 p
第 85 図	浄願寺山古墳群 候補地 ix、x	118 p
第 86 図	浄願寺山古墳群 候補地点 xi	118 p
第 87 図	浄願寺山古墳群 候補地 xii	118 p
第 88 図	浄願寺山 A 【I. 浄願寺山 A 等高線図、II. 同赤色立体図、III. 同求面積図】	119 p
第 89 図	浄願寺山 B	121 p
第 90 図	浄願寺山 C	121 p
第 91 図	浄願寺山古墳群	126 p

北西部、南東部における主要古墳築造順序推定図

図表一覧

第 1 表	浄願寺山古墳群	標高	20 p
第 2 表	浄願寺山古墳群	勾配	21 p
第 3 表	浄願寺山古墳群	長径短径	25 p
第 4 表	浄願寺山古墳群	長径・短径比率	27 p
第 5 表	浄願寺山古墳群	長径÷短径比率の基数等	29 p
第 6 表	浄願寺山古墳群	高さ	29 p
第 7 表	浄願寺山古墳群	平面積	33 p
第 8 表	浄願寺山古墳群	表面積 平面積	36 p
第 9 表	浄願寺山古墳群	面積比率、両値の差	37 p
第 10 表	浄願寺山古墳群	体積	41 p
第 11 表	浄願寺山古墳群	体積／平面積	47 p
第 12 表	浄願寺山古墳群	高さ、面積の比率、両値の差、体積／面積	50 p
第 13 表		直線的外縁の角度と距離	78 p
第 14 表	浄願寺山古墳群	横穴式石室推定開口方位	81 p
第 15 表		高松市内主要古墳玄室一覧表	84 p
第 16 表		高麗尺との比較 I	95 p
第 17 表		高麗尺との比較 II	98 p

添付、表およびグラフ等一覧表

1. 「石清尾山塊古墳群調査報告」記載の浄願寺山古墳群各古墳データ I～V		G 101
2. 浄願寺山古墳群 各古墳データ I～III		G 102
3. 浄願寺山古墳群 本報告長径 調査報告径		G 201
4. 浄願寺山古墳群 本報告短径 調査報告径		G 202
5. 浄願寺山古墳群 本報告高さ 調査報告高さ		G 203
6. 浄願寺山古墳群 各古墳 平面積概要		G 301
7. 浄願寺山古墳群 各古墳 体積概要		G 302
8. 浄願寺山古墳群 平面積を基準とした区分(区画)		G 303
9. 浄願寺山古墳群 平面積 基数と割合		G 304
10. 浄願寺山古墳群 平面積 総面積と割合		G 305
11. 浄願寺山古墳群 平面積を基準とした区分と体積を基準とした区分の関係		G 306
12. 浄願寺山古墳群 体積を基準とした区分		G 307
13. 浄願寺山古墳群 体積 基数と割合		G 308
14. 浄願寺山古墳群 体積 総体積と割合		G 309
15. 浄願寺山古墳群 体積を基準とした区分と平面積を基準とした区分との関係		G 310
16. 浄願寺山古墳群 高さに関する四指標		G 311
17. 浄願寺山古墳群 墳丘形状区分と属する古墳		G 312
18. 浄願寺山古墳群 墳丘形状区分と基数		G 313
19. 浄願寺山古墳群 墳丘形状と数値		G 314
20. 浄願寺山古墳群 横穴式石室推定開口方向概要		G 315
21. 浄願寺山古墳群 立地標高		G 401
22. 浄願寺山古墳群 立地標高比較		G 402
23. 浄願寺山古墳群 立地標高基数		G 403
24. 浄願寺山古墳群 勾配比較 I		G 404
25. 浄願寺山古墳群 勾配比較 II		G 405
26. 浄願寺山古墳群 勾配比較基数		G 406
27. 浄願寺山古墳群 長径・短径比較 I		G 407
28. 浄願寺山古墳群 長径・短径比較 II		G 408
29. 浄願寺山古墳群 長径・短径基数		G 409
30. 浄願寺山古墳群 短径/長径比率および差		G 410
31. 浄願寺山古墳群 短径/長径比率		G 411

32.	浄願寺山古墳群	短径／長径比率基数	G 412
33.	浄願寺山古墳群	墳丘高さ比較 I	G 413
34.	浄願寺山古墳群	墳丘高さ比較 II	G 414
35.	浄願寺山古墳群	墳丘高さ基数	G 415
36.	浄願寺山古墳群	平面積・表面積比較 I	G 416
37.	浄願寺山古墳群	平面積	G 417
38.	浄願寺山古墳群	平面積・表面積比較 II	G 418
39.	浄願寺山古墳群	表面積 表面積／平面積比率	G 419
40.	浄願寺山古墳群	表面積／平面積、表面積－平面積	G 420
41.	浄願寺山古墳群	表面積、平面積基数	G 421
42.	浄願寺山古墳群	表面積／平面積基数	G 422
43.	浄願寺山古墳群	平面積－表面積、高さ	G 423
44.	浄願寺山古墳群	体積 I	G 424
45.	浄願寺山古墳群	体積 II	G 425
46.	浄願寺山古墳群	基数と総体積比数	G 426
47.	浄願寺山古墳群	体積基数	G 427
48.	浄願寺山古墳群	立地標高・平面積比較	G 428
49.	浄願寺山古墳群	立地標高・体積比較	G 429
50.	浄願寺山古墳群	平面積・体積 区分（区画）関係グラフ	G 430
51.	浄願寺山古墳群	区分関係グラフ 体積÷平面積 I	G 431
52.	浄願寺山古墳群	区分関係グラフ 体積÷平面積 II	G 432
53.	浄願寺山古墳群	高さ、平面積、体積比較	G 433
54.	浄願寺山古墳群	平面積と体積	G 434
55.	浄願寺山古墳群	高さに関する数値	G 435
56.	浄願寺山古墳群	横穴式石室推定開口方向	G 436
57.	直列古墳 I（1号墳、2号墳、3号墳）		G 501
58.	直列古墳 II（32号墳、34号墳、36号墳、38号墳）		G 502
59.	順列古墳 I（3号墳、4号墳、5号墳）		G 503
60.	順列古墳 II（3号墳、7号墳、10号墳）		G 504
61.	順列古墳 III（7号墳、13号墳、14号墳、17号墳）		G 505
62.	順列古墳 IV（10号墳、11号墳、12号墳、15号墳）		G 506
63.	順列古墳 V（21号墳、20号墳、19号墳、18号墳）		G 507
64.	順列古墳 VI（26号墳、25号墳、24号墳）		G 508
65.	順列古墳 VII（30号墳、29号墳、28号墳、27号墳）		G 509
66.	並列古墳 I（38号墳、39号墳、40号墳、37号墳）		G 510
67.	参考 I（41号墳、42号墳、43号墳）		G 511

68. 参考Ⅱ（4号墳、5号墳、9号墳、8号墳）————— G512
69. 参考Ⅲ（30号墳、26号墳、21号墳）————— G513

はじめに

平成 25 年度、高松市は史跡石清尾山古墳群の管理、調査、保存などを円滑に実施するために「石清尾山古墳群ヘリレーザー測量業務委託」を実施した。

実際の計測は、GNSS/IMU装置・レーザー測距装置および解析ソフトから構成され、必要な計測機材を装備したヘリコプターを使用し計測範囲の航空レーザー計測を行ったものである。

航空レーザー計測のスキャン密度は、1.0m×1.0mメッシュに 30 点以上のレーザー一点が照射されるように設定している。

測量の対象は高松市の中心市街地に位置する里山・石清尾山塊である。具体的に言えば、猫塚古墳などの国史跡指定古墳が所在する石清尾山、当時は未指定であった稲荷山姫塚古墳などが所在する稲荷山、そして本稿でとりあげる浄願寺山古墳が所在する浄願寺山の三つの山～この三座を『石清尾山塊』と通称する～が、その対象である。

作成された赤色立体図は精密で、石清尾山塊の地形などにおいて多くの情報を得ることができた。それまで円墳とされていた稲荷山北端古墳が石清尾山古墳群中三例目の双方中円墳であることが確認できたのは、作成された赤色立体図が大きな役割を果たしたところである。そして 2 基の前方後円墳・稲荷山姫塚古墳、稲荷山南塚古墳と円墳の稲荷山南塚北古墳とともに 4 基の積石塚古墳が、国史跡石清尾山古墳に追加指定された。

また、本稿で取り上げた浄願寺山古墳群（以下『本古墳群』と呼ぶ）について、浄願寺山の山頂をめぐる群集する古墳時代後期の古墳群の様子が手に取るように図示されていた。

そこで高松大学、高松短期大学において与えられた研究費を充て、赤色立体図をもとに下記の古墳およびその周囲を対象に等高線図の作成を試みた。

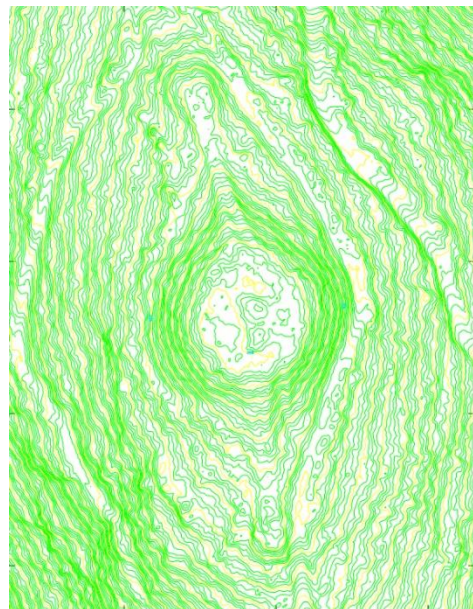
史跡石清尾山古墳群のうち猫塚古墳、姫塚古墳、石船塚古墳、鏡塚古墳、北大塚古墳などの各古墳平面図は、昭和 8 年（1933）に発行された京都帝国大学の報告書¹記載の測量図が現在も使用されている。それらより詳細な図を手にすることが目的である。各古墳の現状により近い姿を知るためである。

あわせて、ほとんど資料のない本古墳群のより詳しいデータを得ることを期待し、浄願寺山古墳群も等高線図作成の対象に加えた。

結果、特に本古墳群に限っていえば、期待以上であったと考えている。

対象とした古墳

- 1 猫塚古墳（積石塚古墳、双方中円墳、国指定史跡）
- 2 姫塚古墳（積石塚古墳、前方後円墳、国指定史跡）



第 1 図 鏡塚古墳等高線図

¹ 梅原末治 昭和 8 年（1933）「讃岐高松石清尾山石塚の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第 12 冊 刀江書院

- 3 鶴尾神社4号墳（積石塚古墳、前方後円墳、国指定史跡）
- 4 鶴尾神社1号墳、同2号墳、同3号墳（積石塚古墳、円墳）
- 5 小塚古墳（積石塚古墳、前方後円墳、国指定史跡）
- 6 石船塚古墳（積石塚古墳、前方後円墳、国指定史跡）
- 7 鏡塚古墳（積石塚古墳、双方中円墳、国指定史跡）
- 8 北大塚古墳、北大塚西古墳、北大塚東古墳（積石塚古墳、方墳、前方後円墳、前方後円墳、国指定史跡）
- 9 石清尾山9号墳（積石塚古墳、前方後円墳、国指定史跡）
- 10 浄願寺山古墳群（盛土古墳、円墳他）

本稿では、作成された等高線図を、提供されたTREND-POINT（トレンドポイント）限定版²を使って、墳丘計測、観察などの様々な試みを行うこともできた。事業のもととなった赤色立体図も加え、上記、試みによって得られたデータを活用することによって、様々な知見を得ることができた。本稿はその結果をまとめたものである。

ただし、現地調査を行っていない点は明記しておきたい。

² 福井コンピュータ株式会社作成の3D点群処理システム「TREND-POINT（トレンドポイント）は、膨大な点群データを快適に取り扱え、豊富なフィルターによる点群データ加工や断面作成、メッシュ土量計算など、国土交通省”i-Construction”関連の各種要領や農林水産省「情報化施工技術の活用ガイドライン」に準拠した成果作成を実現！」とある。
https://const.fukuicompu.co.jp/products/trendpoint/index.html?clid=EAIaIQobChMI4omF29eH7QIV1VVgCh0WNAIYEAAAYAiAAEgLjz_D_BwE

第1章 浄願寺山古墳群の現状

浄願寺山古墳群の名称にもなっている浄願寺山は、最高所の浄願寺山南の小山、北の野山の3つのピークからなる。浄願寺山と小山は緩やかな傾斜の山頂部を持ち、野山はやや尖ったピークを呈する。そして、野山の北東にある切通しと呼ばれる峠で、史跡石清尾山古墳群中最大の古墳である猫塚古墳が位置する石清尾山の南西部につながっている。

一方、浄願寺山の西山裾を洗うように香東川が北流し、瀬戸内海に流れ込む。東側にも御坊川と呼ばれる小さな河川が、小山の南方から紫雲山の南のピーク室山の南に向かって流れた後、北東方向に向かい瀬戸内海に流れ込む。

紫雲山の東山裾をめぐる旧河道のひとつを利用して作庭されたのが、特別名勝栗林公園である。なお、石清尾山塊の東側に紫雲山は栗林公園の借景として知られている。

浄願寺山を含む石清尾山塊は西から南、そして東方へと高松平野は広がっている。一方、北側は瀬戸内海に接している。このように山塊は高松平野に浮いた島とでもいうべき状況を呈している。

小山の南方は勅使町で、その小山から浄願寺山を経て野山に至る稜線の西側が、高松市鶴市町、飯田町で東側が西春日町である。そして西側の前2町の鶴市町、飯田町は弦打地区に、勅使町と西春日町は鶴尾地区に属する。なお、高松市との合併以前は、鶴尾地区は香川郡鷺田村、弦打地区は香川郡弦打村と称した¹。

さらに平安時代の和名類聚抄に記述された郷名では、弦打地区は飯田郷、鶴尾地区は坂田郷にあたり、両郷はともに香川郡に属していた。

現在、浄願寺山一帯は麓を除いて山頂から中腹にかけては雑木林が広がり、それ以外の特別な土地利用は行われていない。本稿の対象である浄願寺山古墳群はその山頂に位置する。もちろん、付近には雑木林が広がっている。

第1節 浄願寺山古墳群の定義

昭和50年(1975)に発行された『石清尾山塊古墳群調査報告』²(以下『調査報告』とする)によれば、浄願寺山古墳群は57基の古墳から構成されている。そのうちの1号墳から50号墳までの50基が今回の等高線図の作成、かつ、本研究の対象である。

等高線図作成の対象から除いた浄願寺山51号墳から同57号墳の7基は、南に延びる尾根線上に並ぶ古墳である。いずれも径8m前後の古墳で、他の50基の古墳と大きく変わることはない。これら57基の古墳の各古墳の『調査報告』記載のデータを表として末尾(G101)に掲載しているので、参考にされたい。

なお、本稿で浄願寺山古墳群(以下『本古墳群』とする³)と呼称した場合は50基の古墳を指す。

¹ 鷺田村は昭和15年(1940)2月11日、弦内村は昭和31年(1956)9月30日に高松市に編入合併されている。

² 石清尾山塊古墳群調査報告1973.3 編集 高松市教育委員会 発行 高松市教育委員会ほか

第2節 地形と地質

浄願寺山（標高 239.5m⁴）は、石清尾山塊と総称される山塊の南部を占める。その山塊は石清尾山（標高 232.4m⁵）を中心に西に紫雲山～稻荷山・室山（標高 199.8m⁶）とも称する～が並び、南に浄願寺山が並ぶ。そして周囲を平野に囲まれた丘陵である。

本古墳群が所在する場所は、浄願寺山山頂（標高 239.5m／等高線図によれば、最高地点の標高は 239.9m以上、240.0m未満である）と説明されるが、詳細に言えば山頂ではなく、山頂の周囲（山頂の西から南）にあたる。

浄願寺山は、香川県内にみられる他の山と同様、山頂部が比較的平らで周囲が急峻な山である。基盤は花崗岩で、その上に讃岐岩質凝灰岩が堆積し、それを覆うようにして讃岐岩質安山岩が重なっている。⁷

浄願寺山3号墳（以下、各古墳については浄願寺山を省略し、『○号墳／○はアラビア数字』と表記する）を囲む溝や21号墳、22号墳、25号墳の東方付近の採土跡地・浄願寺山A【第14章第2節1】においては、1m前後の掘削が認められる。

さらに10号墳東方の小規模な湛水施設や、5号墳の南東に掘られた井戸は開墾に伴う採水施設である。後者は1.1mほど掘られており、井戸底では讃岐岩質安山岩層には到達していないと思われる。

以上から本古墳群が所在する山頂においては、同じ石清尾山塊の紫雲山のように讃岐岩質安山岩が露出するのではなく、同岩の風化土が山頂一帯を覆っていると考えておきたい。

第3節 地理的環境と歴史的環境

本古墳群の周辺の歴史的環境を簡単に記載しておきたい。

1 史跡石清尾山古墳群

「讃岐高松石清尾山石塚の研究」⁸（以下『京大報告』とする）および『調査報告』などによれば、これら石清尾山塊には全てで200基余の古墳が存在しており、これを総称して石清尾山古墳群と呼ぶ。

ここでいう石清尾山古墳群は広義のそれであり、石清尾山と紫雲山の限られた尾根上に点在する国史跡に指定された積石塚古墳群も石清尾山古墳群と呼称されるが、これらは狭義の石清尾山古墳群で、人口に膾炙しているのは狭義の石清尾山古墳群である。

石清尾山の尾根（峰山ともいう）上に立地する古墳に猫塚古墳【11】、姫塚古墳【9】、鶴尾神社4号墳【10】、小塚古墳【8】、石船塚古墳【7】、鏡塚古墳【6】、北大塚、同東、同西古墳【5】、石清尾山9号墳【13】が、紫雲山の尾根上に並ぶ古墳に稲荷山北端古墳【2】、稲荷山姫塚古墳【3】、稲荷山南塚、同北古墳【4】がそれぞれあげられる。これらの14基の古墳はす

⁴ 浄願寺山の位置 北緯 34.32 度、東経 134.02 度

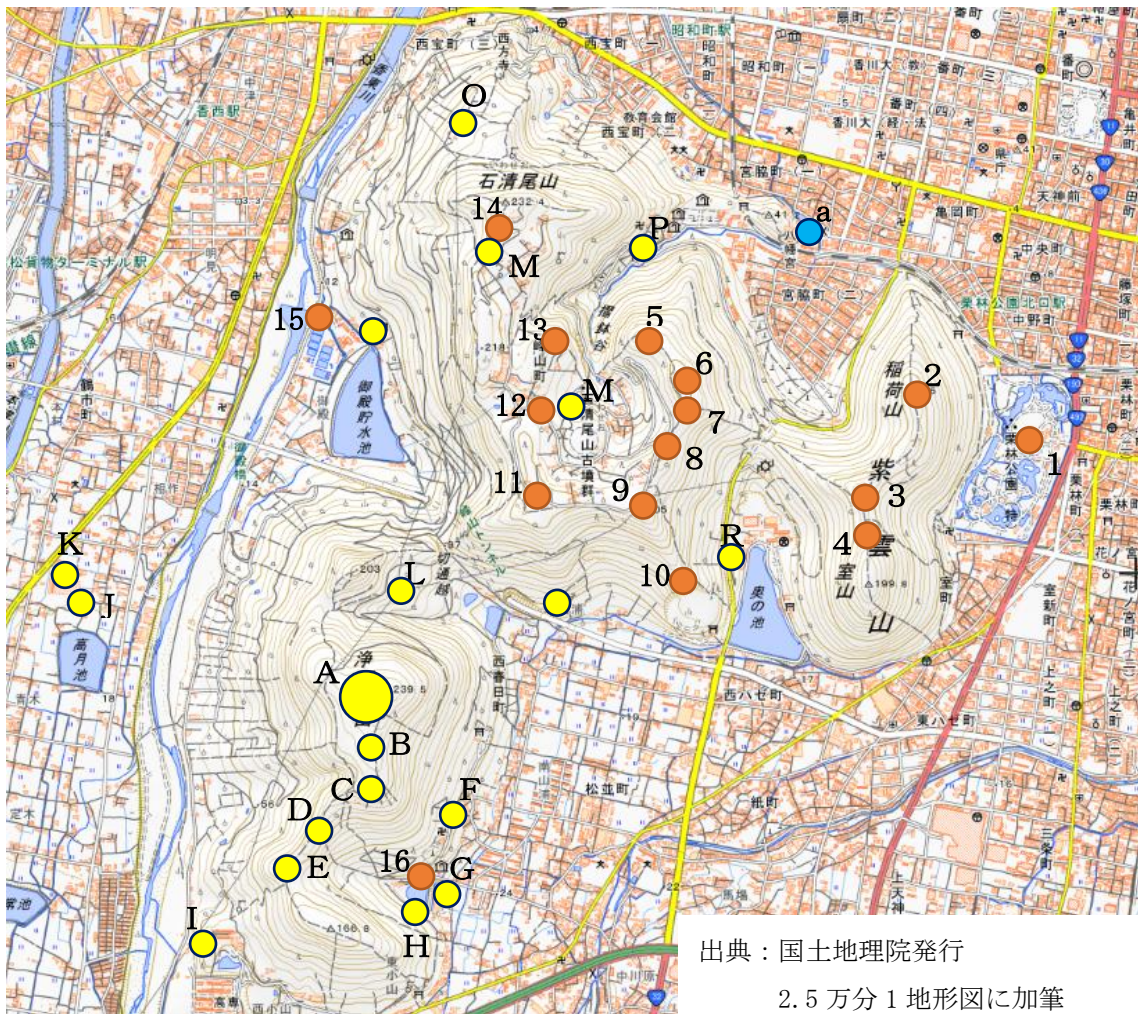
⁵ 石清尾山の位置 北緯 34.34 度、東経 134.02 度

⁶ 室山の位置 北緯 34.33 度、東経 134.04 度

⁷ 讃岐のジオサイト(13) 石清尾山より 香川大学工学部安全システム建設工学科 長谷川研究室(長谷川修一、鶴田聖子)編

⁸ 梅原末治 1933『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告 12

べて積石塚古墳であり、かつ国史跡⁹の指定を受けた古墳である。



第 2 図 浄願寺山古墳群の周辺／史跡・古墳等

- 指定文化財

1 特別名勝栗林公園	2 稲荷山北端古墳	3 稲荷山姫塚古墳
4 稲荷山南塚古墳・同北古墳	5 北大塚古墳、同東古墳、同西古墳	
6 鏡塚古墳	7 石船塚古墳	8 小塚古墳
10 鶴尾神社 4 号墳	11 猫塚古墳	12 石清尾山 2 号墳
14 石清尾山 1 号墳	15 高松水道資料館	13 石清尾山 9 号墳
16 片山池 1 号窯跡		
- 域内の主な古墳

A 浄願寺山古墳群	B 同 51～54 号墳	C 同 55 号墳	D 同 56 号墳
E 同 57 号墳	F 南山浦古墳群	G 坂田廃寺跡	H 片山古墳
I がめ塚古墳	J 相作馬塚古墳跡	K 相作牛塚古墳跡	L 野山古墳群
M 摺鉢谷古墳群	O 木里神社古墳	P 峰山墓地古墳	Q 奥の池古墳群
- その他

a 石清尾八幡宮

墳形は双方中円墳 3 基、前方後円墳 9 基、方墳 1 基、円墳 1 基とバラエティに富む。不規則に石材を積みあげたように見えるが、石を組み上げた段築が明瞭に残る古墳も少なくない。部分的ではあるが、高く積み上げた古墳築造時の姿を留めている。全国でも類例をみない貴重な

⁹ 史跡石清尾山古墳群には積石塚古墳のほかにも横穴式石室墳が 2 基指定されている。

姿であり、稀有な保存状態だけでも貴重な文化遺産といえよう。

なお、これらの古墳の多くは古墳時代の前期、なかでも鶴尾神社4号墳、稲荷山北端古墳などは前期初頭の所産と考えられる。一方、新しい時期、前期末の古墳としては刳拔式石棺を持つ石船塚古墳があげられる。

以上、国史跡に指定された石清尾山の積石塚古墳は、古墳時代前期初頭からほぼ前期の期間にわたって順次、築造されたもので、全国に類例をみない貴重な古墳として、高い価値を有する。

上記のほかにも積石塚古墳はいくらか存在する。例えば、鶴尾神社4号墳の上方に位置した3号墳、2号墳、1号墳などであり、いずれも円墳と考えられている。これらの古墳の築造時期など詳細は不明である。しかし、後記する横穴式石室の時代までくだるものではない。これらの古墳は前期に築造された国史跡指定の積石塚古墳に続く可能性が高い。

積石塚古墳と浄願寺山古墳群などの後期古墳には連続性がみられない。その間を埋める古墳の候補の1基が、浄願寺山の西南に位置する盛土の前方後円墳・がめ塚古墳【I】である。古墳時代中期前葉とされる古墳で、調査報告では前方後円墳であったとされるが、近年、帆立貝式古墳との指摘がある。¹⁰

2 古墳時代後期の古墳

古墳時代後期になると、石清尾山、浄願寺山の西裾を北流する香東川と、その西をほぼ並行して流れる本津川の間において行われた発掘調査の結果、存在が確認された相作馬塚古墳【K】があげられる。短甲を埋納した竪穴式石室を持つ古墳で、古墳時代後期になってからの所産と考えられる。相作馬塚に先行する挂甲小札等を出土した相作牛塚古墳【J】も近隣に所在する。

両者の付近には塚が点在しており、他にも古墳が所在する可能性がある。その地域は本古墳群の位置から見下ろせる一帯であり、今後も注目しておく必要がある。¹¹

先述したように本古墳群【A】の位置する付近は、飯田郷と坂田郷の両郷の境界にあたる。現在の境界線は山の稜線であり、各古墳はその稜線をまたいで分布する。ただし、本古墳群の主要な古墳は飯田町域に所在し、飯田郷に属したと推定される。なお、西春日町側に位置する古墳は群中の東部域に所在する古墳（後記する第3グループの古墳）がほとんどである。浄願寺山々頂における古墳の出現は前者の地域においてであり、終焉は後者の地域である可能性が高い。

ところで、本古墳群の所在する山頂部より南に延びる稜線上にもいくつか古墳が並ぶ。これについても先述したように浄願寺山古墳群の一部とされており、北から51号墳、52号墳、53号墳、54号墳【B】と呼ばれる。さらに少し離れて55号墳【C】、56号墳【D】、57号墳【E】が点々と並ぶ。

なお、浄願寺山の南のピークである小山山頂にも古墳が所在したことが、『京大報告』に記載されている。

一方、京大報告では、浄願寺山の北のピーク野山から北東に下る尾根筋に3基の小型の積石塚古墳の存在が報告されているが、『調査報告』は1基しか残存していないとしている。

¹⁰ 高松市教育委員会・徳島文理大学文学部文化財学科 2004

¹¹ 高松市内遺跡発掘調査報告書相作馬塚 2015年3月20日

また、野山東側の緩斜面一帯に古墳がある。『京大報告』には8基の古墳【L】が『調査報告』では3基の古墳の存在が確認されている。何れも横穴式石室墳である、あるいはあろうと思われる。

浄願寺山の東裾には13基の古墳からなる南山浦古墳群【F】が立地する。2度にわたって発掘調査が実施された。昭和59（1984）年度調査では5基の横穴式石室を持つ古墳が確認されている。

そのうち南山浦11号墳の横穴式石室の全長9.3m、玄室長3.9～4.3m、幅2.0～2.2m、羨道長5.0～5.4m、幅（先端）1.3mを測る。調査報告による10号墳の値（玄室：全長3.55m、幅1.60m、羨道長3.55m以上）よりひと回り大きい規模の横穴式石室であった。¹²

南山浦古墳群の南、浄願寺山と小山との間の溜池・片山池の南側には数基の横穴式石室を持つ古墳が存在していたとされるが、現存しているのは1基【H】のみである。

浄願寺山の北東に続く石清尾山にも古墳時代後期の横穴式石室墳が所在する。本古墳群と同じく山頂一帯に立地するのが、総数31基の摺鉢谷古墳群【M】である。同古墳群は国史跡石清尾山古墳群とともに指定された石清尾山2号墳と13号墳を含む古墳であるが、石清尾山の山頂から南にのびる稜線の西側斜面に所在する。ただし、本古墳群ほど密集していない。¹³

山裾にも同時期の古墳は存在する。木里神社古墳【P】や峰山墓地古墳【Q】¹⁴などのほか、石清尾山と室山の間の谷に築かれた奥の池の東方では20基余（5基余現存）の古墳があったとされる。奥の池古墳群と呼ばれるこの古墳群は、付近の後期古墳のなかで本古墳群について密集している古墳群だったと推定される。

ところで石清尾山古墳群には200基余の古墳があるとされる。その大部分は先に記述した積石塚古墳でなく、本古墳群のような横穴式石室を有する古墳時代後期の古墳と考えられる。もちろん全て積石塚古墳ではなく、石室を土で覆った所謂、盛土墳である。

3 古代の遺跡など

片山池堤の東側に古代寺院跡の坂田廃寺跡【G】が所在する。同寺院跡は県指定有形文化財の金銅製誕生仏が出土した遺跡としても有名であり、円形の柱座が彫りだされた礎石も遺されている。

さらに同池の北側には坂田廃寺



第3図 片山池1号窯跡（写真／高松市HPより）

¹² 高松市教育委員会 1985年3月発行『南山浦古墳群調査報告書』

¹³ 基数は、もっと多かった可能性がある。筆者は、高松市役所に勤めていたおり、それ以前に工事中いくつかの古墳があったとの噂話を聞いたことがある。

¹⁴ 筆者は、高松市役所に勤めていたおり、先輩で図書館司書の宮田忠彦氏がいた。その氏が峰山墓地造営のおり、毎日のように人骨が出土し図書館に持ち込まれたとの経験を話してくれたのを覚えている。

の瓦を焼成した片山池1号窯【16】が存在している。平安時代（9～12世紀）を通じて操業されたと推定され、その保存状態が良好であることもふまえ市指定史跡に指定されている。

浄願寺山の東から南、そして西にかけて条里制に由来する碁盤の目をした地割が広がる。なお、条里制に由来する方形の土地区画は石清尾山塊周辺だけでなく、高松平野全体にひろがっている。

讃岐出身の空海（774～835）は死後86年後に『弘法大師』の諡号を受けた。弘法大師信仰の原点である。この諡号贈与に尽力したのが、東寺の長者であった観賢（854?～925）で、坂田郷出身の秦氏とされている。

また、日本霊異記（日本国現報善悪霊異記）の中巻、第十六に「依不布施与放生而現得善惡報縁」に、坂田郷に住む富豪夫妻の物語が載せられている。「讃岐の国香川の郡坂田の里に、一の富人有り。夫と妻同姓にして綾君なり」とあることから、讃岐の古代氏族・綾氏の有力者がいたことが確認できる。

これらのことから、古代において、浄願寺山の東麓、坂田郷において、秦氏、綾氏等の讃岐における有力古代氏族が付近に住んでいたことがうかがい知れる。

以上が浄願寺山古墳群の立地する浄願寺山周辺の主な古代の歴史的環境である。

第4節 民俗学から見ると

かつて高松市文化財保護委員を務められた小竹一郎氏が、高松市の遺跡を調査した資料が高松市に遺されている。浄願寺山十三塚古墳群、浄願寺山北東古墳群（七ツ塚）の二つの古墳群、合計20基の古墳が略測図とともにデータ化されている。本古墳群のうちの一部であり、全ての古墳が記録されているのではない。¹⁵

ここでは、浄願寺山十三塚古墳群は十三塚と呼ばれていたことに注目したい。十三塚の築造理由の一つである境界指標として、累々と並ぶ古墳を選んで、十三塚の名を冠したのであろうか。伝説が伴っていたこともあり得るが、現在は十三塚の名称とともに忘れ去られている。

第5節 浄願寺山古墳群とは

『調査報告』に本古墳群について次のように評価しているので、ここに抜粋しておきたい。

1 浄願寺山古墳群について

「浄願寺山古墳群は、その立地する場所が、標高200m、比高180mほどの後期古墳としては、通例とはいささかその立地の点で傾向を異にしている。その内容も径10～15mほどの小円墳ながら、すべて横穴式石室を持っていると推定される。この地域では、50基以上は最大の群集墳である。こうした群集墳は香川県地方では極めてまれであり、石清尾地域の後期古墳が、一般的に優位を保っていると評価できよう。他地域では、この石清尾の比較的大型の横穴式石室墳がその盟主として存在していることを考えるならば、一般的に優位に立っているという意味で、高松平野部においては、先進地域であるということができよう。しかしながら、卓越した巨石墳を持たないということに、この地域が律令体制確立期に讃岐地方の政治的中枢地として登場

¹⁵ 20基のうちすべてが特定されてなかったため、今回の調査・研究には資料として扱うことを断念した。

できなかった謎がひめられていると思われるが、こうしたことは一切不明とするほかはない」

2 問題点など

以上のように本古墳群の存在から高松平野において先進地域であることを認めながらも、讃岐国で絶対的な優位性を確立するに至らず、律令体制のなかで讃岐における政治的中枢として登場できなかった点を謎として指摘している。

上記が先学から与えられた本古墳群の研究課題である。発掘調査以外の手法でどこまで、与えられた課題に応えられるか、甚だ心許ないが挑戦してみたい。

第2章 基本情報等

今回の調査・研究は、本古墳群に関する情報を取り出すのが目的で、その対象範囲は【第4図】の赤色立体図に示すとおりである。

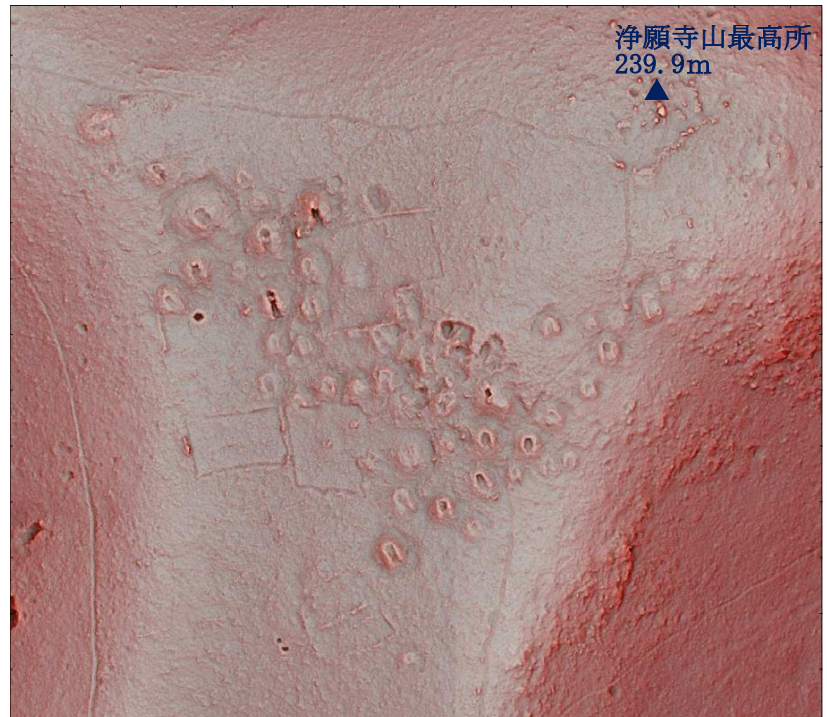
本章では、その作業に必要なとなる基本的な事項について概説しておく。

第1節 本古墳群の立地

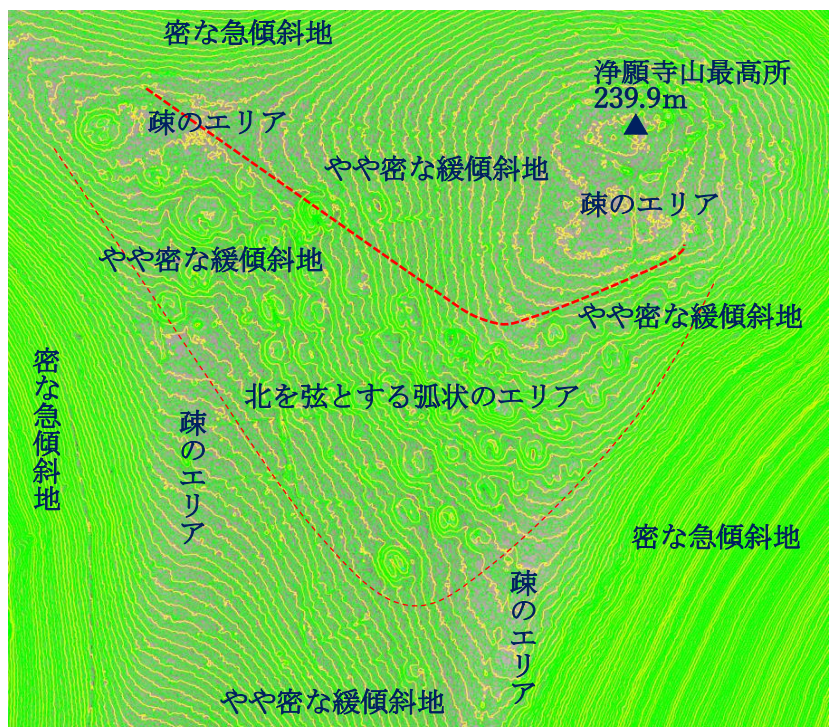
【第5図】は今回作成した等高線図である。本古墳群が所在する浄願寺山山頂付近では等高線の疎密（言い換えれば色の濃淡）を目安として、3つの区域に分割することができる。

等高線の密な部分は山腹部の急斜面にあたり、古墳は存在しない。一方、山頂を含む残りのエリアは、等高線が疎のエリアとやや密のエリアに分けられる。

疎のエリアは南北と東西に広がるやや密のエリアによって四つの区域に分割される。やや密のエリアは概ね縦と横、十文字のように広がるが、特に横一すなわち東西のエリアは北を弦とする弧状のエリアを呈している。古墳のほとんどは、この東西に広がる弧状の範囲に立地している。その部



第4図 浄願寺山古墳群 赤色立体図



第5図 浄願寺山古墳群と山頂付近の等高線図

分は等高線が疎である山頂部分と密である急傾斜地の中間地帯で、やや密な緩傾斜地である。

ところで古墳が所在する範囲は、【第5図】をみれば一目瞭然である。すなわち等高線が著しく乱れている部分が、古墳の群集する範囲である。

そこは古墳時代後期のある時期、多くの人々が墓づくりに狂奔した場所である。しかし、古墳時代が終わり、長い年月の間に古墳は忘れ去られることになった。ただ本古墳群の所在する浄願寺山々頂一帯では、おそらく全く利用されていないというのではなく、生活の中に溶け込んだ利用がなされていたのであろう。

古墳群築造後、顕著な構造物の類が出現することはなく（現在のところ顕著な土木工事跡や伝承の類いは知見にはない）、長い期間が過ぎた。ただし、本古墳群に十三塚の呼称があったことを【第1章 第4節】で触れたように、現在の高松市鶴尾地区と弦打地区の境界として意識されていたのであろう。

古墳築造の終焉後、かなりの期間を経て、浄願寺山々頂一帯を畑として利用する人々が出現した。山頂一帯の疎のエリア、および、やや密な緩傾斜地などで開墾が始まったのである。

赤色立体図や等高線図を観察すると、かなり広範囲に開墾地跡を示す地形が広がる。古墳の近傍にも長形状の開墾地が接しており、大きな影響を受けた古墳もある。

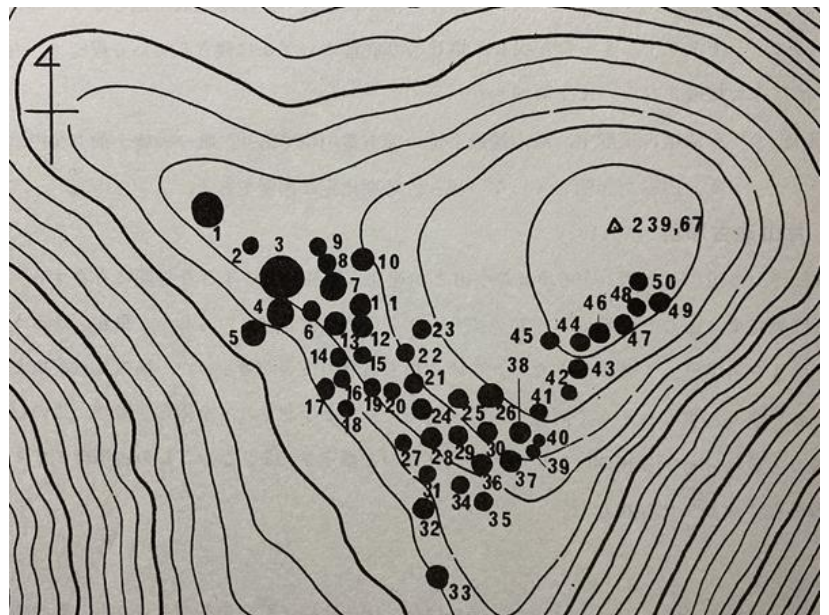
先述したように開墾の始まった時期はわからないが、畑としての土地利用が終わった時期は、昭和30年代後半のことと思われる。¹

第2節 番号の付与

先行する調査を前提に実施する調査・研究であることから、『調査報告』で本古墳群に属する50基の古墳にふれられている番号を継承する必要がある。位置情報を確実に引き継ぐためである。

【第6図】は『調査報告』に掲載された分布図である。

同図をもとにした番号付与の作業は分布図の縁辺から中心部に向かって進めた。円の大小は各古



第6図 浄願寺山古墳群 調査報告記載分布図

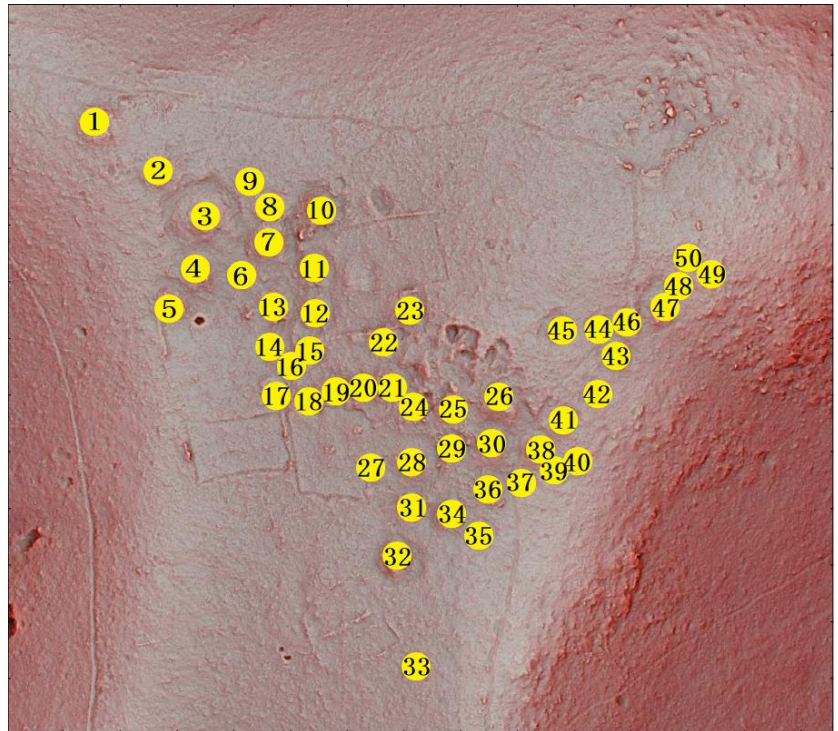
¹ 浄願寺山の北、石清尾山の摺鉢谷一帯も開墾が行われた場所である。開墾地は石垣で区画され、区画する石垣のなかには高さが1m前後もある墨状のものもみられる。距離も数10m以上と比較的長い。多くの人々が長い年月をかけて構築され、現在も畑地などがみられる。一方、浄願寺山山頂にみられる開墾地の縁辺には1m前後の墨状の石垣は存在しない。多くが数10cm程度である。高いところで50cm弱である。摺鉢谷でみられ墨状の石垣もみられるが長くはない。また、摺鉢谷では小規模な堂や石造物などの宗教施設も存在し、すくなくとも江戸時代からの長期間に及ぶ生活の痕跡も濃厚に残る。浄願寺山、特に山頂部一帯にはそのような施設、あるいは痕跡などは存在しない。

以上のことから浄願寺山山頂では、開墾に投じられた人員は極めて限られ、利用も農地に限られていたと考えられる。期間は現在も利用されている摺鉢谷に比べ長期間ではなかった。なお、終焉については昭和37年（1962）撮影の航空写真によれば、浄願寺山山頂に畑地の痕跡らしい小区域が幾つか撮影されている。そして本古墳群付近の大部分は雑木林化が進んでいる。

墳の大小を示していると考え参考にした。もちろん『調査報告』に記載されている本古墳群のデータも参考にしている。

作業は縁辺部から中心部に向けて号数を決定した。現地調査を行っていないなど一抹の不安もあったが、作業は比較的容易に進めることができ、大きな問題はなかったと考えている。

【第7図】はその結果である。以降、本研究は当該図を基本に進める。



第7図 浄願寺山古墳群 分布図

第3節 検証の一手法

上記が適切であったか、否かを判断するためにTREND-POINT（トレンドポイント）限定版を用いて等高線図上で得られた長径と短径、『調査報告』記載の長径、短径の両者の関係を検証するために相関係数²を求めた。

なお、『調査報告』の短径では数値が欠損している古墳がある。この場合は長径の数字を充当している。また、50号墳は『調査報告』に長径、短径とも欠損しているため比較はしていない。従って、比較したデータは49件になる。

1 データの検証

上記作業の確実さを検証するため、『調査報告』記載のデータと本研究により得られたデータの相関係数を求めた。対象としたデータと相関係数は下記のとおりである。あわせて、散布図を作成している。

(1) 検証内容

ア 本報告長径のデータ & 調査報告記載のデータ 【G201】

相関係数：0.8373

イ 本報告短径のデータ & 調査報告記載のデータ 【G202】

相関係数：0.8555

ウ 本報告高さのデータ & 調査報告記載の高さのデータ 【G203】

相関係数：0.7054

結果はともに正の相関である散布図である。0.7以上が強い相関をもつとした場合、

² 相関係数 r とは2つのデータの相関関係の強さを示す指標である。 $-1 \leq r \leq 1$ の間で求められる。 $0.7 \leq r \leq 1$ のとき、強い正の相関があるとす。なお、散布図は1に近いほど各点は直線に並ぶ。

【ウ】の値はきわどいがすべてが正の強い相関をもつことになる。

以上から、2つのデータに強い相関にあるといえる。従って、『調査報告』のデータとTREND-POINT（トレンドポイント）で求めたデータの間には強い関係が認められる。なお、【(1)ーア】および【(1)ーイ】はデータ数が49、【(1)ーウ】は50である。

第4節 取得データ

上記【第3節】に記載した長径と短径のデータのほかに次のデータも取得した。そのデータを用いて2次的なデータを作成し利用している。

さらにデータを分析するにあたって、様々な表、グラフなども作成した。その概要は下記のとおりである。なお、詳細は各項目に記載している。

1 取得したデータ

(1) 標高

ア 古墳の所在する地点の標高

各古墳の所在する地点の標高（m）を取得した。

- ① (2)で求めた4点の最小標高を充てた。
- ② 各古墳の最高所高さも求めている。

イ 取得した2次データ

① 墳丘の高さ

各古墳最高所の標高と(1)での高さから、各古墳の墳丘の高さを算出した。

(2) 長径・短径

ア 古墳の長径と短径（明らかに方墳の場合は、長辺と短辺）

各古墳のほぼ直交する2つの推定径の距離（m）を取得した。

- ① 長い方を長径、短い方を短径としている。
- ② 距離には直線距離、水平距離の2種がある。

イ 取得した2次データ

① 勾配

各径の直線距離と水平距離から勾配を求めた。2種求めた数値の大きい方を勾配として用いた。

(3) 面積

ア 古墳の面積

各古墳の墳裾を結ぶ線によって形成された範囲の面積（m²）を取得した。

- ① 平面積と表面積の2種を求めた。

(4) 体積

ア 古墳の体積

各古墳の墳裾を結ぶ線によって形成された範囲の平面積に対応する体積（m³）を取得した。

(5) 方位

ア 横穴式石室の方位

各古墳において横穴式石室の遺存が明らかで、かつ、その方位がある程度推測できる場合、その十六方位で示した。

当然、略測によって求めたものである。

(6) 定義等

【第3章 第2節】において、一部の指標についてより詳細に記述している。

第5節 区分（平面積と体積から）

本古墳群の考察を進めるうえで、2つの指標を重要視した。平面積と体積である。その2つの指標の分析を進めるにあたって、各々のデータを区分している。

この2つの区分について、前者をⅠ～Ⅲのローマ数字を使って、後者を大・中・小を使って表記した。その概要は下記のとおりである。

1 平面積を基準とした区分【第6章 第1節 1-(1)~(6)】

50基の古墳を平面積で区分するにあたって、1つの区分が過半数程度になるように配慮した。具体的にいえば区分Ⅲを100㎡未満とすることによって、28基とそれ以外の22基を分割することができた。さらに200㎡以上を境とすることによって、広い面積を持つ古墳の3基を区分した。区分Ⅰである。残りが区分Ⅱとなる。

さらに区分Ⅰ、区分Ⅱ、区分Ⅲのそれぞれを2つに細分した。3区分、6細分である。

(1) 区分Ⅰの古墳

ア 平面積200㎡以上 ($\chi \geq 200 \text{ m}^2$) の古墳³..... 3基

細分

① 区分Ⅰ-上.....同 400㎡以上 ($\chi \geq 400 \text{ m}^2$) の古墳..... 1基

② 区分Ⅰ-下.....同 200㎡以上 ($400 \text{ m}^2 > \chi \geq 200 \text{ m}^2$) の古墳..... 2基

(2) 区分Ⅱの古墳

イ 平面積100㎡以上 ($200 \text{ m}^2 > \chi \geq 100 \text{ m}^2$) の古墳..... 18基

細分

① 区分Ⅱ-上.....同 150㎡以上 ($200 \text{ m}^2 > \chi \geq 150 \text{ m}^2$) の古墳..... 6基

② 区分Ⅱ-下.....同 100㎡以上 ($150 \text{ m}^2 > \chi \geq 100 \text{ m}^2$) の古墳..... 12基

(3) 区分Ⅲの古墳

ウ 平面積20㎡以上 ($100 \text{ m}^2 > \chi \geq 20 \text{ m}^2$) の古墳..... 29基

細分

① 区分Ⅲ-上.....同 50㎡以上 ($100 \text{ m}^2 > \chi \geq 50 \text{ m}^2$) の古墳..... 22基

② 区分Ⅲ-下.....同 20㎡以上 ($50 \text{ m}^2 > \chi \geq 20 \text{ m}^2$) の古墳..... 7基

2 体積を基準とした区分【第7章 第1節 1-(1)、(2)、(4)~(6)】

50基の古墳を体積で分類するにあたって、上記の平面積と同じく1つの分類が過半数程度になるように配慮した。具体的にいえば小型古墳を30㎡未満とすることによって、29基と

³本文中、アルファベット小文字の「x」を使用すべき箇所について、わかりやすくするためにローマ文字小文字の「χ」を用いた。

それ以外の 21 基を分割することができた。さらに 300 m³以上を境とすることによって、5 基を区分した。大型古墳である。残りが中型古墳となる。

さらに大型古墳、小型古墳のそれぞれを 2 つに細分した。3 区分、5 細分である。なお、体積分布図の作成にあたって、中型古墳を 2 つに小型古墳・小型古墳を 2 つに細々分している。

(1) 大型古墳

ア 体積 100 m³以上 ($\chi \geq 100$ m³) の古墳..... 5 基

細分

① 大規模古墳 ($\chi \geq 300$ m³以上) 1 基

② 大型古墳 (300 m³ > $\chi \geq 100$ m³以上) 4 基

(2) 中型古墳

イ 体積 30 m³以上 (100 m³ > $\chi \geq 30$ m³以上) の古墳..... 16 基

(3) 小型古墳

ウ 体積 30 m³未満 (30 m³ > χ) の古墳..... 29 基

細分

① 小型古墳 (30 m³ > $\chi \geq 10$ m³以上) の古墳..... 17 基

② 小規模古墳 (10 m³ > χ) の古墳..... 12 基

上記のとおり体積を基準として本古墳群を、3 区分、5 細分した。

4 2つの指標

基数から見る限り、下記の通り 2 つの分類は大きく異なるものではない。

区分Ⅰ..... 3 基 大型古墳..... 5 基

区分Ⅱ..... 18 基 中型古墳..... 16 基

区分Ⅲ..... 29 基 小型古墳..... 29 基

両者の関係については、いくつかのグラフ、表を作成している【6】。

5 規格の使用

古墳の規格について 2 種設定した。本稿ではできる限り、2 種の区分を用いているが、規模という限りは体積を主に使用している。

6 作成資料について

平面積を基準とした区分、体積を基準とした区分の 2 つの区分について、本古墳群に属する各古墳の状況を知るために下記の表およびグラフを作成している。下記のとおり別添資料として添付している。

- (1) G 303 平面積を基準とした区分 (区画) に関する表である。
- (2) G 304 平面積を基準とした区分 (区画) に関する基数とその割合を表とした。
- (3) G 305 平面積を基準とした区分 (区画) に関する総面積とその割合を表とした。
- (4) G 306 平面積を基準とした区分と体積を基準とした区分の関係を表とした。
- (5) G 307 体積を基準とした区分に関する表である。
- (6) G 308 体積を基準とした区分に関する基数とその割合を表とした。
- (7) G 309 体積を基準とした区分に関する総体積とその割合を表とした。

- (8) G 310 平面積を基準とした区分と体積を基準とした区分の関係を表とした。
- (9) G 430 平面積・体積区分（区画）関係グラフ。
- (10) G 431 区分関係グラフ 体積÷平面積Ⅰ関係グラフ（号順）
- (11) G 432 区分関係グラフ 体積÷平面積Ⅱ関係グラフ（降順）

第6節 古墳のグループ

本稿では、本古墳群に属する 50 基の古墳についてグループ分けを試みている。その詳細は、下記や第7図のとおりである。以降の本古墳群の研究を進めるため、ここでは各グループ別の要点を記している。

グループ分けの根拠は【第13章 第7節】に記載している。詳細は当該節を参考にしたい。

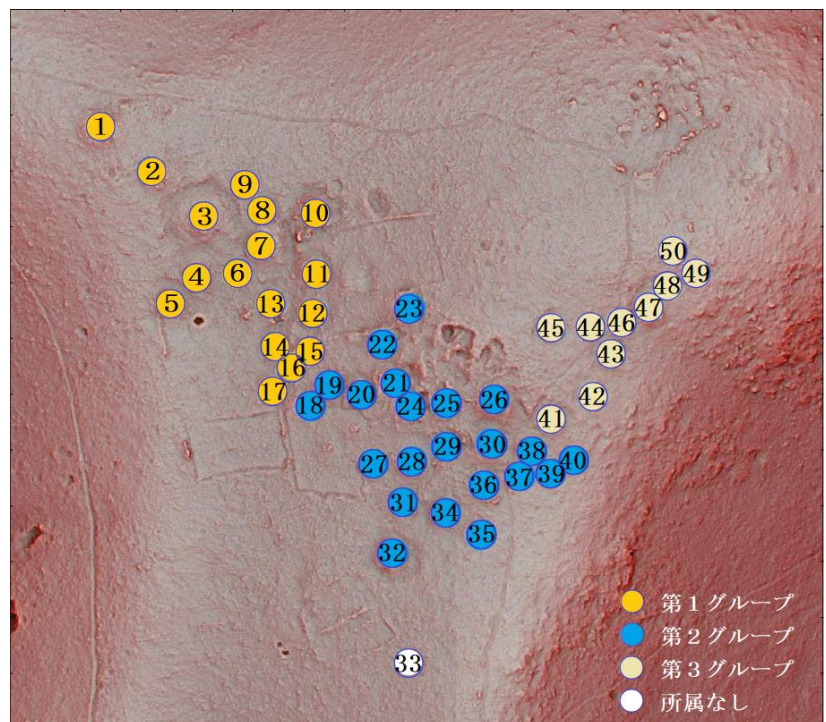
1 第1グループ

- (1) 1号墳から17号墳までの17基の古墳が属する。
- (2) 古墳群の北西部分を占める（【第5図】「北を弦とする弧状」の北西部にあたる）。
- (3) 古墳は標高 223.1mから 228.1mの間に立地する。

- (4) 1号墳、3号墳などの中心的な古墳や群中唯一横穴式石室が現存する10号墳等、群中の特色ある古墳などで構成される。

2 第2グループ

- (1) 18号墳から40号墳（33号墳は除く）までの22基の古墳が属する。
- (2) 本古墳群が分布する地域の中央部を占める（第5図「北を弦とする弧状」の中央部にあたる）。



第8図 浄願寺山古墳群 グループ

- (3) 古墳は標高 223.9mから 228.1mの間に立地する。
- (4) グループ最大規模の32号墳は33号墳を除いた49基の古墳群の南端に位置する。
- (5) 異形の墳丘を持つ古墳が含まれる。

3 第3グループ

- (1) 古墳群の北東部分を占める（【第5図】「北を弦とする弧状」の北東部にあたる）。
- (2) 古墳は標高 231.7mから 238.0mの間に立地する。ほとんどの古墳は群中でも高い場所

に占地する。

- (3) 全て小規模な古墳からなる。
- (4) 第2グループ、第1グループと比べ基数が少ないためやや疎な分布を呈する。

4 所属しない古墳

- (1) 33号墳単独とする。
- (2) 33号墳と最も近い32号墳との距離（墳裾間）は約24mである。1号墳と2号墳の距離である約9m以上を測ることから、その倍以上の間隔がある33号墳は、近隣の第2グループとは別の扱いとした。

第7節 添付資料の概説

文末に添付している表、グラフについて概説しておく。

- 1 『調査報告』のデータ等および本調査で得たデータの表
 - (1) G101 『調査報告』に記載されたデータの写し
 - (2) G102 本調査により得られたデータの表、各古墳の径、高さ、平面積、体積等
- 2 『調査報告』のデータ等および本調査で得たデータに関するグラフ
 - (1) G201～G203 径、高さなど『調査報告』と本調査のデータの比較
- 3 各古墳の平面積、体積の区分に関する表、墳形などに関するグラフ
 - (1) G301～G310 平面積、体積の区分に関する詳細を記した表
 - (2) G311 高さに関する四指標の状況
 - (3) G312～G314 各古墳の墳丘形状区分などに関するグラフ
 - (4) G315 横穴式石室推定開口方向に関するグラフ
- 4 本調査により得たデータに関するグラフ
 - (1) G401～G403 各古墳が立地する標高に関するグラフ
 - (2) G404～G406 各古墳の勾配に関するグラフ
 - (3) G407～G412 各古墳の径（長径、短径）に関するグラフ
 - (4) G413～G415 各古墳の高さに関するグラフ
 - (5) G416～G423 各古墳の面積（表面積、平面積）に関するグラフ
 - (6) G424～G427 各古墳の体積に関するグラフ
 - (7) G428～G435 各古墳の複合データ（(1)～(6)の指標の2以上の使用）に関するグラフ
 - (8) G436 横穴式石室の推定開口方向に関するグラフ
- 5 並ぶ古墳に関するグラフ
 - (1) G501～G511 直列古墳、順列古墳、並列古墳などに関するグラフ
立地標高、立地勾配、墳丘長径、径比率、
墳丘高さ、墳丘平面積、墳丘体積、墳丘体積÷墳丘面積
以上、8つの指標の横棒グラフを組み合わせると一つのグラフとした。

第3章 計測作業など

TREND-POINT（トレンドポイント）限定版を用いて、今回作成した本古墳群の等高線図を対象に計測処理を行った。本章では計測により得られた数値の説明である。

第1節 古墳の計測

上記のシステムを用い各古墳の各部位についての計測を行った。その具体的な内容については次節に詳しい。

基本となった赤色立体図が測点の集合であるため、各々の等高線も同じ高さを持つ点の集まりである。同じ標高の測点（この場合10cm刻み）を結んだものであるため、得られる標高は0.1m刻みとなる。

なお、トレンドポイントによって等高線上にある点を測定すると、座標（国土座標：緯度=X座標、経度=Y座標、標高=Z座標）を求めることができる。

上記のため等高線の高さに関する数値は、必ず小数点第1位の値となる。なお、本稿における高さの数値には、最大±0.1mの誤差がある。

第2節 求めた数値

1 平面積、表面積と体積

(1) 古墳と考えられる範囲を画する閉じた曲線（古墳墳裾の推定ライン）を設定し、それに対応する範囲を平面積¹とした。表面積²とはその範囲に対する曲面の面積である。

(2) 上記の閉じた曲線内に対応する体積を求めることができた。

2 各古墳における5点の座標

(1) 上記のうち4点から墳丘のほぼ中央で交差する2つの直線を選び、各々の水平距離³と直線距離⁴のデータを各々得た。

4点については1-(1)で求めた閉じた曲線上にある測点の座標を求めた。曲線上で計測できなかった場合には、ごく近傍の点をもって測点に代えた。

(2) (1)で求めた2つの直線のうち、大きな値を長径、小さな値を短径とした。

(3) (1)で求めた4点の標高のうち最大値と最小値をそれぞれ得た。

(4) 上記の最小値を当該古墳が立地する標高とした。

(5) 5点目は墳丘最高所の座標である。その標高が当該古墳の最高地点となる。

(6) 上記、最高地点から(4)の標高を除いた値を古墳墳丘の高さとした。

(7) 溝を有する古墳については、溝底部の最高地点の標高（溝底部の高さ）を求めた。

3 上記の2つの直線各々の水平距離と直線距離からアークタンジェント関数を使って傾斜角を算出した。こうして得られた2つの値のうち大きな方を勾配⁵とした。

¹ 平面積／選択した範囲の面積

² 表面積／上記に対応する範囲の点群があらわす面積。表面積>=水平面積

³ 水平距離／2点在同一平面にあるとして、その2点間の距離

⁴ 直線距離／2点間の距離。直線距離>=水平距離

⁵ 勾配／本稿では斜度と称する。長径および短径の水平距離とその両端の点の高低差をもとにアークタンジェント関数により角度を算出した。

なお、ここでいう勾配とは、古墳周辺とは異なり、古墳が立地する地域の勾配をさす。

- 4 各古墳の体積推定値を次の式で求めた。

古墳の推定体積

$$= \text{体積} - \{ \text{平面積} \times (\text{座標 4 点最大値} - \text{座標 4 点最小値}) \div 2 \}$$

- 5 各古墳のうち赤色立体図および等高線図をもとに横穴式石室の存在とその開口方向が推定できる古墳についてのみ、推定開口方向⁶を求めた。

以上の計測作業は筆者が行った。従って、齟齬、独断もあると思われる。そのために計測時の状況等を具体的に提示できるよう、作業の状況を確認するため別途保管している。

⁶赤色立体図およびコンタ図をもとに存在が明らかと思われる横穴式石室およびその主軸を想定し、その想定した主軸の角度をもとにその方位を求めた。

第4章 標高と勾配

古墳が立地する標高、その地点の勾配、あわせて墳丘の長径と短径、さらに墳丘の高さなどのデータについて考察を進める。

第1表 浄願寺山古墳群 各古墳 標高	
データ数	50件
最大値	238.0m
最小値	222.7m
平均値	228.6m
中央値	228.0m

第1節 立地標高

古墳の長径、短径を求めた4点の座標のうち最小値を以て、墳丘の立地標高とした。

最も高い場所に造られた古墳は50号墳で、その値は左表に最大値238.0mが示されている。一方、33号墳が最も低い場所に所在する古墳で、その値が最小値にあたり両者の差は15.3mである。

従って、本古墳群は浄願寺山の標高239.5mの6.4%の幅の中に集中して築造されていることになる。なお、平均値である228.6mは浄願寺山21号墳の立地する標高に等しい。

1 【第9図】から

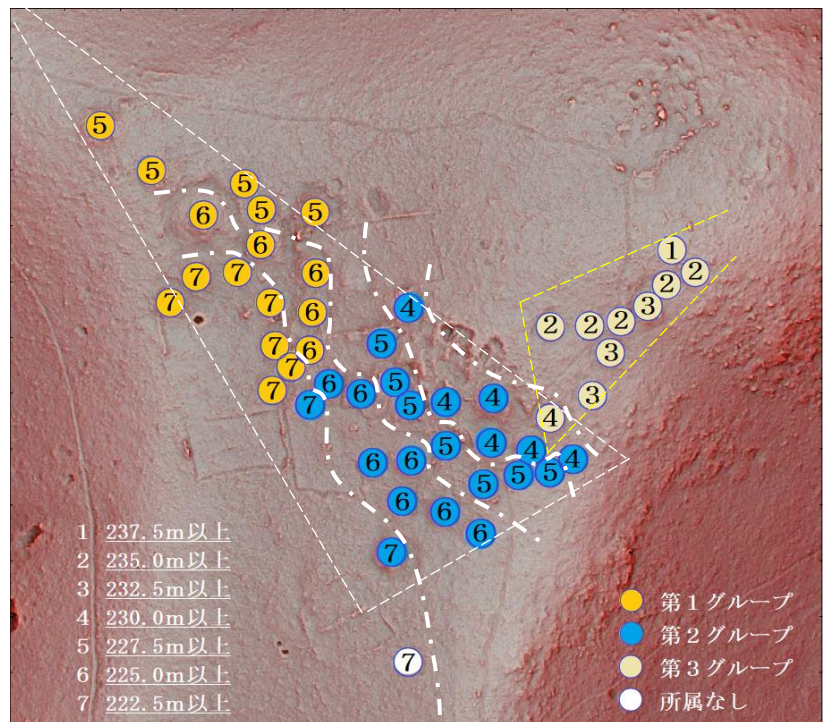
各古墳が立地する標高を、①から⑦までの7段階で表示し作成した分布図で、数値が小さい古墳ほど高所に所在する。

(1) 232.5m未満に立地する古墳(数値④～⑦)が41基を占める。41号墳を除く古墳全てが第1グループ、第2グループの古墳である。ちなみに標高差は9.8mであり、浄願寺山標高に対する比率は4.0%である。

(2) 第1グループと第2グループの集まりは、【第9図】の大きな三角形の範囲のなかで、北西から南東に向かって⑦から④へとそれぞれの数字が並んでいる。このことは古墳が等高線に沿って四重に並んでいることを意味している(【第9図】の一点鎖線参照)。

なお、第1グループおよび、第2グループの古墳については、単に並ぶだけでなく意図的に並べて築造された古墳の存在も指摘できる。これを並ぶ古墳として把握することができた。詳しくは、【第13章】において考えてみたい。

(3) 第3グループの古墳は、【第9図】の小三角形の範囲の中に立地し、それらは連続して築造されている。41号墳をのぞく9基の古墳は、第1グループ、第2グループのどの古墳よりも



第9図 浄願寺山古墳群 立地標高分布図

高い標高に立地する。

- (4) 最も南に位置する⑦が与えられた古墳が 33 号墳で、どのグループにも属しないと考えている。なお、33 号墳は標高の最も低い古墳である。
- (5) ①とある古墳は 50 号墳で本古墳群の最高所に位置し、墳丘も判然としない古墳である。なお、近傍の 49 号墳は所在する標高こそ 50 号墳より低いものの本古墳群中、最も東に位置する古墳である。
- (6) ⑤とされた古墳の中で最も北に位置するのが 1 号墳で、最も北に位置するとともに最も西に位置する古墳でもある。
- (7) 第 1 グループの古墳（⑤、⑥、⑦の古墳が存在）は低所に位置する古墳が多く、第 3 グループ（①、②、③、④の古墳が存在、①と④は 1 基）は高所に位置している。のこる第 2 グループは、その中間的な立地であるとしておきたい。

上記を整理すると、第 1 グループの古墳は概ね低所からやや高い標高に立地し、第 2 グループの古墳は低所に立地する古墳もあるが、やや高い標高から、それよりも高い地点に立地する。第 3 グループの古墳は 1 基（41 号墳）を除き、のこり全ての古墳より高所に立地する。

- (8) 第 1 グループに属する大型古墳のうち 1 号墳と 10 号墳の標高が同じ値に注目したい。両者ともに 228.1m であり、50 基の古墳の立地標高の中央値 228.0m に極めて近い。そして、2 基以外の第 1 グループの古墳 15 基が両者より低い地点に立地する。

単なる偶然なのか、それとも第 1 グループの各古墳は、本古墳群の最初に築造されたと考えられる 1 号墳【第 13 章 第 3 節 1-(1)、(2)】より高い位置に築造することを避けたのであろうか。なお、1 号墳と 10 号墳の標高 228.1m は、第 1 グループ中の最高値である。

2 作成資料

当該項目の分析にあたって、下記の 3 つのグラフを作成、参考にした。いずれも別添資料として添付している。

- (1) G 401 各古墳が立地する標高を号順に並べた棒グラフである。
- (2) G 402 各古墳を立地する標高の順に並べた棒グラフである。
- (3) G 403 各古墳の立地する標高を 7 段階に分割し、基数ごとに表示した棒グラフである。
- (4) G 428 各古墳の立地する標高と平面積の区分の関係を分布図としてあらわした表である。
- (5) G 429 各古墳の立地する標高と体積の区分の関係を分布図としてあらわした表である。

第 2 表 浄願寺山古墳群 各古墳 勾配	
データ数	50件
最大値	10.0度
最小値	2.3度
平均値	5.7度
中央値	5.6度

第 2 節 勾配

古墳が立地する位置の勾配（傾斜）に関する指標である。古墳の長径もしくは短径をもとに導き出された数値のうち、大きい値を充てている。なお、当該数値は各古墳の墳丘基盤が持つ勾配ということになる。決して周辺の勾配ではない。

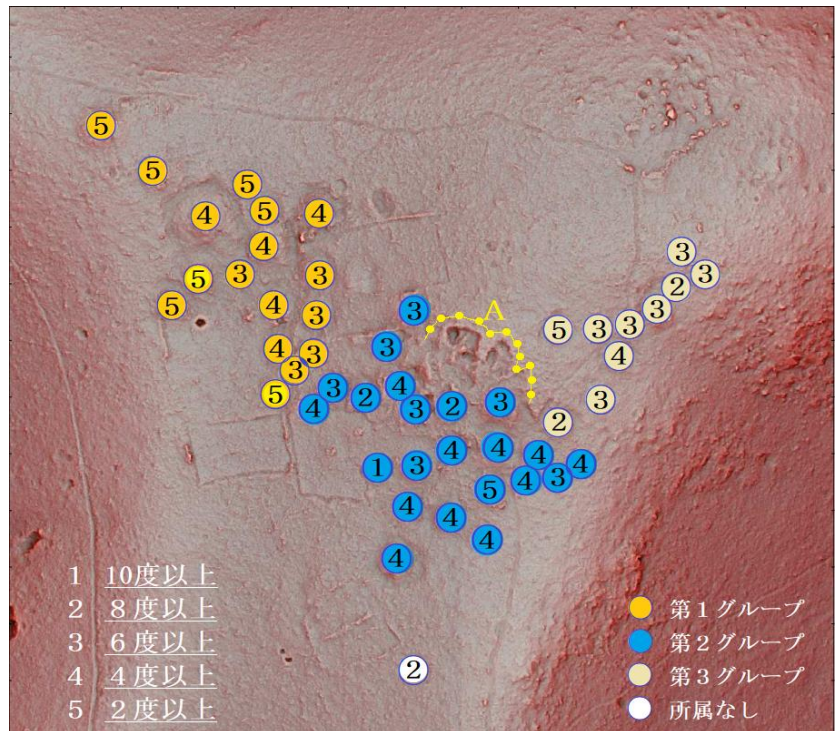
【第 2 章 第 1 節】にも記述したように古墳が所在する付近は、緩傾斜地のエリアにあたり、山腹ほど急斜面ではない。

勾配の最大値の古墳は 27 号墳で 10.0 度、最小値の古墳は 4 号墳で 2.3 度の数値を得ている。

1 【第10図】から

古墳が所在する地点の勾配（傾斜）を①から⑤の5段階に分け、その分布状況を示した図で、数字の大きいほど傾斜の急な斜面に立地する古墳といえる。

- (1) 勾配が最大値の古墳は、唯一①の27号墳である。この古墳の西側一帯は後世の開墾地が広がり付近の勾配はさほどでもないが、同墳の墳丘の形状に勾配が大きい理由ではない。すなわち等高線に直交する短径が短く、一方で両端の高度差は大きいため勾配の値が大きくなったと考えられる。



第10図 浄願寺山古墳群 勾配分布図

- (2) ②と記した古墳は、第2グループの20号墳と25号墳、第3グループの41号墳と48号墳と

所属のない33号墳の4基である。各々単独で所在し、その分布にまとまりはない。

- (3) ③と表記した古墳は、第1グループに5基、第2グループに7基、第3グループに6基ある。まとまりとしては第1グループの11号墳、12号墳、15号墳、16号墳の4基と、第3グループの44号墳、46号墳、47号墳の3基があげられる。

前者は【第13章 第4節4】の順列古墳Ⅳの一群と隣接する1基であり、立地標高を下げながら所在する古墳である。一方、後者は第3グループの高い位置に並ぶ古墳で、②と記載された48号墳を加えると、よく似た勾配を持つ古墳が南斜面に並んで立地する状況を指摘することができる。

なお、10基からなる第3グループでは③とされた古墳が6基で、その割合は60%と高い値を示す。

- (4) ④と記された古墳は、第1グループで5基、第2グループで11基、第3グループで1基を数える。

特に第2グループでは全古墳22基のうち半数にあたり、そのうちの9基がグループの古墳が広がる範囲の南半分に所在する。よく似た勾配を持つ古墳が立地する場所が広がっていることになる。

また、第1グループでも7号墳、13号墳、14号墳は⑤とされた17号墳とともにほぼ同じ勾配で並んでいる【第13章 第4節3】。

- (5) ⑤と表記された古墳は全てで9基存在する。第2グループ、第3グループに各々1基所在

する古墳を除き、のこり7基が第1グループの古墳である。【(4)】で記述した17号墳を除き、本古墳群の北西部を占める一群である。規模の大小は別にして、3号墳を囲むように存在する。

これらの古墳が所在する場所のさらに外側には、開墾跡と考えられる緩傾斜地が広がっている。最も勾配の小さい4号墳と次位の5号墳も3号墳の南西側に所在する。

両古墳は典型例であるが、3号墳の周囲に立地する古墳は、その緩傾斜地を避けて所在することになる。

本古墳群においては、勾配の値が小さいことが、古墳築造の好条件とは限らないようである。

- (6) 17号墳、20号墳、25号墳の3基が本古墳群における勾配のベスト3である。これらはすべて第2グループの古墳である。同グループでは半数を占める④の古墳をはじめ①から⑤までの古墳が存在する。

第2グループではあらゆる勾配を持つ古墳が存在するのに対し、第1グループでは①および②の第3グループでは①の値を持つ古墳が存在しない点に注目したい。

- (7) 勾配2度未満の古墳はない。従って、本古墳群に属するすべての古墳は、2度以上の勾配を持つ場所に築造されていることを意味している。

上記の【(5)】に関連して考えてみると、1号墳、3号墳の周囲には、緩やかな勾配を持つ古墳が存在することがわかる。その外側に広がる緩やかな場所に古墳は存在せず、南側に立地する古墳は、より大きい勾配を持つことが認められる。

- (8) 第1グループの南方では、一部の例外を除き、西側から東側に向かって④、③と標示された古墳が並ぶ。

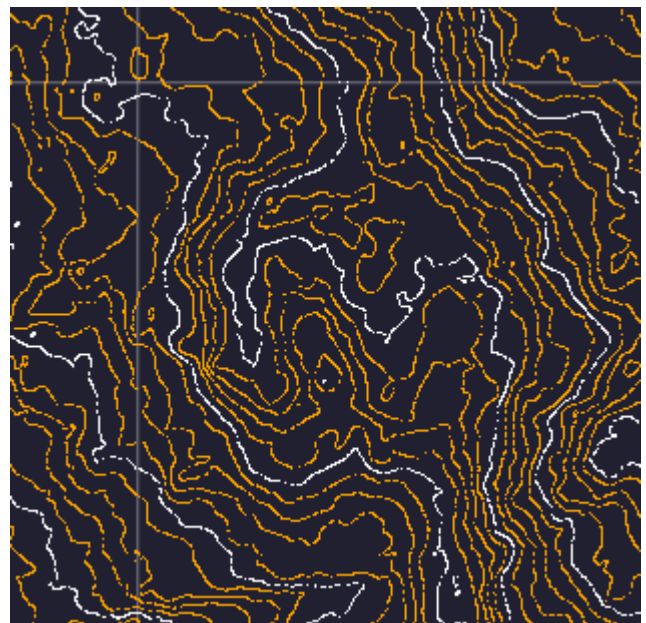
このことは緩やかな勾配を持つ古墳の横に、それよりもやや勾配を持つ古墳が造られていることを意味している。

- (9) 図中A（正式には浄願寺山Aと称する／【第14章 第2節】を参考）と表示しているのが採土跡と考えられる場所で、図示した曲線の西側では幾つかの掘削跡が複雑に重なっている。

【第9図】では、その周囲に②、③、④の異なる値を持つ古墳が囲んでいる。採土跡周辺の複雑な地形のためと思われる。

- (10) 【(7)】から第1グループの1号墳、3号墳とその周囲の古墳には⑤が、【(8)】から第2グループの南辺、32号墳や34号墳の周辺には④の値を持つ古墳が並んでいる。

これらは本古墳群の形成が北西端、次いで南辺から始まったことを意味しているのかも知れない。



第11図 浄願寺山17号墳等高線図

(11) 古墳が立地する標高と勾配については、関係性を求めることはできない。一応、相関係数を求めたが、その値は【0.263】である。

2 作成資料から

当該項目の分析にあたって、下記の3つのグラフを作成している。いずれも別添資料として添付している。

- (1) G404 各古墳が立地する標高を号順に並べた棒グラフである。
- (2) G405 各古墳を立地する標高の順に並べた棒グラフである。
- (3) G406 各古墳の立地する標高を7段階に分割し、基数ごとに表示した棒グラフである。

第5章 長径・短径と高さ

本章では古墳を構成する縦、横、高さの3要素に相当するデータの分析を試みた。具体的には、墳丘の範囲の広がりを示す長径、短径に加えて高さ（縦、横、高さ）である。

なお、長径と短径については両者の数値の比較だけでなく、両者の長短の比率なども検討の対象としている。

第1節 長径および短径

第3表 浄願寺山古墳群		
各古墳	長径	短径
データ数	50件	50件
最大値	25.8m	24.5m
最小値	6.6m	6.1m
平均値	12.1m	10.5m
中央値	11.9m	10.1m

長径、短径の両数値は墳丘中央付近ではほぼ直交するように配慮して計測して得た数値である。古墳墳裾の推定ライン上もしくは近傍の2つ点を結んだ線と、それにほぼ直交する同様な2点を結んだ線の2つの線を設定し、その測定を行った。なお、長径、短径の両者が厳密に直交しているのではない。

二つの線の値のうち大きい方を長径、小さい方を短径とした。

上記の表にある長径と短径の最大値はともに3号墳で、最小値は長径が16号墳、短径が48号墳である。3号墳は本古墳群中の平面積、体積ともに最大規模の古墳であり、最小値を持つ古墳、16号墳、48号墳はいずれも区画Ⅲ一下に属する小規模古墳である。

1 【第12図】から

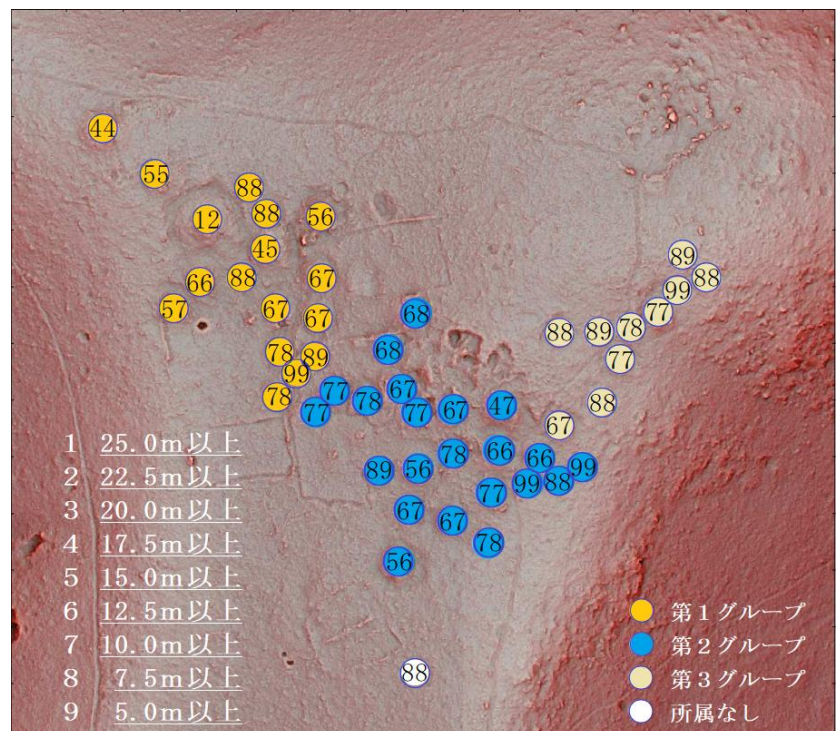
長径と短径を分布図として作成したもので、径の長さに主眼を置いたものである。10の位の数字が長径を、1の位が短径をあらわす。10の位、1の位の両方の数値各々を1から9の9段階に分け表示している。当然、記載された10の位の数字が大きいほど小さな古墳であることを示す。数値としての意味はこの部分のみである。

全体としては、単なる表記としてみていただきたい。

短径を示す1の位は10の位と同じ数字か、+1、ある

いは+2の数字が表記される場合もある。前者の場合、墳丘は円形（方形）に近く、後者はより楕円形（長方形）を呈することになる【第9章】。

なお、以下の文について【第12図】の記載に◎と記されている内容について、本文中では‘12’



第12図 浄願寺山古墳群 長径短径比較分布図

と表示している。

- (1) 3号墳は‘12’の数字を持つ。‘20’、‘30’台の古墳は存在せず、全て‘50’台の数字である。3号墳と他の古墳との長径、短径の差は明らかである。

以下、考察を進める本稿において、各指標で3号墳が大規模古墳であることが示される。本指標もそのひとつである。

- (2) ‘40’台の数字を持つ古墳は2基（1号墳、7号墳）で、‘50’台の数字を持つ古墳は6基（2号墳、5号墳、10号墳、26号墳、28号墳、32号墳）である。これらの9基は3号墳に次いで大きな径を持つ古墳といえる。

以上の古墳のうち3号墳を加えた1号墳、2号墳、5号墳、7号墳、10号墳の6基は第1グループに属する古墳である。のこりの26号墳、28号墳、32号墳の3基は第2グループの主要な古墳である。これら9基は本古墳群のなかで重要な位置を占め、かつ、個性を持った古墳といえる。

- (3) 短径に注目してみたい。3号墳を別にして、1の位に‘4’の数字を持つ古墳は1号墳のみで、‘5’の数字を持つ古墳は2号墳と7号墳の2基である。上記【(2)】に記述した古墳のうち10号墳、28号墳、32号墳の3基は1の位に‘6’の数字を持つ。

- (4) 5号墳とともに22号墳、23号墳の3基は10の位の数字に対して、1の位の数字が+2となっている。より楕円形（長方形）を呈するとしておきたい。

- (5) 上記の【(4)】で記載した3基の古墳以外に‘47’の数字が標記されているのが26号墳である。‘47’は長径、短径のアンバランスが顕著な数字で、円形や方形といった定形的な形状ではなく、他の古墳と大きく異なる墳丘を持つ。

以降、本稿では26号墳を『不定形古墳』と表現した。詳細については【第9章 第2節3】に記す。

- (6) ‘99’の数字を持つ古墳は、最も小さな規模の古墳で4基確認できる。第1グループの南方にある16号墳、第2グループの東南における40号墳の両側に並ぶ39号墳、41号墳の2基、第3グループの東部に位置する48号墳である。

- (7) 【(1)～(6)】において記述した古墳以外、‘60’、‘70’、‘80’の数字を示す36基の古墳は全域に広がって所在している。本古墳群における最も一般的な古墳と考えられよう。

2 作成資料から

長径と短径の項目の分析にあたって、下記の4種のグラフを作成した。いずれも別添資料として添付している。

- (1) G 407 各古墳の2つの径を示す。表示は計測そのままの値である。表示は計測そのままの値である。実際には長い値を長径、短い値を短径とした。グラフは変更前の表示である。
- (2) G 408 各古墳の長径を降順で並べた棒グラフで表した。あわせて短径を折線グラフで表示した。
- (3) G 409 各古墳の長径、短径を7段階に分け、グループ別に基数を棒グラフで表した。区分は【第12図】に準じた。

第2節 長径÷短径比率

第4表 浄願寺山古墳群 各古墳 長径・短径比率	
データ数	50件
最大値	99.0%
最小値	57.0%
平均値	86.8%
中央値	88.2%

短径を長径で割った数値を百分率であらわしたのが、長径・短径比率（2つのデータを除し、求めることができた数値を百分率で表した値を「長径・短径比率」あるいは「長径÷短径比率」として示す。以降、本稿においては2つのデータを除して求めた数値も同様とする）である。墳丘の形状を把握する指標のひとつとして、短径の数値を長径の数値で除した数値を算出し百分率で表示した。

最大値は4号墳の99.0%で、極めて近い数値は正円形の墳丘を持つことを示す。一方、最小値は26号墳の57.0%で、両者の数値は大きく異なる。このことは本古墳群において、正円形の墳丘を持つ古墳が存在する一方、それと大きく異なる不定形の墳丘を持つ古墳が共存することを意味する。

1 【第13図】から

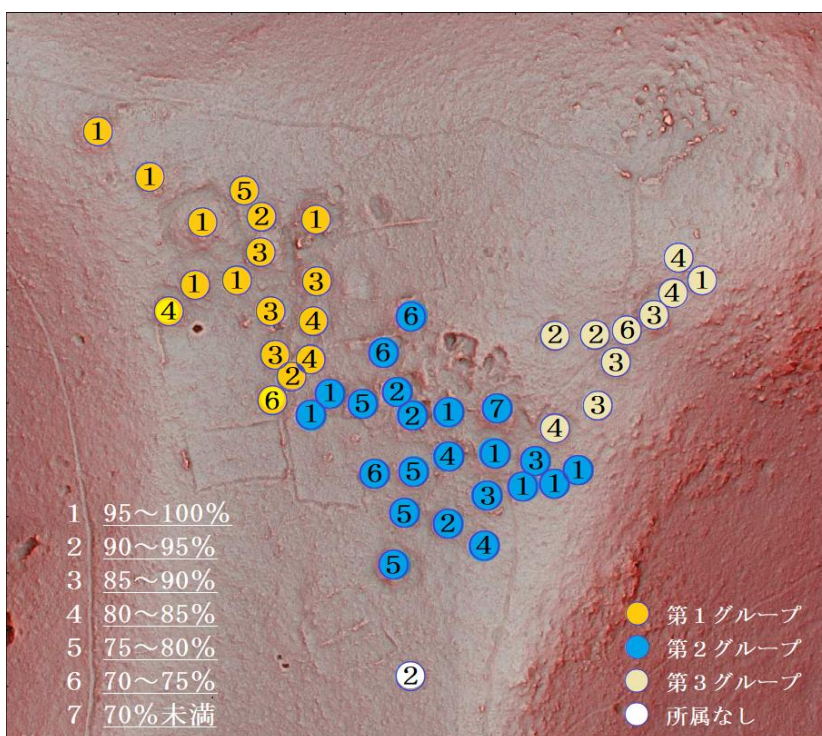
長径÷短径比率を分布図として作成した。古墳の大きさには関係が無い。図にあるように①から⑦の7段階、5%ごとに分け、その分布状況を示した図である。値が小さいほど、正円もしくは正方形に近い墳丘を持つことを示している。逆であれば長楕円形¹あるいは長方形などのいびつな墳丘を持つ。

(1) ①の値を持つ古墳では、第1グループの北西部の一群がめだつ。他の1号墳、2号墳、3号墳、4号墳、10号墳の5基は円形に近い墳丘を持つ。本古墳群中で最も整った円墳の一群であろう。

なお、小型古墳の6号墳は同じく①の値を持つが、7号墳に付属するありかたを示すことから、上記の古墳とは別に考えたい。

他にも第2グループの38号墳の墳裾において、①が付与された3基の古墳が並んでいるが、いずれも小規模古墳で、40号墳以外、平面積も区画Ⅲ一下に分類される。

さらに18号墳、19号墳が第2グループの北西で2基並び、25号墳と30号墳がやや離れて所在する。



第13図 浄願寺山古墳群 長径÷短径比率分布図

¹ 円を分割し生じた両方の半円を、長方形で繋いだ形を本稿では長楕円形と呼ぶことにした。形状としては陸上競技のトラックコースの形状である。そのような形の古墳を本稿では長楕円形墳と呼ぶことにした。

一方、第3グループで位置する①の古墳が、本古墳群中で最も東に位置する49号墳である。
(2) ②の古墳は、第1グループの北部と南端に9号墳、16号墳の1基ずつ、さらに第2グループには2基(21号墳、24号墳)が、第3グループには2基(44号墳、45号墳)が存在する。加えてグループに所属しない33号墳とあわせて8基が存在する。

第2グループの北辺の2基、第3グループの2基が並列することは注目しておきたい。

(3) 先の【(1)】の古墳の東から南にかけて③の古墳が並ぶ。7号墳のほか、11号墳、13号墳、14号墳の4基である。第2グループには2基(36号墳、38号墳)、第3グループには3基(42号墳、43号墳、47号墳)とあわせて、③が付与された古墳は9基である。

(4) 次に④の古墳である。第1グループに3基、第2グループに2基、第3グループに3基、あわせて8基存在する。2基で並存する古墳、単立する古墳とさまざまである。

(5) 以上が①、②、③、④の古墳で、長径と短径の比率が80%以上を持つ古墳である。すなわち、円形あるいは方形の墳丘、あるいは近い墳丘を持つ古墳と考えられる。

(6) 比率が80%に満たない古墳のうち⑤と表示された古墳は、第1グループでは北辺の9号墳の1基だけで、第2グループでは4基が存在する。20号墳以外には、本古墳群の南辺において32号墳、31号墳、28号墳が並んでいる。

(7) ⑥の表示を持つ古墳は、第1グループに1基(17号墳)、第2グループに3基(22号墳、23号墳、27号墳)、第3グループに1基(46号墳)存在する。

このうち第2グループの北辺で並ぶ⑥の表示を持つ22号墳、23号墳について考えてみたい。その南から東の地点において立地する古墳候補地vii【第14章 第1節7】は、2つの古墳とよく似た南北に長い長楕円形の墳丘を持つ古墳である可能性が極めて高い。

現段階では、あわせて3基で一つの集まりと推定しておく。

(8) ⑤の表示を持つ古墳5基、⑥の5基、両者のあわせて10基、全体として20%の古墳が、長楕円形もしくは長方形の墳丘を持つ古墳として数えられる。

上記の古墳のうちまとまりがみられるのは、⑤の32号墳、31号墳、28号墳に⑥の27号墳の4基の一群である。これらの古墳については【第9章 第2節2-(1)】において長楕円形墳の一群として記述されている。

(9) 最後に⑦の表示の古墳である。【第1節1-(5)】に記載した不定形古墳、すなわち異形の墳形を持つ26号墳がこれにあたる【第9章 第2節3-(1)】。

長径と短径の差の最大値は26号墳の7.7mである。26号墳ほど値は大きくないが、その他にも23号墳の4.1m、32号墳、28号墳の3.9m、22号墳の3.8mと大きな差を持つ古墳がある。いずれも第2グループの古墳で、32号墳や28号墳など特色ある古墳の名が並ぶ。

(10) 長径、短径の比率が最も高いのは99.0%の4号墳である。ただし、北北東部で3号墳(95.3%)の墳丘と完全に切断されてない。完全な円墳と言えない。周囲に溝をめぐるし円形に近い墳丘を持つ円墳をあげるとすれば、1号墳(96.8%)、あるいは10号墳(97.6%)となる。

加えて、3号墳(95.3%)、7号墳(85.4%)、2号墳(97.7%)、5号墳(81.4%)は本古墳群の北西部、第1グループの北辺に位置する古墳である。

(11) 最後に比率の値が80%以下の古墳について考えてみたい。【第13図】の⑤、⑥、⑦が付された古墳についてである。

この地域には古墳が密集して築造されている。下記の表中、長径÷短径比率が80%未満の基数について注目してみたい。第2グループにおいて11基中8基(50%台という特別小さい値を持つ1基—26号墳を含む)と表示されており、比率は72.7%と高い数値をとる。

第5表 浄願寺山古墳群 長径÷短径比率の基数等	90%以上		80%以上		80%未満	
	第1グループ	8基	40.0%	7基	38.9%	2基
第2グループ	9基	45.0%	5基	27.8%	8基	72.7%
第3グループ	3基	15.0%	6基	33.3%	1基	9.1%
全体／33号墳除く	20基	100.0%	18基	100.0%	11基	100.0%

80%未満の古墳は第2グループの中でも、ほぼ2つに分けることができる。1つは32号墳の付近にある27号墳、28号墳、31号墳の集まりで、これらは長楕円形【第9章 第2節2-1】の古墳である。

一方、採土地跡と推定される浄願寺山A【第14章 第2節1】の周辺において、3基の古墳をみることができる。22号墳、23号墳、26号墳に古墳候補地vii【同章 第1節7】も考える必要がある。少し離れるが20号墳も加えてもよいかも知れない。

本古墳群において、多くの古墳ではコンタラインの走る方向に長径をとる。従って短径はコンタラインに概ね直交する。その結果、長径・短径比率が80%を切ったのではないか。

それと異なり浄願寺山Aの周辺に所在する古墳は、採土跡地という特殊な状況下に立地しているといえる。凹凸のある跡地に立地することは、定型的な墳丘を築造するに適していたとは言えないであろう。

このように対象とした80%未満の古墳8基が集中するという理由として、複雑な地形の影響をあげてよいのではないか。

2 作成資料

当該項目の分析にあたり下記3種のグラフを作成し、別添資料として添付している。

- (1) G410 各古墳の直径・短径比率の棒グラフと両径の差を示した折線グラフである。号順。
- (2) G411 各古墳の長径・短径比率を降順で並べ棒グラフで表した。
- (3) G412 各古墳の長径・短径比率を5段階に分け、基数を棒グラフで表した。

第3節 高さ

本稿における古墳墳丘の高さは、墳丘内の最高地点の標高と、【第4章 第1節】の墳丘立地標高の差をあてている。

本古墳群中の高さの最大値は10号墳である。高さが3.0mを超える古墳は一基のみで、次位の2.6mを計測する3号墳との間には0.4mの差がある。

最小値は40号墳および50号墳の2基で、標高0.7mを測る。そして、平均値の1.5mを持つ古墳は2号墳、23号墳、33号墳の3基である。

第6表 浄願寺山古墳群 各古墳 高さ	
データ数	50件
最大値	3.1m
最小値	0.7m
平均値	1.5m
中央値	1.5m

1 【第14図】から

各古墳の高さを①から⑥の6段階、0.5m毎に分け表示した分布図である。

(1) まず、10号墳の墳丘が高い理由として、同古墳において横穴式石室が現存することを第一にあげなければならない。

10号墳は本古墳群中唯一、古墳の埋葬施設である横穴式石室がほぼ完存している。【(3)】にも記しているが、仮に10号墳より規模の大きい3号墳や1号墳の石室が遺存していた

ならば、高さの最大値は、その古墳であったであろう。

詳細については【第12章 第2節3】の記載を参考。

(2) 最も高い墳丘を有する10号墳で、①の表示となっているが、次に高い数値の②は3号墳である。以上、①と②は各々1基である。

(3) 3号墳が②である理由は、その墳丘が大規模なためである。【本章 第1節】においても長径と短径の数値が群を抜く存在であることが示されている。

以降、面積、体積に関する項でもこの傾向は明瞭であり、本古墳群内における3号墳の破格の規模がよく理解できる。

(4) ③と表示されている古墳は1号墳、7号墳、25号墳、30号墳、32号墳、34号墳の6基である。

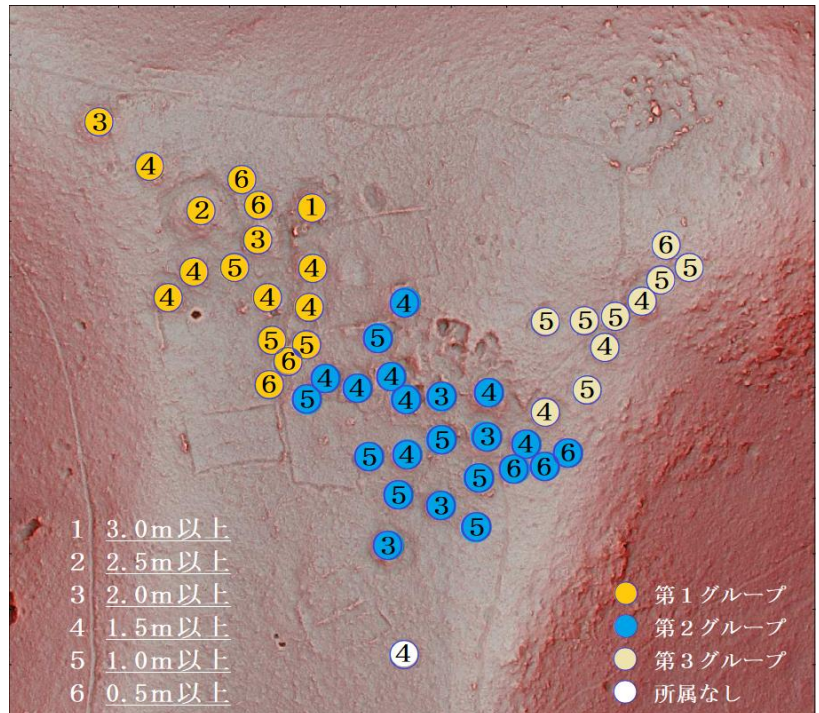
(5) 上記【(1)～(4)】にあげた8基の古墳のうち、半数にあたる10号墳、3号墳、1号墳、7号墳の4基の古墳が、第1グループに属する大型古墳である。また、32号墳は第2グループで唯一の大型古墳である。

30号墳は32号墳に次ぐ第6位の体積を持つ中型古墳で、2.0m以上の高さを持つ。第8位の体積を持つ34号墳も同様である。

不思議な存在が25号墳である。体積で30番目に位置する小型古墳の目立たない古墳でありながら、高さでは3号墳に次ぐ第3位になっている。

10号墳と同様、横穴式石室墳との遺存状況と関連があるのではないかと考えられる浄願寺山Aとの関係があるのか、それ以外の理由があるのか。いずれが正しいか判断がつかかねる。

(6) ④の表示を持つ古墳は、第1グループで6基、第2グループで8基、第3グループで3基である。これに33号墳が加わる。



第14図 浄願寺山古墳群 高さ分布図

特に第2グループの北側では④と表示された古墳が集中している。付近の⑤を含めると、その区域は2.0m未満、1.0m以上の墳丘を持つ古墳で埋め尽くされているといえる。

さらに第1グループ南部の古墳にも④、⑤、⑥の古墳は多い。中位程度の高さを持つ古墳が集中する一帯として注目しておきたい。

- (7) ⑤の表示を持つ古墳は、第1グループで3基、第2グループで7基、第3グループで6基である。

第3グループ10基のうち過半数をこえる古墳が、この表示を持つ。ほかに④は3基、⑥が1基で、よく似た高さの古墳がそろっているといえよう。

- (8) 次に⑥と表示された古墳8基についてである。第1グループ4基、第2グループ3基、第3グループ1基で構成される。いずれもが小規模古墳である。

第2グループのそれは3基、関係の深いと思われる38号墳の南裾に並列し、第1グループにおいても2基ずつ並んで所在する。

- (9) 以上、高さの指標からみると、第1グループには高い墳丘を有する古墳が集中し、第2グループにやや高い墳丘を有する古墳が、どちらかといえば南半分の区域に存在することが認められる。

一方、高さのない墳丘を持つ古墳は第1グループでも比較的多く、大規模な墳丘を持つ古墳と小規模な墳丘を持つ古墳が共存する。第1グループの特色として注目すべきである。

- (10) 10号墳と3号墳を除いた48基の古墳は、最小の高さ0.6mを測る50号墳から2.2mを測る1号墳と32号墳との間、数値では1.6mの間に48基全ての古墳が、17段の階段状に並ぶ。測点の関係（高さは0.1m刻み）から、グラフは何れの段～数値が欠けることはない。

- (11) 墳丘の高さ2.0m未満の古墳は43基である。特に③の2.0m未満から1.5m以上の古墳が19基と最も多く、次いで④の1.5m未満から1.0m以上の古墳の16基が続く。両者で35基、全体の70%を占める。2.0m未満から1.0m以上の墳丘の高さを持つ古墳が、現況における標準的な高さの古墳であるとしておきたい。

- (12) 50号墳の高さは0.6mと極めて低い。ほかに1m以下の持つ古墳が9基ある。調査報告には、これら10基のうち5基の石室の全長が推定されている。

それによれば最も大きいのが、17号墳の7.0m以上（長径11.9m×短径8.6m／本調査による墳丘の規模、以下同じ）、40号墳の6.6m以上（7.2m×7.1m）、15号墳の6.5m以上（8.9m×7.3m）、37号墳の5.0m以上（7.0m×6.8m）、39号墳の5.0m以上（8.3m×8.0m）である。15号墳が小型古墳である以外は、全て小規模古墳である。

これらの古墳において、横穴式石室の規模と墳丘の規模が比較的近い。横穴式石室を覆うに足りる墳丘であり、その規模の縮小化、縮小傾向を認めてもよいのではないか。

- (13) 墳丘の高さに関連する別の指標もある。【第8章 第2節】などでも触れている。

2 作成資料から

当該項目の分析にあたって、下記の3種のグラフを作成し、いずれも別添資料として添付している。

- (1) G413 各古墳の高さを号順に並べた棒グラフである。
- (2) G414 各古墳の高さを降順に並べた棒グラフである。

(3) G415 各古墳の長径・短径比率を5段階に分け、基数を棒グラフで表した。

参考

長径と短径各々と勾配について、直線距離・水平距離の値を参考に両者の関係をあきらかにするため、相関係数を求めた。

1 長径と勾配

(1) 長径【直線距離】と【勾配】の相関係数.....	-0.1976
(2) 長径【水平距離】と【勾配】の相関係数.....	-0.2066
(3) 長径【直線距離－水平距離】と【勾配】の相関係数.....	0.9314
(4) 長径【水平距離÷直線距離(%)】と【勾配】の相関係数.....	-0.9523

2 短径と勾配

(1) 短径【直線距離】と【勾配】の相関係数.....	-0.2187
(2) 短径【水平距離】と【勾配】の相関係数.....	-0.2269
(3) 短径【直線距離－水平距離】と【勾配】の相関係数.....	0.8646
(4) 短径【水平距離÷直線距離(%)】と【勾配】の相関係数.....	-0.9252

以上から【1-(3)、2-(3)】は強い正の相関係数にあるとしてよく、【1-(4)、2-(4)】は強い負の相関係数にある。

第6章 面積

古墳の基盤となっている面積についての考察を進める。本章で対象となるデータは平面積と表面積である。また、表面積と平面積の比率についても検討してみたい。

なお、表面積のデータについては、古墳の調査などでは用いられたことがないのではないかと。測量が難しいためであろう。本稿でもTREND-POINT（トレンドポイント）限定版で表面積の数値を求めることができたこと、かつ、墳丘の盛り上がりなどを判断するために有効な指標と考えたことからデータとして使用した。

第1節 平面積

まず、古墳の平面積について考察を進めたい。その最大値は3号墳の501.3㎡で、第2位の1号墳の数値295.8㎡と比べ、約1.67倍もあり、他の古墳と隔絶した規模であることが容易に認められる。

一方の最小値は50号墳の36.8㎡で、唯一、40.0㎡未満の数値を持つ古墳である。ただし、40.0㎡台の古墳は5基存在している。

次に平均値と中央値の差が大きい点にも注目したい。30号墳の大きな数値が、平均値を大きくしていると推定する。

3号墳の数値が巨大であり、その影響により平均値が大きくなったと考えられよう。面積だけでなく次項の体積について、全体の姿を把握する数値としては、中央値・メジアンの方が有効ではないかと思っている。

1 【第15図】から

各古墳の平面積を6段階にわけたが、本図はその分布図として作成した。

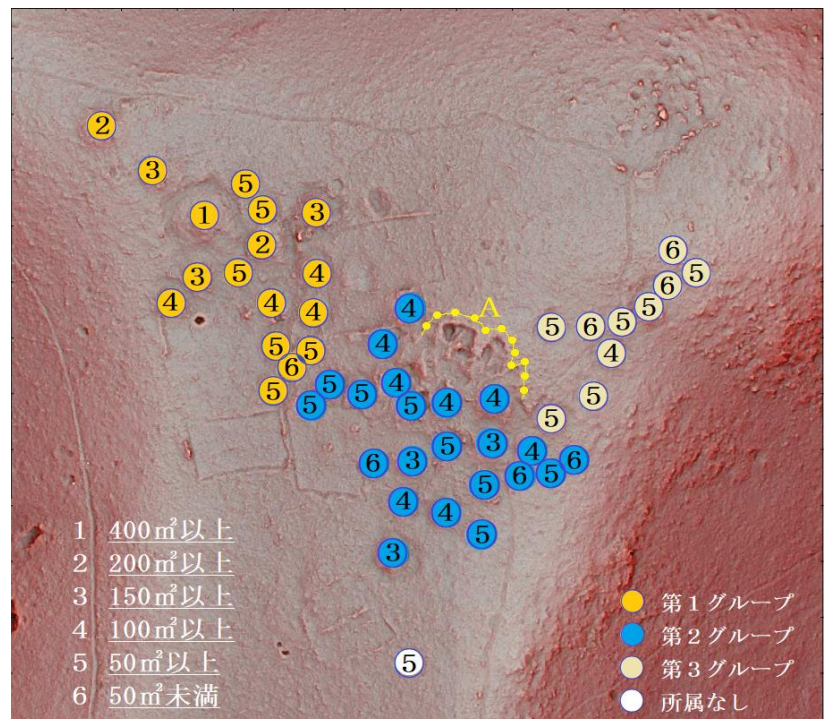
(1) ①と表示されているのが、区画I-上にあたる3号墳で唯一である。上記にも記載しているが、3号墳の巨大さを示す数値の一つといえる。

3号墳は、大規模古墳に分類されている。同古墳は平面積、体積においても他の古墳と隔絶する墳丘を持つ古墳である。

これらのことは、3号墳が本古墳群の盟主的な古墳であることを示している。

(2) ②とあるのが、1号墳と7号墳の2基である。区画I-下に属するこの2基も他の古墳と

第7表 浄願寺山古墳群 各古墳 平面積	
データ数	50件
最大値	501.3㎡
最小値	36.8㎡
平均値	112.0㎡
中央値	94.8㎡



第15図 浄願寺山古墳群 平面積分布図

比べ十分に巨大である。特に1号墳は295.8㎡と300㎡近くの面積を持つ。

- (3) 区画Ⅱー上にあたる③と記されている古墳は6基ある。そのうちの3基、2号墳、10号墳、4号墳が第1グループの古墳で、のこりの3基、32号墳、28号墳、30号墳が第2グループの古墳である。

ア 2号墳は上記6基の中では最大の平面積を持つ。大きな体積を持つ古墳ではないが、平面積が200㎡に近い194.8㎡と高位の第4位の値を示す。

2号墳の西側には、北隣の1号墳と異なり、明瞭な溝がある。3号墳などの事例に従えば、北側には深く掘られた溝が存在した可能性が高い。

そして同墳の周囲に認められる開墾地跡に注目したい。墳丘の北側、横穴式石室に接するように開墾地の境界線が走る。おそらく墳丘は開墾によって削られ、掘られていた溝は埋設されたのであろう。

このことから2号墳墳丘は大きく改変を受けていると推定しておきたい。

- イ 4号墳も詳細は【第11章 第1節2】に記すが、3号墳との関係で注目すべき存在である。横穴式石室が遺存する10号墳も墳丘の規模から妥当であろう。
- ウ 第2グループの3基は同グループ内最大規模の32号墳や、重要な位置を占める28号墳、30号墳が③の値を与えられている。これらの各古墳は互いに隣接するのではなく、周囲の古墳とは異なる数字を与えられている。詳細は【第11章 第1節5、第13章 第4節7】を参考。

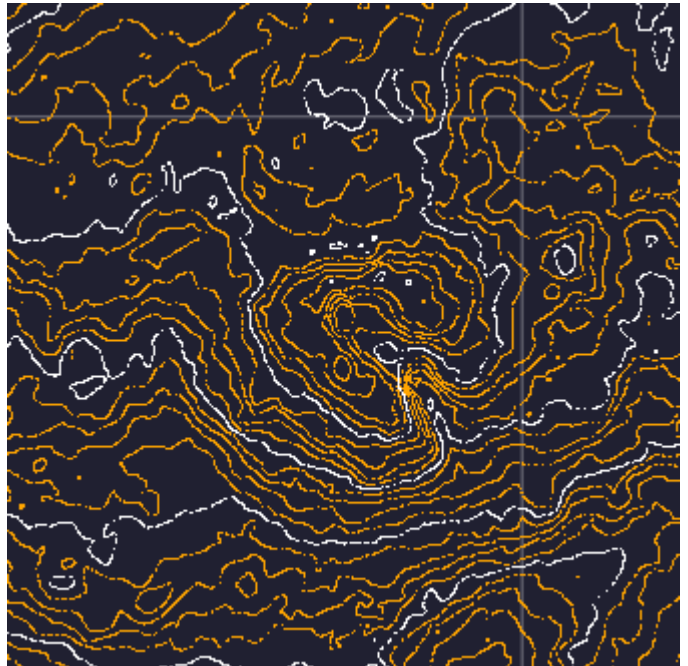
- (4) 区画Ⅱー下にあたる④は、第1グループで4基（5号墳、13号墳、11号墳、12号墳）、第2グループで8基（38号墳、26号墳、21号墳、23号墳、31号墳、25号墳、34号墳、22号墳）、第3グループで1基（43号墳）の計13基みられる。

ア 第1グループの11号墳、12号墳、13号墳からなる3基の集まりと、第2グループの26号墳、25号墳、21号墳、22号墳、23号墳の5基の古墳は注目すべきである。

イ 前者の3基は大型古墳である7号墳、10号墳の南に並ぶ中型古墳で、2基に続いて造られた可能性の高い古墳である。詳細は【第13章 第4節3、4】を参考。

ウ 後者の5基は【第15図】で(A)記載した付近を囲むように立地する。【第14章 第2節1】にはこの地域を浄願寺山Aと名付け、古墳築造のための採土跡と想定している。

区分Ⅲー上の⑤とされている24号墳は、④に近い値を持つ。この古墳を加えると浄願寺山Aの周囲に6基の古墳が、同じような平面積の古墳が並ぶことになる。両者の間には、複雑な関係があると推測できよう。



第16図 浄願寺山2号墳等高線図

(5) 区画Ⅲー上である⑤の古墳は、第1グループに6基(17号墳、14号墳、6号墳、9号墳、8号墳、15号墳)、第2グループに8基(24号墳、36号墳、19号墳、35号墳、20号墳、18号墳、29号墳、49号墳)、第3グループに6基(41号墳、47号墳、45号墳、46号墳、42号墳、49号墳)がそれぞれ所属する。これにどのグループにも属さない33号墳の1基を加えて21基、存在する。

ア 本指標の中では最も多く、かつ、3つのグループにほぼ同数みられる。次の⑥も含めてであるが、これらの古墳は全て小型古墳である。

(6) 区画Ⅲー下にあたる⑥と表記した古墳は、第1グループでは上記の16号墳1基が、第2グループでは29号墳、37号墳、40号墳の3基が、第3グループでは44号墳、48号墳、50号墳の3基の合計7基を数える。

ア 第1グループの南方、および、第2グループの北西を合わせた区域は、⑥と表記された16号墳がほぼ中央に位置し、その周囲を6基の⑤の古墳が取り囲んでいる。

イ 第3グループ東方で2基が並ぶ以外、のこりは単独で所在する。

(7) 本古墳群に属する古墳の平面積の総和は、5,602.0 m²である。その平均値は112.0 m²、中央値は94.8 m²であるから、3号墳などの大きな平面積を持つ古墳の存在が、平均値を大きくしている。

反対に言えば、区分Ⅲに属する小さな古墳の数が圧倒的に多いことを意味する。半数を超える基数(56.0%)の古墳の平面積の総合計は33.9%に過ぎない。

このことは基数の2%すなわち1基にしか過ぎない3号墳の平面積が、全体の8.9%に達していることと関連した事象であるとしておく。

2 作成資料から

当該項目の分析にあたって、下記の9種の表・グラフを作成し、いずれも別添資料として添付している。

- (1) G301 平面積に関する各グループに属する古墳の総合計などの表である。
- (2) G303 平面積を基準とした区分(区画)に関する表である。
- (3) G304 平面積を基準とした区分(区画)に関する基数とその割合を表とした。
- (4) G305 平面積を基準とした区分(区画)に関する総面積とその割合を表とした。
- (5) G306 平面積を基準とした区分と体積を基準とした区分の関係を表とした。
- (6) G416 各古墳の平面積・表面積の棒グラフである。
- (7) G417 各古墳の平面積を号順に並べた棒グラフ。
- (8) G418 各古墳の平面積を号順に並べた棒グラフ。差を折線グラフで示した。
- (9) G421 表面積と平面積の基数を棒グラフとして表した。

第2節 表面積

表面積と平面積の違いとの関係について検証しておきたい。

古墳の墳裾を含む閉じた曲線内に対応する水平な面積を平面積とし、それに対応する古墳表面の面積が表面積である。

第8表

浄願寺山古墳群

各古墳	表面積	平面積
データ数	50件	50件
最大値	514.4m ²	501.3m ²
最小値	37.9m ²	36.8m ²
平均値	116.8m ²	112.0m ²
中央値	99.4m ²	94.8m ²

検証のために求めた表面積と平面積のデータの相関係数の値が【0.9995】と1に近い値を示す。極めて強い関係であることが認められる。

なお、両者の関係について下記の不等式が成立する。

$$\text{表面積} > \text{平面積}$$

表面積は、水平な平面積に対する凹凸のある古墳の表面の数値である。当然、平面積より等しく、あるいは小さくなることはない。

【第8表】は表面積の値を認識するため平面積を再掲している。いずれも最大値は3号墳であり、最小値は50号墳である。

1 【第17図】

(1) 本古墳群に属する50基の古墳の表面積の分布図で、基本的には第15図と大きく変わらない。同じ傾向であると考えてよい。

しかし、【第15図】に表示された平面積の数値と【第17図】に表示する表面積の数値が、下記のとおり9基の古墳において小さくなっている。

ア ③ ⇒ ②に変わった古墳2基。

(2号墳、10号墳)

イ ④ ⇒ ③に変わった古墳4基。

(5号墳、38号墳、26号墳、13号墳)

ウ ⑤ ⇒ ④に変わった古墳2基。

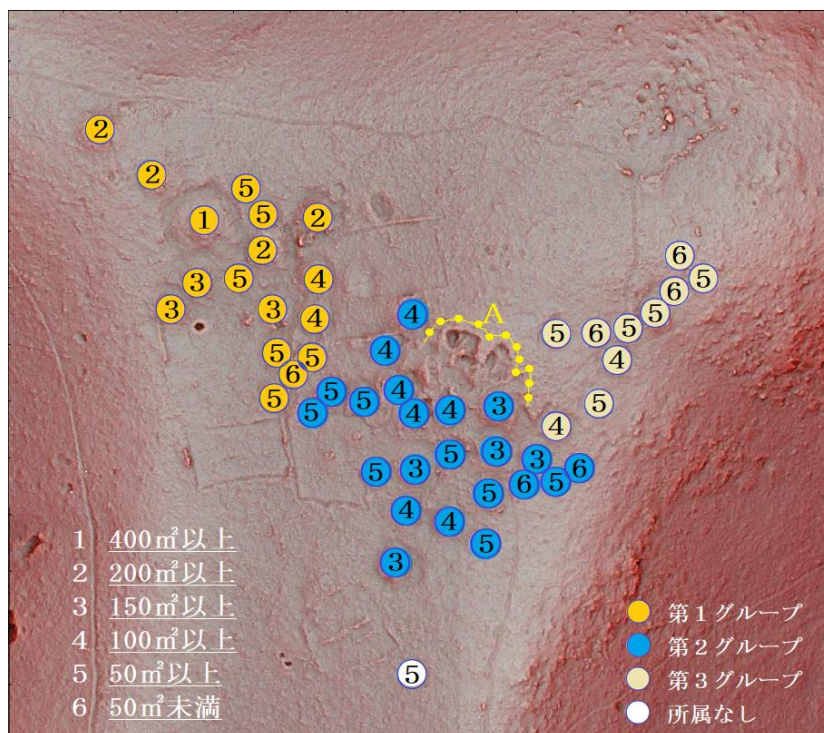
(41号墳、24号墳)

エ ⑥ ⇒ ⑤に変わった古墳1基。

(27号墳)

(2) 【(1-ア)】の古墳は区画Ⅱ-上の古墳であり、【(1-イ)】の古墳は区画Ⅱ-下、【(1-ウ)】の古墳は区画Ⅲ-上、【(1-エ)】の古墳は区画Ⅲ-下にそれぞれ属している。それらは各区画の上位に位置する古墳である。表面積が大きくなることによって、区画も上昇したといえる。

(3) ただし、10号墳はそれと異なると考えてよい。次節、表面積÷平面積比率、表面積と平面積の差では最大数値になっている。



第17図 浄願寺山古墳群 表面積分布図

高さの項で第1位である10号墳は縦方向に盛り上がった構造である。これが表面積の数値にも反映したと考えておきたい。

2 作成資料から

当該項目の分析にあたって、下記の3種のグラフを作成し、いずれも別添資料として添付している。

- (1) G416 各古墳の平面積・表面積の棒グラフである。
- (2) G418 各古墳の平面積を号順に並べた棒グラフ。表面積との差を折線グラフで示した。
- (3) G421 表面積と平面積の基数を棒グラフとして表した。

第3節 表面積÷平面積の比率、表面積と平面積の差

各古墳の表面積を平面積で除して得た数値を百分率で表してみた。当然、100%より小さくなることはない。あわせて両者の差も検討対象としている。

最大値はともに10号墳である。以下の本文に示すが、高さと同様、横穴式石室の存在が値の大きな理由と考えている。

対して、最小値は面積の比率が39号墳で、

両者の差は50号墳である。ほかにも最小値に近い値を持つ古墳が、他にも幾つかみられる。

1 【第18図、第19図】から

両者の値について比較検討するため、上記の項目に関する2つの分布図を用意した。区画はともに5段階である。なお、説明については併記している。

(1) ①が付与された古墳

【第18図、第19図】

ともに区画Ⅱ-上に属する10号墳の1基である。

(2) ②が付与された古墳

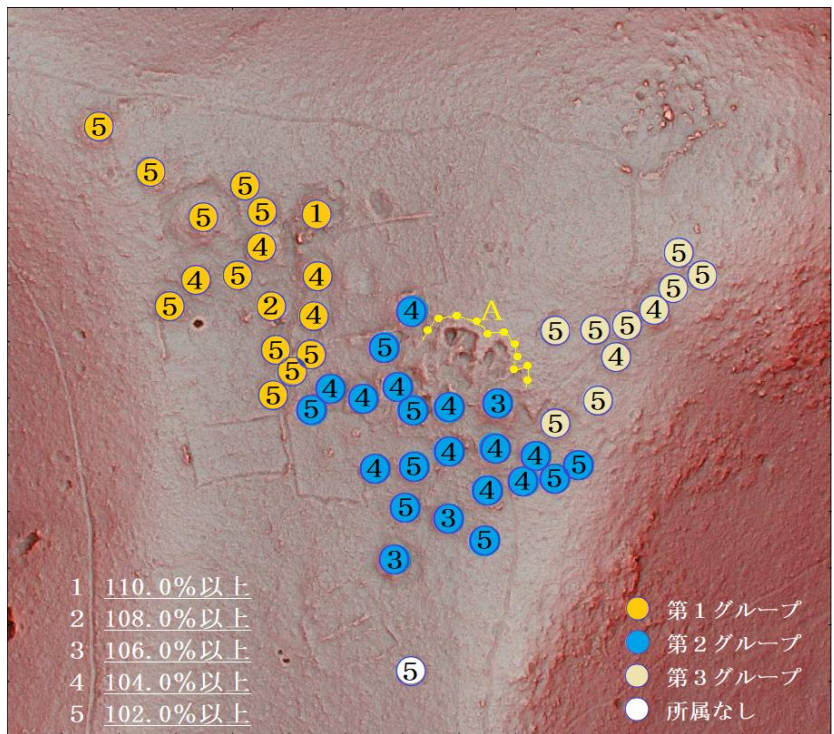
ア 【第18図】

区画Ⅱ-下に属する13号墳が1基のみである。

イ 【第19図】

13号墳だけでなく、区画Ⅰ-上の1号墳、区画Ⅰ-下3号墳、同7号墳の3基と、第

第9表 浄願寺山古墳群		
各古墳	面積比率	両値の差
データ数	50件	50件
最大値	110.6%	19.3m ²
最小値	102.1%	1.0m ²
平均値	104.0%	4.7m ²
中央値	103.8%	3.9m ²



第18図 浄願寺山古墳群 表面積÷平面積の比率分布図

2グループの区画Ⅱー上 32号墳の1基が加わる。

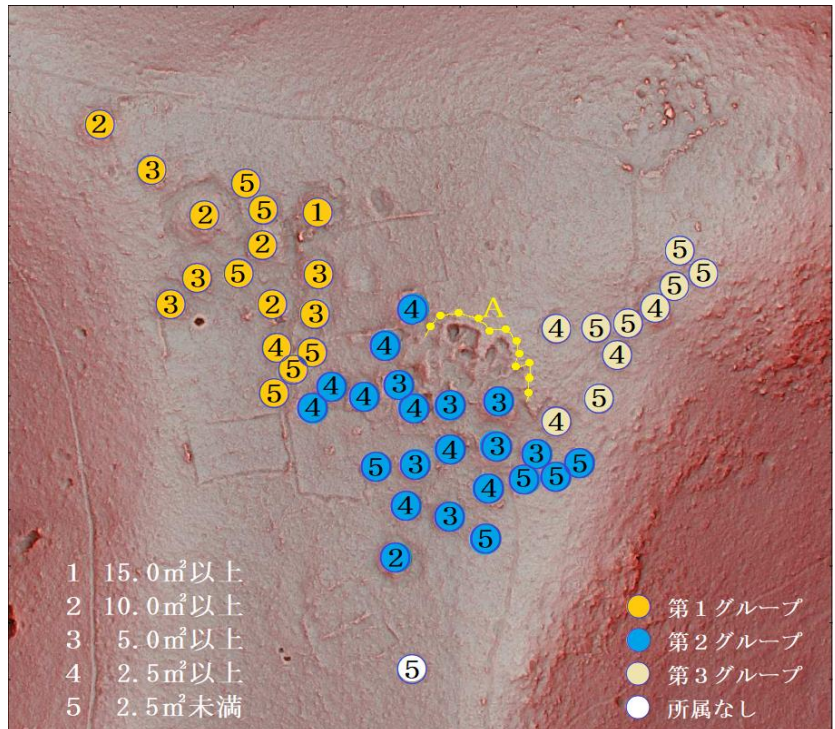
(3) ③が付与された古墳

ア 【第18図】

区画Ⅱー上 32号墳、26号墳と、区画Ⅱー下に属する34号墳のいずれも第2グループの3基である。

イ 【第19図】

第1グループでは5基、第2グループの7基の合計12基がこれに属する。【第18図】に比べ【第19図】では12基と基数が多い。



第19図 浄願寺山古墳群 表面積と平面積の差分布図

(4) ④が付与された古墳

ア 【第18図】

第1グループで4基、第2グループで11基、第3グループの2基を数える。あわせて17基である。

イ 【第19図】

第1グループ1基、第2グループ9基、第3グループ4基の計14基である。

(5) ⑤が付与された古墳

ア 【第18図】

第1グループでは11基でグループ全体の64.7%を数える。

イ 【第19図】

第1グループ6基、第2グループ5基、第3グループ6基、所属なし1基の18基である。

(6) 第1グループの特異性

標記の特異性は、表面積と平面積の比率を分布図とした【第18図】でよみとれる。第1グループで⑤と表示された古墳である。1号墳、3号墳に加えて2号墳、5号墳の4基に⑤の表示がある。前者は区画Ⅰー上と区画Ⅰー下の古墳で、後者は区画Ⅱー上、区画Ⅱー下で各々筆頭の古墳である。

一方、6号墳、8号墳、9号墳、14号墳、15号墳、16号墳、17号墳の7基のうち区画Ⅲー下に分類される16号墳以外は区画Ⅲー上の古墳である。このように小型古墳および小規模古墳も⑤の数字が与えられている。大規模古墳の3号墳から小規模古墳の8号墳まで同じ

範疇に括られていることは注目に値する。

これまで、1号墳、3号墳の2基の古墳が他の古墳と比べて優越性をもっていることを示してきた。しかし、【第18図】では16号墳などの小規模な古墳と同じ扱いとなっている。他の分布図と大きく異なっている。

他の指標ではこのような事例はみられない。2つの集まりが共存し、見かけ上1つと見えているのではないか。それとも特別な理由が存在するのか、筆者は適切な回答を持っていない。

(7) 横穴式石室と表面積等の関係

表面積÷平面積比率などを基に10号墳、13号墳について検討したい。

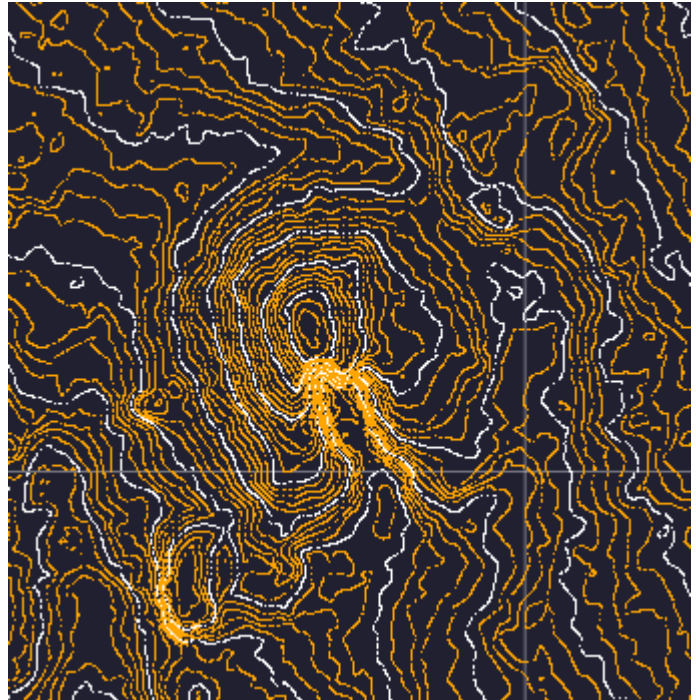
【第5章 第3節1】において、10号墳が最も高さを持つ古墳であることを確認し、理由として横穴式石室の遺存をあげた。

その10号墳は表面積÷平面積比率でも最も大きい値を持つ。その値は110.57%で、50基の中で最も大きい比率を示す。また、表面積と平面積との差でも19.3mと他の古墳と比べ大きな値をもつ1位である。

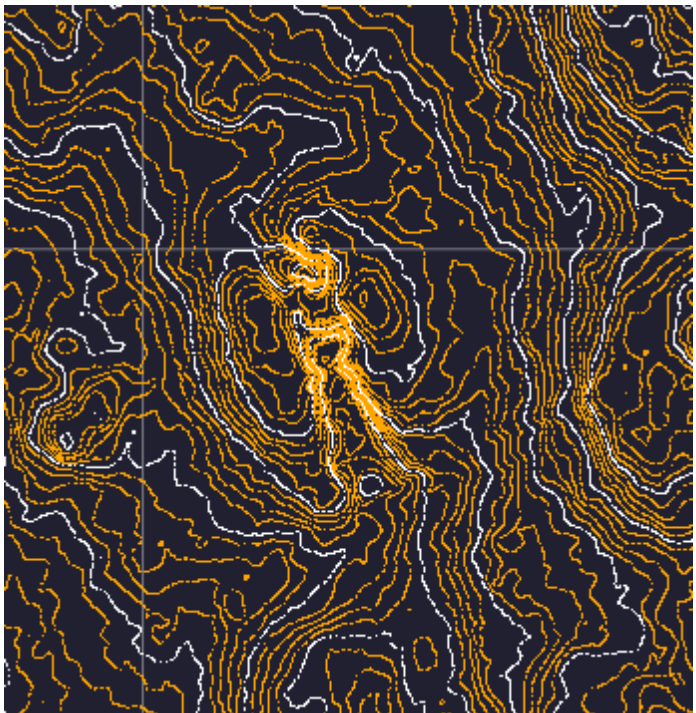
両方の値が他と隔絶した大きな値を持つ理由として、高さの値と同様、横穴式石室の残存をあげておきたい。

次に13号墳について検討してみたい。同古墳の高さは1.8mで、近隣の11号墳、12号墳とともに10位である。特別な特徴を読み取ることはできない。

一方、表面積÷平面積比率の値は1位の10号墳110.57%に次ぐ109.22%である。3位の34号墳の106.17%や、それ以下の値の古墳と比較すると、2基の突出ぶりが目立っている。表面積と平面積の差についても13号墳は、3号墳に次いで3位の値である。



第20図 浄願寺山10号墳等高線図



第21図 浄願寺山13号墳等高線図

【第 20 図、第 21 図】は浄願寺山 10 号墳、同 13 号墳の等高線図である。両者のコンタラインが集中し横穴式石室の存在を示している。前者は羨道部にあたる付近で、後者では墳丘を貫くようにコンタラインが密である状況が各々みられる。

10 号墳では横穴式石室の存在を、高さなどの値が大きい理由としたが、実際は羨道部でコンタラインが密であることも、その理由の一因であると考えている。

そう考えると 13 号墳の表面積÷平面積比率および表面積と平面積の差の各々の値が大きい理由として、コンタラインの状況をあげておきたい。

なお、平面積と表面積の差のデータと高さのデータの相関係数の値は【0.8884】の値を算出しており、強い相関にあるといえる。

2 作成資料から

当該項目の分析にあたって、下記の 4 種のグラフを作成し、いずれも別添資料として添付している。

- (1) G418 各古墳の平面積を号順に並べた棒グラフ。表面積との差を折線グラフで示した。
- (2) G419 各古墳の表面積を降順の棒グラフ、表面積と平面積比率を折線グラフで示した。
- (3) G420 各古墳の表面積と平面積比率を降順に、表面積と平面積の差を棒グラフと折れ線グラフで示した。
- (4) G422 各古墳の表面積÷平面積比率を基数に分け棒グラフで表示した。

第7章 体積

本章では墳丘の体積について考察を進める。古墳各々を比較する場合、径、高さ、そして面積は重要な指標であるが、体積も重要な指標である。体積を俎上に載せて検討することは大切な試みであると思う。

例えば、古墳の築造を現代的にとらえ、資材確保に要する経費と築造に要した人数を考える道筋もある。しかし、その算出は極めて難しい。事実上、不可能であろう。

が、体積という指標が反映する可能性はないだろうか。簡単ではないが築造に要した人数など数量として表すこともできそうである。もちろん、本稿ではそこまで至ってはいないが。

第1節 体積

第10表

浄願寺山古墳群
各古墳 体積

データ数	50件
最大値	305.2 m ³
最小値	2.7 m ³
平均値	39.9 m ³
中央値	23.5 m ³

本古墳群における墳丘体積の最小値を持つ古墳は50号墳で2.7 m³である。最大値は3号墳で305.2 m³、50号墳の約110倍でかなりの差がある。そして3号墳に次ぐ規模の1号墳の170.1 m³と比較しても約1.8倍の法量を持つ。

また、【第6章】の面積と同様、平均値と中央値の差が認められ、その差は16 m³ほどである。

差の原因は【第6章】と同様、3号墳などの大きな法量の墳丘規模を持つ古墳の数値が極めて大きいためと考えられる。

1 【第23図】から

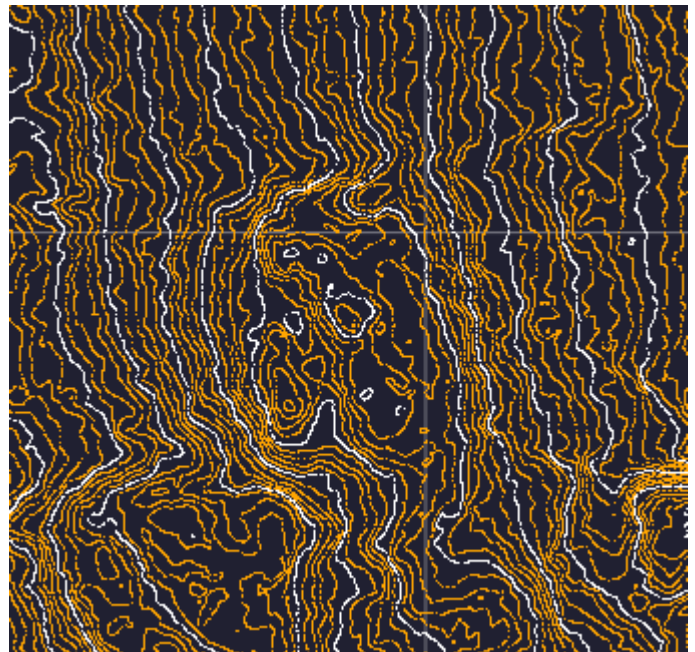
50基の古墳の体積を、図の記載のとおり①～⑦の7段階に分けた分布図として作成した。

(1) 分布図で①とあるのは3号墳である。本古墳群中最大の体積を誇る大規模古墳（大型古墳を細分）で、規模の上で他の古墳と圧倒的な差を示している。第1グループに属する。

(2) ②とあるのは、1号墳、32号墳、10号墳、7号墳の4基である。これらを大型古墳に分類している。1号墳は本群の最北西の位置を占める古墳である。溝を持たないなど特徴ある性質を持つ。10号墳は横穴式石室が残存しており、7号墳は崩壊した横穴式石室の存在が推定される。以上3基はともに第1グループの大型古墳である。

32号墳だけが第2グループに属する古墳で、同グループ内での最大規模の体積を持つ。同グループを代表する古墳である。

なお、33号墳を除いた本古墳群中49基のうち、最北および最西に位置する1号墳と、最南に位置する32号墳



第22図 浄願寺山23号墳等高線図
体積の平均値に近い
体積(39.8 m³)を持つ古墳

の2基は大型古墳であるだけでなく、本古墳群の構造のうえからも重要な位置を占めている。

- (3) 以上の5基が大型古墳に分類されている。その体積の総合計は 811.4 m³ で、本古墳群の全て体積の 1,994.7 m³ の 40.7%、体積全体の4割を占める。

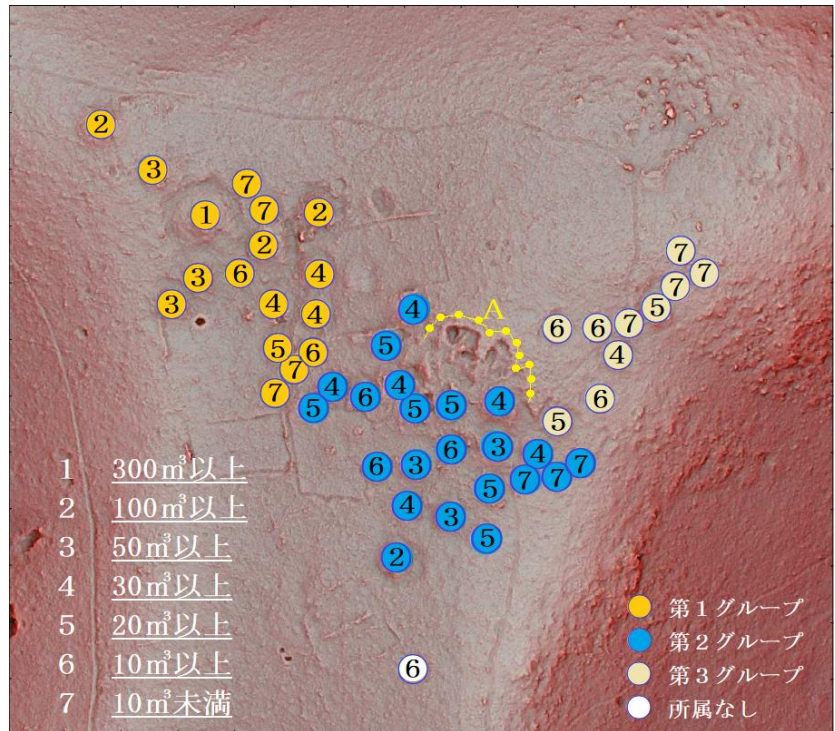
さらに第1グループの4基を考えると 697.2 m³ で全体積の3割以上の35.0%、3分の1以上である。4基の合計体積の大きさは別格といわざるを得ない。

本古墳群の北西部において、3号墳の巨大な墳丘だけでなく、第1グループの大型古墳が連続して築造された事実注目したい。

- (4) ③とある古墳は、第1グループでは2号墳、4号墳と5号墳の3基、第2グループで30号墳、34号墳、28号墳の3基の合計6基を数える。
- (5) ④とある古墳は、第1グループにおいて11号墳、12号墳、13号墳の3基、第2グループにおいて38号墳、21号墳、26号墳、23号墳、19号墳、31号墳の6基、第3グループで43号墳の1基で、合計10基の存在を確認できる。

ここでは、第3グループの古墳が登場する点が注目される。この古墳は43号墳で当該グループ最大の古墳である。

- (6) 以上、【(4)、(5)】に記載した16基が中型古墳に分類される。体積の総合計は 759.4 m³ で、本古墳群の全体積の 1,994.7 m³ の 38.1%、全体の3分の1をこえる40%に近い値である。
- (7) ⑤とある古墳は、第1グループにおいて14号墳の1基、第2グループで24号墳、36号墳、35号墳、18号墳、22号墳、25号墳の6基、第3グループの47号墳、41号墳の2基、あわせて9基を確認できる。
- (8) ⑥とある古墳は、第1グループで15号墳、6号墳、第2グループで20号墳、29号墳のそれぞれ2基、第3グループで44号墳、45号墳、42号墳の3基、どのグループにも所属していない33号墳の合計8基である。
- (9) ⑦とある古墳は、第1グループで9号墳、8号墳、16号墳、17号墳、第2グループで40号墳、27号墳、39号墳、37号墳、第3グループで46号墳、49号墳、48号墳、50号墳の各々4基の合計12基である。



第23図 浄願寺山古墳群 体積分布図

(10) 以上、【(6)、(7)、(8)】の29基を小型古墳に分類した。体積の総計は424.0 m³で、本古墳群の全体積の1,994.7 m³の21.3%、全体の4分の1強の値である。

なお、【(6)、(7)】に記載した古墳は小型古墳として、【(8)】を小規模古墳として細分している。

(11) 第1グループの3号墳を中心とした体積の分布状況を考えてみたい。

①とある3号墳の北西に1号墳があり、東南に7号墳、さらに10号墳の2基が並ぶ。これらは②の古墳である。そして3号墳と1号墳の間に2号墳が、南西に4号墳、5号墳が並ぶ。③の古墳である。

以上、これら7基の古墳が、3号墳を頂点とする本古墳群の最盛期の前後に相次いで築造されたと推定したい。

さらに11号墳や12号墳、13号墳の3基は④とあり、上記の7基の古墳に続く規模である。

(12) 次に同じ第1グループの4基の古墳、6号墳、9号墳、8号墳、16号墳の小型古墳、あるいは小規模古墳についてである。

7号墳の墳裾に造られた6号墳、3号墳の溝の外縁に沿って築造された8号墳、9号墳、15号墳の墳裾に造られた16号墳、いずれも寄り添うように造られている。そして寄り添う古墳よりも新しいことに誤りはない。以上から概ね次のことが言える。

ア 上記に記載した4基の古墳の築造時期が新しいといえる。

ただし、寄り添われる側である大型古墳の3号墳、7号墳の2基と比べ、15号墳は規模において大きな差がある。小型古墳15号墳と小規模古墳16号墳の時間的間隔は短く、築造時期は極めて近いと考えられる。

従って、寄り添うように造られた小型古墳の6号墳や小規模古墳の9号墳、8号墳は、15号墳や17号墳とともに規模の小さい古墳であり、築造時期は極めて近いと想定したい。

一方、3号墳や7号墳、その他にも1号墳や10号墳のように墳丘規模の大きい古墳—大規模古墳、大型古墳は、占める位置からも比較的早く築造されたと考えてよい。

そして、大規模古墳・大型古墳と小型古墳・小規模古墳の間を占めるのが、4号墳や13号墳、11号墳などの中型古墳であろう。

イ 以上から連続して並んで築造されている大型古墳、中型古墳、小型古墳・小規模古墳は、その規模だけでなく、時間的にも並んでいると想定したい。

ウ 平面積を区分した基準についても、関係する各古墳の区画をあげてみたい。

3号墳は区画Ⅰ—上、7号墳は区画Ⅰ—下であり、17号墳、6号墳、9号墳、8号墳、15号墳は区画Ⅲ—上に16号墳は区画Ⅲ—下にあたる。それ以外の10号墳、11号墳などは区画Ⅱの古墳である。

このことは体積を区分した基準と大きく変わるものでないと認めてよい。

エ 以上、整理すると『概ね墳丘の規模が大きいほど築造時期が早く、小さいほど築造時期が新しい』といえる。

このことについては、【第13章】でもさらに具体的に考察したい。

2 基数と体積の比較

G 426 は、基数の比率およびその基数に相当する全体積の比率を表した折れ線グラフである。体積はグラフ左側で基数を上まわり、基数は右側で体積を上まわっている。その上下関係が逆転するのは、30 m³の左側である。古墳体積の平均値が 39.9 m³であるので妥当であろう。

広義の大型古墳に属する 5 基で総体積の約 40%を占め、広義の小型古墳の総体積約 10%であるものの総基数は 20 基と 40%である。大型古墳と小型古墳が、体積と基数で相対する状況を反映しているものと考えておきたい。

上記【1-(12)-エ】および【第 13 章】から、『本古墳群の形成は、数少ない大型古墳の築造に始まり、多くの小型古墳の築造に終わった』と考えられる。

3 作成資料から

当該項目の分析にあたって、下記の 2 種の表・グラフを作成し、いずれも別添資料として添付している。

- (1) G 302 体積に関する各グループに属する古墳の総合計などの表である。
- (2) G 307 体積を基準とした区分に関する表である。
- (3) G 308 体積を基準とした区分に関する基数とその割合を表とした。
- (4) G 309 体積を基準とした区分に関する総体積とその割合を表とした。
- (5) G 310 平面積を基準とした区分と体積を基準とした区分の関係を表とした。
- (6) G 424 各古墳の体積の値を号順に並べた棒グラフである。
- (7) G 425 各古墳の体積の値を降順に並べた棒グラフである。
- (8) G 426 各古墳の体積および基数の比率を表した折れ線グラフである。
- (9) G 427 各古墳の体積の値を区分ごとに基数で表した棒グラフである。グループごとにも分けている。
- (10) G 429 各古墳の立地標高と体積を比較するための分布図である。

第8章 様々なデータから

【第4章】から【第7章】にかけて、本古墳群の標高、勾配、長径、短径、高さ、平面積、表面積、表面積と表面積の比率、同差、体積の各データを分析してきた。

本章では上記のデータの2件以上から得た複合データや、2つのデータを用いて作成したグラフなどについて検討した。

第1節 平面積と体積

【第2章 第5節】では、本古墳群に属する50基の古墳の区分案を提示している。

平面積を基準とした区分、体積を基準とした区分である。本節では両者の関係を図示するため表・グラフなどを作成している。

1 【第24図】から

平面積を大きい方からAからFまでの6段階に、体積を1から7までの7段階にそれぞれ区分し、その両方の値を並べて当該古墳の位置に表示したのが、右図である。

アルファベット表示のA

およびBが区画Ⅰの広い平面積を持つ古墳である。さらにCとDが区画Ⅱ、EとFが区画Ⅲに分割される。そして前者のA、C、Eが上、後者のB、D、Fが下にそれぞれ細分されている。

次に数字表示の1と2が大型古墳、3と4が中型古墳、5から7が小型古墳に分類されている。なお、1は大規模古墳であり、7は小規模古墳に細分される。

2 G434の作成と意味

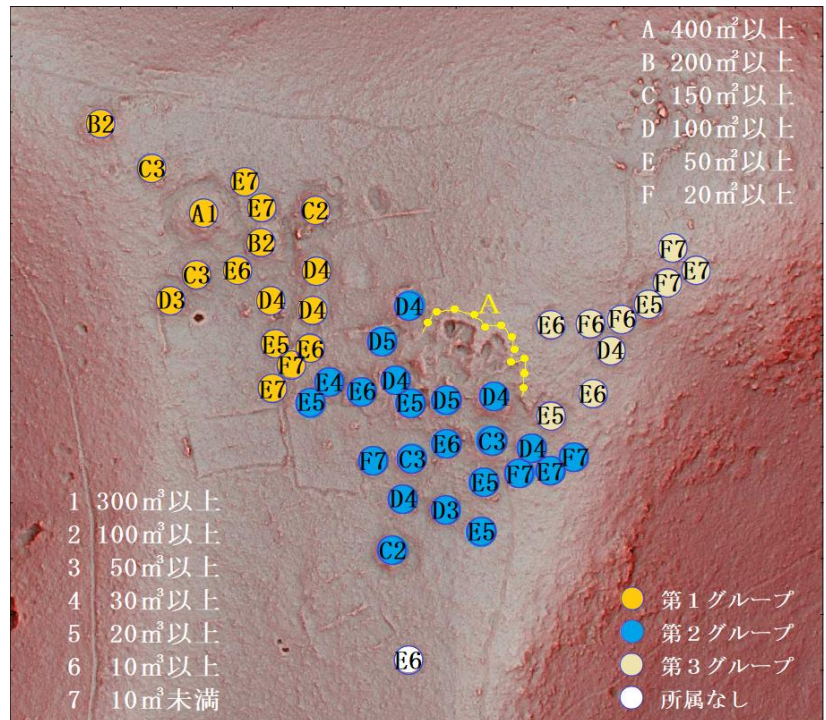
アルファベットと数字を古墳ごとに表示したのが、【第24図】の分布図であるが、さらに進めて、平面積の6段階および体積の7段階のそれぞれが、下記のように相対すると考えた。その状況を表示したグラフの作成を行い、平面積と体積の関係の分析を行ってみた。

なお、一般には本古墳群50基を対象にしているが、本グラフでは1号墳と3号墳を除いた48基が対象である。

(1) 区分と規格の検討

【A】 ⇔ 【1】 【B】 ⇔ 【2】 【C】 ⇔ 【3】 【D】 ⇔ 【4】
 【E】 ⇔ 【5、6】 【F】 ⇔ 【7】

上記、相対する段階をあわせた指標を持つ古墳「α群」と称する”の基数は次のとおりで



第24図 浄願寺山古墳群 平面積、体積区分分布図

ある。

【A 1】 = 1 基 【B 2】 = 2 基 【C 3】 = 4 基 【D 4】 = 9 基

【E 5】 & 【E 6】 = 14 基 【F 7】 = 6 基 合計：36 基

一方、 α 群の 36 基以外の古墳 “ β 群” と称する” は次のとおりになる。

【C 2】 = 2 基 【D 3】 = 2 基、【D 5】 = 2 基 【E 4】 = 1 基、【E 7】 = 5 基

【F 6】 = 2 基 合計：14 基

(2) α 群と β 群の関係

α 群の 36 基を『平面積と体積の規格』が相対すると考え、のこり β 群の 14 基を相対さないとした場合、前者が 72%、後者は 28%になる。

G434 の平面図と体積を両軸にとる分布図によれば、概ね β 群の古墳マーカーが α 群の古墳マーカーの周囲に点在する傾向を見て取れる。数値が一段階小さいか、一段階大きいかのいずれかであると考えたい。

この事実は、平面積と体積に極端な差のある古墳は存在しないということにほかならない。本古墳群では、 β 群の数値より大きく、あるいは小さい領域の古墳はみられないのである。 α 群の古墳を核とし、そのまわりに位置する β 群の枠を超える、平面積と体積が大きく異なる古墳が存在しないことを重要視しておきたい。

3 平面積区分と体積規格の関係

各古墳の標高と平面積、および体積の 2 つの分布図を作成している。古墳の立地する標高と（平面積および体積のいずれかの）規模との関係を示している。

(1) G428、G429 から

本稿では、本古墳群 50 基を対象にしているが、本グラフでも 1 号墳と 3 号墳を除く 48 基としている。小さい値の古墳の表示が重なりみにくくなるため、値が大きい両古墳を除外したためである。

前者の G428 は標高と平面積、後者の G429 は標高と体積を表している。縦軸、すなわち標高のデータは両者同じである。従って、横軸が相違するに過ぎない。その特色は下記のとおりである。

なお、各古墳の標高については【第 4 章 第 1 節】に詳しい。

ア 平面積の区分と体積の規格の関係

グラフの横軸について注目したい。両者とも古墳の存在しないある程度の空間を認めることができる。

① 古墳の数値の最低値

50 号墳の 36.8 m²未満の平面積を持つ古墳は存在しない。一方、体積では 50 号墳の 2.7 m³未満の値をもつ古墳は存在しない。

② 体積について

30 号墳の 73 m³以上から 7 号墳の 108 m³以下の間の体積を持つ古墳は存在しない。一方、平面積においては、該当古墳がみられない幅広い区間はみられない。

③ 標高とグループ

2 つのグラフから、第 3 グループの 9 基の古墳は標高 233.0m 以上の場所に立地する。

それに対して、第2グループに属する23号墳、38号墳、25号墳、30号墳、40号墳、39号墳、22号墳、37号墳、29号墳、36号墳、21号墳、24号墳の12基の古墳が標高231.2mから228.5mの間に位置する。

それ以下の標高には第2グループと第1グループの古墳が共存する。ただし、第1グループの古墳が第2グループの古墳より低所に立地する傾向にある。

4 作成資料から

当該項目の分析にあたって、下記のグラフを作成し、いずれも別添資料として添付している。

- (1) G434 各古墳の平面積と体積を比較し分布図としてまとめたグラフ。
- (2) G428 立地標高と平面積の比較をした分布図
- (3) G429 立地標高と体積の比較をした分布図

第2節 体積÷平面積

本節では体積とならんで重要な指標である平面積との関係について考察を進める。扱った数値は体積を平面積で除した値である。言い換えれば、1㎡あたり何mの封土を積み上げているかという数字である。平均高とでも言うべきではないかと考えている。

単純に言えば墳丘封土を積みあげた㎡当たりの土量とみることができるか。現代的に言えば㎡当たりの工事量に相当すると考えたい。なお、埋葬施設である横穴式石室の残存状況などを無視している。

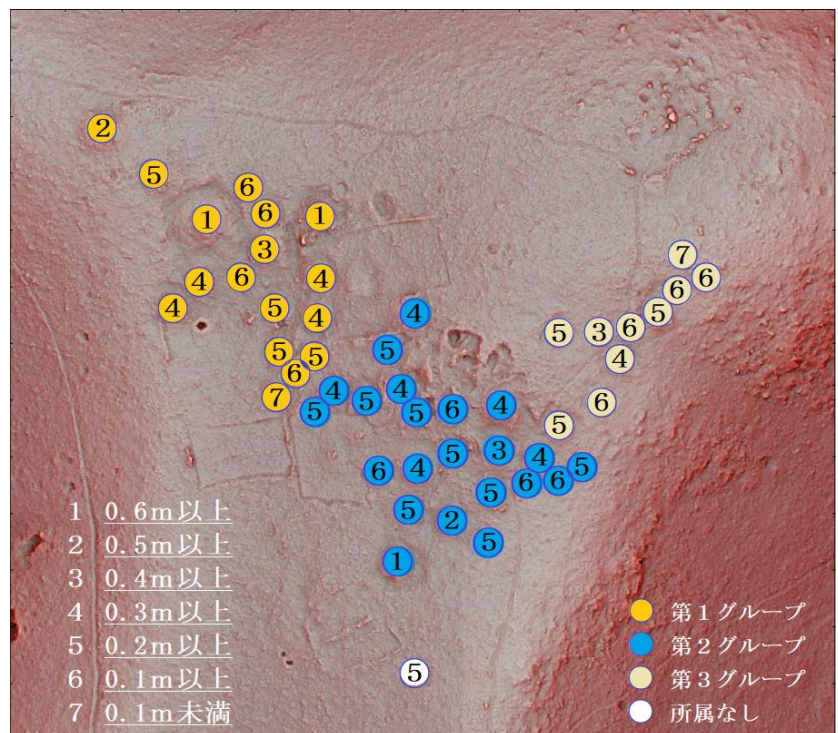
この数字の値が大きければ大きいほど、墳丘を高く積み上げているし、小さいほど積み上げる高さは小さく、墳丘は薄いと見える。

第11表 浄願寺山古墳群 各古墳 体積／平面積	
データ数	50件
最大値	0.64m
最小値	0.07m
平均値	0.29m
中央値	0.27m

【第11表】によれば、最大値の0.64mは32号墳である。大型古墳の1基ではあるが、他の数値で最大の値を示したことはない。この点は注目しておきたい。

最小値は0.07mで、該当する古墳は50号墳と17号墳の2基である。値は10cm未満の数値を示す。48番目の古墳（39号墳）の値は両者の倍の値で0.15mである。48基の古墳は全て10cm以上であることから、低い数値を持つ両古墳の墳丘は、平坦に近いものと考えてよい。

なお、17号墳は西側におい



第25図 浄願寺山古墳群 体積÷平面積分布図

て開墾跡地に接しており、そのために小規模古墳であり、かつ、薄い墳丘を持つ古墳となった可能性もある。

2 【第25図】から

本分布図は、体積÷平面積の値の分布をあらわしたものである。①～⑦の7段階に分けた。0.1m（10cm）ごとに区切っている。

- (1) ①と表示されているのは、32号墳、10号墳、3号墳の3基である。

いずれも大型古墳に分類される古墳である。

本指標においては、高さで1位の10号墳を抑え第2グループに属する32号墳が、微差でありながら1位となっている。（32号墳：0.64m、10号墳：0.62m、3号墳：0.61m）

すでに記載したが、大型古墳32号墳が1位の値をとる理由は明らかではない。

- (2) ②とあるのは、1号墳と34号墳の2基である。（1号墳：0.58m、34号墳：0.51m）

注目したいのは、32号墳に隣接する34号墳である。大型古墳の7号墳より大きな数値を持つ。本古墳群の中で重要な古墳であることを暗示しているのかもしれない。墳丘を描き出すコンタラインは、他とは比較して密であるようにも思える。

なお、他の古墳と比べて、同墳は表面積と平面積の比率でも第3位に位置している。

- (3) ③と記載されているのが7号墳、30号墳、44号墳で、各グループ1基ずつの存在が確認できる。（7号墳：0.48m、30号墳：0.46m、44号墳：0.40m）

44号墳は隣接する中型古墳の43号墳より当該数値は大きく、小型古墳のなかで最も大きな値を持つ。

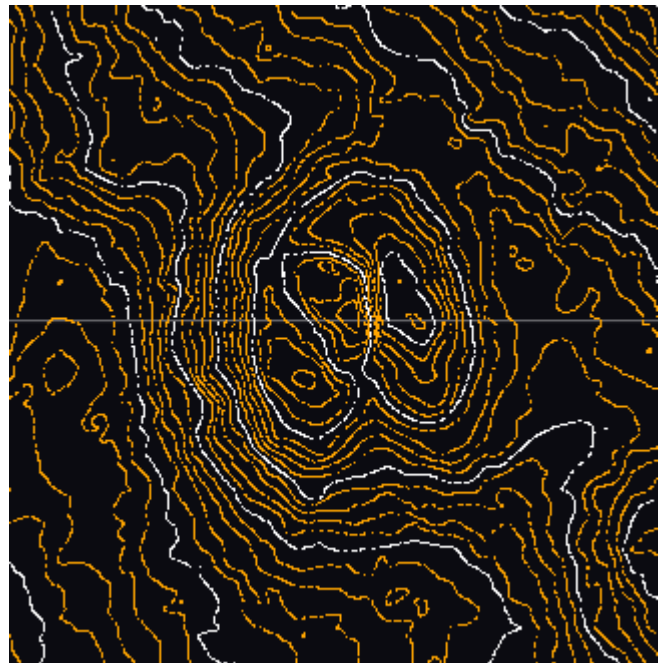
- (4) ④とあるのは、第1グループで4基、第2グループで6基、第3グループで1基の合計11基の存在が確認できる。

第1グループでは4号墳と5号墳（同表示）と11号墳と12号墳が各々隣接する。一方、第2グループでは隣接するものではなく、他の古墳を1基程度挟んで存在するのと異なる。

43号墳は平面積、体積とも第3グループの古墳では最も大きい古墳である。体積÷平面積においても同じ状況にある。

- (5) ⑤の記載があるのが、第1グループで4基、第2グループで9基、第3グループで3基、所属なしの1基の合計17基になる。最も基数が多いクラスである。

注目したいのは、13号墳がこのクラスに属している点である。表面積と平面積の比率は2位、両面積の差が3位となっているが、横穴式石室の残存状況がその理由と考えられる【第6章・第3節1-(7)】。しかし、本指標では24位と大きく順位を下げている。



第26図 浄願寺山34号墳 等高線図

一方、④の2基、11号墳、12号墳が隣接している。13号墳を合わせた3基は「平面積を基準とした区分」は区画Ⅱ一下に、「体積を基準とした区分」は中型古墳に分類されている。

ただし、体積÷平面積については11号墳の0.39m、12号墳の0.36mに対して、13号墳が0.28mと0.1m前後とやや差が認められる。ただし、表面積と平面積の比率、両面積の差などが示す横穴式石室の残存状況に関係するか否か、微妙なところである。

(6) ⑥とあるのは、第1グループで4基、第2グループで4基、第3グループで4基の合計12基存在している。

(7) ⑦の記載があるのは17号墳と50号墳の2基である。ともに0.07mで最小値の値を持つことは前記した。

この2つの古墳は、限りなく平坦に近い古墳と考えられる。しかし、主体部である横穴式石室が埋設されているはずである。ただし、その石室は小規模と推定できよう。

石室の縮小・小型化が(X軸、Y軸の平面的だけではなく、Z軸の3次元方向にも)起きていると考えられる。その石室の縮小・小型化から、2つの古墳の築造時期を本古墳群中のなかで最も新しい時期と推定しておきたい。

(8) ①、②、③の古墳は合計8基である。全体の16%を占める。これらのなかには、他の指標の検討において目立つことのなかった2つの古墳、34号墳、44号墳が含まれる。

(9) G431、G432のグラフは体積÷平面積をもとにした表である。前者は号順、後者は降順に並べたものである。上段、下段に並べたグラフは同じデータの表示である。

異なるのは上段が「平面積を基準とした区分との対比」、下段が「体積を基準とした区分との対比」の各々につき、古墳ごとに属する区分を表示したものである。

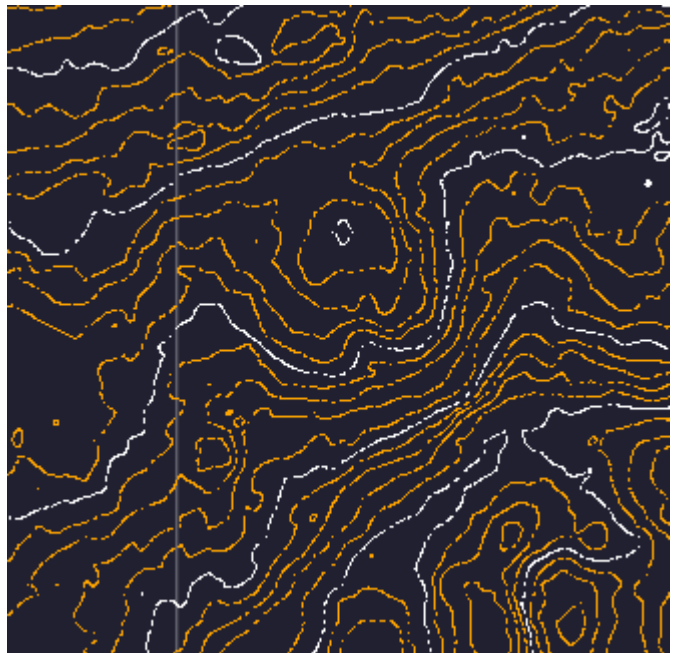
2 作成資料から

当該項目の分析にあたって、下記の4種のグラフを作成し、いずれも別添資料として添付している。

(1) G430 各古墳の平面積 体積 区分(区画)関係グラフ。

(2) G431 各古墳の体積÷平面積 区分(区画)関係グラフ。号順。

(3) G432 各古墳の体積÷平面積 区分(区画)関係グラフ。降順。



第27図 浄願寺山44号墳 等高線図

第3節 四指標について

高さ【第5章 第3節】は各古墳における縦方向の最高値(各古墳最高所—立地標高)であり、体積÷面積【本章 第2節】の値は高さの平均値である。これに対して、面積比率(表面積÷平面積)、両面積の差(表面積—平面積)【第6章 第3節】は古墳の起伏を反映した数値と

考えている。

いずれも縦方向—三次元方向に関連を持つと考えられる数値である。ここではそれらの4つの数値を分析の対象とした。

第12表 浄願寺山古墳群				
各古墳	墳丘高さ	面積の比率	両値の差	体積／面積
データ数	50件	49件	50件	50件
最大値	3.10m	10.6%	19.3m ²	0.64m
最小値	0.70m	2.1%	1.0m ²	0.07m
平均値	1.49m	4.1%	4.7m ²	0.29m
中央値	1.50m	3.9%	3.9m ²	0.27m

【第12表】によれば、墳丘の高さの最大値は10号墳の3.10m、最小値は50号墳の0.7mである。面積の比率では最大値が10号墳の10.6%、最小値は39号墳の2.1%、両面積の差は最大値が10号墳の19.3m²、最小値は50号墳の1.0m²、体積÷面積の最大値はやはり10号墳の0.64m、最小値は50号墳の0.07mである。

この状況を把握・分析するためにG311を作成した。高さ、面積比率（表面積÷平面積）、両面積の差（表面積－平面積）、体積÷面積の四指標を対象に、上位5位までと下位5位までの数値を持つ古墳をまとめた表である。

なお、本節に関連して【第8章 第2節】も参考にしていきたい。

- (1) 表に取り上げた古墳は21基を数える。その内訳は上位の数値を持つのが9基(50基の18%)で、逆に下位の値を持つのが12基(50基の24%)である。なお、上位、下位の両方の値を持つ古墳は存在しない。
- (2) 上位の順位を持つ古墳は、全て第1グループと第2グループに属している。一方、下位の順位を持つ古墳は各グループにみられる。
- (3) 10号墳と32号墳はすべての指標において上位5位に位置する。前者は体積÷面積の値が2位である以外、全てが1位と表示される。一方、32号墳は体積÷面積の値が1位である以外、残りの指標が5位となっている。

偶然なのか、あるいは理由があるのか。後者であったとしても詳細は不明である。

- (4) 3号墳で不思議な状況が確認できる。高さなどが2位、3位と群中最大の古墳にふさわしい順位を示すが、面積の比率は44位と45位とほとんど変わらない順位である。墳丘が巨大であるだけに比率が小さくなったのであろうか。

3号墳に次ぐ規模の1号墳においても同じデータが31位となっている。3号墳、1号墳ともに巨大な墳丘のため比率は小さくなったと考えておきたい。

- (5) 13号墳について考察してみたい。当該古墳では両面積の比率と両面積の差では2位、3位と順位は上位である。理由として【第6章 第3節1-(7)】に記述した横穴式石室の遺存状況があげられる。が、体積÷面積の値は中位の順位となっている。

- (6) 25号墳も不思議な古墳である。高さは3位だが、体積÷面積の値は39位と下位にならぶ。

【第3章 第3節1-(5)】では、採土地跡の浄願寺山Aに隣接していることを理由の一つと

してあげている。

(7) 下位の順位を持つ古墳のなかで、四指標全てが45位以下である例はない。

(8) 50号墳は下位の順位を持つ代表的な古墳である。面積比率を除き、高さ \div 体積 \div 面積が50位、両面積の差が49位となっている。

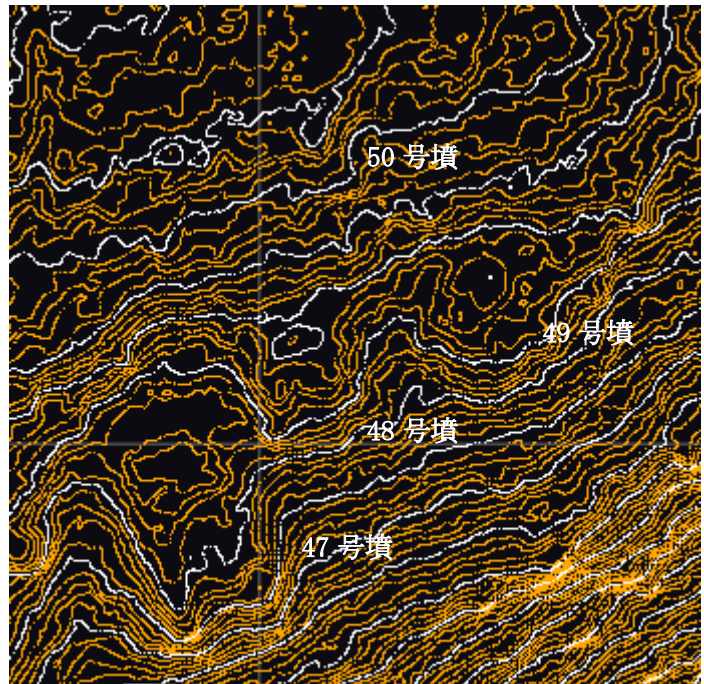
それに次ぐ存在が、17号墳（体積 \div 面積50位、高さ47位、面積比率46位）と9号墳（面積比率49位、高さ47位、体積 \div 面積46位）で、ともに第1グループに属する小型古墳である。

2 作成資料から

当該項目の分析にあたって、下記の

4種のグラフを作成し、いずれも別添資料として添付している。

(1) G311 各古墳の高さに関する四指標。



第28図 浄願寺山古墳群 50号墳ほか



第29図 浄願寺山古墳群所在地付近断面図

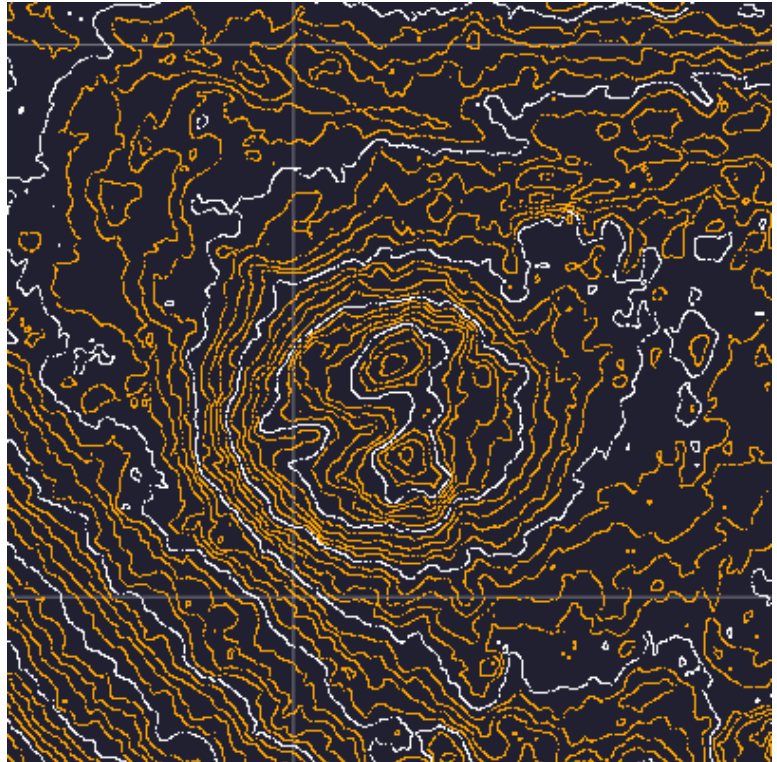
第9章 古墳の墳形

本古墳群に属する古墳の墳形について、赤色立体図および等高線図をもとに考察をすすめたい。

第1節 墳形について

本節では、【第5章 第2節】短径÷長径の比率を使用した（以下、本章においてのみ短径÷長径の比率の比率を『比率』とする）。その等高線図から得たデータ、さらに赤色立体図から得た情報を加味して、墳形を判断した。

なお、各々の墳形について下記の定義によって分類した。その結果を図示したのが【第31図】である。



第30図 浄願寺山1号墳等高線図

1 墳形の定義

(1) 円墳

条件Ⅰ：短径÷長径の比率80%以上の古墳である。

条件Ⅱ：墳裾が内側に向かって弧を描く

※ 条件Ⅰの比率90%以上を円墳Ⅰ、80%以上を円墳Ⅱに細別したが、より円形に近い形状とより楕円形に近い形状を、比率でもって区別しただけである。

(2) 長楕円形墳

条件Ⅰ：比率80%未満の古墳である。

条件Ⅱ：全体として弧を描くが、特に長軸方向において墳裾のかなりの部分が直線の箇所がある。

※ 長楕円形墳の詳細については【3-(1)】に詳述している。

(3) 方墳

条件Ⅰ：方形の異なる2つの辺の比率が80%以上の古墳である。

条件Ⅱ：墳裾部が概ね直線を描く。

※ 条件Ⅰの比率90%以上を方墳Ⅰ、80%以上を方墳Ⅱに細別したが、より正方形に近い形状とより長方形に近い形状を、比率でもって区別しただけである。

※ 長楕円形墳に相当する古墳は存在しない（比率80%未満の方墳は存在しない）。

(4) 墳形不詳

上記に分類したものの分類できなかった古墳、あるいは円墳か方墳か判断がつかなかった古墳である。

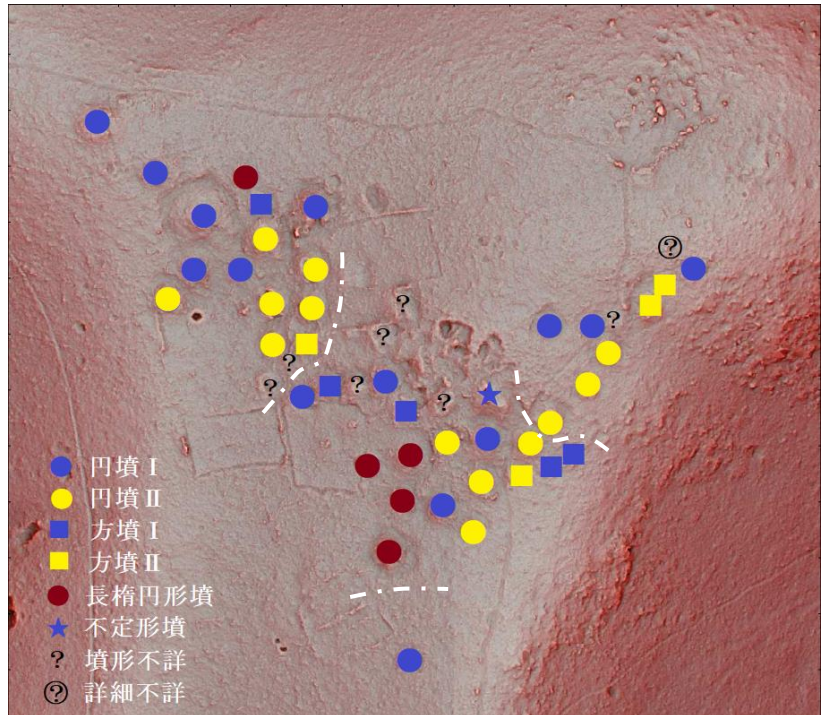
(5) 不定形墳

古墳であることは間違いないが、円墳、方墳あるいは他の墳形にも属さない独特の形状をした古墳。26号墳1基である。

(6) 詳細不詳

50号墳が該当する。

「調査報告」には高さ1.10m、現状の項に「石材散乱」としか記録されていない。赤色立体図、等高線図では存在をうかがえるものの明確に把握できないので、墳形の推定までは困難であると判断した。



第31図 浄願寺山古墳群 墳形分布図

なお、本古墳の体積等の数値については、その箇所に存在する人工的な高まりを測定していることを申し添えておく。

2 作成資料から

当該項目の分析にあたって、下記の4種のグラフを作成し、いずれも別添資料として添付している。

- (1) G312 墳丘形状区分と属する古墳の分類。
- (2) G313 墳丘形状区分と属する基数の分類。
- (3) G314 墳丘形状区分と属する数値の分類。

第2節 墳形各種

本古墳群の古墳の墳形について第31図をもとに分析を行ってみたい。ただし、前節【1- (5)、(6)】に該当する古墳は対象から除外している。

1 各種墳形の分布

墳形は大きく円墳系（円墳Ⅰ、円墳Ⅱ、長楕円形墳）の古墳、方墳系（方墳Ⅰ、方墳Ⅱ）の古墳に区分される。他にも先の分類に属さないものや不定形古墳などがある。

(1) 円墳系（円墳Ⅰ、円墳Ⅱ、長楕円形墳）の分布状況

円墳系の古墳についての分布状況についてであるが、一部、方墳も含めて考察している。

ア 円墳とした古墳は27基、総平面積3,522.2㎡、平均値130.5㎡である。一方、総体積1,428.7㎡、平均値52.9㎡となっている。

これに長楕円形の古墳5基を加えた32基の古墳の総平面積4,104.2㎡、平均値128.3㎡で、総体積は1,646.4㎡、平均値51.5㎡となる。前者では全体の73.3%、後者では全体の82.5%を占めている。

後述する方墳の平均値と比較すると、両方とも大きい値をもつ。

イ 本古墳群のなかで北西部に位置する一群は、他と異なる特徴を有する古墳の集まりである。墳丘においても同様に、1号墳、2号墳、3号墳、4号墳、10号墳の5基はいずれも比率が95%以上の円墳Ⅰである。

規模、形状ともに代表的な円墳がみられる。背景にはそれらの古墳を出現させた築造者の強い意思を感じられる。典型的な円墳の設計プランがあり、これらの古墳築造者は、それを厳格に守ろうとしたのではないか。

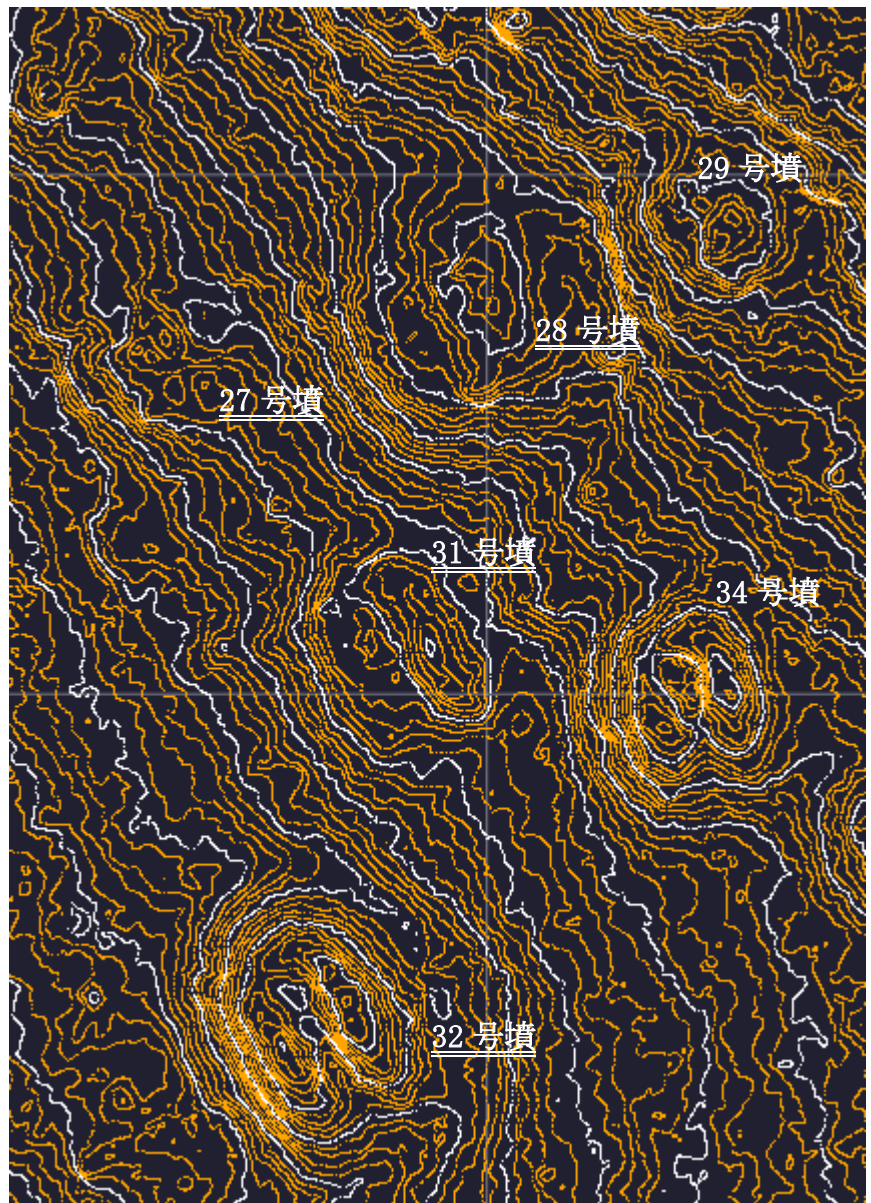
ウ 上記の南側において、比率のやや小さい円墳Ⅱがまとまって存在する。これらは7号墳以外、中型古墳、あるいは、それよりも小さな古墳の集まりである。

これら円墳Ⅱの古墳が5基集中するが、方墳Ⅱの古墳1基を加えて、長辺と短辺の差がより大きい墳丘を持つ古墳が、集中して存在することを指摘できる。

なお、方墳Ⅱの15号墳と南西に並ぶ16号墳、17号墳の墳形不明の2基が、第1グループと第2グループの境に沿って並んでいる。

そして、これらの古墳を含めて【第13章 第4節3、4】の順列古墳Ⅲ、Ⅳに分類することができる。

エ 第2グループに



第32図 浄願寺山32号墳ほか 長楕円形古墳群

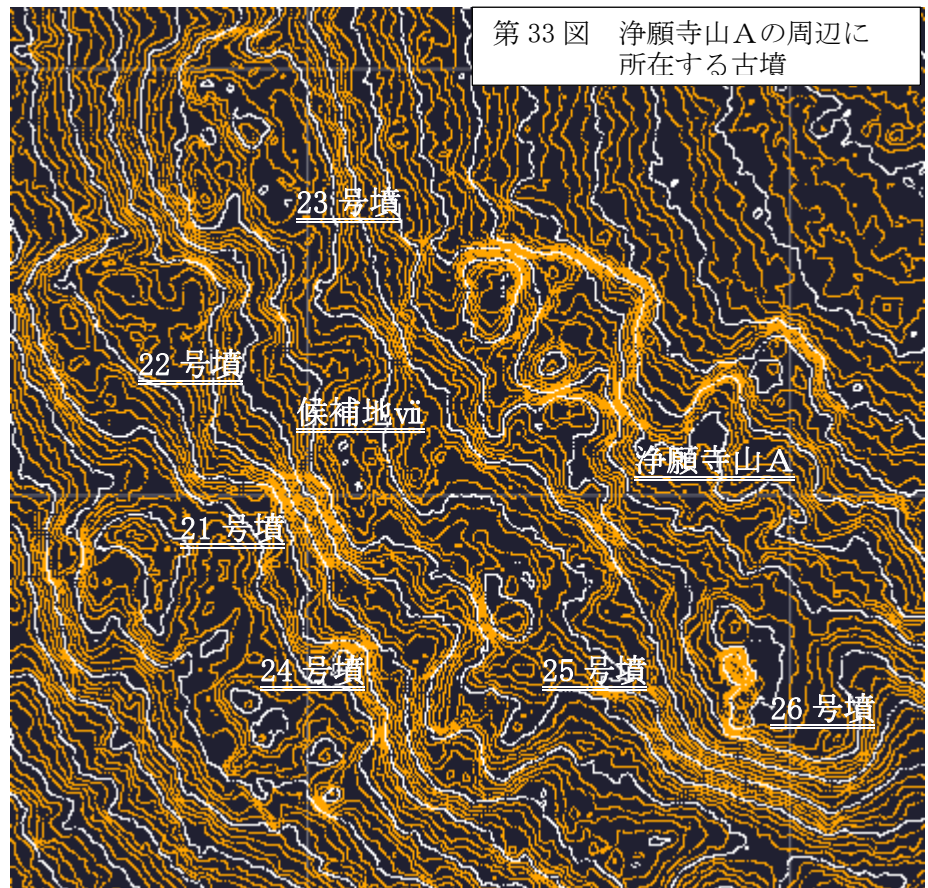
ついて考えてみてみたい。南西部で 32 号墳、31 号墳、28 号墳、21 号墳の 4 基の長楕円形墳が固まって立地する様子が確認できる【第 32 図】。

墳丘の規模は 32 号墳よりやや劣るが、第 2 グループの古墳の中では重要な存在である 28 号墳も含まれている。

なお、集中して立地していることについては、築造場所の結果か、長楕円形墳をつくるという意思があったのか、等高線図を見る限り前者の可能性が高いが、いずれについての結論をくだす材料はない。

長楕円形墳については【カ、および、本節 2-(1)】においても詳述している。

オ 第 2 グループの北側では墳形不詳の古墳が多くみられる。それらの古墳は浄願寺山 A の縁辺にみられる。浄願寺山 A を採土跡地【第 14 章 第 2 節】と考えており、その跡地とその周辺（特に北西から西、そして南に至る周辺）は複雑な地形を呈して



いる。その縁辺に立地しているのが、21 号墳、22 号墳、23 号墳、24 号墳、25 号墳、26 号墳である。加えて、古墳の可能性が高い候補地 vii【第 14 章 第 1 節 7】が、浄願寺山 A を取り囲むか、その範囲内に存在する。

これらのうち円墳と方墳である 21 号墳、24 号墳、不定形古墳である 26 号墳以外の 3 基（候補地 vii を加えて 4 基）が墳形不明である。

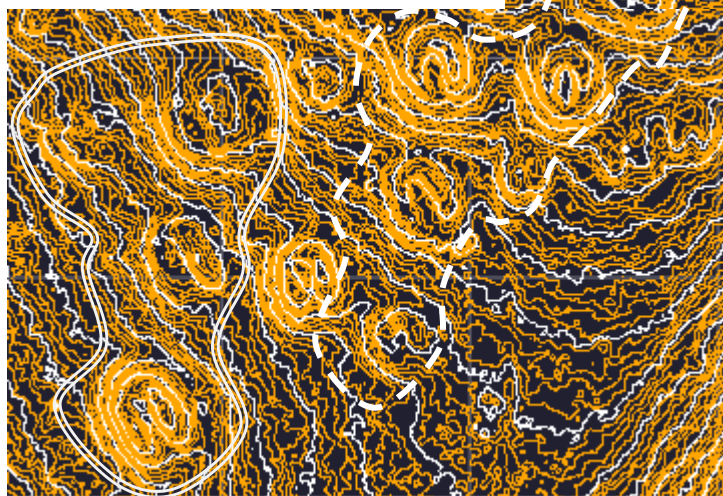
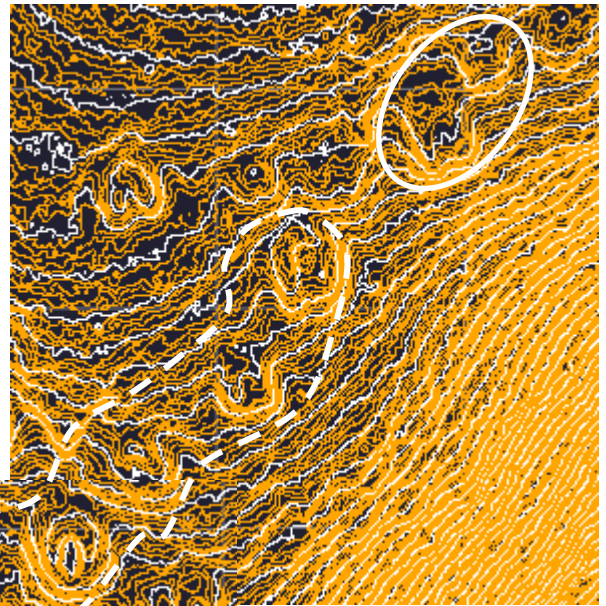
そして後述【3-(2)】古墳の列が認められる【第 33 図】。

カ 本古墳群の南東側、第 2 グループから第 3 グループにおいて、円墳、方墳の区別なく黄色に塗色された古墳が並ぶ。90%未満から 80%以上の比率もった円墳Ⅱ、方墳Ⅱの古墳の列である。

本古墳群の北東に位置する 48 号墳から南西方向に 47 号墳、43 号墳、42 号墳、41 号墳、38 号墳、37 号墳、36 号墳と並び 35 号墳に至る列である。これら 9 基の古墳

は、方墳Ⅱに分類された48号墳、47号墳の2基を除き円墳Ⅱとした古墳である。これらのうち38号墳、43号墳の2基は平面積からは区画Ⅱの古墳に分類され、体積は中型古墳に属する。それ以外の7基はいずれも区画Ⅲの小型古墳である。

さらに上記【エ】の比率がより小さい長楕円形古墳【2-(1)】の4基を加



第34図 浄願寺山古墳群南東辺における古墳の分布状況

実線 方墳Ⅱの古墳
破線 円墳Ⅱの古墳
二重線 長楕円形の古墳

えて考えると、本古墳群の南東辺においては、長径と短径（方墳では長辺と短辺）の比率が90%未満の古墳が連続して築造されたことになる。

すなわち本古墳群の南東の縁辺を方墳Ⅱ、円墳Ⅱ、長楕円形墳の長径が勝る古墳が南東（加えて南も）の縁辺に並んでいることになる。

(2) 方墳系（方墳Ⅰ、方墳Ⅱ）の分布状況

ア 方墳に分類した古墳は9基

方墳Ⅰ、方墳Ⅱに分類した古墳は9基で、全体の18%を占めるに過ぎない。その総平面積は693.1 m²、平均値77.0 m²、総体積は180.3 m³、その平均値20.0 m³と極めて小さい。

円墳Ⅰ、円墳Ⅱの平面積の平均値である130.5 m²と体積の平均値52.9 m³と比べると方墳Ⅰ、方墳Ⅱの平均値は極めて小さい。

なお、方墳の平面積の最大値は24号墳の97.2 m²、体積の最大値は19号墳の35.5 m³である。ともに円墳Ⅰ、円墳Ⅱの平均値より小さい。

イ 分布は38号墳の南側に39号墳、40号墳、37号墳の3基が並び、第3グループの東側で47号墳、48号墳が所在する。また、第1グループと第2グループを挟んで15号墳と19号墳がみられる。3基から2基の小さな集団を形成し、それが散在している。

ウ 方墳の長辺と短辺の比率について考えてみたい。

37号墳が98.4%、19号墳が98.3%、40号墳が97.9%、39号墳が96.1%、8号墳が94.5%、24号墳が94.4%と以上の6基が90%を越える値をもつ。加えて47号墳の89.9%は90%とみてよい。従って、7基が90%以上の比率を持つとしておく。

のこりの2基も80%台である。次記する円墳系の長楕円形墳に対応する例はない。

2 長楕円形古墳

上記の聞き慣れない語句を墳形名に使用したので、その内容を説明しておきたい。

(1) 長楕円形墳

上記【1-(1)-エ】にあるように第2グループの27号墳(71.3%)、28号墳(77.1%)、31号墳(78.5%)、32号墳(76.5%)の4基と、第1グループに所属する9号墳(79.5%)の5基を長楕円形墳と呼称することにした。

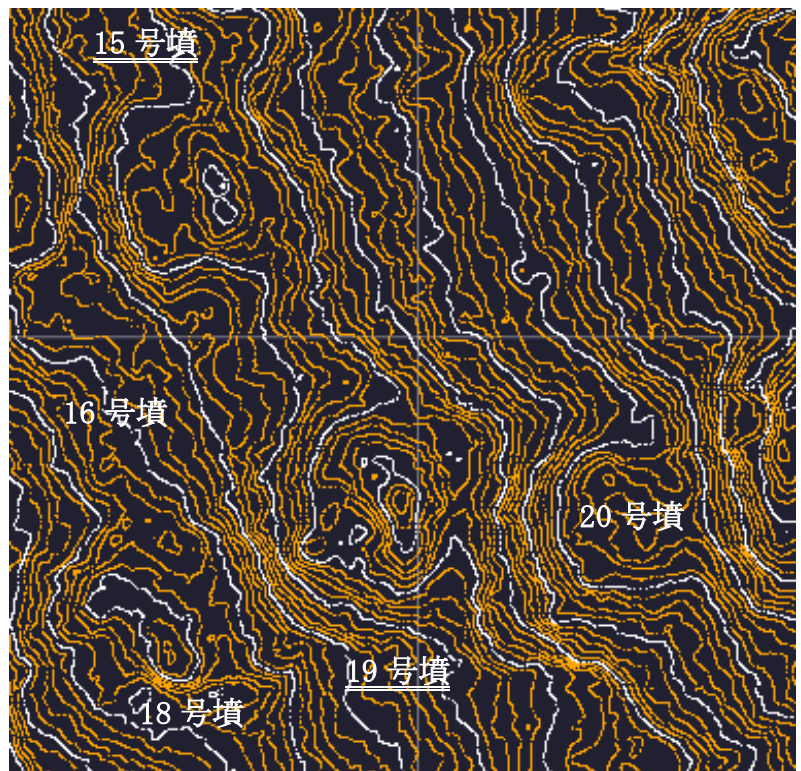
正円を半裁した2つの半円の間を長方形でつないだ形状である。俗な表現をすると小判のような、あるいはトラックコースのように見える。

このような古墳では、等高線が走行する方位に墳丘長軸が設定されている。墳丘の短軸方向(北東から南西)への広がりを持っていない。その形状から横穴式石室墳を埋設するためには最も効率の良い墳形と言えないだろうか。

南端の重要な地点に位置する大型古墳32号墳が代表例であり、『調査報告』では26号墳とともに全長8.1m以上とあり、調査した全古墳中、最大長の横穴式石室の存在を記録している。

同じ大型古墳である3号墳や1号墳が、墳丘の中心付近に石室奥壁を置くのに比べ大きな違いがある。墳丘と埋葬施設である横穴式石室の関係は、大きく変化したものと考えられる。

また、3号墳の溝のふちに存在する9号墳は区分Ⅲ-上、小規模古墳に分類される古墳で、第1グループに属する古墳のなかで唯一の長楕円形墳である。ただし、32号墳のような典型的な長楕円形墳ではないようである。



第35図 浄願寺山古墳群 15号墳、19号墳等 等高線図

3 不定形古墳

本古墳群のなかで特異な墳形を持つのが 26 号墳である。

(1) 墳形について

その平面形は楕円形に近い不規則な五角形で、長軸（北西－南東）と短軸（北東－南西）の両軸が概ね直交する。

長径は 4 位の数値（17.8m）をとり、同じ第 2 グループで最大規模の 32 号墳（16.8m）を凌駕する。しかしながら短径は長径の 6 割弱に過ぎないためか、墳丘の平面積（24 位）および体積（22 位）と平均的な位置を占めている。

ただし、南から西方向における墳裾の設定の仕方によっては、巨大な墳丘を持つ古墳とみることも可能である。

墳頂部は本古墳群のなかで例を見ないほど広く、墳丘同様の不規則な形状を呈している。

墳頂部西寄りに露出する横穴式石室にも注目しておきたい。『調査報告』では計測値を全長 8.1m 以上、幅 1.4m と記し、「巨大な安山岩の天井石が動か

され石室が露出している」と石室の現状を述べている。赤色立体図や等高線図でも石室の位置が克明に表されている【第 36 図、第 37 図】。

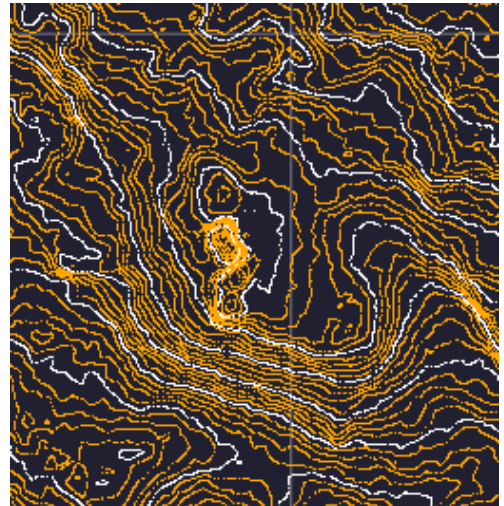
そして上記の『調査報告』とおり天井石は遺存していると記載されている。その遺存状況は本古墳群の中でも 10 号墳ほどでないにせよ、13 号墳よりも良好な状態であると推測しておきたい【第 37 図】。

注目されるのは、この石室は墳丘中央に位置しない点である。というより墳頂部西側に偏って存在している。石室の位置、および、やや傾斜を持ちながらも東側に広がる墳頂部の状況か

ら、その部分に小型の石室が存在する可能性も考えられないだろうか。

また、浄願寺山 A と呼称する採土跡の縁辺に築かれた古墳の一つでもある【第 14 章 第 2 節】。それがこの古墳が特異な形状を呈している理由の一つかもしれない。

墳形だけでなく、あらゆる面で規格から外れた存在、それがこの 26 号墳である。これが不定形古墳と呼んだ所以でもある。



第 36 図 浄願寺山古墳群
26 号墳等高線図



第 37 図 浄願寺山古墳群 横穴式石室遺存状況
10 号墳、13 号墳、26 号墳

第 3 節 古墳の築造について

【第 1 節】では古墳の平面形について記述した。続いて立面形に挑戦してみたい。【第 38 図】は古墳の築造経過を想定した模式図である。単純かつ粗雑ではあるが、数工程を推定し

てみた。

1 想定したモデル

1号墳や3号墳のような大型古墳でなく、第1グループの南辺から第2グループにみられる一般的な古墳を想定している。第I段階から第4段階まで模式図として示した。

なお、モデルの古墳の埋葬施設は、どの古墳において普通にみられる横穴式石室墳を考えている。

(1) 第I段階

緩斜面地の掘削を行う。掘削土は斜面低所側を埋めることによって古墳が立地する用地の拡張を図る。

(2) 第II段階

石室構築のために整備した面に横穴式石室を構築する。

石室を安定させるため石室構築の地盤は、掘削によって生じた地山の面が使われたと推定する。

(3) 第III段階

石室構築終了後、封土により石室を埋設し、墳丘を完成し古墳の築造が終了する。

(4) 第IV段階

このとき【A】の箇所には溝が形成される。この底面の高さの関係から、連続する溝になるか、そうでない場合は高さのある溝底が出現している。

そして山側の場所には浅い溝が形成された場合、掘りのこされた箇所なのか、あるいは墳丘（特に墳頂部）を築くことによって山側との間に盛土が充填された、2つのケースがあったのではないか。もちろん、後者の場合が圧倒的多数と思われるが。

墳丘（特に墳頂部）を築造することにより出現した溝をそのままとしたのか、そのあと溝底に盛土を充填する必要があったのか、いずれにせよ築かれた溝の出現である。

また、溝横には人工的な崖面が生じる。崖面は概ねコンタラインに沿う。なお、順列古墳IV、順列古墳V【第13章 第4節3、4】などでは、この崖面が連続しているように観ることができる。

(5) 最後に

以上が本古墳群における一般的な古墳群の築造過程の想定である。あえて模式図まで作成してみたが、それほど単純ではないであろう。

横穴式石室の構築、さらに墳丘の築造を行うにあたっては、さらに複雑で難しい工程を経る必要があったはずである。

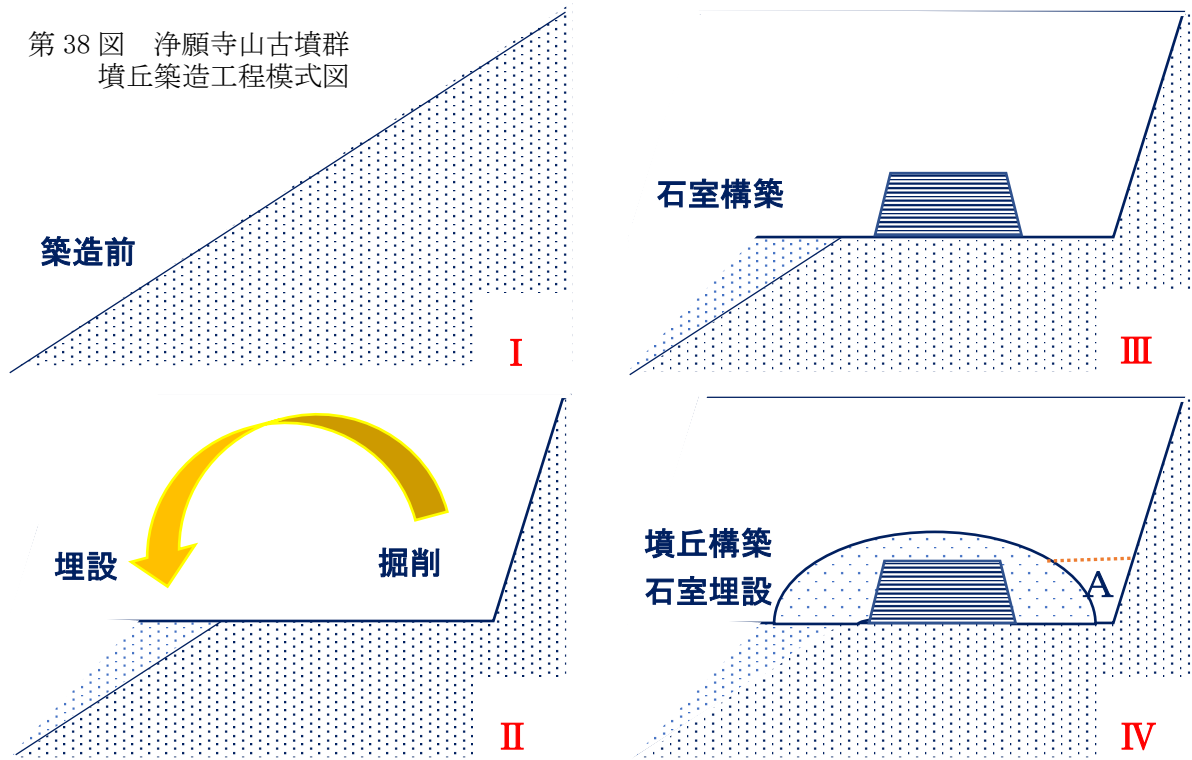
しかも、標高二百数十メートルという高所での作業である。石室を構成する巨大な石材の調達、運搬、墳丘を構成する土砂の確保、掘削、運搬、盛土、締固などという様々な工程の多くは人力でもってまかなわれたのであろう¹。

1基の古墳の築造にあたって、どれぐらいの人々がどれぐらいの期間を費やされたのであろうか。そして50基の古墳を築造した工事量の総和（人日）が投下されたのか。最

¹ 大久保徹也氏によれば、横穴式石室の石材には花崗岩が使用されている例があるという。

も知りたいところである。

第 38 図 浄願寺山古墳群
墳丘築造工程模式図



- ❶ 高所側に対する低所側には溝が掘られることがないので、溝を図示していない。
- ❷ (A) は高所側に築造された溝を示している。墳丘高所側の溝は地山を掘り残した場合、掘削後埋設した場合の何れかが想定できる。

第10章 古墳溝

【第39図】は赤色立体図の部分である。左上側に第1グループ、中央から東南にかけて第2グループの古墳がみられる。その古墳の周りには様々な形状をした溝が存在する様子がよくわかる。

県内において、本古墳群のように横穴式石室を有する後期古墳が発掘調査を経ずして溝を実見できる事例は極めて少ない。そこで本章では各古墳の溝の状況を整理してみることとした。

第1節 溝について

本古墳群では古墳築造にあたって周辺の土砂を掘削し、それを墳丘の封土として使用したのであろう（このとき掘削中に現れた岩石も採石されたとも考えたい。それらを石室の用材に使用されたことも想定できる。この古墳築造時の資材～土砂と石材～取得行為を「採土」と呼称する）。その結果が溝となった場合もあると考えている。

1 溝の定義

溝という語句を『古墳の裾に存在する連続した凹地』と定義しておく。現地において実見していないので、赤色立体図および等高線図のコントラインの状況

で判断している。

さらに、墳丘最頂地点標高（Ym）と溝最高地点標高（Xm）、山側高所標高（Zm）との間に次の関係が成り立つときに溝と呼ぶことにした【第41図】を参考）。

条件Ⅰ $Zm > Ym > Xm$

条件Ⅱ $Xm - Ym \geq 0.2m^1$

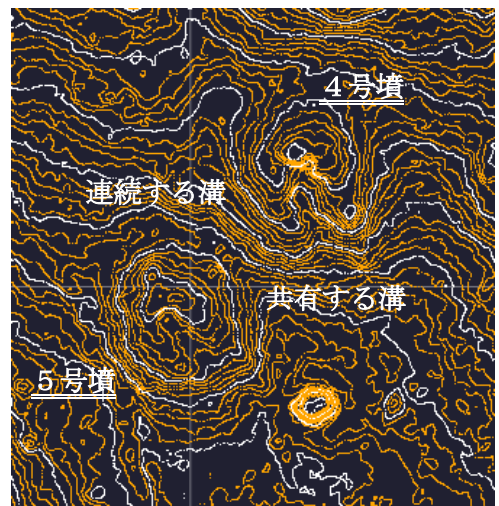
他にも本稿では特別な用語を使用している。下記に概要を述べるとともに、その意味等について簡単に説明する。

(1) 連続する溝

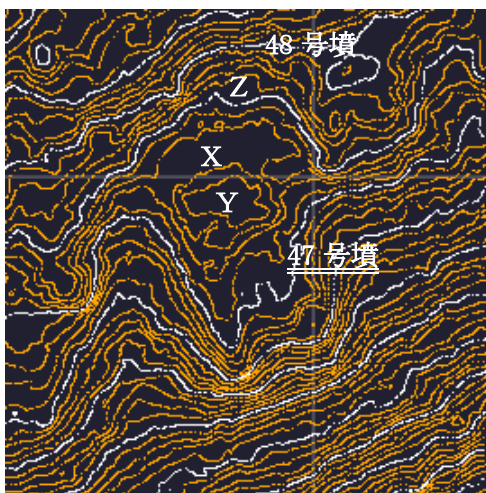
一周はしないが古墳周囲の三方、あるいは二方に溝が掘られ、連続している場合には連続した溝と呼ぶ。【第40図】を参照。一般に底部のレベルは地形に従って、溝底部分の高低



第39図 浄願寺山古墳群
赤色立体図 部分



第40図 浄願寺山古墳群
4号墳、5号墳等高線図



第41図 浄願寺山古墳群
47号墳 等高線図

¹ 0.2以上とは墳丘側のコントラインが一重（一本）以上であることを意味する。47号墳の山側で方形の区画がみられる。小さな値であるが、築造時に意図されていることから、条件Ⅱの根拠とした。

が緩やかに変化している。

(2) 陸橋

連続する溝の底部のみにみられる人工的地形。3基の古墳(7号墳、10号墳、32号墳)だけにみられるが、各々の形状は異なる。高さを有する掘り残しがみられるのに対し、溝を遮断するほどの高さを持たない形骸的な例もある【本節4】。

(3) 共有する溝 主の関係 従の関係

2つの古墳の間に溝が存在し、いずれの古墳の溝と考えてもよい場合、『溝を共有』すると表現する。一方の古墳に伴って掘られた溝であることがあきらかな場合を『主の関係』、逆の場合を『従の関係』と呼称する。【第40図の5号墳/主の関係、4号墳/従の関係】。

(4) 直線的外縁

溝の外側の縁を指す語句として使用した。基本的には溝の外側の掘削線(掘削の縁)を指す。特に外縁が直線的に掘削されている場合、『直線的外縁』と呼称することにした【第11章】。

(5) 弧状の溝

当該古墳墳丘を包み込むような弧を描く溝を指す。下記の登る溝とともに『登る弧状の溝』のように使用した。相対する用語として直線的な登る溝として使用することもある【第42図】。

(6) 登る溝

斜面に掘られた溝。始点は低く・広く、徐々に高く・狭くなり終点となる。深さはあまりない例が多い【第42図】。

(7) 掘り残し

古墳墳丘の高所側(隣接する古墳の墳丘の場合もある) / 山側において、墳丘との切り離された箇所 の状況をさす。連続する溝の一部となる場合もある。

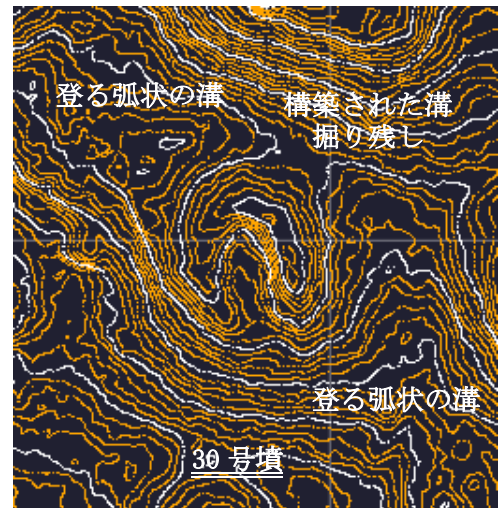
(8) 構築された溝

山側において完全に掘削されていない、上記(7)の掘り残した部分が存在し、それが見かけ上、溝とみることができた場合に使った。

墳丘側を積み上げることで(墳丘側には横穴式石室が埋設されているので、必ず盛土されている)生じた溝を指す。

上記の掘り残しとあわせ『掘り残され、かつ、構築された溝』という溝も存在する可能性がある。確認は発掘調査を経なければならないが。

なお、高所側に構築された溝が造られる状況について【第9章 第3節1-第38図】に掲載している模式図を参考していただきたい。



第42図 浄願寺山30号墳 等高線図

2 溝の状況

上記の語句を用いながら、本古墳群に属する古墳と溝の関係を概説する。

(1) 溝と周溝

溝が一周する周溝を持つ古墳は存在しない。

発掘調査を経ていないので断定はできないが、墳丘の周囲を一周する溝は存在しない可能性が高い。斜面に造られているためと単純に考えている。

従って本稿では周溝という用語は用いていない。ただし、【第 11 章 第 3 節】で述べる 3 号墳の直線的外縁は墳丘全体を囲む可能性がある。

(2) 登る溝と構築された溝の関係

多くの古墳では近隣の高所側（山側）において、構築する溝を持つ場合が多い。それと溝のない低所側をつなぐのが登る溝である。

(3) 溝の無いなどの部分

ア 本古墳群において溝は標高の低い側にはみられない。その古墳は概ね下記のとおりである。

① 概ね南側に溝がみられない古墳

※ 第 1 グループ北部に立地する古墳。

※ 第 2 グループ南辺【第 8 章 第 2 節 1-(1)-カ】に位置する古墳など。

※ 第 3 グループの古墳。

なお、第 3 グループの東端に所在する数基の古墳では、東側溝は存在しない。

② 概ね西側に溝がみられない古墳

※ 第 1 グループ西縁に立地する古墳。

※ 第 2 グループ西縁に立地する古墳。

イ 高所側に溝が見られない—高所側と墳丘が連続する古墳も存在する。概ね次の 8 基である。

16 号墳、20 号墳、27 号墳、39 号墳、40 号墳、42 号墳、46 号墳

前 3 基は概ね東側において、残りの 4 基は北側において高所側とつながっている。

いずれも平面積で区画Ⅲ、体積で小型古墳である。

(4) 溝を伴わない古墳

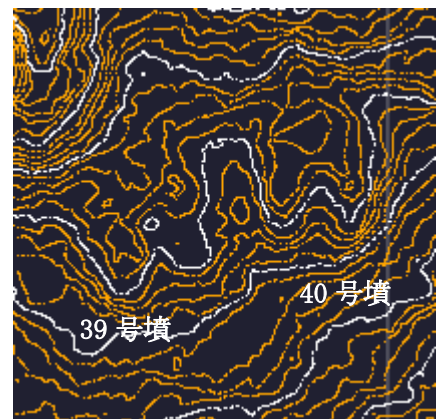
50 基の古墳のうち溝を伴わない古墳が 2 基みられる。

ア 浄願寺山 1 号墳

本古墳群の北西に所在する大型古墳。円墳で墳裾には溝の掘削は認められない。詳細は【第 2 節】を参考にされたい。

イ 浄願寺山 50 号墳

本古墳群の東辺、北に位置する古墳。当該古墳は墳形が明瞭でないことから溝が存在するか否か、判断が難しい。



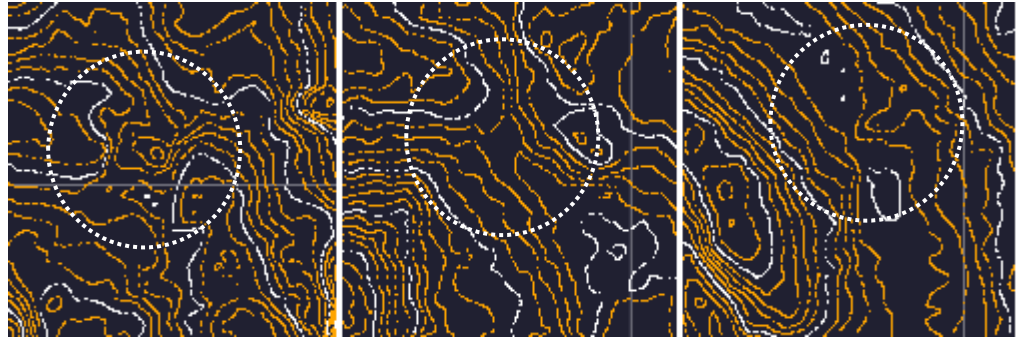
第 43 図 浄願寺山古墳群
39 号墳、40 号墳等高線図

3 陸橋の状況

【第43図】は連続する溝を持つ古墳のうち陸橋を持つ古墳、7号墳、10号墳、32号墳の3基の陸橋部分の図である。7号墳は幅広で高さを持ち構造が複雑で、10号墳は構造が単純になっている。32号墳は幅が狭く高差も低く、あきらかに形骸化が認められる。陸橋

とするには難しい面もあるが、陸橋として分類した。

3基にみられる陸橋の複雑から単純への変



7号墳陸橋

10号墳陸橋

32号墳陸橋

第44図 各古墳の陸橋（各円内）の状況

化が時間的な流れを反映しているのであれば、7号墳、10号墳、32号墳の築造順を想定できる。

4 共有された溝

本古墳群の中には2つの古墳の間で溝が共有されている場合がある。築造された当初から共有関係が意識されていたのか、そうでないかは不明であるが、いくつかの共有関係にある古墳が確認できるので、各々について述べておきたい。

【1-(3)】により想定が可能な範囲で『主の関係』、『従の関係』と示す。

(1) 4号墳と5号墳

5号墳の溝の一部と4号墳の溝の一部が共有関係にある。後者の溝を前者が切る関係とみられ、5号墳が主の関係にある溝で、4号墳が従の関係にあると考えておきたい。

このように従の関係の溝を持つ古墳が先行して築造され、主の関係の溝を持つ古墳が後出する古墳である事例もあり、主と従とは築造の前後を表すものではない。

(2) 7号墳と10号墳

7号墳の溝の一部と10号墳の溝の一部が共有関係にある。前者の溝を築造したのち、後者がその溝を利用したと考えられ、7号墳が主の関係で、10号墳が従の関係にあるとしておきたい。

(3) 11号墳と12号墳、13号墳と14号墳

前者の古墳の南側溝と後者の古墳の北側溝が共有されている。いずれも前者が主の関係で、後者が従の関係である。両方の溝とも【(1)、(2)】とは異なり、ほぼ全体が共有されている。

(4) 21号墳と22号墳、21号墳と24号墳

21号墳の北側の溝が22号墳の南側の溝と共有されている。この場合、前者が主の関係、後者が従の関係にあたる。

一方、21号墳の南溝の一部である南西部分が、24号墳の溝と共有されている。前者の溝が主の関係、後者の溝が従の関係にあたる。

(5) 39号墳と40号墳、44号墳と46号墳、46号墳と47号墳、48号墳と49号墳

4組の古墳において前者の東溝が後者の西溝となっている。いずれも完全な共有関係で、状況から主、あるいは、従の判断は難しい。

(6) 他にも、共有関係と考えられるケースもあるが、古墳間の距離、状況などから溝が単に重なっていると考えた方が適切な場合もある。

5 溝を持つ古墳

【第2節1】にも関連しているが、本古墳群50基のうち48基は、大小、形状は別にして溝を有している。

本古墳群において溝を有する古墳の始まりは2号墳であろう【第13章 第3節1】と考えている。同古墳西側では登る溝が残されており、東側ではかなり形状を変えた溝跡が認められる。

ただし、最も深く掘られているはずの溝はみられない。関係の深い3号墳では本古墳群最大の溝が掘られており、2号墳においてもそれほどではないにせよ、ある程度の溝が存在した可能性は高い。

2号墳の付近は開墾の痕跡が顕著な部分であり、現段階では墳丘の封土を削ることにより、北側の溝は埋設されたものと考えておきたい。

6 本古墳群と溝

以上が本古墳群における溝についての概説である。筆者も横穴式石室を有する古墳を見学することは多いが、香川県下においては発掘調査現場以外で、現存している溝を実見できた例は皆無である。

本古墳群のようにほとんどすべての古墳において溝が現存している例は、極めてまれではないだろうか。

本古墳群が特別な古墳群でなく讃岐における普通の古墳群であるならば、同様な他の古墳群においても各々の古墳に溝が存在した、あるいは存在している可能性は高いといえよう。

推測ではあるが、埋没、流出、削平、破壊などにより眼に触れなくなってしまった事例が多いと思われる。現実に浄願山の東麓に所在する南山浦古墳群の南山浦11号墳においては、発掘調査によって溝が検出されている。

第2節 溝を有しない古墳

本古墳群の50基の古墳の中で溝を持たない古墳がある。本古墳群の北西に位置する1号墳で、以下の注目すべき事項があげられる。

他にも50号墳が溝を持たない可能性がある。

1 溝を持たない1号墳

(1) 最北西部に位置し、この1号墳に近接する古墳は2号墳しかない。本古墳群の中では、

高い独立性を有する。

(2) 立地する場所は尾根の先端、等高線の疎な地域、すなわち傾斜の少ない場所である。

1号墳以外のほとんどの古墳は、等高線のやや密な地域である緩傾斜を持つエリアに立地する点が、大きく異なる。

(3) 古墳の直下、南西側が急斜面に続く。

古墳への眺望、古墳からの眺望が極めてよいと考えられる。平野部をかなり意識した存在である。

(4) 横穴式石室が西南西に主軸を取る可能性が高く、本古墳のなかでは特異な存在である。

(5) 周囲に溝を持たない。このことは古墳の築造に溝を掘削する工程を経ていないことになる。他の古墳と明白な違いである。

ア 他の古墳では溝を掘削することにより、得られた土石が大なり小なり墳丘の封土に転用できるが、1号墳ではそれができなかった、あるいはしなかったといえる。

イ 1号墳の築造に要した資材の収集方法を想定した。

- ① 採土を古墳周辺の山頂部一帯で薄く広く行った。
- ② 浄願寺山Aと呼んでいる採土跡地から掘削・運搬した。
- ③ 両者の方法が用いられた。

以上、三つの工事手法が想定できる。

ウ 上記から本古墳の築造は大工事であったことが推定される。

(6) 1号墳の地点に瘤状の高まりが存在し、それを整形して墳丘としたことも考えられるが、確証はない。かつ、周囲・山頂一帯（石清尾山も含む一帯）では、そのような地形は存在しない。

2 50号墳の状況

等高線図で見える限り、推定場所には溝らしきものの存在は確認できない。今回の手段では溝の有無の判別できなかった。

発掘調査等で存在の有無を確認する以外にはないかもしれない。

第11章 多角形を呈する古墳

連続する溝を有する古墳の中で最大規模を誇る3号墳では、墳丘外周一溝の外側—外縁が直線的に整えられている。赤色立体図や等高線図で確認する限り、その外縁は六角形を構成する一辺にあたる。

本稿では3号墳で見られるような外縁を『直線的外縁』と呼称する。そして直線的外縁がみられる古墳は3号墳だけでなく、4号墳、19号墳、28号墳、32号墳、41号墳、45号墳の6基、合計7基を数える。

本章では、上記の7基の直線的外縁を持つ古墳について解説

を加えていきたい。なお、挿図に使用した記号などを次のように定めて使用している。

※ アルファベット

A ⇒ 3号墳 B ⇒ 4号墳 C ⇒ 19号墳 D ⇒ 28号墳
E ⇒ 32号墳 F ⇒ 41号墳 G ⇒ 45号墳

※ 下付き文字

数字（1～6）は各頂点を示す。図の左上から時計回りに番号をふっている。
アルファベット小文字は線上にある点を示す場合を使用している。

※ 線分／2つの点の距離

表記例 $(A_1 - A_2) \cdots A_1$ と A_2 間の距離

表記例 $(B_1 - B_b) \cdots B_b$ の位置が定まっていないので、距離はあらかわせない。

※ 角度／頂点の角度

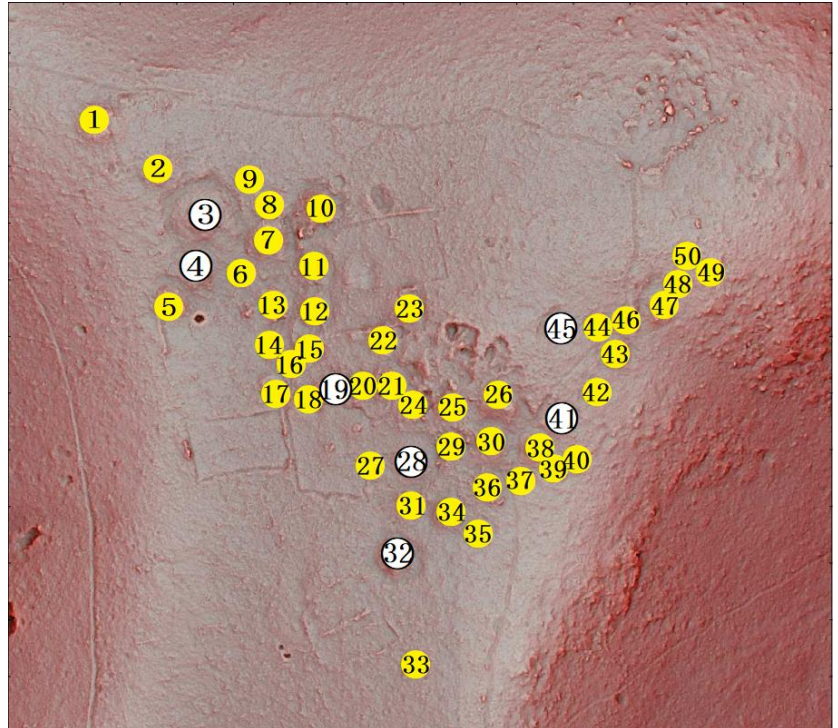
∠を使って示す。ただし、角度の値は180度未満である。

表記例 $\angle C_1$

角度については、求める角度の地点を頂点とした三角形を想定し、TREND-POINT（トレンドポイント）限定版を用いて三辺の距離を求め、その値を下記の『三角形の3辺から角度を計算 (<https://keisan.casio.jp/exec/system/1209543011>)』に代入し角度を求めた。

上記、7基の古墳に各古墳の溝の外側に形成された直線的外縁が作り出す角度について計測したところ、それぞれ90度から180度までの間の値を得ることができた。

そして7基の古墳の直線的外縁が作り出す形状は、3号墳のように六角形を意識しているもの2基（3号墳と4号墳）、六角形への意識が形骸化していると考えられ、三つの辺で構成された2基（32号墳、28号墳）、二つの辺によって形作られた3基（19号墳、41号墳、45号墳）

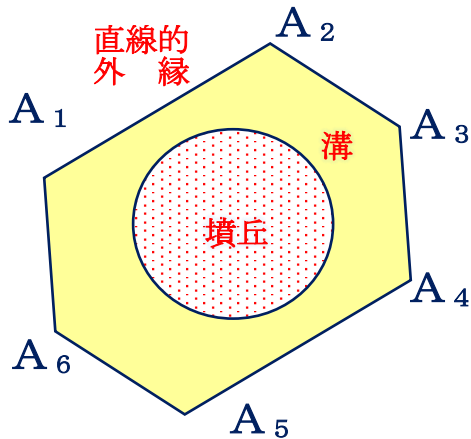


第45図 浄願寺山古墳群
直線的外縁を有する古墳分布図（白地の○で表示）

に分類できる。

第1節 直線的外縁を持つ古墳

以下、上記7基の古墳について、個々に説明を加える。



第46図 3号墳直線的外縁 模式図

1 浄願寺山3号墳【第46図、第47図】

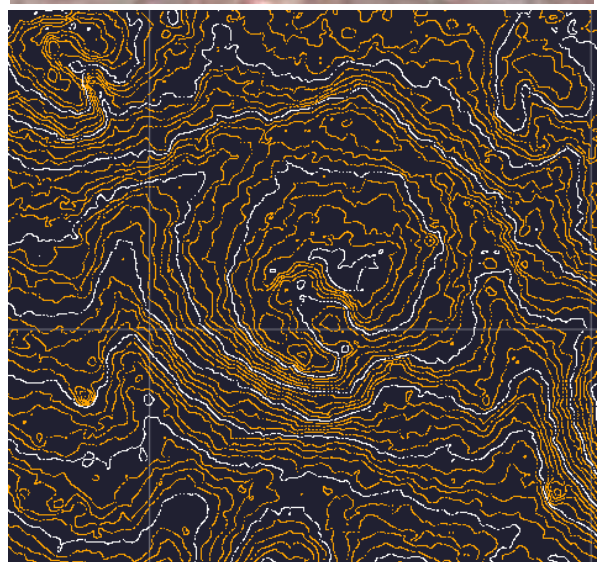
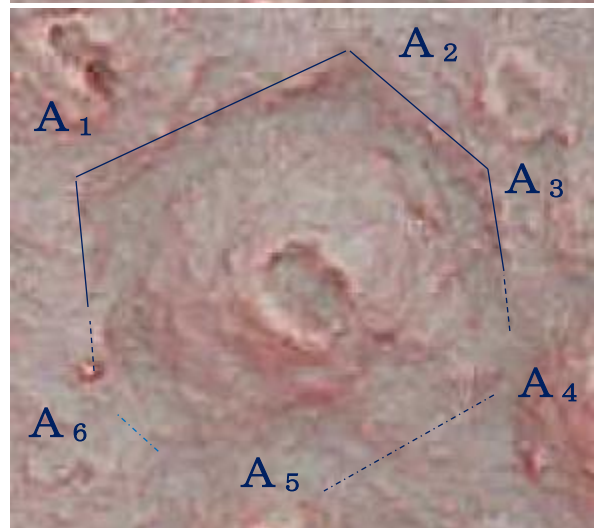
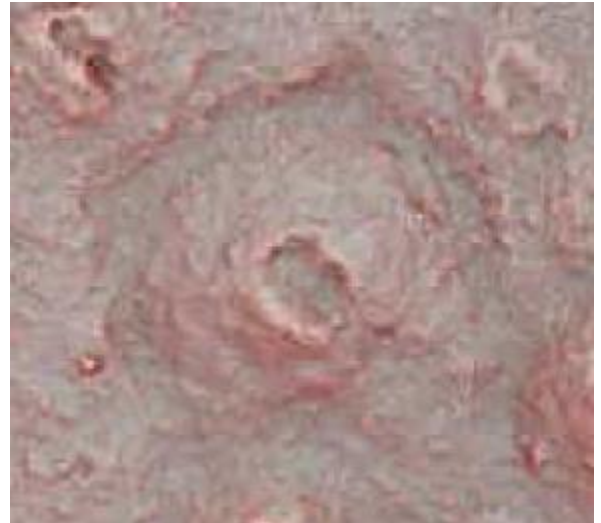
浄願寺山古墳群の最大規模を誇る古墳である。平面積、体積ともに全古墳群中最大で、他の古墳を圧倒する数値をはかる。

墳丘は円墳で、周囲には他の古墳にみられない深く、広く、長い巨大な溝を持つ。ただしこの溝は特徴的である。円墳の墳裾は溝の内側で明らかに円形を描くものの、外側においては直線的に掘削された直線的外縁が確認できる。

明瞭に確認できる外縁は四本である。また、2本の線が交わる地点はA₁、A₂、A₃の3か所において確認できる。

それに微地形をもとに考慮して推定したのが、3号墳の直線的外縁の現状である。以下の文により、その考察、知りえた特徴などを列記する。

- (1) 最も明瞭、かつ、最も整った形態を示す直線的外縁を持った古墳である。
- (2) 墳丘だけでなく、東、北、西方向に掘ら



第47図 3号墳直線的外縁関係図

赤色立体図	／上
直線的外縁位置図	／中
等高線図	／下

れた溝の平均的な深さは0.8m余りで、幅も広く本古墳群中最大規模である。

(3) 各点、各線を赤色立体図、等高線図をもとに次のとおり推定した。

ア 溝北側において、2号墳と接する直線的外縁(A₁-A₂)が走る。続く、直線的外縁(A₂-A₃)も明瞭である。両外縁はともにかんりの高さを有する。

イ 直線的外縁(A₆-A₁)は北方では高さがあるため明確であるが、A₆の地点は不明瞭なため推定したものである。微地形を根拠に、A₃の地点とほぼ対称の位置を充てた。

ウ 直線的外縁(A₃-A₄)は北側において確認できるものの南側では明瞭ではない。赤色立体図では痕跡のような微地形の遺存状況が一部で認められる。

エ 直線的外縁(A₄-A₅)は3号墳の南方において、赤色立体図で僅かに確認できる微地形を基に想定した線で、直線的外縁(A₁-A₂)とほぼ平行に走る。

オ 当該線をA₄の方向に延ばし直線的外縁(A₃-A₄)の延長線との交点A₄を復元した。

カ A₅の地点は外縁(A₂-A₃)とほぼ平行でA₆からA₅の方向に延びる線上で僅かに観察できる微地形を基に復元することができた。

なお、A₅の点は4号墳の墳丘と重なる地点に位置すると考えられる。

キ 6点および6つの線分が決まる(あるいは推定される)ことによって、直線的外縁で構成された六角形の状況が明らかになった。

本古墳群中最大の規模を誇る3号墳の墳丘と溝を納めるように造られているのが、直線的外縁で構成する六角形の構造物である。

(4) 上記で確認された六角形を呈する直線的外縁について、図上で計測した。

計測の対象であるが、各辺の距離、および各点における角度(180度以内)である。

その結果は以下のとおりである。

ア 各直線的外縁の距離

外縁(A₁-A₂)の距離

=21.296m (59.5高麗尺)

外縁(A₂-A₃)の距離

=12.430m (34.1高麗尺)

外縁(A₃-A₄)の推定距離

=13.344m (37.3高麗尺)

外縁(A₄-A₅)の推定距離

=20.468m (57.2高麗尺)

外縁(A₅-A₆)の推定距離

=13.384m (37.4高麗尺)

外縁(A₆-A₁)の距離

=12.477m (34.9高麗尺)

イ 各地点の角度

∠A₁ =105.633度

$$\angle A_2 = 109.240 \text{ 度}$$

$$\angle A_3 = 141.991 \text{ 度}$$

$$\angle A_4 = 109.607 \text{ 度}$$

$$\angle A_5 = 103.266 \text{ 度}$$

$$\angle A_6 = 142.634 \text{ 度}$$

ウ 距離の後に記した括弧書は、得られた数値を高麗尺の一尺 \approx 36.4 cmで除したものである。(以下の古墳でも同じ)

エ 角度の総合計は712.371度である。

六角形の内角の和は(180度 \times (6-2)=720度)であるから、求められた各々の数値は、近似値として容認して良いと考えている。

六角形の形状であるが、各辺の長さ、各々の角度から正六角形ではなく、少し横に長くなった六角形である。

- (5) 溝自体、内側は円墳である3号墳の墳裾にそって円弧を描く。溝の外側だけが直線的に掘削されており、六角形という特別な形状で古墳が囲まれている。
- (6) 六角形を呈する外縁は、3号墳墳丘の墳域を画する溝の外側の線である。たとえ話的に言えば、六角形の大きな箱に巨大な円墳1基を納めたようにみとれる。その箱の役割を持つのが、3号墳の六角形を呈する直線的外縁といえる。
- (7) 外縁(A₅-A₆)は、他の直線的外縁と比べてはなはだ不鮮明であるが、赤色立体図にみられる微地形を根拠に復元することができた。

特にA₅の地点は4号墳と重なっている。その近傍の外縁も含めて、4号墳の築造時に改変された可能性がある。ここでは敢えて存在したと想定の上で記載した。

- (8) 南側の外縁(A₄-A₅)については、赤色立体図にみられる微地形を根拠に復元したものである。現段階では【第10章 第1節2-(1)】に従い、3号墳の溝は南で存在しないと考えている。しかし、直線的外縁は溝の一部であるので、あきらかに矛盾がある。

観察する限り3号墳南部において、窪みをもった溝は存在しないが、埋没している可能性もある。外縁(A₅-A₆)も含めて、南側の外縁(A₄-A₅)の存在、溝の存在等の確認については、発掘調査によるしかない。

- (9) 円形、方形が主流であった当時の墳丘に、外縁という一部とはいえ六角形という異色の図形が採用されている点に注目したい。もちろん、終末期の古墳にみられる六角形墳とは、時間的にも内容的にも大きな隔りがあるものと考えている。

そして、六角形を採用する理由、古墳築造時に六角形を現地に造り出す技術、これらは浄願寺山古墳群を築造した集団が独自に生み出したものでない、と考えるのが自然であろう。おそらく(讃岐以外の¹⁾)外部からもちこまれたと推定される。

- (10) 直線的外縁の(A₂-A₃)は、直列古墳I【第13章 第3節1および第67図】がっ

¹ 讃岐国内の別集団によって持ち込まれ、その集団から浄願寺山3号墳に伝わった可能性を否定できない。ただし、現在のところ県内においてこのような直線的外縁を持つ古墳の存在は知られていない。

くる1号墳、2号墳、3号墳の3基の古墳奥壁の位置を結ぶ線とほぼ平行である点も注目される。当然(A₅-A₆)にもその可能性がある。

- (11) 六角形をした直線的外縁の構築の背景には、特別な権威の存在を考えてよいのではないか。そのような権威は、3号墳に葬られた特定の集団もしくは人物に与えられたと想定しておきたい。

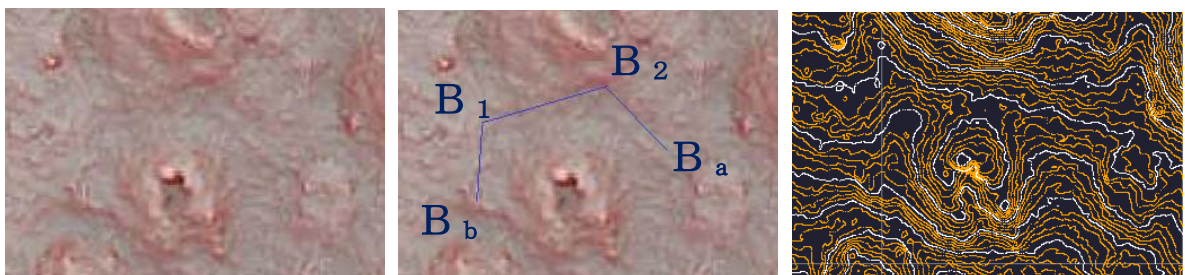
以上から六角形をした直線的外縁を持つ3号墳は、本古墳群の盟主的な墳墓として君臨したことが推定される。最大規模の墳丘を持つ理由もそこにあるのではないか。

- (12) 3号墳築造後、直線的外縁に示される3号墳の権威は、どのように扱われたのであろうか。他の勢力によって与えられた権威ならば、改めて与えられない限り次代への継続は難しいはずである。

しかし、本古墳群を築いた集団は直線的外縁を持つ古墳を順次、築造することによって、権威の継続を図ったのではないと思われる。それは本古墳群を築造した集団向けの内向な手法と考えられる。決して外向な手法ではなかった。

その根拠が3号墳以外の直線的外縁を持つ古墳の存在であろう。特別な権威を直線的外縁に求め、それを継承し周囲(本古墳群の造墓者などが構成する社会)に示したのであろうか。しかし、直線的外縁の形状は変化をした。上記に言う内向な手法にほかならない。

2 浄願寺山4号墳



第48図 4号墳直線的外縁関係図 赤色立体図／左 直線的外縁位置図／中 等高線図／右

- (1) 区分Ⅱ-上、中型古墳に属する古墳で3号墳の南西に所在する。平面積、体積ともに50基中7位の順位を持つ。

3号墳とあわせると双円墳にもみえるほど近接し、一部が重なって築造されている。そして、3号墳の直線的外縁の頂点A₅は4号墳の墳域内に位置している。

4号墳の築造によって3号墳の墳丘が改変されている事実は、3号墳と4号墳の強い関係を示唆している。

- (2) 4号墳の直線的外縁南側においては、4号墳の構築された溝がみられる。墳丘はその南に位置する。

墳丘、溝、直線的外縁で構成される4号墳全体の築造場所を、現在位置より南側から南西側に移せば、3号墳の墳丘を改変する必要が無かったはずである。底部の高い構築された溝も築くことも無かった。

しかし、3号墳の墳丘を大きく変更するにもかかわらず、4号墳は築造された。こう

して3号墳の墳丘や直線的外縁は、その南西側において、大きく現状が変更された。現在地に4号墳を築造しなければならない大きな事由が存在したのであろう。

(3) 直線的外縁 (B_1-B_2) の距離と $\angle B_1$ 、 $\angle B_2$ を計測したので記載する。

ア 直線的外縁の距離

外縁 (B_1-B_2) の距離
 $=12.944\text{m}$ (35.7 高麗尺)

イ 各地点の角度

$\angle B_1 = 122.944$ 度

$\angle B_2 = 113.471$ 度

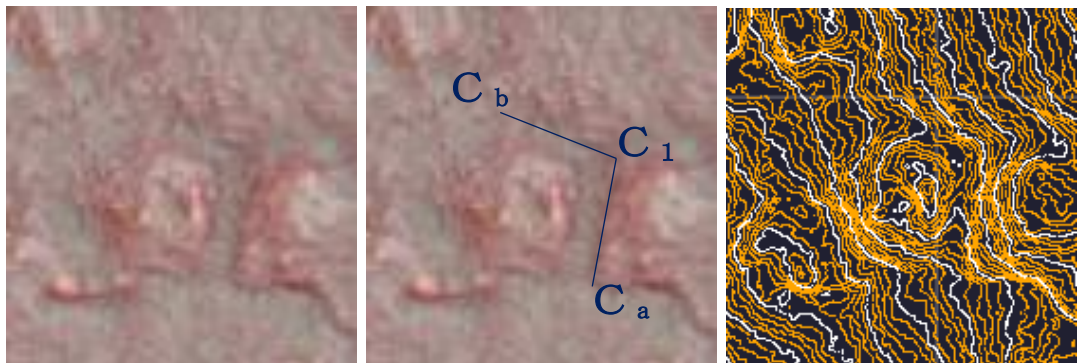
(4) 赤色立体図によれば、東側と北側において比較的明瞭な直線の外縁を確認できる。東側と北側の外縁は3号墳墳丘の南斜面に刻まれており、その高さは低いためか等高線図では明確に確認できない。

おそらく形骸化しているものと思われ、外縁と呼ぶには不適切とも思われるが、共通する性格があるため、直線的外縁の呼称は変えないものとした。

(5) 赤色立体図を観察すると、4号墳の直線的外縁と考えている線の内側に同じような存在するようにもみとれる。4号墳の直線的外縁は二重になっている可能性も考慮しなければならない。

(6) 4号墳の南側において、3号墳のような六角形の直線的外縁は確認されていない。

3 浄願寺山 19号墳



第 49 図 19号墳直線的外縁関係図
 赤色立体図／左 直線的外縁位置図／中 等高線図／右

(1) 東側の 20号墳、西側の 18号墳に挟まれて存在する古墳。北側にやや離れて 15号墳が立地する。

平面積では区分Ⅲ-上 (27位)、体積は中型古墳 (19位) に分類される古墳である。

(2) 2本の直線的外縁 (C_b-C_1) と (C_1-C_a) で構成されている。2本の直線的外縁みられる古墳は、ほかに 41号墳、45号墳が存在する。

(3) $\angle C_1$ を計測したので記載する。

ア 各地点の角度

$\angle C_1 = 116.833$ 度

(4) 19号墳の墳丘は方墳と考えられる。本古墳群では円墳の数に対して、方墳の基数は少

ない。方墳の2つの辺は $(C_1 - C_2)$ に沿った辺と $(C_b - C_1)$ に沿った辺で形づくられる。

なお、本墳の北に位置する 15 号墳も方墳であり、2 基の方墳がほぼ並んで所在している。その理由は明らかでない。

(5) 東隣に存在する 20 号墳の墳裾は、19 号墳の直線的外縁と重複するようにみえる。両者はかなり接近しているともいえる。

(6) 方墳のため溝の平面はL字状を呈し、底部分は 1.0mから 2.0m程度を測る。底部分の高さは南端付近で 226.3mを、東端付近で 226.4mをそれぞれ測り、最高所は 226.6 mである。その差は 0.3m余りである。

上記のように底が平坦でかつ幅が一定である 19 号墳の溝は、本古墳群の中でも珍しい事例である。

(7) 南側墳裾近くまで開墾されている。

4 浄願寺山 28 号墳

(1) 東側の 29 号墳、西側の 27 号墳に挟まれて存在する古墳。区分Ⅱ-上、中型古墳に分類される。平面積では 50 基中 8 位、体積では 50 基中 10 位の規模を持つ。隣接する古墳のなかでは比較的規模が大きな存在である。

赤色立体図では、東側と北側に明瞭な直線の外縁を確認できる。南東側にも存在する可能性がある。

(2) 外縁 $(D_1 - D_2)$ の距離と $\angle D_1$ 、 $\angle D_2$ を計測したので記載する。

ア 各外縁の距離

外縁 $(D_1 - D_2)$ の距離
 $= 10.060\text{m}$ (27.6 高麗尺)

イ 各地点の角度

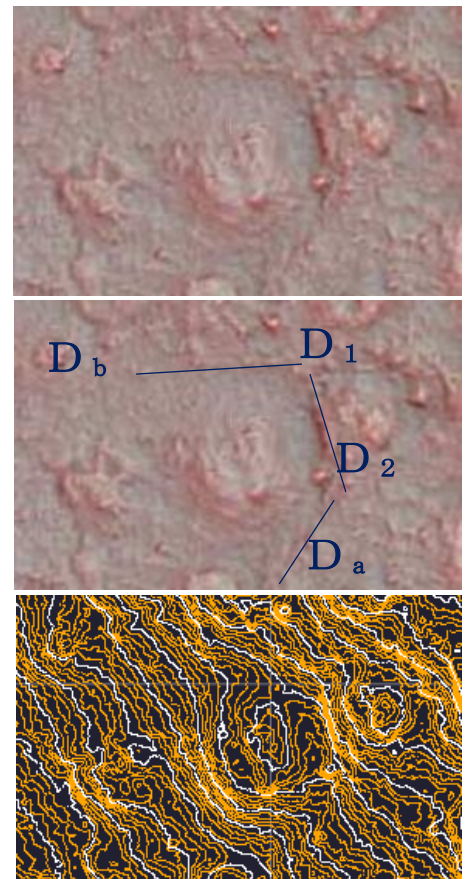
$\angle D_1 = 123.632$ 度
 $\angle D_2 = 142.367$ 度

(3) 28 号墳の直線的外縁は 3 本の線で構成されるが、2 つの角度は明らかに異なる。墳丘西側への広がりについては、西側に立地する 27 号墳の存在から否定的にみておきたい。

本古墳では 3 号墳の墳丘全体を囲む直線的外縁でなく、後述する 32 号墳のように平面が台形となる直線的外縁を持つと考えておきたい。

3 号墳の直線的外縁の形態の一部を継承するものの、築造理由あるいは目的まで踏襲されていたかは、不明といわざるを得ない。

(4) 直線的外縁のうち東の 29 号墳側の斜面は、古墳築造に伴う掘削、盛土によって生じた人工的な斜面で最も勾配を有する地点である。このことは 28 号墳の築造にあたって



第 50 図 28 号墳直線的外縁関係図
 赤色立体図 / 上
 直線的外縁位置図 / 中
 等高線図 / 下

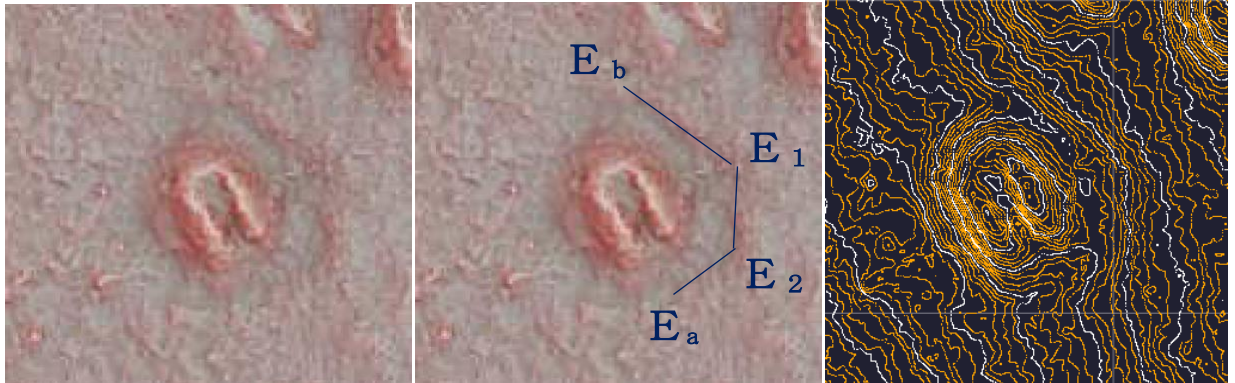
29号墳側にできる限り墳域を広げようとした結果と推測できる。

以上から28号墳築造以前に29号墳が既に存在していたことを示している。

(5) 赤色立体図で観察する限り、直線的外縁の内側には28号墳の比較的広く感じる溝が墳丘を囲む。直線的外縁の存在を確認できるなかでは、3号墳に次いで明瞭な直線的外縁を持つ。

(6) 北東側には開墾の手が入っている可能性がある。

5 浄願寺山32号墳



第51図 32号墳直線的外縁関係図 赤色立体図／左 直線的外縁位置図／中 等高線図／右

(1) 第6位の平面積を持つ古墳で区画Ⅱ一上に属し、第5位の体積の大型古墳である。

32号墳の東側に直線的外縁(E_1-E_2)と北東(E_b-E_1)と北西(E_2-E_a)にある2つの直線とが、各々交差する外縁線がみられる。28号墳と同様、三方向に直線的外縁がみられる。

ただし、3号墳や28号墳の事例と比べて、明瞭な掘削ではないように感じられる。

(2) 外縁(E_1-E_2)の距離と $\angle E_1$ 、 $\angle E_2$ を計測したので記載する。

ア 各外縁の距離

外縁(E_1-E_2)の距離

=9.398m (25.8高麗尺)

イ 各地点の角度

$\angle E_1 = 137.079$ 度

$\angle E_2 = 121.267$ 度

(3) 本古墳群の第2グループに属する唯一の大型古墳である。また、33号墳をのぞき古墳群の南西角に位置することも重要な点である。

(4) 3本の直線的外縁で構成され完結していない可能性がある。形状としては、3号墳あるいは4号墳よりも、同じ第2グループの古墳である28号墳に似ている。

(5) 28号墳の直線的外縁との相違は外縁と墳丘との距離である。32号墳は狭くみえ、28号墳では広くみえる。墳丘の規模も関係するが、外縁内の墳丘の納まり方は、前者が窮屈に、後者がゆったりとしているように感じる。

(6) 32号墳と28号墳の規模、位置関係など【第13章 第3節2、第3節7 第6節】から32号墳の直線的外縁が出現した後、やや遅れて28号墳のそれが現れたものと考えて

よい。

何故なら、第2グループの古墳として本古墳群の南端において最初に築造されたのが32号墳であり、同じグループの古墳である28号墳が32号墳に先んじて構築されたとは考えがたい。

6 浄願寺山41号墳

- (1) 当該古墳は平面積が区分Ⅲ-上/23位、体積は小型古墳/23位の古墳で、第3グループで標高が最も低い地点に立地する。

41号墳の直線的な外縁は北東(F_1-F_a)と北西(F_b-F_1)の直線がほぼ直角で交差して存在する。長さともに墳丘の径程度である。

なお、角度についての計測値は下記のとおりである。

ア 各地点の角度

$$\angle F_1 = 88.713$$

- (2) 19号墳と本古墳、次項の45号墳の3基では、2本の線で直線的な外縁が形づくられている。

3号墳にみられた多角形をつくる意図は既に失われており、直線的な外縁を形成する点に重要性があったのではないかと推測する。

- (3) 北西の外縁線にみられる崖は90度に近い勾配をもった斜面である。その南基部を走る登山道によって変形されたためと考えられる。

7 浄願寺山45号墳

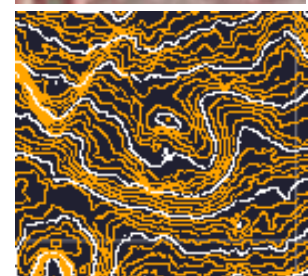
- (1) 41号墳とほぼ同じように、北東と北西にある2つの直線がほぼ直角で交差する外縁線がみられる。長さともに墳丘の径程度である。なお、角度についての計測値は下記のとおりである。

ア 各地点の角度

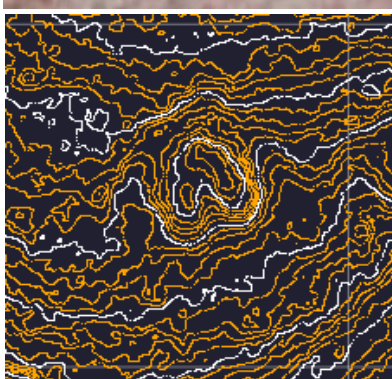
$$\angle G_1 = 90.872$$

- (2) 45号墳で注目したいのは、同古墳の周囲に掘られた溝と直線的な外縁が独立している可能性があることである。

【第53図】では、2つの線で構成される範囲のなかに溝を伴った小さな円墳~45号墳~が納まっているようにみえる。その傾向は特に古墳の西側で顕著であり、古墳の周囲に溝が巡っているように読みとれる。そして弧を描く溝の北側に直線的な外縁がみられる。



第52図 41号墳
直線的な外縁関係図
赤色立体図 / 上
直線的な外縁
位置図 / 中
等高線図 / 下



第53図 45号墳
直線的な外縁関係図
赤色立体図 / 上
直線的な外縁等位置図 / 中
等高線図 / 下

これまでの「溝の外縁 = 直線的外縁」が「溝の外縁 ≠ 直線的外縁」に変化を遂げていることに注目したい。直線的外縁が変化した結果ではないか。

- (3) 上記変化が認められるならば、2つの直線的外縁がみられる19号墳、41号墳、45号墳の3基の古墳について、前2者と45号墳の間に築造順序を設定してよい。

すなわち溝の外縁と直線的外縁が分離された45号墳は、19号墳、41号墳の2基より新しい古墳と推定したい。

- (4) 45号墳は小規模ではあるが、丁寧に築造された古墳のようにみえる。本古墳群の最終末を飾る重要な古墳として、貴重な存在といえる。



第54図 11号墳、12号墳、15号墳、19号墳の状況

7 その他の古墳

本古墳群中7基の古墳を、直線的外縁を持つ古墳として記述したが、他にもその可能性がある古墳もある。【第54図】を参考に簡単に記載しておきたい。

- (1) 浄願寺山11号墳、12号墳、15号墳

左図は【第13章 第4節4】において順列古墳Ⅳとして分類した4基の古墳うち後3基である。やや斜行気味に並ぶこれらの古墳の東側にはほぼ南北方向の直線的外縁が確認できる。さらに15号墳の南にも下端から斜めに走る直線的な外縁らしき線が認められる。

しかし、それらの直線は古墳築造に伴う掘削の連続する線と判断している。ほぼ南北の直線は東側に広がる開墾地の東西区画線にほぼ直交する点も判断を難しくしている。

以上からこれらの古墳にみられる外縁は、3号墳以下の古墳にみられる直線的外縁とは異なるとしておきたい。

- (2) 浄願寺山40号墳

この古墳の北側と東側に直線的外縁とみなせる掘削跡が存在する。しかし、東側のそれが明確でないなど、確証は持てない。

第2節 直線的外縁を持つ古墳の築造順など

ここでは直線的外縁を持つ7基の古墳について、自分なりの分析を進めてみたい。

1 直線的外縁を持つ古墳の時間的変遷

分析の対象は直線的外縁を持つ7基の古墳である。作業は7基の古墳を可能な限り時間軸に沿って並べることになる。

(1) 事実の整理

以下、アからカのとおり、事実を整理してみた。

ア 直線的外縁を構成する線分の数と各々の古墳の関係は次のとおりである。

- ① 6本から5本で構成される..... 3号墳
- ② 3本で構成される（3号墳の一部と相似形をとる）..... 4号墳
- ③ 3本で構成される（3号墳とは相似形をとらない）..... 32号墳、28号墳
- ④ 2本で構成される（内側に弧状の溝を持たない）..... 19号墳、41号墳

- ⑤ 2本で構成される（内側に弧状の溝を持つ）.....45号墳
 弧状の溝は新しい要素と考えられる。
- イ 3号墳の直線的外縁は他の5基と大きく異なる。
 六角形の形状が認められる可能性がある。他の6基にはそれがない。
 3号墳は、1号墳、2号墳以外に先行して築造された古墳はない。上記の3基の古墳は規則正しく並び、号数の順につくられた可能性が高い【第13章 第4節2】。
- ウ 4号墳は3号墳の墳丘の一部に重なり築造されていることから、4号墳は3号墳の後に築造されている【第13章 第4節1】。
- エ 32号墳は7号墳、10号墳より後出し【第10章 第1節4】、7号墳、10号墳は3号墳より後出する【第13章 第4節2】。
- オ 4号墳と10号墳の築造順位は不明であるが、前者が後者よりも早い可能性がある【第13章 第6節1 第77図】。
- カ 32号墳の墳丘は横穴式石室を埋設するに必要な最低限の規模を持つ。3号墳、4号墳の墳丘、横穴式石室と比べて後出する可能性を指摘できる【第13章 第6節1 第77図】。
- キ 19号墳、28号墳は32号墳より後出する。
 第2グループでは最初に南端に位置する32号墳が出現した後、グループ内の古墳が形成される。従って、19号墳、28号墳の築造は32号墳より後出する【第13章 第6節1 第77図】。
- ク 19号墳は28号墳より後出する。
 【ア-③】に該当する28号墳と【ア-④】に該当する19号墳は、直線的外縁の本数から前者が先行して築造されたと考えられる。
- ケ 19号墳、41号墳、45号墳について。
 19号墳の角度 $\angle C_1$ と41号墳の角度 $\angle F_1$ を比較すると、前者は28号墳の角度 $\angle D_1$ に近く、後者は45号墳の角度 $\angle G_1$ とほぼ同じである。従って、19号墳が先行して現れ、41号墳がそれに続いたと想定することが可能である【第13表】参考。
- コ 41号墳、45号墳について。
 両者の角度も90度前後とあきらかに直線的外縁を持つ古墳の他の角度と異なっており、後出すると考えている。
 それに加えて、【ア-⑤】から45号墳が一番新しく築造されたと考えてよい。
- (2) 直線的外縁を持つ古墳の築造順の推定
 上記をまとめれば、【第54図】のとおり3号墳、4号墳、28号墳、32号墳、41号



第55図 浄願寺山古墳群 直線的外縁を持つ古墳の推定築造順

墳、45号墳の7基の古墳の推定築造順を並べることができる。

(3) 3号墳の直線的外縁が意図する六角形とは

相対する2つの角 $\angle A_3$ (141.991度)、 $\angle A_6$ (142.634度)から、ほぼ142度であると考ええる。

ア 六角形の内角の総和は下記の式で求められる。

$$180 \text{度} \times (6 - 2) = 720 \text{度}$$

イ $\angle A_3$ 、 $\angle A_6$ の2つの角以外の和は下記の式で求められる。

$$720 \text{度} - 142 \text{度} \times 2 = 436 \text{度}$$

ウ 4つの角の想定される角度は下記の式で求められる。

$$436 \text{度} \div 4 = 109 \text{度}$$

【第13表】は3号墳の直線的外縁が形づくる角度、距離の実測値が示されている。

それによれば $\angle A_1$ および $\angle A_5$ は109度よりやや小さい値を示すが、 $\angle A_2$ 、 $\angle A_4$ は109度である。

これにより3号墳の直線的外縁は142度の相対する2つの角と、109度の相対する2つの角2組で構成された六角形を形づくっていると考えてよい。

さらに言えば140度前後の2つの角 ($\angle A_3$ と $\angle A_6$)、110度前後の4つの角 (残りの角) がつくる横に長い正六角形に近い形状をとっていると想定しておきたい。

第13表 直線的な外縁の角度と距離					
角度 (括弧内推定値)		距離 (括弧内推定値)		角度	
				距離	
浄願寺山3号墳			浄願寺山4号墳		
$\angle A_1$	105.63度	A ₁ - A ₂	21.30m	$\angle B_1$	122.94度
$\angle A_2$	109.24度	A ₂ - A ₃	12.43m	B ₁ - B ₂	12.94m
$\angle A_3$	141.99度	A ₃ - A ₄	(13.34m)	$\angle B_2$	113.47度
$\angle A_4$	(109.61度)	A ₄ - A ₅	(20.47m)	浄願寺山19号墳	
$\angle A_5$	(103.27度)	A ₅ - A ₆	(13.38m)	$\angle C_1$	116.83度
$\angle A_6$	(142.63度)	A ₆ - A ₁	(12.48m)	—	
浄願寺山28号墳			浄願寺山32号墳		
$\angle D_1$	123.63度	D ₁ - D ₂	10.06m	$\angle E_1$	137.08度
$\angle D_2$	142.37度	—		E ₁ - E ₂	9.40m
浄願寺山41号墳			浄願寺山19号墳		
$\angle F_1$	88.71度	—		$\angle G_1$	90.87度
				—	

(4) 直線的な外縁がつくる角度の状況と変遷

ア 4号墳は120度強 ($\angle C_1$) と110度強 ($\angle C_2$) の角度が確認できる。

イ 32号墳では120度強 ($\angle E_2$) と140度強 ($\angle E_1$) の角度が確認できる。

ウ 28号墳では120度強 ($\angle D_1$) と140度強 ($\angle D_2$) の角度が確認できる。

エ 19号墳では120度弱 ($\angle C_1$) の角度が確認できる。

オ 41号墳では90度弱 ($\angle F_1$) の角度が確認できる。

カ 45号墳では90度強 ($\angle G_1$) の角度が確認できる。

概ね、4号墳は3号墳の $\angle A_1$ あるいは $\angle A_2$ を、32号墳では $\angle A_3$ 、 $\angle A_2$ を、28号墳では $\angle A_2$ 、 $\angle A_3$ を、19号墳では $\angle A_2$ を、それぞれ意図している考えられないか。各々大きめの角度ではあるが。

第12章 横穴式石室の現状

本古墳群に属する古墳の大部分が埋葬施設に横穴式石室墳を持つと考えてよい。しかし、それに関する情報は極めて限られている。

一つには『調査報告』の内容であり、今ひとつは赤色立体図と等高線図である。あとは個々の情報があるだけで、全体として把握するためのデータは不足している。

最も不足しているデータは埋葬施設・横穴式石室についてである。本章では本古墳群の各横穴式石室の現状に触れておきたい。

第1節 横穴式石室の開口方向

本稿では赤色立体図、等高線図で横穴式石室の開口方向が推定できる場合に限り、その開口方向を求めた。ここでは石室の状況が明確でないため十六方位を用いて表した。従って、記載しているデータは概ねの方位である。

将来、発掘調査が実施されたとき正しいデータに更正されるべきであろう。

なお、方位については『調査報告』に記載があるものもあるが、赤色立

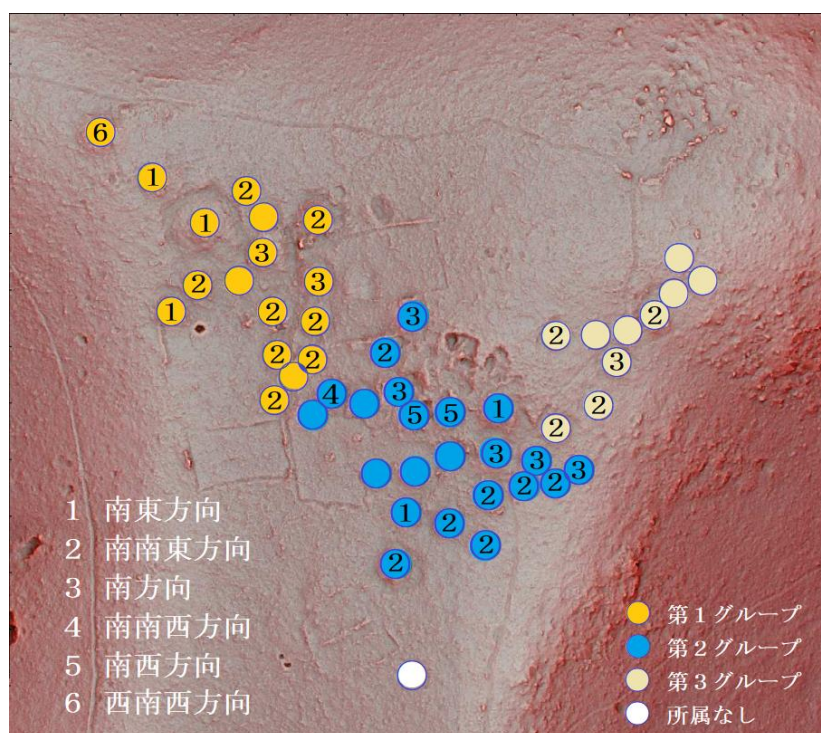
体図、等高線図から方位を求めることのできた場合には『調査報告』のデータがない場合もある。従って、本稿では『調査報告』のデータを使用しないこととした。

【第56図】は横穴式石室推定開口方向を分布図として表したものである。番号を記入していないのは推定できなかった古墳である。一方、【第14表】は開口方向が推定できた古墳の方位ごとの一覧表である。

推定できた古墳のほぼ全部において、崩壊した横穴式石室の痕跡が認められる。一方、存在が認められなかった場合、あるいは確実ではない場合には、あえて推定していない。

別添の(G235)は上記をグラフ化したものである。それによれば開口方向が推定することができた古墳は本古墳群50基のうち36基である。14基は推定不可能であった。

最も多い方位は南南東であり19基、次いで南方向の8基、南東の5基と続く。これ



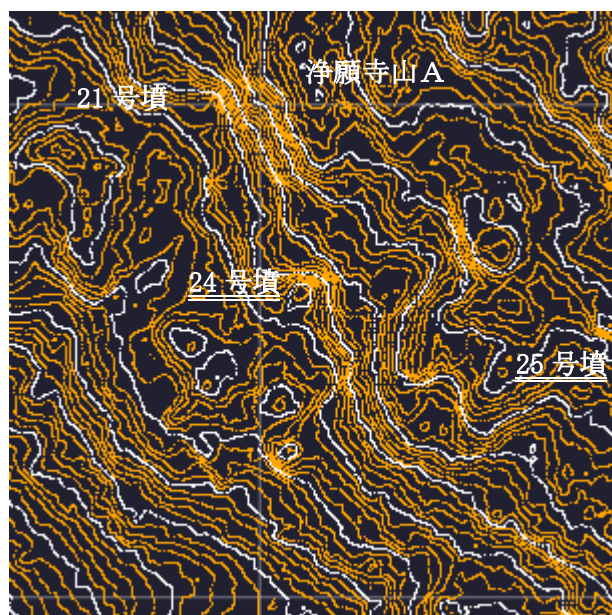
第56図 浄願寺山古墳群 横穴式石室推定開口方向分布図

らの南東から南方向の推定開口方向を持つのは32基で36基の89.0%である。50基にその比率をかけると44.5基が存在すると推定される。圧倒的に南南東を中心に南東から南方向～67.5度の範囲に開口する古墳が多いといえる。

一方、南西と西南西の西要素を持つ推定開口方向の古墳は4基である。これらのうち西南西の開口方向を持つと推定されるのが1号墳である。本古墳群の最北、かつ、最西に位置し、溝を持たないなど他の古墳にみられない特色を持つが、西南西の開口方向を持つ横穴式石室も他の古墳に例をみない特色のひとつにあげられる。

南西に開口する可能性のある古墳は、第2グループに属する24号墳(体積69.0 m³)、25号墳(86.7 m³)と並ぶ2基である。そのうちの24号墳は方墳である。南西方向の一边のほぼ中央、その辺に直交するように開口する横穴式石室の存在が推定される。

25号墳は方墳か円墳かの判断がつかねる古墳である。方墳であるとしたならば、24号墳と同じ方向に並ぶと考えてよく、等高線図から同方位の横穴式石室を持つと判



第57図 浄願寺山古墳群 24号墳、25号墳 等高線図

第14表 浄願寺山古墳群 横穴式石室推定開口方位	
西南西方位	1基
1号墳	
南西方位	2基
24号墳、25号墳	
南南西方位	1基
19号墳	
南方位	8基
7号墳、11号墳、21号墳、23号墳、30号墳、38号墳、40号墳、43号墳	
南南東方位	19基
4号墳、9号墳、10号墳、12号墳、13号墳、14号墳、15号墳、17号墳、22号墳、32号墳、34号墳、35号墳、36号墳、37号墳、39号墳、41号墳、42号墳、45号墳、47号墳	
南東方位	5基
2号墳、3号墳、5号墳、26号墳、31号墳	
東南東方位	—
—	
不明	14基
6号墳、8号墳、16号墳、18号墳、20号墳、27号墳、28号墳、29号墳、33号墳、44号墳、46号墳、48号墳、49号墳、50号墳	

断できる。

直線的な外縁を持つ19号墳(61.2 m³)は方墳の可能性の高い古墳の1基であり、南南西方位の横穴式石室が存在すると思われる。以上、3基の古墳すべてが、方墳、あるいは方墳の可能性を持ち、南西および南南西に軸を持つ。

現段階で、西南西から南西、そして南南西に開口する横穴式石室を有する4基の古墳は、全体の8%を占める異質な存在と見てよい。

なお、南南西はほとんど南であるが西要素を持つ点に注目し、横穴式石室が西に向けた古墳の1基として数えた。

第2節 各古墳の横穴式石室

等高線図をもとにいくつかの古墳の横穴式石室について考察してみたい。

1 1号墳

【第9章 第1節 第30図】は1号墳の墳丘の等高線図である。中央部にほぼ西に口を向けた「U」字型に走るコンタラインが確認できる。

この窪地を横穴式石室の痕跡と推定した。略測によれば主軸長は約6.0m、幅は約1.5mであるが、石室の規模はひとまわり大きくなるかもわからない。

『調査報告』には墳丘中央部は深くえぐられていること、巨石が露出していることなどが記録されている。なお、窪地の東端は円形である墳丘のほぼ中心あたりに位置する。

2 3号墳

【第58図】は3号墳の等高線図である。直線的な外縁が六角形を呈するこの古墳は巨大な円丘を持つ。高さを除く、ほとんどすべての計測値が本古墳群中50基のなかでも最高値をとる。

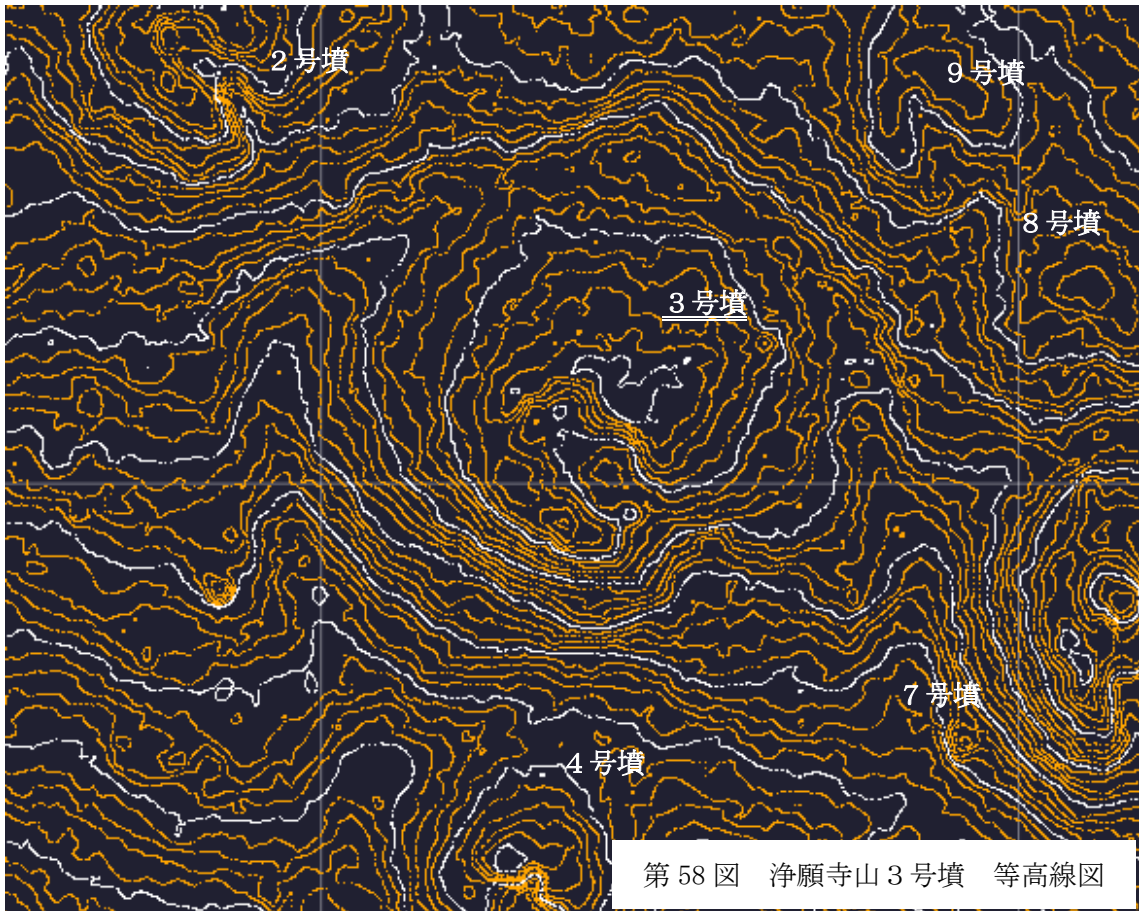
主要なデータである長径は25.8m、短径は24.5m、平面積は501.3 m²、体積は305.2 m³をそれぞれ測る。なかでも平面積は次位の1号墳の1.69倍、体積についても次位の1号墳の1.79倍と2倍ほどではないが相当の差が認められる。

さらに規模の最も小さい50号墳の平面積、体積と比較すると、前者で13.6倍、後者に至っては113.0倍と大きな格差を示す。

以上のように平面積、体積の重要な数値は他を凌駕する値である。このことは本群中で極めて大きな古墳であるといえる。さらに周囲に7号墳、2号墳、4号墳を従える様子は、本古墳群の盟主墳であることをうかがえるに充分である。

【第59図】は3号墳墳頂部の等高線図の拡大である。南東方向に主軸を持つ長方形の凹みの存在が確認できる。南東側、図の下側には突出するコンタラインの動きも認められる。袖部分のなごりとするならば、片袖式の横穴式石室となる。

(1) 玄室と考えられる凹み底部の範囲を概測すると長さ約5.3m、幅約2.6mの測定値を得た。深さは0.5m以上であろう。実際は上記の数値より大きいと考えた方が

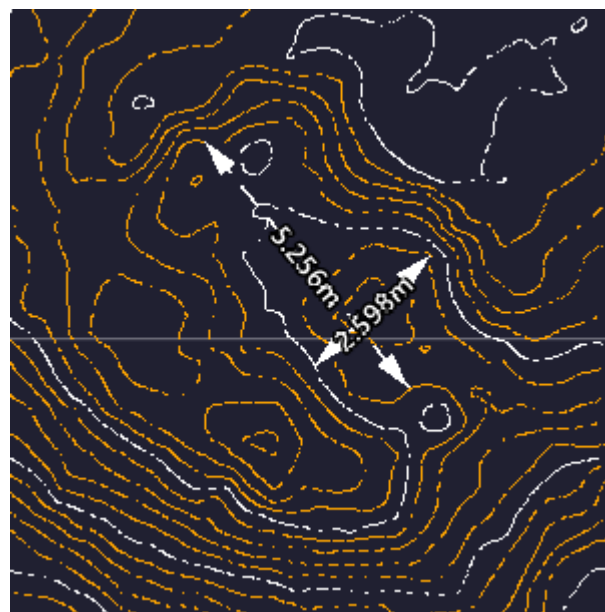


自然である。

石清尾山山塊には多くの横穴式石室を持つ古墳が存在する。『調査報告』では石清尾山の摺鉢谷に所在する摺鉢谷4号墳の玄室の値は、全長 5.0m、最大幅 2.37m、高さ 2.6mで、石清尾山塊にある横穴式石室墳の中で最も大きいと記している。しかし、3号墳の石室・玄室部よりは小規模な可能性がある。

従って、3号墳は本古墳群だけではなく、石清尾山塊に存在する古墳の中では最も規模の大きい横穴式石室を有する古墳としていいかも知れない。

とすれば、本古墳群の盟主墳として、また、石清尾山山塊に築かれた最大規模の横穴式石室墳をもつ古墳として注視する必要がある。



第59図 浄願寺山3号墳 横穴式石室状況

(2) 下記【第15表】は高松市の史跡指定を受けた巨大な横穴式石室を持つ古墳の玄室規模を、高松市のHPなどをもとにまとめたものである。

3号墳の計測値は概測である。しかし、玄室の規模が巨大であった可能性をうかがうに十分な値である。さらに【第11章 第1節1】にも記しているように、六角形の直線的な外縁を持つ古墳であるなど、3号墳に関する重要な知見も得られている。発掘調査を実施すればさらに新しい情報が得られるであろう。

なお、3号墳の側壁から基底部の石材まで撤去されているならば、玄室は上記ほどの規模にはならないであろう。

第15表 高松市内主要古墳玄室一覧表					
	長さ	幅/min	幅/max	高/min	高/max
古宮古墳	6.00m	2.03m	2.14m	2.90m	3.20m
高松市鬼無町					
久本古墳	4.60m	2.60m		3.50m	
高松市新田町					
東赤坂古墳	3.60m		2.30m	2.00m	
高松市香川町浅野					
摺鉢谷4号墳	5.00m		2.37m	2.60m	
高松市峰山町					
浄願寺山3号墳	5.30m	2.60m		0.50m	
高松市飯田町					

3 10号墳の石室について

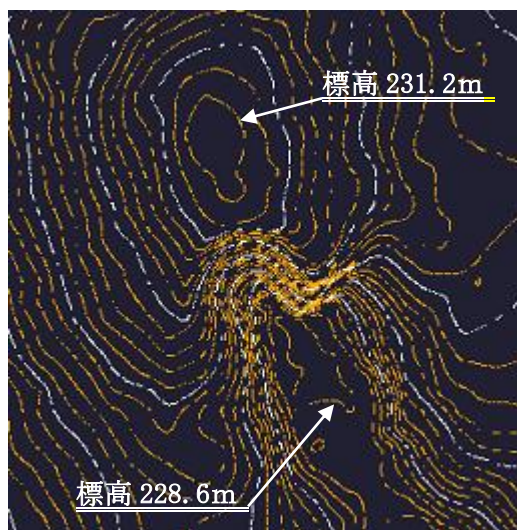
(1) 【第5章 第3節1-(1)】で10号墳の墳丘が特別な高さを持つ理由として、唯一横穴式石室がほぼ現存していることを記したが、その石室の詳細は下記のとおりである。

調査報告記載の石室の数値を並べると、石室全長 7.4m以上、玄室の長さ 3.55m、幅 1.6m、高さ 1.6mとある。高さ 1.6mの玄室が埋設されていること、加えて天井石の厚さ、その上を覆う封土の存在と、他の古墳ではみられない現況により、墳丘が高くなっていると考えてよい。

(2) 10号墳の羨道前の標高が 228.6mであり、墳丘の最高所が 231.2mである。仮に 228.6mが横穴式石室床面の高さとする、

$$231.2\text{m} - 228.6\text{m} - 1.6\text{m} = 1.0\text{m}$$

の単純計算から、石室に架せられた天井石の厚さに、石室全体を覆う封土の厚さを加えた合計が 1.0m以上ある。封土の流失等を考えれば、さらなる厚み、言い換えれば、さらなる高さを有していた可能性も否定で



第60図 浄願寺山10号墳 墳丘

きない。

- (3) 崩壊した横穴式石室を持つ古墳の多くは、積まれていた封土は現在よりも多かったはずであり、各古墳において本来の姿は全く異なっていたと思われる。

特に下記の3号墳をはじめ、10号墳より巨大な平面積を持つ1号墳、7号墳などは遙かに高い墳丘を誇っていたであろうことは容易に想像がつく。

- (4) 【(2)、(3)】の記載から本古墳群が築造の終焉を迎えたとき、そこには現在と全く違った墳墓群がみられたのではないか。すなわち、現在以上の高さを持った墳丘が林立した姿である。

ただし、本古墳群の終焉の風景は上記のようではなかった可能性がある【第3節】。

4 7号墳

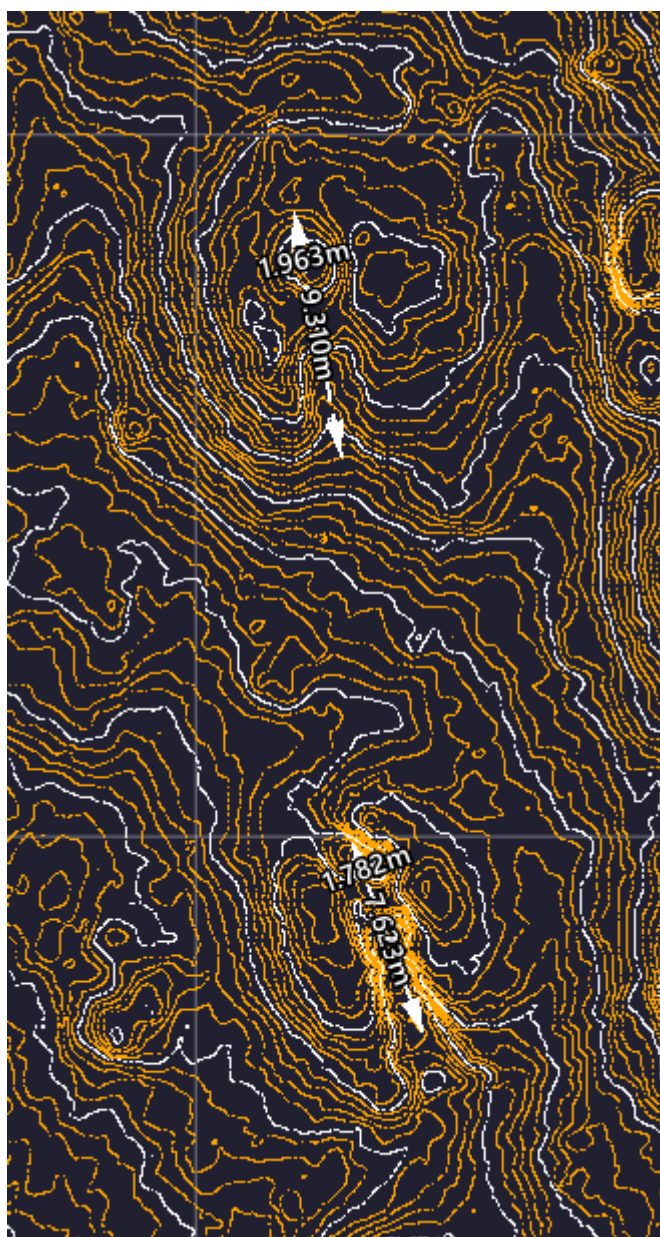
【第60図】は7号墳の墳頂部の等高線図である。南方向に主軸を持つ窪地が確認できる。南北に長い窪地とその北に円形状の窪地の2つが確認できる。両者の間に天井石の類いが架かったままの状態と推定しておきたい。

仮測値として、石室全長約9.3m、玄室幅約2.0mを得た。南に開いた比較的大型の横穴式石室が半壊しながらも遺存している可能性が高い。

赤色立体図、等高線図などの観察によれば、1号墳、3号墳においては、玄室の奥壁が墳丘のほぼ中央に位置するが、7号墳ではその位置が墳丘の北側に移動している。

5 13号墳

中央において、墳丘をほぼ南北に串刺すようにみえる横穴式石室の痕跡が確認できるのが13号墳である。北と南の窪地の間に天井石と思われる石材が架かっているらしい。北と南に連続して続く窪みが横穴式石室の全体で



第61図 浄願寺山7号墳、13号墳 墳丘状況

あろう。石室は仮測値が全長約 7.6m と幅約 1.8m である。なお、『調査報告』では石室の全長を、推定 750cm 以上としているから、仮測値は適当といえる。

6 奥壁位置の移動

3号墳、7号墳、13号墳の3基の横穴式石室奥壁の位置を比較してみたい【第58図、第61図】。

3号墳の奥壁は円丘のほぼ中央に位置する。次の7号墳では奥壁の位置がより北側に移っている。13号墳では奥壁の位置が、微妙ではあるものの7号墳のそれより北に移動している。平面で見る限り、中央から北方への移動が見て取れる。墳丘中央から北端へと移っていることが確認できる。

墳丘の高さについても3号墳が2.6m、7号墳が2.0m、13号墳が1.8mと値を減じている。

墳丘は埋葬施設である横穴式石室を覆うことを主目的とする構造である。3基の古墳を比較すると、奥壁の位置が中央から北端に移り、墳丘の高さも徐々に減じていることが明らかである。

3号墳を本古墳群における墳丘築造の頂点とするならば、7号墳以降においては、墳丘および横穴式石室の縮小化、ひいては古墳築造の省力化が始まっていたと考えられる。

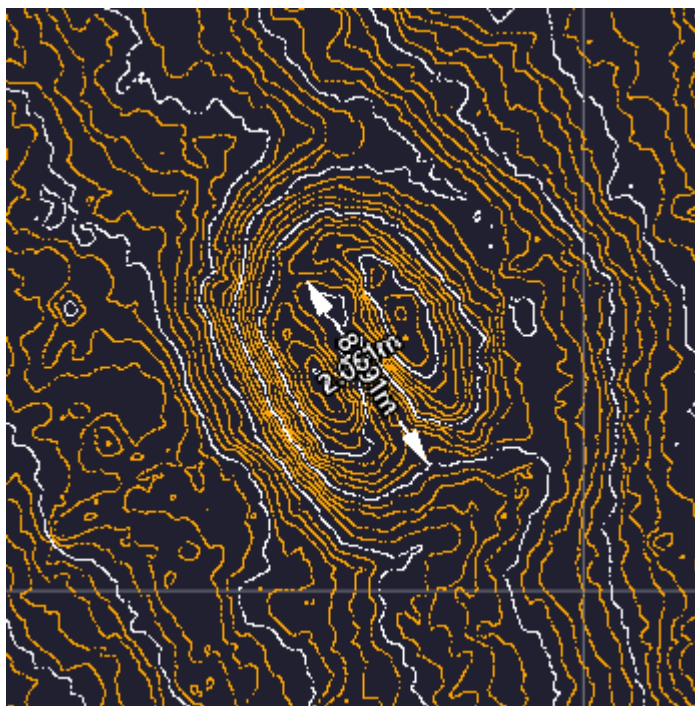
大まかにいえば古墳の規模は、最大規模の古墳（本古墳群では3号墳）を頂点に、順次規模を減じていくと考えてよい。当然、時間的な流れに沿ったものであるといえよう。

7 32号墳

大型古墳の1基である32号墳は本古墳群の南西に位置する古墳である。横穴式石室跡と目される窪地は、長楕円形をした墳丘に包み込まれるように存在する。

概測により得られた窪地の測定値は全長約 8.4m、幅約 1.9m である。『調査報告』にも石室の全長を、推定 810cm 以上としているので、大きな問題は無いであろう。

奥壁の位置も3号墳とは異なり墳丘中央部ではなく、7号墳と同様北方に寄っている。



第62図 浄願寺山 32号墳 横穴式石室状況

8 24号墳

【第1節 第57図】にある24号墳を方墳と考えている。北西側と南東側に溝をもつ。ただし、後者は荒廃が顕著である。その両側の溝と平行して墳丘側に窪む等高線が確認できる。その南縁には30cm程度の高まりがある。両側の溝にほぼ平行で、南西の辺にほぼ直角の窪みである。

これらから横穴式石室の存在を推定した。溝に平行する窪みの軸の長さは約2.1m、直交する長さは約1.9mである。後者を幅にあたと考えるならば適当な計測値であろう。

なお、北東の辺は両側の溝の先端を結んだ箇所に整っていない溝がある。ただし、浄願寺山Aの付近でもあるため、判断がつかかねる状況である。

9 26号墳

【第9章 第2節3 第36図】の不定形古墳の項において、26号墳の横穴式石室について説明している。

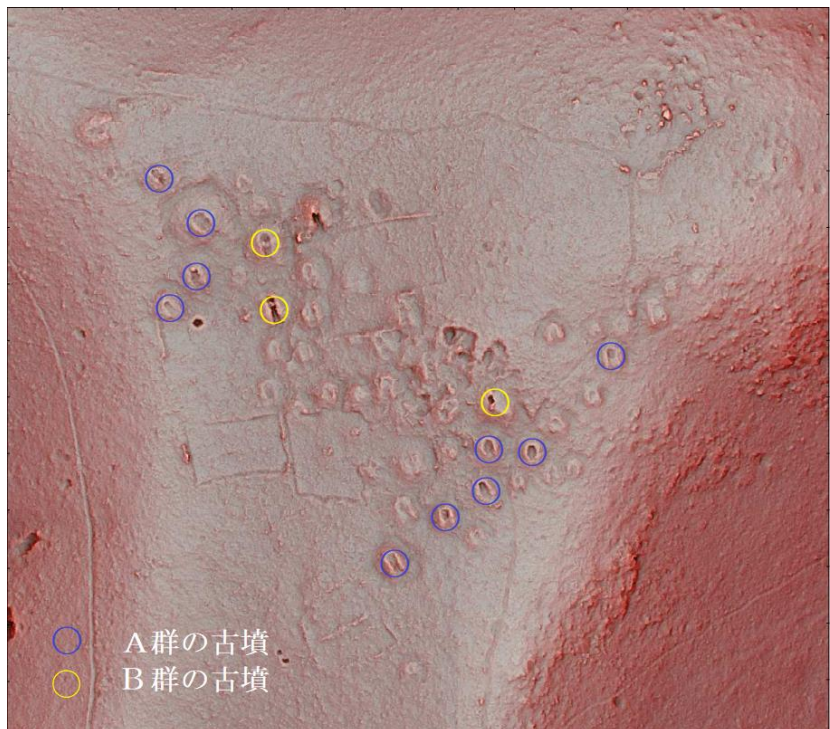
第3節 横穴式石室と本古墳群の現状

赤色立体図および等高線図の観察によれば、墳丘のほぼ中央に平面が逆U字形、あるいはΩ形の窪みがみられる古墳が少なくない。それら窪地はおおむね南方向に向く。横穴式石室の痕跡、崩壊の跡と推定できる。推測ではあるが、天井石まで取り去った徹底した破壊が行われたのであろう。ここで注目したのはその分布である。

1 状況の整理

【第63図】を参考に状況を整理してみたい。対象にする古墳は下記のとおりである。

- (1) A群 石室が大きく破壊された古墳の2号墳、3号墳、4号墳、5号墳、30号墳、32号墳、34号墳、36号墳、38号墳、43号墳
(以上、10基)
- (2) B群 天井石が露出する古墳



第63図 横穴式石室の遺存状況分布図

7号墳、13号墳、26号墳（以上、3基）

2 【第63図】から

- (1) 第1グループの北西側に位置する一部の古墳、第2グループの南側における一部の古墳≒A群の古墳である。
- (2) それらの古墳の多くが規模の大きな古墳である。
- (3) 赤色立体図によるとA群の古墳では、横穴式石室の徹底的に破壊された状況～全天井石の撤去～が顕著に認められる。

その結果、墳丘中央にほぼ南に向いた逆U字形、あるいはΩ形をした明確な窪みが存在する。

A群以外の古墳でも破壊された横穴式石室の痕跡がみられるが、その状況は様々で、A群の古墳のように統一感はない。

- (4) A群の古墳については状況からみて、すべての古墳において天井石がひとつ残らず撤去され、横穴式石室が露出していると考えてよい。

これらの古墳において同じような破壊が行われている。同じ目的で同じような時期に実施されたと考えておきたい。

- (5) B群の古墳3基は、A群に隣接し半壊した横穴式石室が露出している。

『調査報告』ではそれぞれの古墳について石室の用材が露出し、基底部が残存していることを記す。そして26号墳については「巨大な安山岩の天井石が動かされ石室が露出している」とある。

天井石の撤去という破壊行為の途中で放棄され、その状況が残されたと想定しておきたい。

- (6) A群、B群の古墳は北西側の一群と南側の一群に分けられる。

A群、B群の古墳のほとんどが、大型古墳、あるいは中型古墳である。小型古墳に分類されるのは36号墳のみであるが、その古墳にしても直列古墳Ⅱ【第13章 第3節2】に属する重要な古墳である。

- (7) 両者の内側に位置する古墳では、盗掘の被害は受けていると考えられるものの、その状況は限定的であり破壊は一様ではない。A群やB群の古墳によく似た徹底した破壊をほとんどの古墳が受けていないと思われる。

- (8) A群とB群の古墳に挟まれた中間地帯に



第64図 浄願寺山古墳群
A群とB群の現況

所在する古墳に対して、西方向や東方向からの破壊行為が行われた形跡は、現状では認められない。

- (9) 【(1)、(8)】で言えることは、共通の目的をもった集団が、ある時期に継続的に行った可能性が高い。ただ中断期間が介在した可能性を否定するものではない。
- (10) 【(7)】は個々の小集団による破壊であり、目的、規模、時間などが上記と大きく異なる。また、自然破壊の可能性もある。

2 仮定の提出

上記の状況を考慮したうえで、以下の仮定を提出しておきたい。

仮定Ⅰ

周囲で行われた開墾の結果と考えられる。

目的 開墾地の整備に伴う工事

集団 開墾を行った人たち、比較的小集団？

時期 開墾地の整備時期

仮定Ⅱ

開墾以外の目的によって、行われた結果と考えられる。

目的 不詳（盗掘？）

集団 不明（地域の集団と考えられる？）

時期 不明（近い時期ならば、伝承が残っているのでは？）

仮定Ⅲ

内側の古墳築造に関連した工事の結果。

目的 古墳築造の用材確保のため

多数の古墳築造により大型石材が不足していた可能性？

集団 古墳を築造した集団

時期 古墳時代後期

3 結論等

- (1) 最も普通と思われるのが【仮定Ⅰ】である。しかし、結果などを考えた場合、下記の理由等により十分納得できるものではない。
- ア 周囲の開墾地に数mクラスの大型の石材はみられない。赤色立体図、等高線図では確認できない。
- イ 本古墳群の北から東にかけて広がる開墾の用に期すためには、横穴式石室が現存する10号墳やそれに続く11号墳なども対象になっていてもよい。西側に広がる開墾地に面する古墳についても同様なことが言える。
- (2) 【仮定Ⅱ】は検討することはできない。是非については留保せざるを得ない。
- (3) 【仮定Ⅲ】が正しいと考えることは可能である。あるいは最も妥当な考えかもしれない。
- ア 7号墳、13号墳の横穴式石室にのこされた天井石が東側から引かれ、西側が

石室内に落ち込む形で遺存している。東側へ引き上げようとしたのではないか。イ 26号墳でも横穴式石室の天井石が動かされていることが、『調査報告』に記述されている。

ウ アとイから破壊行為を行った者は、天井石に興味があったものと思われるが、如何であろうか。

4 まとめ

本古墳群に属する古墳において、徹底した破壊（盗掘／自然崩壊も含む）が行われているA群の古墳とそれ以外の古墳において破壊の内容が大きく異なる。

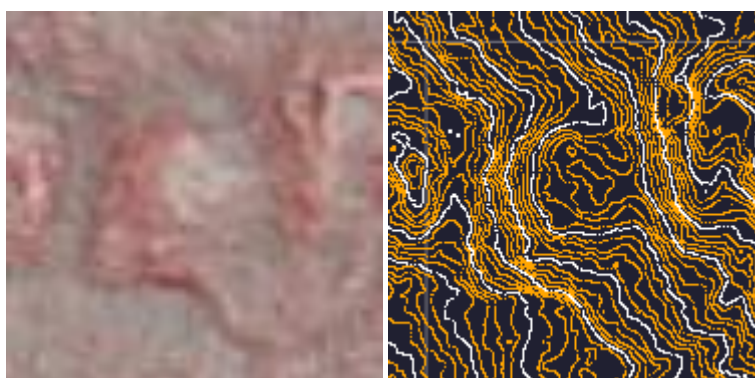
原因を盗掘とするならば、両側に所在するA群の古墳において、ある目的に基づいて徹底した破壊（盗掘）が行われた一方、両者の間に所在する古墳では、A群の古墳とは異なる傾向（天井石が遺る？）の破壊（盗掘？）が行われたと認められる。

おそらく破壊の時期・方法などが異なっていたものと思われる。もちろん、具体的な内容は不明である。

筆者は仮定Ⅲが正しいのではないかと考えているが、ただし、証明する方法は持ってなく、ますます、混乱したようにも思える。今後の課題としておきたい。

5 保存状況良好

『調査報告』に20号墳、29号墳について『比較的保存度良好』と記されている。赤色立体図、等高線図を観察する限り、2基の古墳墳頂部には顕著な凹凸はみられない【第65図】。



第65図 浄願寺山20号墳 赤色立体図、等高線図

2基の横穴式石室は大きく破壊されていること

はないと思われる。横穴式石室が盗掘を受けている可能性を否定するものではないが、荒廃が顕著な本古墳群のなかでは、良好な保存状態にある古墳と推定される。

第13章 並ぶ古墳

本古墳群では、数基（概ね3基から4基）の古墳が、規則性を持ち並ぶように見える場合がある。それについて調べた結果をまとめたのが本章である。

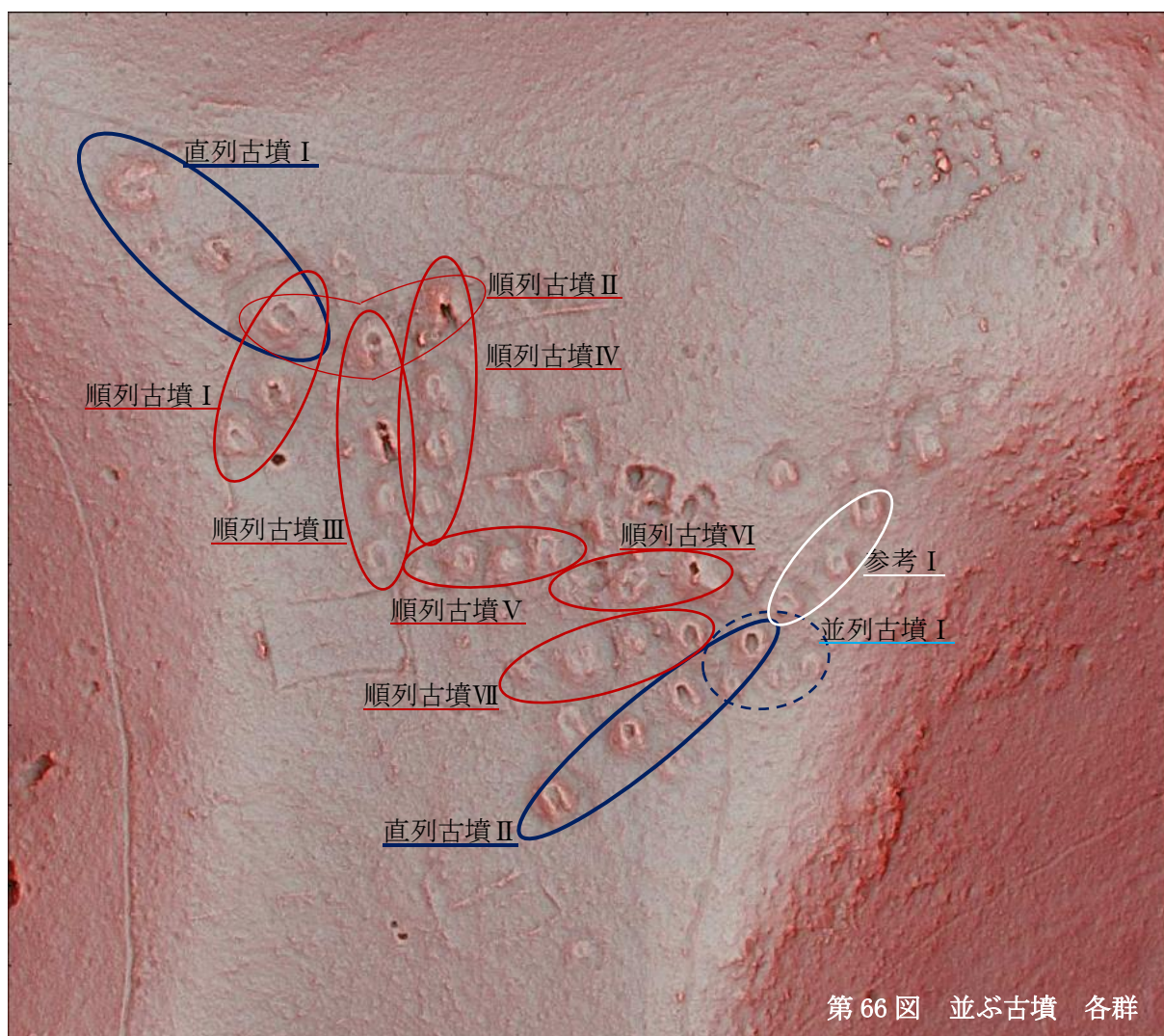
第1節 列の形成

本古墳群においては、50基の各古墳の周囲にいくつかの古墳が存在するのが一般的である。

そのうち特定の性格を持った古墳が数基並ぶケースが多く、そのような古墳の集まりを『並ぶ古墳』とした。

特定の性格とは特定の方向に並ぶことであり、かつ、平面積、体積などの指標が概ね「大きな数値」から「小さな数値」へと変化することを意味する。

さらに『並ぶ古墳』の性格＝並び方を分類し、その名称と所属する古墳を次頁記載の1から3に分類してみた。



各々の『並ぶ古墳』について属する古墳の集合を『一群』もしくは『群』を表記することがあり、その一群の基数は3基から4基で構成される。

なお、複数の群に属する古墳もある。

1 直列古墳 規則正しく直線的にならぶ数基からなる古墳の一群

- (1) 直列古墳Ⅰ（1号墳、2号墳、3号墳）・・・3基で構成される群
- (2) 直列古墳Ⅱ（32号墳、34号墳、36号墳、38号墳）・・・4基で構成される群

2 順列古墳 概ね直線状に順序良くならぶ数基の古墳の一群

- (1) 順列古墳Ⅰ（3号墳、4号墳、5号墳）・・・3基で構成される群
- (2) 順列古墳Ⅱ（3号墳、7号墳、10号墳）・・・3基で構成される群
- (3) 順列古墳Ⅲ（7号墳、13号墳、14号墳、17号墳）・・・4基で構成される群
- (4) 順列古墳Ⅳ（10号墳、11号墳、12号墳、15号墳）・・・4基で構成される群
- (5) 順列古墳Ⅴ（21号墳、20号墳、19号墳、18号墳）・・・4基で構成される群
- (6) 順列古墳Ⅵ（26号墳、25号墳、24号墳）・・・3基で構成される群
- (7) 順列古墳Ⅶ（30号墳、29号墳、28号墳、27号墳）・・・4基で構成される群

3 並列古墳 数基の古墳の一群 すべての古墳は並ばない。

- (1) 並列古墳Ⅱ（38号墳、40号墳、39号墳、37号墳）・・・4基で構成される群

4 参考（一群に準じるケースとして記述）

- (1) 参考Ⅰ（41号墳、42号墳、43号墳）

5 該当する古墳の延基数

36基

6 重複する古墳

- (1) 3号墳

直列古墳Ⅰ、順列古墳Ⅰ、順列古墳Ⅱに属する。

- (2) 7号墳

順列古墳Ⅱ、順列古墳Ⅲに属する。

- (3) 10号墳

順列古墳Ⅱ、順列古墳Ⅳに属する。

- (4) 38号墳

直列古墳Ⅱ、並列古墳Ⅰに属する。

- (5) 重複例を取り除いた並ぶ古墳の基数

31基

7 検討のためのグラフ

上記の複数の古墳からなる各々の一群について検討のために作成したのが、文末に添付している（G501～G513）のグラフである。

グラフは一群ごとに作成したもので、所属する各々の古墳の立地標高/m、立地勾配/度、墳丘長径/m、径比率/%、墳丘高さ/m、墳丘平面積/m²、墳丘体積/m³、

体積÷面積/mの八指標をグラフ化している。

あわせて、直列古墳、順列古墳に属する各古墳との関係を【第77図】として図示してみた。

なお、この並ぶ古墳は本古墳群を第1グループ、第2グループ、第3グループに分割する根拠となっており、本章の最後【第6節】にその詳細について記している。

第2節 並ぶ古墳の築造順序など

本古墳群において並んで築造された古墳を直列古墳、順列古墳としたが、各々の一群は数基の古墳からなっている。そして隣接して並ぶ。さらに規模は縮小する傾向を読みとれる。当然、時間差を認めることができる。

ほとんどの場合、古墳の位置、規模の変化、それに伴う時間の流れ（築造の順序）は同方向に一致すると考えられる。具体的には下記のとおり。

(1) 古墳の位置

多くの場合、接して、かつ並んで存在する。

直列古墳の間隔は、より距離があるものの傾向は同様であると考えておきたい。

(2) 規模の変化

長径、高さ、平面積、体積などのデータは概ね大きな数値から小さな数値へと変化する。

(3) 時間の流れ

【(1)、(2)】は築造時間も並ぶと意味している。言い換えると、先頭古墳から最終に位置する古墳へと時間の流れ（築造の順序）を容認しておきたい。

第3節 直列古墳

明確な意図～属する古墳の横穴式石室奥壁部が一直線に並ぶ～で連続して築造された可能性が強い古墳の並びを『直列古墳』と呼ぶ。

その背景には古墳を築造する土地の高低・広狭・位置関係などをはかることが行われていたと考えるのが自然であろう。

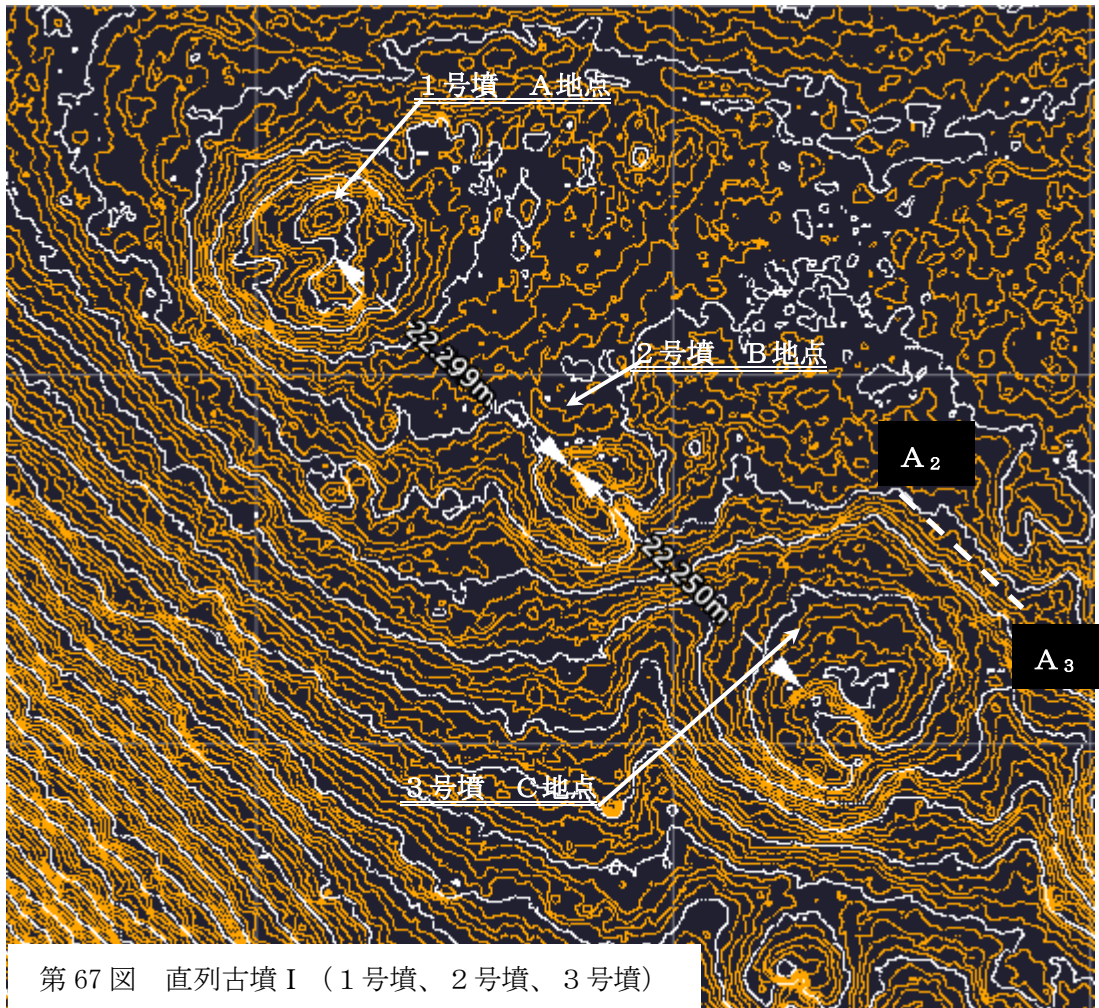
各古墳の築造にあたって量地的な手法が採用されていたと思われるが、直列古墳の築造に関しては極めて計画的な測量などが行われたと推定したい。

1 直列古墳Ⅰ（G501）

本古墳群の北西部に並ぶ、1号墳（区分Ⅰー下、大型古墳）、2号墳（区分Ⅱー上、中型古墳）、3号墳（区分Ⅰー上、大規模古墳）の3基の古墳からなる。

上記、3基の各古墳のほぼ中央部、横穴式石室の玄室奥壁と想定した3点を各々A地点、B地点、C地点とする。

A地点とB地点およびC地点を結んだ線は、ほぼ一直線で、3点の計測距離は次のとおりである。



A地点とB地点間の直線距離 22.3m B地点とC地点間の直線距離 22.3mである。以上から、直列古墳 I に属する 3 基の古墳は一直線上に、かつ、等間隔に並ぶといえる。

このことから 3 基の古墳は密接な関係にあり、計画的に築造されたことが想定できる。従って、最初に出現した古墳の位置が、のちに築造された 2 基の位置を規制しているとも言えよう。

(1) 直列古墳 I について (各古墳の位置)

【第 67 図】によれば、1号墳 (区画 I ー下、大型古墳)、2号墳 (区画 II ー上、中型古墳)、3号墳 (区画 I ー上、大規模古墳) の各古墳奥壁、中央付近の A 地点、B 地点、C 地点は一直線上に位置するとともに A B 間の距離 22.3m (22.299m)、B C 間の距離 22.3m (22.250m) とほぼ等しい。

一直線、かつ等距離に並ぶゆえに 1号墳以下 3 基の古墳は、極めて計画的に設計 (城郭築造の縄張りのな?)、築造されたと考えべきである。

(2) 直列古墳 I について (最初に築造された古墳)

直列古墳 I のなかで最初に築造された古墳を、規模は 3号墳に劣るものの下記

の他の古墳と異なるいくつかの属性【第10章 第2節1】を持つ1号墳と考えている。

ア 本古墳群の北西端に位置し高い独立性を有する。

イ 尾根の先端、等高線の疎な地域、すなわち傾斜の少ない場所に立地する。1号墳以外のほとんどの古墳と立地する点が、大きく異なる。

ウ 古墳への眺望、古墳からの眺望が極めてよいと考えられる。平野部をかなり意識した存在である。

エ 横穴式石室が西南西に主軸を取る可能性が高く、本古墳のなかでは特異な存在である。

オ 周囲に溝を持たない。他の古墳と明白な違いである。

上記のとおり、1号墳は直列古墳Ⅰの最初の古墳である。立地の状況や上記【ア～オ】から本古墳群の最初の古墳とも考えている。

(3) 直列古墳Ⅰについて（築造の順序）

次に1号墳築造後、2号墳と3号墳の築造順序を考えたい。仮に3号墳が先行して築かれたとするなら、その後1号墳と3号墳の中間地点に2号墳横穴式石室の奥壁の位置を決定し、その墳丘の南縁を3号墳北側にみられる溝の直線的な外縁に接するように配置する必要がある。極めて困難であろう。

以上から1号墳の築造から2号墳、3号墳の築造が計画されていたのではないかと。その計画が立案、継承、実施された期間はそう長くなかったはずである。従って、3基の古墳の築造時期は、あまり隔たっていないと推定しておきたい。

(4) 直列古墳Ⅰについて（築造の順序Ⅱ）

上記【(2)、(3)】を踏まえて、直列古墳Ⅰは、1号墳、2号墳、3号墳の順序で築造されたと想定する。

また、後述する順列古墳Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの各群の古墳では最初に位置する古墳から最後の古墳の位置する方向に連続して築造されている可能性が高い。本直列古墳Ⅰも同様であると考えておきたい。

(5) 直列古墳Ⅰについて（距離と高麗尺）

上記、A B間の距離 22.3m、B C間の距離 22.3mについて、その値を高麗尺の数値をもって除した値である【第16表】。

両方の距離は、ほぼ61尺前後である。机上の採寸なので問題があるにしても、築造にあたって

高麗尺が用いられた可能性が皆無ではない。そうであったとすれば、3基の古墳築造前、現地において計測が行われたことが明らかである。

第16表

高麗尺との比較Ⅰ（直列古墳Ⅰ関係）

1尺 ≒ 36.4cm

A B間距離	B C間距離	A C間距離
2,229.9cm	2,225.0cm	4,454.9cm
61.3尺	61.1尺	122.4尺

(6) 3号墳の直線的な外縁との関係

3号墳の直線的な外縁を構成する一辺・直線（ A_2-A_3 ）について考察してみたい【第11章 第1節2】。第67図には直線（ A_2-A_3 ）も挿入している。これを見るかぎり、A地点、B地点、C地点を結ぶ直線と、（ A_2-A_3 ）が平行である可能性が高い。

このことは直列古墳Ⅰの3基を結ぶ直線と、3号墳の直線的な外縁が強い関連を以って築造されたと推定できる。3号墳は直列古墳Ⅰに規制されて登場したのではないか。

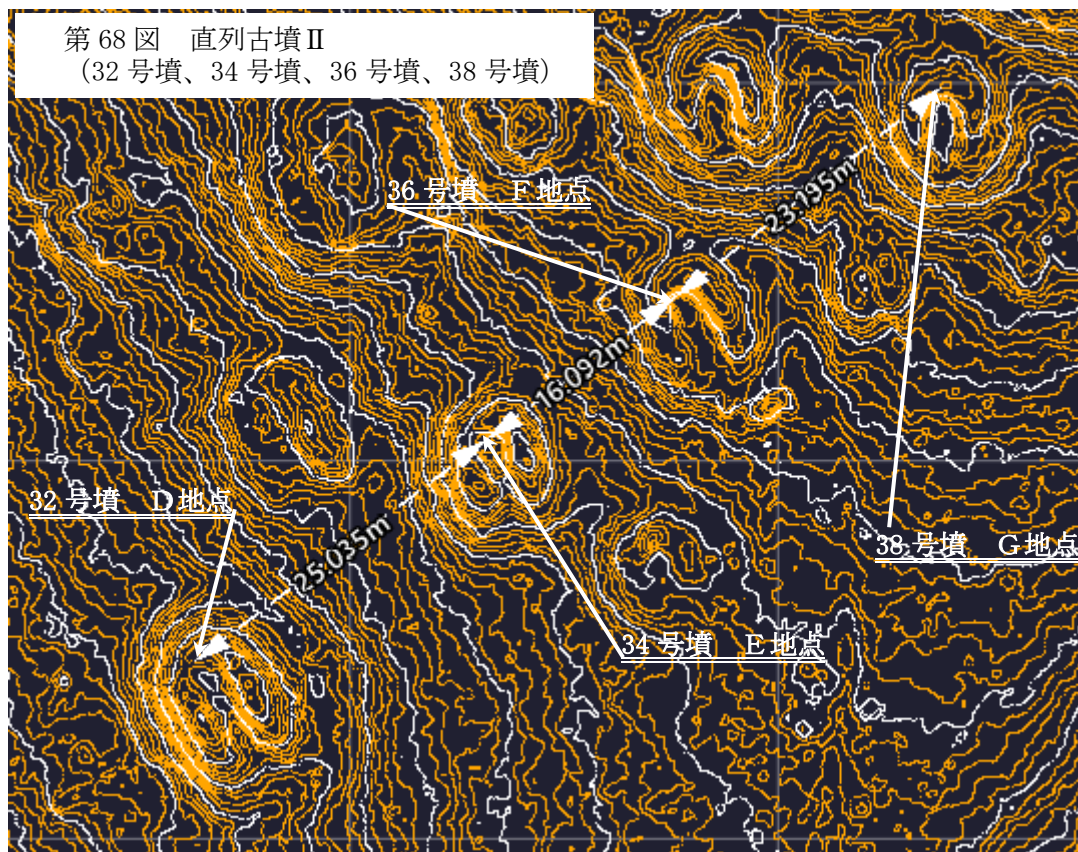
(7) (G501) から

直列古墳Ⅰに属する3基の古墳のデータは、標高が高くから低い順に、勾配はその逆となっている。長径、高さ、平面積、体積、平面積÷体積の値では3号墳が最大値、2号墳が最小値となっている。

後述する順列古墳Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳなどによれば古墳の規模（平面積、体積）が、最初の古墳が最も規模が大きく、最後の古墳が小さくなっている。

しかし、直列古墳Ⅰの場合は3号墳の規模が最も大きく、上記の傾向と異なっている。

その理由について、3号墳が直線的な外縁を持つ古墳であることをあげておきたい【第11章 第1節1】。順列古墳Ⅴ、Ⅶでさらに触れたい。



2 直列古墳Ⅱ (G502)

本古墳群のほぼ南東縁に位置する 32 号墳 (区分Ⅱ-上、大型古墳)、34 号墳 (区分Ⅱ-下、中型古墳)、36 号墳 (区分Ⅲ-上、小型古墳)、38 号墳 (区分Ⅱ-下、中型古墳) の各古墳の横穴式石室奥壁を結ぶ線が、ほぼ一直線であることが確認できる。このことは 4 基の古墳の墳丘の中心が直線状に並んでいることを意味する。

直列古墳Ⅰと同様、4 基の古墳は一直線に並ぶ。ただし、直列古墳Ⅰと異なり古墳間の距離は等間隔ではない。

重要なのは 4 基の古墳の築造が計画的に行われたことである。直列古墳Ⅰの事例と同じ理由で、築造期間も短いと考えたい。

(1) 直列古墳Ⅱについて (32 号墳の位置)

32 号墳 (区画Ⅱ-上、大型古墳) は周辺で規模が最も大きく、33 号墳を除くと本古墳群の南を限る重要な地点に位置する古墳である。

その理由としては、32 号墳は直線的な外縁を持つ古墳で【第 11 章 第 2 節 1-(2)】によれば、4 号墳よりは後出すると考えられる。また、陸橋【第 10 章 第 1 節 4】を持つことなど、他の 3 基、特に直列古墳Ⅱのなかで南東端に位置する 38 号墳と比べ異なる点がある。

従って、32 号墳を直列古墳Ⅱの初頭の古墳と考えておきたい。北西隅を限る 1 号墳の例と同じく直列古墳Ⅱに属する 4 基の古墳のなかで最初に出現したのであろう。

(2) 直列古墳Ⅱについて (4 基の古墳)

直列古墳Ⅰおよび後記する順列古墳Ⅲ、同Ⅳの例から、32 号墳を皮切りに南西から北東方向に並ぶ 34 号墳、36 号墳、38 号墳の築造順を提示したい。

32 号墳が長楕円形墳であるが、のこりの 3 基は円墳である。【(1)】で 32 号墳が南端を占めるばかりでなく、直列古墳Ⅱの 4 基が第 2 グループの南辺に立地している。

(3) 直列古墳Ⅱについて (築造順)

4 基の古墳の築造順序についてであるが、上記の築造順について検証しておきたい。

長径、高さ、平面積、体積の四つの指標に注目した。これらの指標は 32 号墳、34 号墳、36 号墳の順に数値を減じて並ぶ。しかし、次の 38 号墳は 36 号墳より四つの指標全てで大きな値を持つ。さらに 34 号墳の値をも凌駕する指標もある。

平面積、体積などの規模を重視すれば、32 号墳、38 号墳、34 号墳、36 号墳の築造順序をも想定できる。

なお、38 号墳に加え、墳裾に位置する 37 号墳、39 号墳、40 号墳の 4 基の古墳で並列古墳Ⅰなど後継古墳との関係も考慮する必要がある。その 3 基は新しい築造と考えられる小型古墳であり、38 号墳も 32 号墳に継いで築造されたとは考えに

くい。

(4) 直列古墳Ⅱについて (41号墳との関係)

38号墳の東側に位置する41号墳を加えて順列古墳(直列古墳と異なり一直線に

第17表

高麗尺との比較Ⅱ (直列古墳Ⅱ関係)
1尺 ≒ 36.4cm

D E 間距離	E F 間距離	F G 間距離	D G 間距離
2,503.5cm	1,609.2cm	2,319.5cm	6,432.2cm
68.8尺	44.2尺	63.7尺	176.7尺

並ばない)とみることも可能であるが、本古墳群中に2例しかない直列古墳の意味を考え、否定しておきたい。

なお、41号墳は直線的外縁を持つ古墳として、個の単位で重要な古墳である。

(5) 直列古墳Ⅱについて (距離と高麗尺)

D E間の距離 25.04m、E F間の距離 16.09m、F Gの距離 23.20mについて、高麗尺と比較した。

三者の距離は、ほぼ69尺弱、44尺強、64尺弱である。机上の採寸なので問題があるにしても、直列古墳Ⅰの例と同様、4基の古墳の築造に高麗尺が用いられた可能性は皆無ではない。

(6) (G502) から

【(3)】に記したように38号墳の規模が32号墳に次ぐものであることを示している。規模を考慮すれば38号墳は32号墳に続いて築造されたと推定され、位置を考慮すれば38号墳は最後に築造されたと考えられる。

本稿では、後者の例をとりあげておきたい。

第4節 順列古墳

直列古墳から直線的に並ぶという条件をのぞいたのが、この順列古墳である。直線的でなく曲線状に並ぶとしておきたい。ただし、密集度は直列古墳より顕著であり、平面積や体積などの数値が大きな古墳から小さな古墳へと並んでいるケースが多い。

1 順列古墳Ⅰ (G503)

3号墳を含む群の一つで、4号墳(区分Ⅱ-上、中型古墳)、5号墳(区分Ⅱ-下、中型古墳)の3基が属する。南西方向にのびる一群で、番号の順で築造されたと考えられる。

(1) 順列古墳Ⅰについて (3号墳と4号墳)

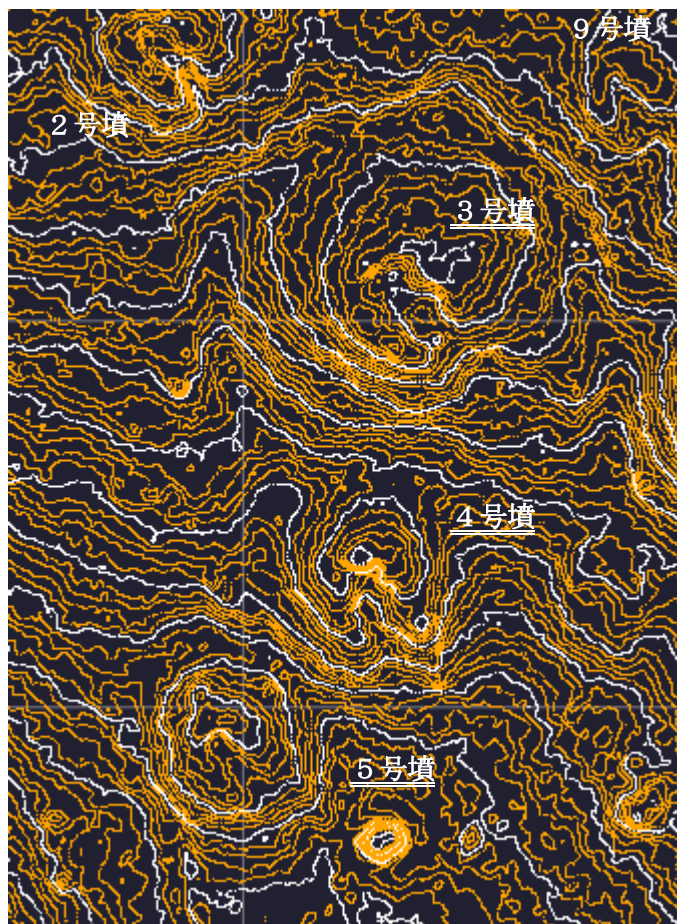
3号墳と4号墳の両者は双円墳とみまちがえるほど密接な関係を論じることができる。

平面積、体積で3号墳とは大きな格差が認められるものの、4号墳が3号墳とと

もに直線的外縁を有すること、そしてその直線的外縁が3号墳のそれに続く存在である。このことから4号墳は3号墳の後継的な古墳と考えてよい【第11章 第1節1、2、第2節1】。

(2) 順列古墳Iについて（4号墳と5号墳の関係）

4号墳と5号墳の共有する溝との関係から、前者の築造後、後者が築造されたと考えられる。従って、順列古墳の3基は、3号墳、4号墳、5号墳の順に築造されたと想定しておきたい。



(3) (G503) から

墳丘の小規模化と築造順について、(G503)を参考に考えてみたい。

立地勾配を除く指標はいずれも最初の古墳である3号墳にくらべると、2者はかなり小さな数値を持つ。特に平面積、体積の差はかなり大きい。3号墳に比べて4号墳の墳丘は体積が19.7%(60.1 m³)、5号墳では16.8%(51.4 m³)と小さな数値である。

第69図 順列古墳I（3号墳、4号墳、5号墳）

3号墳の巨大さが容易に理解できる同グラフでは、4号墳、5号墳の高さ、平面積、体積の三指標において数値を減じている。長径は4号墳と5号墳とは微差で、ほとんど同じである。従って、3基の古墳の並びは長径を除く三指標において減ずる方向性を認めることができる。

背景に墳丘の縮小化、および、時間経過があることは間違いない。

(4) 順列古墳Iについて（8号墳、9号墳との関係）

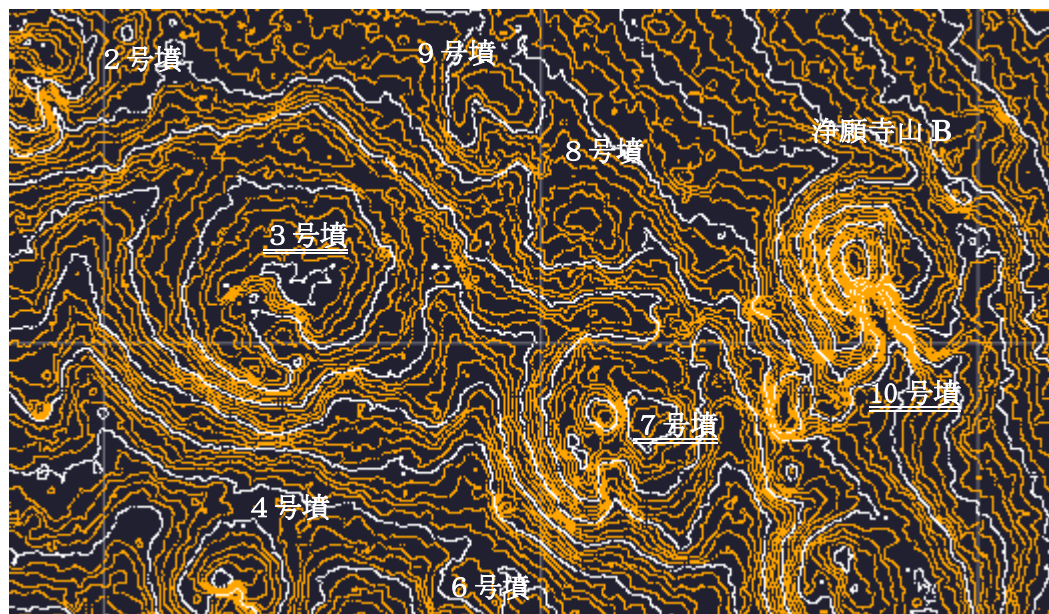
3号墳北東に位置する9号墳（区画Ⅲ-上、小規模古墳、体積9.3 m³）、8号墳（区画Ⅲ-上、小規模古墳、体積8.4 m³）の2基が5号墳に続いて築造されたと想定することが可能である。

(G512)は、4号墳、5号墳と9号墳、8号墳の4基のデータを表化したものである。位置関係を考慮しないことを条件に、3号墳を加えた5基の並びを想定し

てよいであろう。

また、順列古墳Ⅲの17号墳（体積6.1 m³）、同Ⅳの15号墳（体積13.4 m³）の2基と比べても規模はそんなさく大きな差異はない。8号墳、9号墳が順列古墳Ⅰの5号墳に続いて築造された古墳である可能性を指摘しておきたい。

2 順列古墳Ⅱ（G503）



第70図 順列古墳Ⅱ（3号墳、7号墳、10号墳）

順列古墳Ⅰと同じく3号墳を含む一群で、その並び方は直線ではなく、より曲線的である。

7号墳（区分Ⅰー下、大型古墳）、10号墳（区分Ⅱー上、大型古墳）の3基で構成される。3基の古墳は、平面積で第1位、第3位、第5位、体積で第1位、第3位、第4位の順位を誇る大型古墳で、本古墳群中において最も際立った古墳の集団であるといえる。

いずれも連続する溝を伴う円墳である。ただし、7号墳と10号墳は溝を共有するなど、3号墳と7号墳の間よりも密接度が高い。

ただし、墳丘高さについて10号墳が3号墳、7号墳より大きい値をもつ。その理由として、10号墳には横穴式石室が良好に遺存しているためと考えられる【第12章第2節3】。

(1) 順列古墳Ⅱについて（空間的、時間的關係）

南東方向にのびる一群で、3号墳は順列古墳Ⅰ、7号墳は順列古墳Ⅲ、10号墳は順列古墳Ⅳのそれぞれ最初に位置する古墳である。

3基の各古墳は本古墳群中、重要な位置を持つ古墳であり、位置関係、墳丘規模などから3号墳を皮切りに7号墳、10号墳と続く築造順を想定する。

(2) 順列古墳Ⅱについて（築造順序の考察）

7号墳墳丘の短径÷長径比率は85.4%で、西隣の3号墳の95.3%、東で接する10号墳の97.6%と比べ値が小さい。このことは7号墳が南北にやや長い墳丘をもっていることを示す。

ア 7号墳をはじめとする順列古墳Ⅲでは、長径、短径の比率が7号墳と等しいか、より小さい。とするならば7号墳の径比率は立地が影響している可能性もある。

イ 両者の間に立地する7号墳が上記の墳形を採用した原因として、3号墳、10号墳、7号墳という築造順序の可能性も皆無ではない。

ウ 1号墳と10号墳の標高に注目したい。10号墳は1号墳の標高をこえることを避けて立地しているとすれば、10号墳は計画的に築造された円墳であるといえる。それが【ア】に記した理由の可能性もある。

両者の築造順序は上記のように相反する推測が可能であり、現段階では確定できないが、本稿では他の順列古墳と同様、位置だけでなく築造順序（3号墳、7号墳、10号墳）も並んでいると考えておきたい。

(3) (G504) から

長径、平面積は値を減じ、標高は値を増している。墳丘の高さ、体積の数値は順序良く並んでいない。10号墳において横穴式石室が存在していることが、現在の数値の並びに反映されている。

3号墳、7号墳の横穴式石室が10号墳と同様に遺存していたならば、平面積、体積の値は3号墳、7号墳、10号墳の順位となることを想定しておきたい。

3 順列古墳Ⅲ (G505)

4 順列古墳Ⅳ (G506)

ともに北から南に並ぶ一群である。7号墳、13号墳（区分Ⅱ一上、中型古墳）、14号墳（区分Ⅲ一上、小型古墳）、17号墳（区分Ⅲ一上、小規模古墳）の4基からなる順列古墳Ⅲと、10号墳、11号墳（区分Ⅱ一上、中型古墳）、12号墳（区分Ⅱ一上、中型古墳）、15号墳（区分Ⅲ一上、小型古墳）の4基からなる順列古墳Ⅳについて考察する。両者の関係が深いのでひとまとめに記述したい。

10号墳の南に並ぶのが順列古墳Ⅳで、7号墳の南に並ぶのが順列古墳Ⅴである。合わせて8基の古墳が並行して存在する状況が確認できる。

(1) 順列古墳Ⅲ、順列古墳Ⅳについて

(空間的、時間的關係)

2つの順列は各々4基の古墳が属していて、7号墳と10号墳、13号墳と11号墳、14号墳と12号墳、17号墳と15号墳がそれぞれ対になる。さらに【第70図】にも示しているように7号墳、10号墳、11号墳、13号墳の4基と、14号墳、12号墳、15号墳、17号墳の4基が形成する2組の4点は2個の平行四辺形を形成する。

このことは2つの順列古墳の相対する古墳が規則的（南・北の間隔、北東・南西の間隔）に並んで築造されているとみてよい。その結果、8基の古墳の規則的な配

置が出現したと考えられる。2つの順列古墳の列が強く関係しながら築造された結果であろう。

(2) 順列古墳Ⅲ、Ⅳについて（進む密接化）

順列古墳Ⅲ、順列古墳Ⅳの古墳では必要に応じて溝の共有化が認められるなど、古墳間の距離が縮小している。

具体的には7号墳と13号墳、10号墳と11号墳では比較的間隔があいている。先頭の7号墳、10号墳は南に溝をもつことがないが、地形の関係もあってか13号墳、11号墳以下の古墳は南に溝を持つ。このことは両者の距離の縮小であり、個々の古墳同士の間隔の縮小と捉えられる。

(3) 順列古墳Ⅲ、Ⅳについて

（進む小型化）

順列古墳Ⅲ、順列古墳Ⅳのそれぞれ4基の平面積、体積の区分は次のとおりである。

ア 順列古墳Ⅲ

※ 平面積

区画Ⅰ一下：7号墳、
区画Ⅱ一下：13号墳、
区画Ⅲ一上：14号墳、17号墳

※ 体積

大型古墳：7号墳、
中型古墳：13号墳、
小型古墳：14号墳、
小規模古墳：17号墳

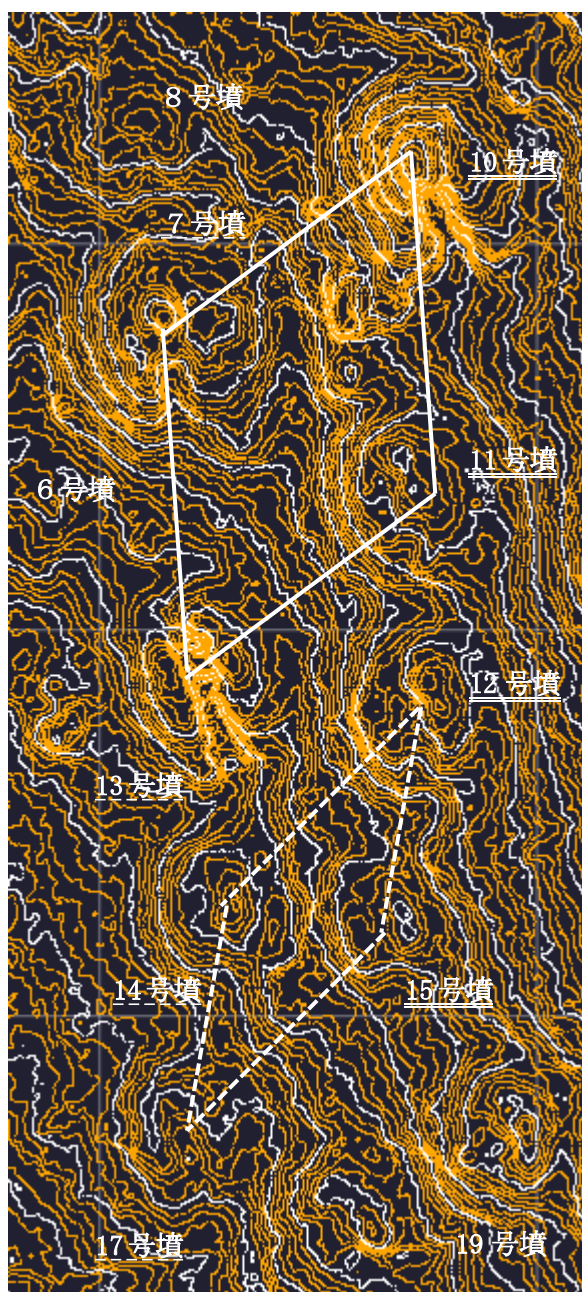
イ 順列古墳Ⅳ

※ 平面積

区画Ⅱ一上：10号墳、
区画Ⅱ一下：11号墳、12号墳、
区画Ⅲ一上：15号墳

※ 体積

大型古墳：10号墳、中型古墳：11号墳、13号墳、小型古墳：15号墳



第71図 順列古墳Ⅲ
7号墳、13号墳、14号墳、17号墳
順列古墳Ⅳ
10号墳、11号墳、12号墳、15号墳

順列古墳Ⅲの先頭である7号墳と最後の17号墳の平面積と体積を比較すると、前者で36.1%、後者は5.6%である。一方、順列古墳Ⅳの10号墳と15号墳を同様に比較すると平面積では33.2%、体積では11.8%となる。

この数値からみると順列古墳ⅢおよびⅣに属する古墳の墳丘の小規模化は顕著である。

(4) (G505、G506) から

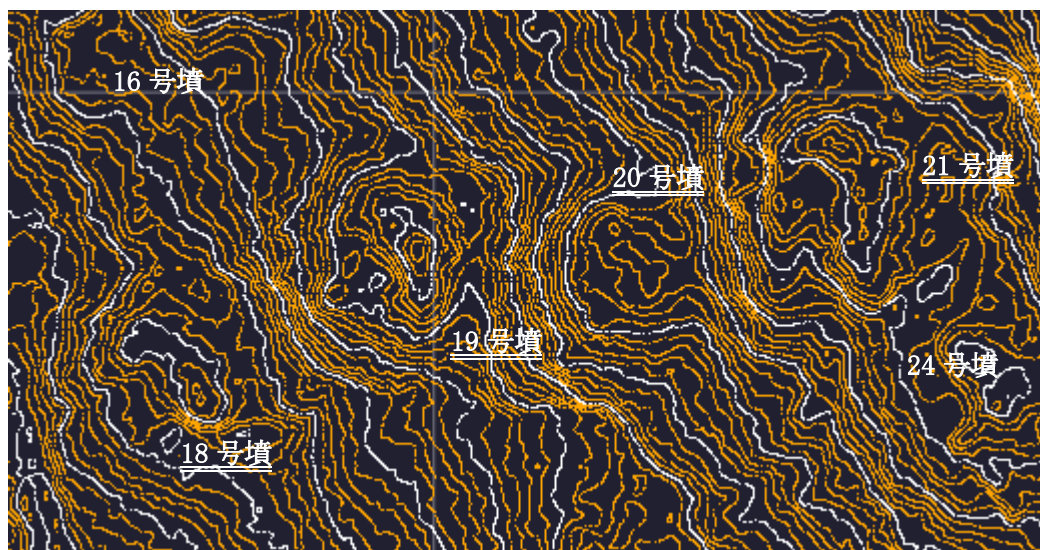
順列古墳Ⅳ (G506) では長径、高さ、平面積、体積の四つの指標において同じ値をとる一例 (11号墳と12号墳の高さが同値) を除き、すべて減じている。

従って、北に位置する7号墳と南に位置する17号墳を比較すると、北より南に向かって数値が小さくなっており、北から南に並ぶ墳丘の小規模化が起こっているのは明らかである。

順列古墳Ⅲ (G505) では四つの指標のうち長径および平面積において14号墳と17号墳の値が逆転している。ただし、平面積については微差である。そして体積は14号墳が17号墳より大きい。

このことから順列古墳も号順に並ぶとしておきたい。

5 順列古墳Ⅴ (G507)



第72図 順列古墳Ⅴ (21号墳、20号墳、19号墳、18号墳)

21号墳 (区分Ⅱ一下、中型古墳)、20号墳 (区分Ⅲ一上、中型古墳)、19号墳 (区分Ⅲ一上、中型古墳)、18号墳 (区分Ⅲ一上、小型古墳) からなる一群である。

東の高所から西に向かって下がりながら4基の古墳が連続して立地する。東側に位置する古墳の西側直下に、次の古墳が寄りかかるように築かれている。ほぼ東西方向に設けられた階段のように見え、きわめて密接な関係を認めることができる。

(1) 順列古墳Ⅴについて (空間的、時間的關係)

前記したように、この順列古墳にいたってはじめて古墳が東から西方向に並ぶ。

以降、順列古墳Ⅵ、順列古墳Ⅶも同様である。

これらに属する古墳は全て第2グループの古墳であり、大型古墳が東に向かって並ぶ順列古墳Ⅱ、南に向かって並ぶ順列古墳Ⅰ、Ⅲ、Ⅳと大きく異なっている。

(2) 順列古墳Ⅴについて（密接する古墳）

最初の古墳である21号墳の周囲には古墳が所在し、かつ、採土跡地である浄願寺山A【第14章 第2節1】とも隣接するなど、遺構の密集した場所である。一方、最後の古墳である18号墳は、順列古墳Ⅲの17号墳に近接する場所に納まっている。

ちなみに21号墳と18号墳の中心点間の距離は約31mで、順列古墳Ⅲの7号墳～17号墳の距離約54m、順列古墳Ⅳの10号墳～15号墳の距離は約50mである。順列古墳Ⅶの30号墳と27号墳の距離約41mと比較しても、その距離は短い。

順列古墳Ⅵの26号墳と24号墳の距離約32mが、21号墳～18号墳間の距離とほぼ同じであるが、順列古墳Ⅵは3基で構成されているので、比較にはならない。

以上の点から、短い距離の間に4基の古墳が配置されているのが順列古墳Ⅴの特色で、前の古墳にもたれるように造られており、大きな階段のようにみえる。

密接する順列古墳のなかにあつて、さらに密接の度合いが高い順列古墳であるといえる。

(3) 順列古墳Ⅴについて（特異点に位置する古墳）

(G508)によれば、4基の古墳の長径、高さ、平面積、体積の指標が、20号墳と19号墳の間で逆転している。

特に20号墳、19号墳、18号墳の平面積は、83.2 m²、90.7 m²、81.5 m²と、体積は、17.1 m³、35.5 m³、23.6 m³と変化している。19号墳の数値が20号墳より大きくなり、そのあとに続く18号墳の数値が19号墳より小さくなっている。高さも同じ傾向にある。

ただし、19号墳の長径は20号墳のそれより小さく、18号墳とほぼ同じ数値を持っている。

このような19号墳の数値は、『平面積や体積などの数値が大きな古墳から小さな古墳へと並ぶ』順列古墳の前提に反している。従って、19号墳は順列古墳Ⅴの特異な位置を占める。

理由として19号墳が直列的外縁を持つ古墳【第11章 第1節3】であることをあげておきたい。【本節7】に記述する順列古墳Ⅶに属する28号墳の事例と同じである。

6 順列古墳Ⅵ (G308)

不定形古墳の26号墳(区分Ⅱ一下、中型古墳)、25号墳(区分Ⅱ一下、小型古墳)、24号墳(区分Ⅲ一上、小型古墳)の3基で一群を構成すると考えておきたい。

東の高所から順列古墳Ⅶの最初の古墳である30号墳の北側に位置する26号墳と、

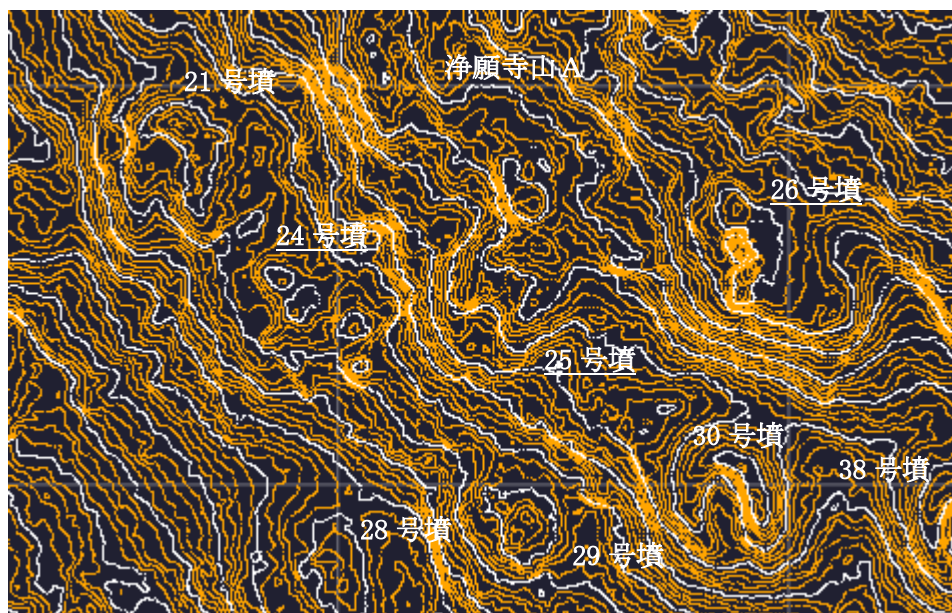
順列古墳Ⅴの最初の古墳である 21 号墳の南に位置する 24 号墳、および、両古墳にはさまれて存在する 25 号墳の 3 基からなる列である。

(1) 順列古墳Ⅵについて（墳丘の形状）

先頭の古墳にあたる不定形古墳【第 9 章 第 2 節 3】26 号墳は、本古墳群中、最も異形の墳形を持つ古墳である。径比率が 56.6% で円墳でも方墳でもない存在は異彩を放つ。

24 号墳は本古墳群では類例の少ない方墳と考えられる。また、25 号墳にもその可能性がある。

このように不定形古墳、方墳？、方墳と相異なる墳形の古墳が並ぶ様は、他の順列古墳においては例をみない。



第 73 図 順列古墳Ⅵ (26 号墳、25 号墳、24 号墳)

(2) 順列古墳Ⅵについて（狭い場所を選択）

順列古墳Ⅴと順列古墳Ⅶとの間に割り込むように占地・築造されている。両者の間にほぼ並行して築造することも可能であると考えられるが、あえて狭い場所を選択している。

【6-(2)】にも記したように先頭の 26 号墳と最後の 24 号墳の距離も短い。そのためか、順列古墳Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅶが 4 基で構成されるが、Ⅵでは 3 基で構成される。

(3) 順列古墳Ⅵについて（採土跡地との関係）

3 基の古墳は浄願寺山 A と称する採土地跡【第 14 章 第 2 節 1】に重なるか、あるいは寄り沿う位置に築かれている。特に最初の古墳である 26 号墳は、採土地跡に築かれたのであろう。そのため不定形の墳形をもたざるを得なかったのではないか。

(4) 順列古墳Ⅵについて（石室の開口方向）

24号墳の横穴式石室は方墳の軸に沿って南西に開口すると考えてよい。25号墳は南西に開口し、同じ方向に開口する石室を持つ方墳が2基並ぶ可能性がある。

両者の石室の開口方向は西方向の要素を持つ。1号墳、19号墳を除き他の古墳にはみられない【第12章 第1節】。

なお、26号墳では横穴式石室の現存が確認できる。そして2ヶ所目の石室が存在する可能性がある【第9章 第2節3-(1)】。

(5) 順列古墳Ⅵについて（並ぶとは）

順列古墳Ⅵの先頭である26号墳は順列古墳Ⅶの先頭である30号墳に接し、最後の古墳である24号墳は順列古墳Ⅴの先頭古墳である21号墳に接している。順列古墳Ⅴと順列古墳Ⅶとの間を結ぶような順列古墳である。

(G508)によれば、高さ、平面積は26号墳、25号墳、24号墳の順で数値を減じている。しかし、25号墳は体積の値が最も小さい。

ただし、25号墳の平面積が大きいこと、25号墳が24号墳より採土跡地・浄願寺山A【第9章 第2節3】に近接することから、何らかの事由で墳丘の体積が変化している可能性を指摘できる。

以上から25号墳の体積について考慮の余地があるものの、平面積と高さについて、数値が大から小への動きが認められるので、順列古墳に該当するとしておきたい。

7 順列古墳Ⅶ（G509）

30号墳（区分Ⅱ-上、中型古墳）をはじめとして、29号墳（区分Ⅲ-上、小型古墳）、28号墳（区分Ⅱ-上、中型古墳）、27号墳（区分Ⅲ-下、小規模古墳）の4基からなる。順列古墳Ⅴの古墳と同じく、高所から低所へと西に向かって展開する。

ただし異なるのは、28号墳の平面積、体積が30号墳に匹敵する数値を呈する事実である。これまで記述した順列古墳とは大きく異なる点でもある。

(1) 順列古墳Ⅶについて（空間的、時間的關係）

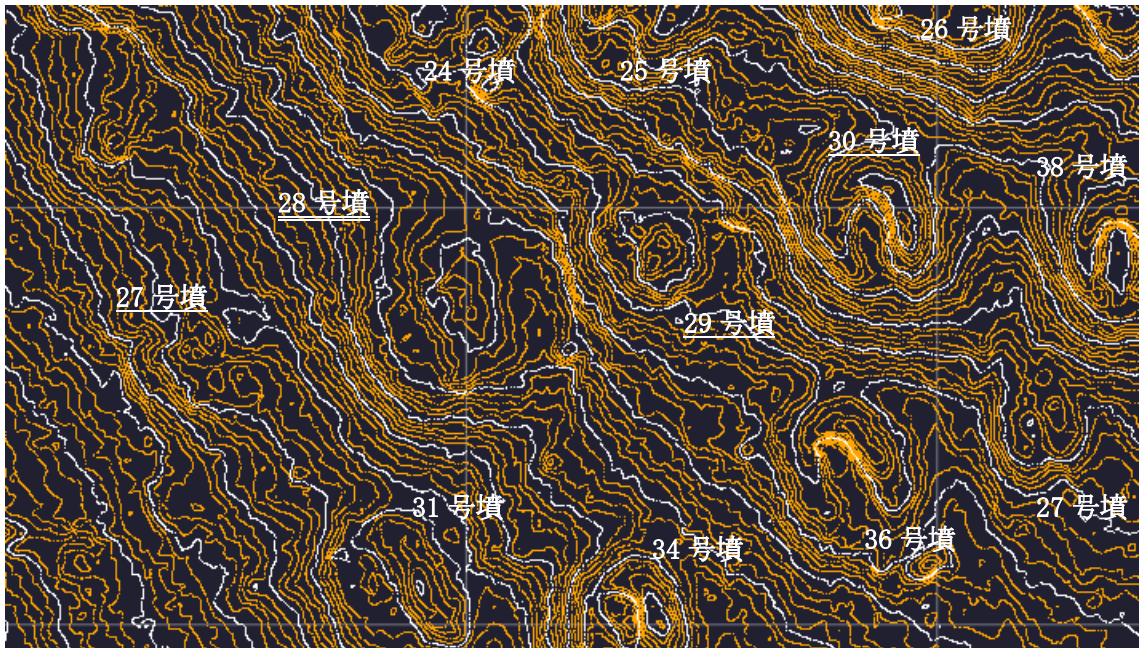
最も南の順列古墳で、直列古墳Ⅱの北側に並ぶ。直列古墳Ⅱが並びの方向を北東に向けるのに対し、当該順列古墳は順列古墳Ⅴと同じく東から西の方向をとる。

(2) 順列古墳Ⅶについて（30号墳と38号墳）

30号墳の近隣に位置する38号墳をもって本順列古墳の最初の古墳と考えることもできるが、38号墳が直列古墳に属する古墳であること、30号墳が38号墳より大きな体積を持つことなどから、現段階では順列古墳Ⅶは4基で構成されるとしておきたい。

順列古墳Ⅶの先頭に位置する30号墳は72.3 m³の体積を測る古墳である。本古墳群中の第6位の体積を持つ中型古墳（中型古墳としては最大規模）である。

(3) 順列古墳Ⅶについて（特異点に位置する古墳）



第74図 順列古墳Ⅶ (30号墳、29号墳、28号墳、27号墳)

順列古墳Ⅶに属する古墳のうち30号墳に続く規模を持つ古墳が28号墳である。

29号墳、28号墳、27号墳の平面積は66.8㎡、168.1㎡、48.0㎡、体積は16.6㎡、52.7㎡、8.9㎡とそれぞれ変化している。2つの値は28号墳が最も大きい。その他の長径、高さも同様である。さらに長径、平面積に至っては30号墳の値も凌駕する(長径14.2m⇒17.0m、平面積156.6㎡⇒168.1㎡)。

当然、「平面積や体積などの数値が大きな古墳から小さな古墳へと並ぶ」の順列古墳の前提に反している。ここでは順列古墳Ⅴに属する19号墳と同様、28号墳は順列古墳Ⅶのなかで特異な位置を占めている。

その理由として、28号墳が直線的外縁を持つ古墳【第11章 第1節4】である事実をあげておきたい。

順列古墳Ⅴの19号墳も同様であるが、28号墳は数値規模が19号墳より大きい。さらに直線的外縁の内側溝の範囲が19号墳より広くとられている。28号墳の築造が古いかもしれない。

なお、両古墳は各々の順列古墳で3番目に位置する古墳である。

第5節 並列古墳など

順列古墳から並ぶ方向を無視した古墳の列/集まり?を並列古墳とした。

1 並列古墳Ⅰ

1基の古墳を中心として、その周囲に位置する古墳を並列古墳とする。この場合、順列古墳と同様、規模が大から小へと変化すると規定した。

(1) 並列古墳Ⅰ (G510)

38号墳(区分Ⅱ一下、中型古墳)を中心とし、39号墳(区分Ⅲ一上、小規模古墳)、40号墳(区分Ⅲ一下、小規模古墳)、37号墳(区分Ⅲ一下、小規模古墳)からなる一群である。38号墳以外いずれもよく似た規模の小型の古墳である。

38号墳の南側墳裾に規則正しく位置することから、38号墳と極めて強い関係にあるものと推定できる。38号墳とのこり3基の古墳の築造時間が極めて接近していたとするならば、この並列古墳Ⅰが築造された時期、墳丘の小型化は急速に進んだものと考えられる。

2 参考

参考のため次の資料を作成した。

(1) 参考Ⅰ (G511)

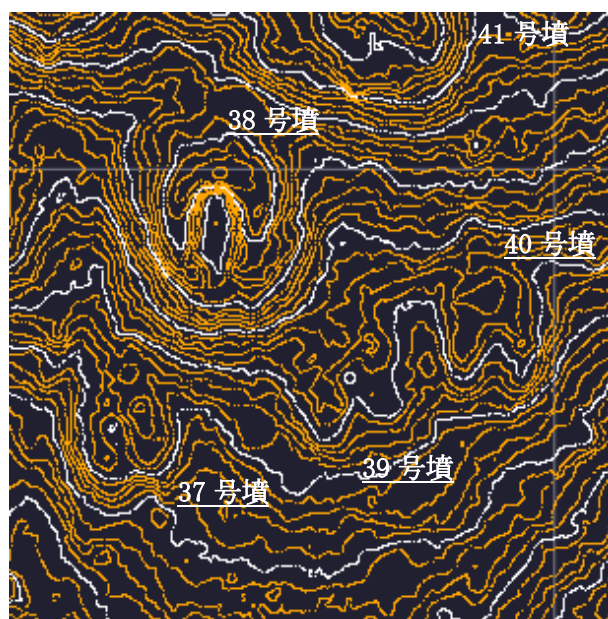
他にも直列古墳に準じる可能性のある古墳をあげておきたい。それは41号墳(区分Ⅲ一上、小型古墳)、42号墳(区分Ⅲ一上、小型古墳)、43号墳(区分Ⅱ一下、中型古墳)の3基である。

この3基の墳丘中央付近の距離、具体的には41号墳・42号墳間、42号墳・43号墳間の距離がほぼ同じ16.0m弱である。直線的に並ぶのではなく、2つの距離が等しいという点に興味をもつ。

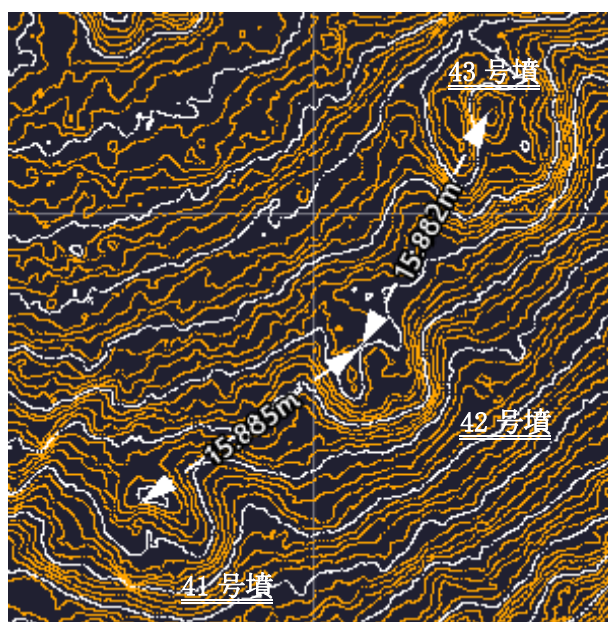
直列古墳Ⅰの特徴である、直線的に並ぶ、等距離であるという2条件のうち、後者の等距離であるという点を満たす可能性があり注目しておきたい。

各古墳の測点の位置が、墳丘中央付近という曖昧な特定であること、3基が第3グループに属する古墳

で築造時期が直列古墳Ⅰのそれと比較して、かなり遅れる可能性が高いことから、



第75図 並列古墳Ⅰ
(38号墳、37号墳、39号墳、40号墳)



第76図 参考Ⅰ (41号墳、42号墳、43号墳)

ここでは事実を述べるにとどめておく。

なお、43号墳は第3グループの中で最も大きな規模の古墳であり、その域内に立地する重要な古墳である。

(2) 参考Ⅱ (G512)

順列古墳Ⅰを理解するため作成した資料である。3号墳、4号墳、5号墳に続いて9号墳、8号墳が並ぶ(続く)と考えた場合、各古墳の各々のデータをグラフで表したものである。なお、数値の大きい3号墳は省略している。

(3) 参考Ⅲ (G513)

直列古墳Ⅱの各古墳と順列古墳Ⅴ、順列古墳Ⅵ、順列古墳Ⅶの各先頭古墳との関係を考えるため順列古墳Ⅶの先頭古墳30号墳、順列古墳Ⅵの先頭古墳26号墳、順列古墳Ⅴの先頭古墳21号墳の各々のデータをグラフで表したものである。

第6節 並ぶ古墳のまとめ

前節の直列古墳、順列古墳の内容、および下記する補足事項を整理して、古墳の築造順などを第77図として作成した。

1 補足事項

(1) 順列古墳Ⅰ、Ⅲ、Ⅳについて

ア 順列古墳Ⅲ、Ⅳにおいては、ほぼ並行して順序よく古墳が並んでいる。主要な指標について、概ね北側の古墳より南側の古墳が小さくなっている。数値の逆転の事例があっても微差である。

イ 【第4節1-(4)】に記したように順列古墳Ⅰでは、9号墳、8号墳の2基の古墳を合わせて5基で構成される群を想定することもできる(G512)。同様に順列古墳Ⅲでは7号墳の南西墳裾に存在する6号墳、順列古墳Ⅳには15号墳の南西墳裾に存在する16号墳を考慮したい。

ウ 上記に記述した小型古墳を各々の順列古墳に加えると、各々3つの順列古墳が『順列古墳+1基』の形で表され、その結果、各々が5基で構成されることになる。

エ 直列古墳Ⅰの先頭に位置する1号墳から3号墳を経て、各順列古墳(この場合、順列古墳Ⅱも含めて)各々の古墳、合計17基の古墳の系統樹を描くことができる【第77図】。

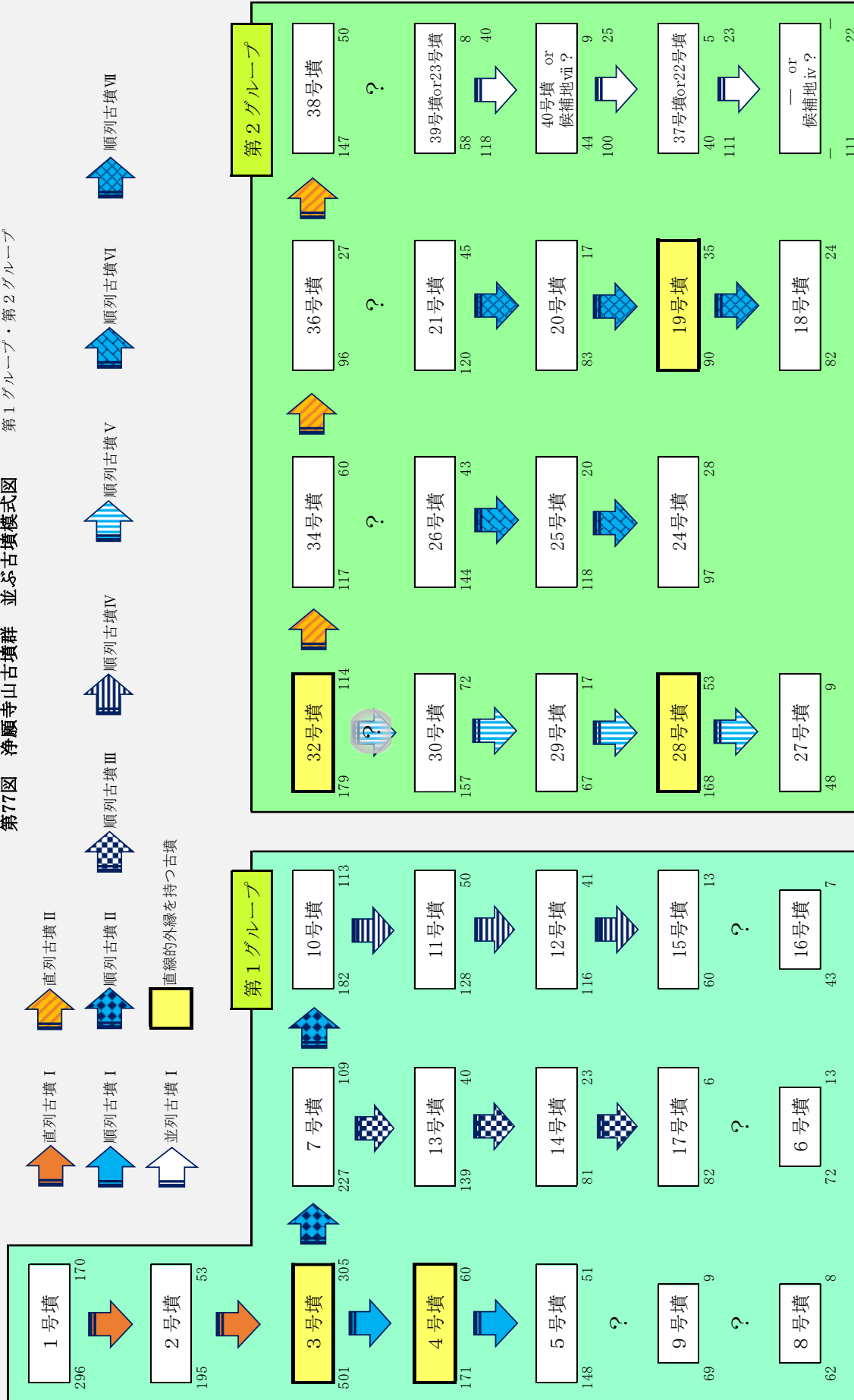
オ なお、この古墳の集まりが第1グループの古墳といえる。

(2) 順列古墳Ⅴ、Ⅵ、Ⅶおよび直列古墳ⅡについてⅠ

ア 順列古墳Ⅴ、順列古墳Ⅵ、順列古墳Ⅶの3つの順列古墳は、他の順列古墳と異なり、東の高所から西の高所に向かって並ぶ古墳の列である。

イ 直列古墳Ⅱの1基と順列古墳Ⅴ、Ⅶの基数4基を合わせて考えると、上記【(1)-イ、ウ】のように5基で構成されることになる。

第77図 浄願寺山古墳群 並ぶ古墳模式図 第1グループ・第2グループ



- 1 直列古墳IIの各古墳に続く、順列古墳は推定である。ただし、32号墳一順列古墳VII、34号墳一同VI、36号墳一同Vの順番に対比させて並べている。
- 2 直列古墳II 38号古墳に続く一群を参考古墳Iとするが、23号墳、(古墳) 候補地vi、22号墳、候補地ivの一群も候補であると考えている。なお、後者においては体積順で並べている。
- 3 各古墳左下側の数値は平面積、右下側の数値は体積を示す。上記に関わる古墳については上下二段で各々の数値を示す。小数点以下を四捨五入し、単位のm²、m³は省略する。
- 4 それぞれの順列古墳に付随すると考えることも可能である。この場合、順列古墳I、同III、同IV、同V、同VIIは5基で構成される。本資料はエクセルを使って作成したため、横に並ぶ古墳が幾つかみられる。また、同群を意味するものではない。?は関係が想定されることを意味する。

ウ 前記のとおり考えると次のとおり問題点が浮かび上がる。

- ① 直列古墳Ⅱの基数は4基であり、関係のある順列古墳はⅤ、Ⅵ、Ⅶの3群であり、数が一致しない。ただし3組のペアは考えられる。直列古墳Ⅱの4基のうち1基は対する順列古墳はないことになる。
- ② 直列古墳Ⅱに属する個々の古墳と、順列古墳との関係を想定した場合、どの古墳がどの順列古墳とペアになるのか、具体的な根拠はない。
- ③ 順列古墳Ⅵの組は5基でなく4基となる。

エ 【ウー①、②】についてⅠ

並ぶ古墳であることから直列古墳Ⅱの並びの順序（G513）と、順列古墳の順序を合致させてみた。この場合、38号墳に対応する順列古墳はない【キ】。

34号墳と順列古墳Ⅵ、36号墳と順列古墳Ⅴについては根拠を示すことはできない。

オ 【ウー①、②】についてⅡ

順列古墳Ⅶの始めの古墳、30号墳は32号墳に匹敵する古墳で最大の中型古墳である。32号墳と30号墳を筆頭とする順列古墳Ⅶを連続すると考えるのは妥当であると考えられる。

カ 【ウー①、②】についてⅢ

- ① 34号墳に対すると考える順列古墳Ⅵの先頭古墳 26号墳との平面積と体積の比較は次のとおりである。

34号墳：平面積 116.7 m²、体積 59.6 m³、

26号墳：平面積 144.0 m²、体積 43.3 m³

- ② 36号墳に対すると考える順列古墳Ⅴの先頭古墳 21号墳との平面積と体積の比較は次のとおりである。

36号墳：平面積 95.8 m²、体積 27.3 m³、

21号墳：平面積 120.4 m²、体積 44.6 m³

【①】の場合、体積は34号墳、36号墳と並んでいるが、平面積は逆転している。【②】の場合、平面積、体積ともに逆転している。

キ 【ウー①、②】についてⅢ

38号墳に対応する順列古墳はない。しかし、同古墳が属する並列古墳Ⅰをあてることも考えられる。

この場合、典型的な小型古墳である39号墳、40号墳、37号墳の3基と中型古墳である38号墳には大きな時期差はないものと考えられ、墳丘の急速な小規模化が進んだものと考えられる。

一方、38号墳に続いて順列古墳Ⅴの先頭に位置する21号墳の北から北東に所在する22号墳、23号墳をあてることも考えられる。これに古墳の可能性が極めて高い候補地vii【第14章 第1節7】を加えると3基になる。さらに候補地iv

【第14章 第1節4】を加えることも考えられる。

(3) 順列古墳Ⅴ、Ⅵ、Ⅶおよび直列古墳Ⅱについて

ア 順列古墳Ⅴにおいては3番目に位置する19号墳が、順列古墳Ⅶにおいては同じく3番目の28号墳が、その前に位置する古墳より主要な指標である平面積、体積の値より大きくなっている。

その理由として、当該古墳の2基が直線的外縁を持つ古墳の1基であるためと考えられる。また、直列古墳Ⅱの先頭古墳である32号墳も直線的外縁を持つ古墳である。【第11章】に詳述。

以上、【(2)ーア～カ】に記したように直列古墳Ⅱの各古墳と各順列古墳との関係について検討を加えた。しかし、いずれも決定的な根拠をあげることができていない。あくまでも仮説であることを申し添えておきたい。

第7節 グループ化

本古墳群に属する古墳について、【第3節、第4節、第5節】記述の直列古墳、順列古墳などをもとにグループ分けを行った。【第2章 第6節】の記述の理由付けが本節である。

1 第1グループの古墳と築造の系譜

1号墳から始まる2号墳、3号墳の直列古墳Ⅰは本古墳群の北辺を形成する古墳の列である。

直列古墳Ⅰに続いて並ぶ順列古墳Ⅱに属する3号墳、7号墳、10号墳の3基から順列古墳Ⅰ（3号墳、4号墳、5号墳）、順列古墳Ⅲ（7号墳、13号墳、14号墳、17号墳）、順列古墳Ⅳ（10号墳、11号墳、12号墳、15号墳）の各古墳がそれぞれ続く。このように合計13基の古墳は系統的につながっている。極めて強い関係を認めることができる。

さらに小型古墳である、8号墳、9号墳（ともに3号墳の東溝縁に立地する／順列古墳Ⅰの5号墳に続く古墳の可能性を持つ）、順列古墳Ⅲの13号墳の墳裾に立地する6号墳、順列古墳Ⅳの15号墳の墳裾に所在する16号墳（15号墳墳裾に立地する）の4基の古墳も括弧内の根拠により、上記の13基と関連がうかがえる。

以上、合計17基の古墳をもって、第1グループの古墳とした。

2 第2グループの古墳

直列古墳Ⅱの4基（32号墳、34号墳、36号墳、38号墳）が南辺に順次出現する。引き続き、順列古墳Ⅶに属する30号墳、29号墳、28号墳、27号墳の4基が、順列古墳Ⅵの26号墳、25号墳、24号墳の3基が、順列古墳Ⅴである21号墳、20号墳、19号墳、18号墳の4基、並列古墳Ⅰに属する40号墳、39号墳、37号墳の3基の計18基が記載の順序に従って築造されていると考えている。

直列古墳Ⅱの4基と順列古墳Ⅶ、順列古墳Ⅵ、順列古墳Ⅴ、並列古墳Ⅰと【第77

【図】のとおり対比させ、順序を推定している。

これら 18 基の古墳を、第 1 グループの 17 基の古墳に対応する古墳と考えることができる。

その 18 基の古墳に 21 号墳に隣接する 22 号墳、23 号墳と、32 号墳および 34 号墳に近い位置に所在する 31 号墳、35 号墳を加えた計 4 基を、地理的条件を加味し同一のグループと考えた。

上記の 4 基に 18 基を加算した第 2 グループとしている。合計、22 基である。

第 1 グループとの大きな違いは、6 号墳、8 号墳、9 号墳、16 号墳のような付属する小規模古墳がみられないことである。

3 第 3 グループの古墳

第 1 グループ、第 2 グループの古墳（33 号墳も加え）は、頂上から南に向かってのびる稜線上のほぼ西側に位置する。それ以外、稜線上の東に占地する古墳を第 3 グループの古墳とする。

なお、並列古墳Ⅱの 1 基 40 号墳は稜線上の東側に位置する。本来は第 3 グループの古墳とするべきであるが、並列古墳Ⅰに属するため第 2 グループの古墳とする。

以上から第 3 グループの古墳は 41 号墳から 50 号墳までの 10 基を数えることになる。参考Ⅰの 41 号墳、42 号墳、43 号墳もこのグループに含まれる古墳である。

第 3 グループの古墳は最小の区画Ⅱ、次最小の中型古墳である 43 号墳と区画Ⅲに属する 9 基の小型古墳で構成される。

第 1 グループ、第 2 グループにおいて、各古墳の墳丘が区画Ⅰから区画Ⅲ、大型古墳から小型古墳と様々な古墳が含まれている。

対して、区画Ⅲ、かつ、小型古墳がほぼすべてを占める第 3 グループの古墳の多くは、新しい時期に築造された古墳と考えられる。

4 所属しない古墳

33 号墳を単独で所属しない古墳とした。

33 号墳に最も近い古墳は 32 号墳である。その 2 基の距離（墳裾間）は約 24m である。本古墳群において、それに次ぐ距離（墳裾間）は、1 号墳と 2 号墳の約 9 m である。

本古墳群は密集が特徴の一つと考えられる。両者は隔絶性が大きいと考え、第 2 グループとは別の扱いとした。

4 各グループに属する古墳の整理

(1) 第 1 グループ

ア 1 号墳から 17 号墳までの 17 基の古墳が属する。

イ 古墳群の北西部分を占める。【第 2 章 第 1 節 第 5 図】に記載されている緩斜面で「北を弦とする弧状」の北西部にあたるエリア。

ウ 古墳は標高 223.1m から 228.1m の間に立地する。

エ 1号墳、3号墳などの大型古墳や群中唯一横穴式石室が完存する10号墳等、群中では特色のある古墳がみられる。

オ 小型古墳が比較的多い。これらは他の古墳に張り付くように存在する。

(2) 第2グループ

ア 18号墳から40号墳(33号墳は除く)までの22基の古墳が属する。

イ 本古墳群が分布する地域の中央部を占める。【第2章 第1節 第5図】に記載されている緩斜面で「北を弦とする弧状」の中央部から南部にあたるエリア。

ウ 古墳は標高223.9mから228.1mの間に立地する。

エ グループ最大規模の32号墳が南端に位置する。

オ 採土地と推定される浄願寺山A(後述)に密接するなど、古墳密集度が高い部分がみられる。

カ 長楕円形の墳丘の古墳や不定形の墳丘を持つ古墳が含まれる。

(3) 第3グループ

ア 古墳群の北東部分を占める。【第2章 第1節 第5図】に記載されている緩斜面で「北を弦とする弧状」の北東部にあたるエリア。

イ 古墳は標高231.7mから230.0mの間に立地する。41号墳を除き、古墳は群中のどの古墳よりも高い場所に占地する。

ウ 最も小さな中型古墳以外の9基は小型古墳である。

エ 第2グループ、第1グループと比べ基数が少ないため、やや疎な分布をなす。

第14章 古墳群の周辺について

本古墳群に属する古墳の周囲には、古墳の可能性のある地点や、古墳の用材である土石を掘削、採土した跡地と考えられる地点がある。これらを整理しておきたい。

第1節 古墳の可能性が

ある地点

=古墳の候補地点【第78図】

本古墳群は50基の古墳で構成されるが、他にも古墳の可能性のある地点がみられる。これからあげる候補地点のなかには本古墳群に属する小型古墳とよく似た規模、あるいは形状を持つものも少なくない。

ただし、本古墳群の周辺においては開墾地が広がっている関係から、開墾の結果生じた地形を取り上げていることもあるであろう。

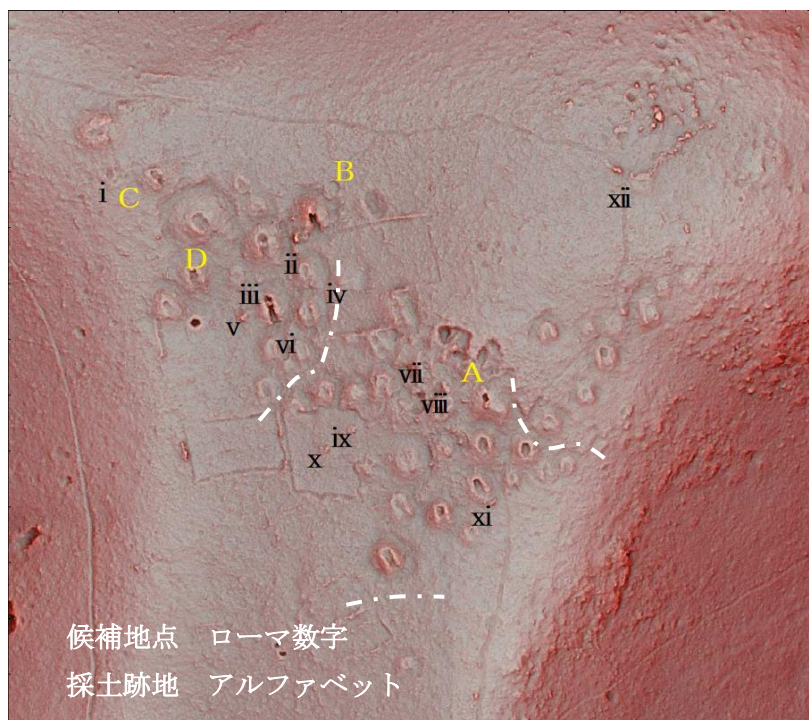
本稿では上記も踏まえ、古墳の可能性のある地点をできるだけ幅広く候補地点としてとりあげた。候補地にはi～xiiのローマ数字（小文字）を充てている。

1 候補地 i 1号墳南、2号墳西の地点【第79図】

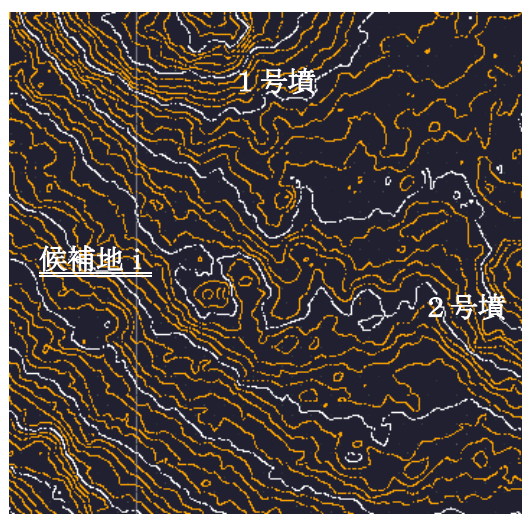
周囲は開墾地である。2号墳から西に向かっのびる開墾地の境界（境界を画するのは、石を積み上げた構造物と思われる）と、1号墳からほぼ南にのびる境界が交点西側に3.84m×4.63m、高さ0.3m程度の高まりが確認できる。

詳しくいえば、南側、北東側、北西側に画されたうちの北西側開墾地の南東隅に位置する。そのためか複雑な状況が赤色立体図からは読み取れる。

なお、本古墳群中の最小径48号墳の短径6.1mよりも小さい値なので、古墳でない可能



第78図 浄願寺山古墳群 古墳候補地ほか 分布図



第79図 浄願寺山古墳群 候補地 i

性もある。

- 2 候補地 ii ____ 10 号墳南、11 号墳北／溝北側の地点【第 80 図】

10 号墳と 11 号墳の間にある小さな高まり。11 号墳の北溝に接して位置している。3.63m×3.64m、高さ 0.4m 程度の高まりが確認できる。

候補地 i と同様、古墳でない可能性も高い。

なお、北側 10 号墳南西裾

の高まり（第 80 図中※で示した地点）は、香川大学教育学部によって実施された 10 号墳の横穴式石室の清掃調査の結果生じた廃土置場であろう。

- 3 候補地 iii ____ 7 号墳南、13 号墳北／溝北側の地点、東に 6 号墳が所在【第 80 図】

7 号墳と 13 号墳の間にある小高い高まり。13 号墳の北溝に接して位置している。

2.98m×3.64m、高さ 0.4m 程度の高まりが確認できる。

候補地 i と同様、古墳でない可能性も高い。

- 4 候補地 iv ____ 11 号墳の東にやや離れて位置する地点【第 81 図】

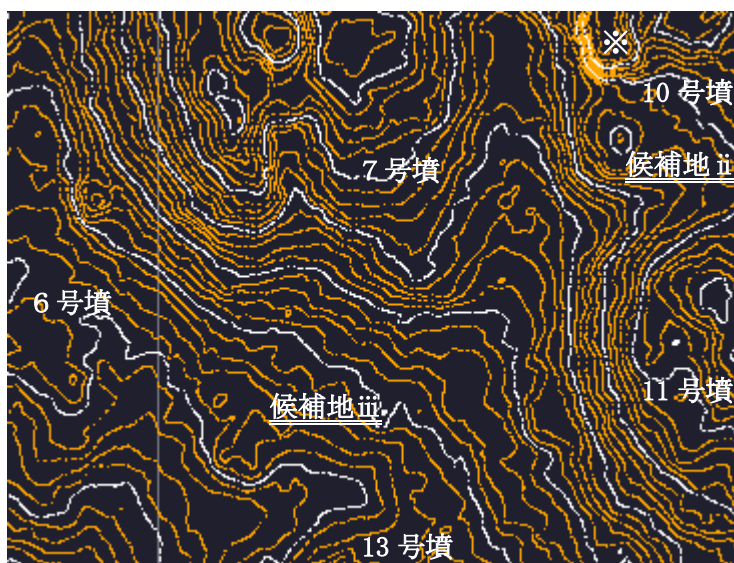
開墾地が広がる地点である。この地点で等高線が大きく西側にふくらむ。浄願寺山の山頂一帯では、本古墳群が所在する範囲を除き、等高線はおおむね平行に走る。それに異なる動きがみて取れるのは、本地点北東にある水溜場跡だけである。

候補地 i、ii、iii と比べ古墳である可能性は高いのではないか。古墳とすれば 9.73m×12.74m、高さ 0.90m 程度の墳丘を持つと考えられる。

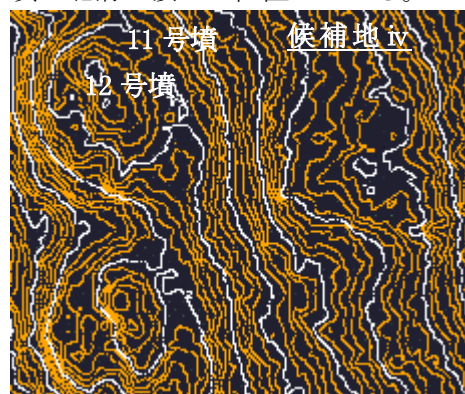
- 5 候補地 v ____ 13 号墳西側墳裾の地点【第 82 図】

13 号墳の墳裾にみられる高まりで、平面が長楕円形をしている。3.60m×5.65m、高さ 0.70m 程度の高まりが確認できる。

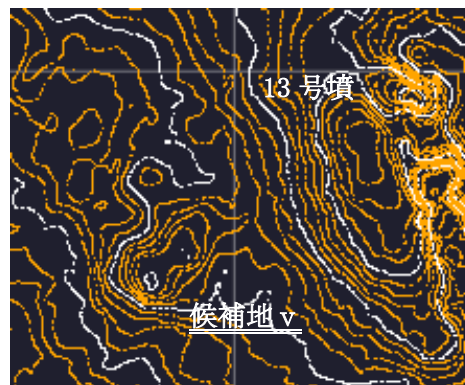
開墾時に形成された集石の可能性もある。



第 80 図 浄願寺山古墳群 候補地 ii、iii



第 81 図 浄願寺山古墳群 候補地 iv



第 82 図 浄願寺山古墳群 候補地 v

6 候補地vi____12号墳南西の地点【第83図】

12号墳の南西・墳裾にややテラス状にみられる地形がある。4.98m×5.28m、高さ0.6m程度の規模と確認できる。

15号墳南西裾に位置する16号墳と同様な立地である。異なるのは北東—南西の幅が16号墳に比べて狭い点である。

7 候補地vii____21号墳北東、22号墳南東の地点【第84図】

採土跡である浄願寺山A【第2節1】の地点の北西に位置する。もともとの採土跡に古墳として築かれた可能性がある。

範囲内に横穴式石室の崩壊跡とみられる地形が赤色立体図から確認できる(a)。また、北側において南西から北東に向かって弧状の登る溝が存在する(b)。溝は横穴式石室跡と考えられる南側に弦を持つことから、当該地点は古墳であることが可能である。

なお、古墳として計測した場合の数値は下記のとおりである。

ア 立地標高____231.1m

(41号墳に次いで12番目)

イ 長 径____12.8m

(12号墳に次いで20番目)

ウ 短 径____9.7m

(47号墳に次いで26番目／

ただし同数値の古墳が1基有)

エ 高 さ____1.8m

(41号墳に次いで9番目／

ただし同数値の古墳が8基有)

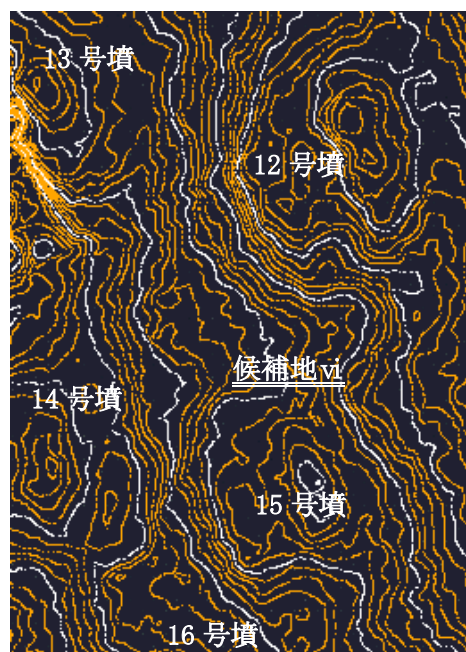
オ 平 面 積____99.5 m²

(43号墳に次いで23番目

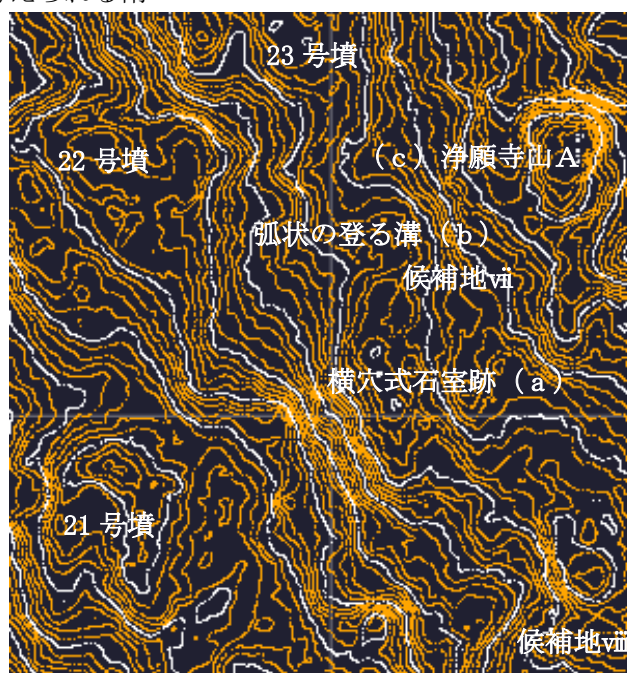
区画Ⅲ—上、最も大きな区画Ⅲ—上の古墳となる)

カ 体 積____80.7 m³

(25号墳に次いで17番目／中型古墳、最も小さな中型古墳になる)



第83図 浄願寺山古墳群 候補地点vi



第84図 浄願寺山古墳群 候補地vii

- 8 候補地viii 候補地viiの南東側に
みられる高まり【第84図】

採土跡地・浄願寺山A内の掘り残し
とも考えられる。

2.91m×5.32m、高さ0.6m程度の
高まりである。

なお、24号墳の南にも径2.0mあ
まりの小さな高まりがあるが、古墳と考
えるにはあまりにも小規模なので省
略した。

- 9 候補地ix 18号墳、19号墳、27
号墳などに囲まれた開墾地における
東側の高まり【第85図】

上記開墾地内にみられる高まりの
うちの一つ。開墾に伴う集石の可能性
もある。

3.71m×4.40m、高さ0.4m程度の
高まりである。

- 10 候補地x 18号墳、19号墳、27
号墳などに囲まれた開墾地における
西側の高まり【第85図】

上記開墾地内にみられる高まりの
うちの一つ。開墾に伴う集石の可能性
もある。

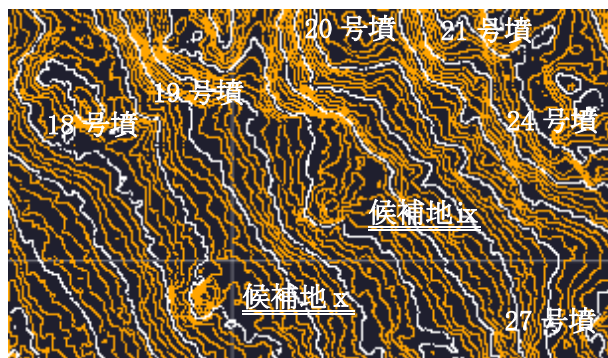
3.09m×4.44m、高さ0.6m程度の
高まりである。

- 11 候補地xi 36号墳の南の地点、
36号墳の南裾近くに存在する高まり
【第86図】

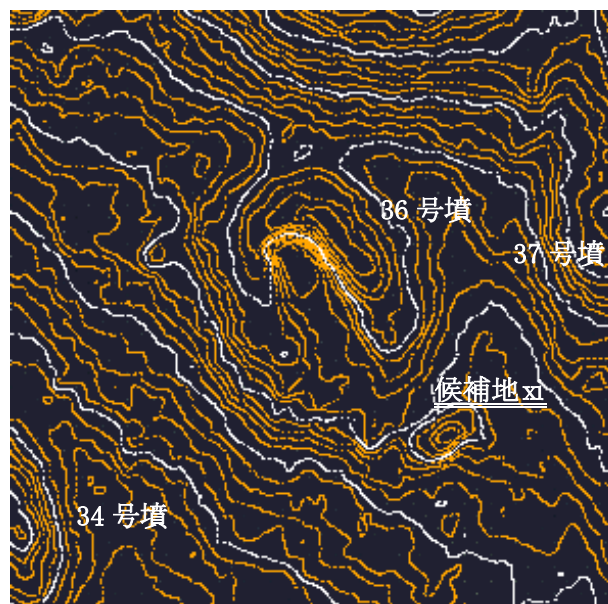
1.86m×3.69m、0.50mを測る楕円
形の高まり。

- 12 候補地xii 浄願寺山山頂の円形
状の土壇？【第87図】

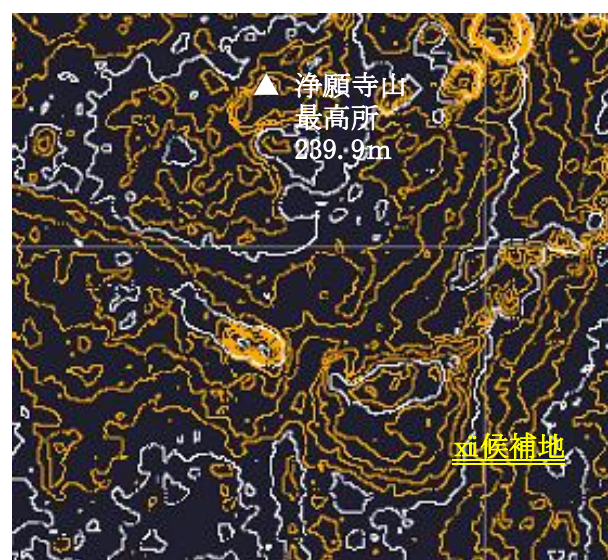
山頂部にみられる円形の土壇（墳
丘）である。立地する標高は239.0m、
9.0m×10.2m、高さは0.6mを測る。



第85図 浄願寺山古墳群 候補地ix、x



第86図 浄願寺山古墳群 候補地点xi



第87図 浄願寺山古墳群 候補地xii

古墳の可能性はあるが、位置的に最も近い 50 号墳と 20m 余り離れている。群集墳近傍の古墳とすれば、孤立していることになる。

また、山頂周辺では候補地 xii 以外にも盛り上がった場所が多い。特に登山道縁に連続して存在する盛り上がりは明らかに人為的なものである。度重なる登山道の使用が原因かもわからない。

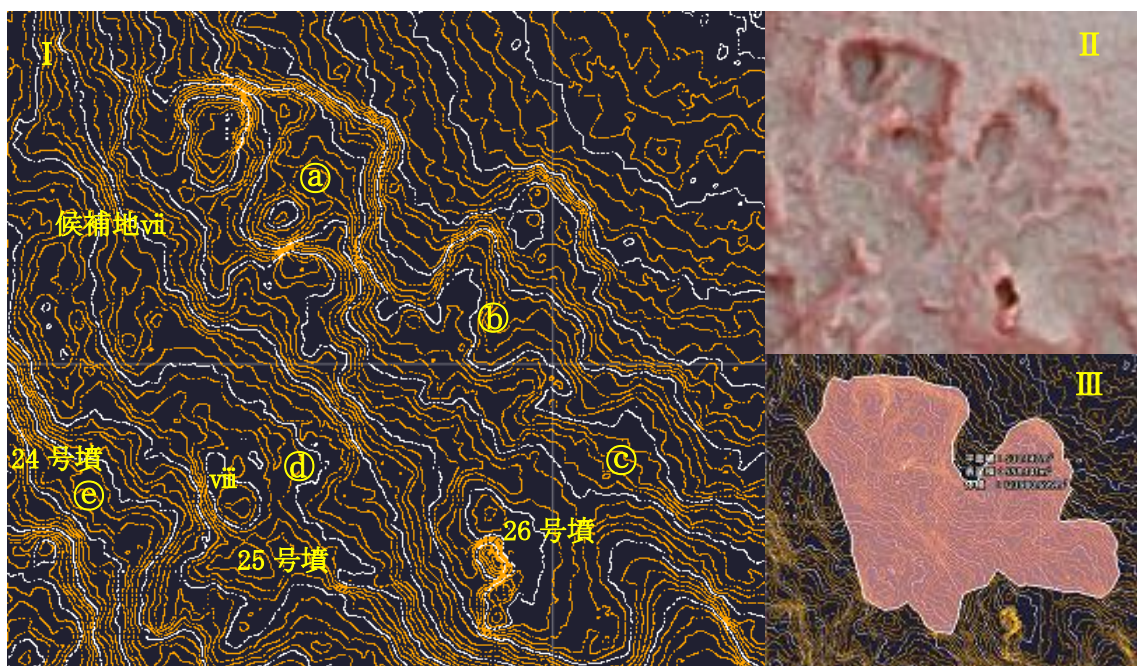
古墳か、そうでないか現段階では結論を保留としたい。

第 2 節 採土跡地について

本古墳群では古墳周囲の溝からだけでなく、周辺の特定の地点からも採土が行われた可能性がある。以下に採土跡地の可能性のある数か所について説明を加えたい。

採土跡地と考えられる場所の個別名称については、古墳と区別するため、アルファベットの大きい文字を採用している。

1 浄願寺山 A (採土跡地 A) 【第 88 図】



第 88 図 浄願寺山 A 【 I. 浄願寺山 A 等高線図、 II. 同赤色立体図、 III. 同求面積図】

本稿ではこれまでも浄願寺山 A として触れてきた。

(1) 第 2 グループの古墳が築造されている区域の東側、具体的には 23 号墳の南東、22 号墳、21 号墳、24 号墳、25 号墳の東側、26 号墳の北東にコンタラインが大きく乱れている場所がある。この一帯が採土跡地と考えられる区域で、かなり広い面積になる。

この区域の東から北には、山頂から南東に向かって広がる緩斜面のエリアとなっており、東に 20m 程度で第 3 グループの 45 号墳が所在する。

(2) 上記【第 88 図】で示した採土地の範囲は、北西－南東約 36.7m、北東－南西約

26.2m、平面積は約 530.1 m²（表面積約 558.1 m²）を測る。

- (3) 採土地域は二段にわけて考えることができる。二段目が最上部で東側にあたる。さらに東が自然の山肌で、反対の西側が一段目である。
- (4) 採土地の範囲と考えられる区域には古墳が築造されている可能性が高い。上記の候補地Ⅶをはじめ25号墳、26号墳の立地場所が、これに該当すると考えている。これらの区域については、採土地であることを証明することは難しいので、浄願寺山Aの範囲からは除いた。
- (5) 浄願寺山Aの二段目、最上段は採土が行われた中心的な場所である。おそらくもっとも新しく採土工事が行われたと思われる。

この区域はいくつかの掘削跡の集合体に分割できる。まず、最も北側に位置するのが㉔の区域で、平面がほぼ長方形に近い幾つもの掘削跡の集合体である。

その南東が㉕の区域、さらに南東が㉖の区域で、いずれも掘削跡の集合体である。全体では不定形ではあるものの、数枚の花弁のようにもみえる。この㉔、㉕、㉖の3区域を合わせて上段とするが、掘削跡の数、掘削跡の深さなどは㉔より㉖に向かって、減じ、掘削も浅くなっている。

この掘削跡地の変化は、原因となる築造する古墳の規模の変化に関連している可能性も考慮する必要がある。なお、㉖区域の南に位置するのが26号墳である。

- (6) 一段目の最下段が㉗の周辺である。候補地点ⅦとⅧの地点に25号墳の東側、26号墳の北側も加えてもよいかもしれない。比較的平坦な面で上段とは1.0m前後の段差がみられる。

候補地Ⅶ、Ⅷや25号墳、26号墳の存在などが重なり、あるいは縁辺に位置するなどやや複雑な地形を呈する。

- (7) この最下段より、さらに低い場所、具体的に言えば24号墳の東側に目立つ採土跡(㉘と表示する)がある。24号墳築造にかかるものか、そうではないのか、当然不明である。
- (8) このような複雑な地形を呈する浄願寺山Aを、古墳築造にかかわる掘削跡とする理由を以下にあげたい。

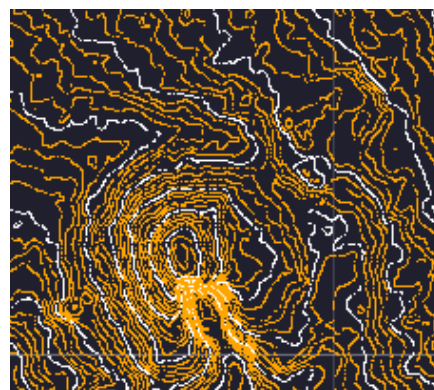
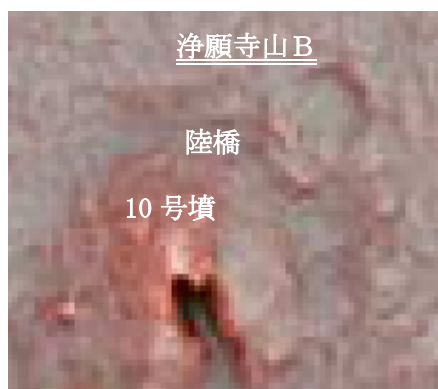
ア 地形変更が古墳群の所在する方向から行われている。各々の単位が北東である山頂側には向かっていない。

イ 掘削跡㉘は24号墳と密接な関係にあることがいえる。そして㉗の縁辺に築造された25号墳、26号墳も同様である。古墳の可能性が高い候補地Ⅶは㉗が形成された後、域内に築造されたようにみえる。25号墳、26号墳も同じく域内に築造されたのかもしれない。

従って、これら3基の古墳(候補地Ⅶも含めて)が㉗において掘削が終わった後、築造されたものと考えておきたい。その後、採土は㉔、㉕、㉖の場所に移ったのではないか。

ウ 3号墳溝にみられる直線的外縁ほどではないが、㉔、㉕などで直線的な掘削が認められる。

エ 直線的な掘削は、次に述べる小規模な掘削跡である浄願寺山B、浄願寺山



第 89 図 浄願寺山B

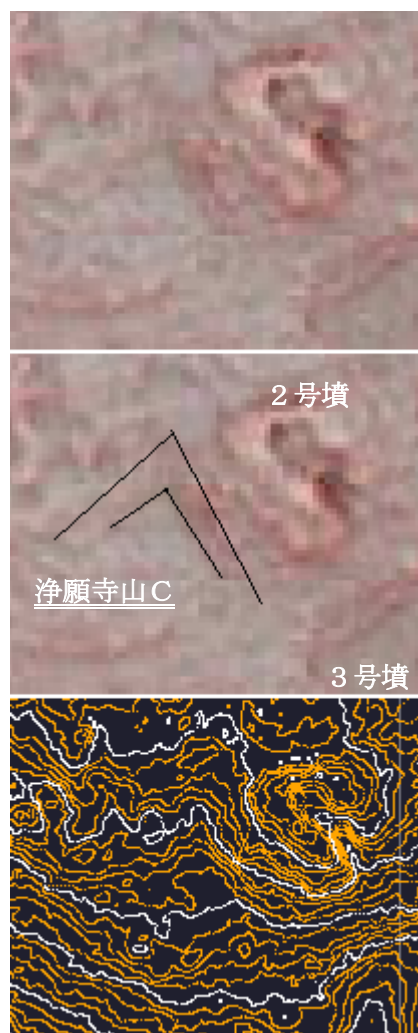
Cにもみられる。

2 浄願寺山B（採土跡地B）【第 89 図】

- (1) 10号墳の北東に位置する平面が台形をした掘削跡である。そこは10号墳の溝内・北東に造られた陸橋によって同墳の墳丘につながる。
- (2) 赤色立体図、等高線図のいずれからでも当該場所が掘削の跡と考えるのが妥当であり、掘削された土を10号墳に運び込むルートも存在していたかもしれない。
- (3) 同古墳の東側は7号墳の溝が存在しており、10号墳の墳丘を築くため土石に不足が生じ、それを補った結果ではないか。
- (4) 上記の推測から10号墳封土を調達するための掘削跡と考えている。

3 浄願寺山C（採土跡地C）【第 90 図】

- (1) 2号墳の西側に位置する浅い掘削跡である。赤色立体図によって確認でき、等高線図でも等高線の僅かな屈曲を追認できる。隣接する2号墳築造のためのものか。
- (2) 中央の図には線を挿入している2つの線の間が、掘削後の崖になる。



第 90 図 浄願寺山C

まとめ

本稿のまとめとして浄願寺山古墳群築造の変遷の概要を記述したい。そのためには次の条件を前提としている。

- 1 並ぶ古墳は、先頭に位置する古墳ほど築造年代は古く、最後に位置する古墳に向かって築造年代は新しくなる。(時間的流れ)
 - 2 同じ並ぶ古墳において、重要な指標である平面積と体積は、上記の時間的流れにあわせ、概ね大規模から小規模な数値に変遷する。
 - 3 上記【2】について次の例外が認められる。
 - (1) 直線的な外縁を持つ古墳では、前位置する古墳より両値とも大きな数値を持つ古墳が存在する。どちらか一方の場合もあり得る。
 - (2) 上記以外の古墳においても例外が数例認められる。前に位置する古墳より両値とも大きな数値を持つ古墳が存在する。どちらか一方の場合もあり得る。
- 【第7章 第1節1-(12)】、【第13章 第2節 第4節】などを参照。

4 本古墳群形成の展開

(1) 形成の始まり

古墳時代の後期、浄願寺山の山頂から西に向ってのびる尾根の先端において1号墳の築造が開始されたのが、本古墳群の形成の嚆矢である【第91図1】。

北西の尾根上に立地すること、溝を持たないこと、西方向に開口した横穴式石室を持つこと(本古墳群唯一の事例)など、他の古墳とは一線を画しており、本古墳群の最初の古墳と考えるのにふさわしい【第10章 第2節1、第13章 第3節1-(2)】。平面積や体積は3号墳に次ぐ第2位の古墳であり、規模の面でも最初の古墳として充分である。

続いて、1号墳の南東に立地するのが2号墳である【第91図2】。平面積は第4位であるが体積は第9位と極めて小さな数値である。墳丘北側では開墾により大きく変貌している可能性が高い。なお、2号墳は本古墳群で初めて溝を持つ古墳である【第10章 第1節5】。

(2) 3号墳の登場

2号墳に続いて出現するのが3号墳である【第91図3】。1号墳、2号墳、3号墳は直線的に並び、その距離も等しい(直列古墳I【第13章 第3節1】)。従って、3基は強い関係のもと計画的に築造されたと想定できる。3号墳は1号墳築造時から計画されていた可能性を考慮しておきたい。

3号墳は本古墳群中第1の規模を誇る古墳である。平面積、体積ともに次位の規模の1号墳と比較すると前者で1.69倍、後方で1.79倍の数値を示す。1基だけで本古墳群全体積の15.3%を占める(G426など)。このことから3号墳に投下された築造に要した人員は、圧倒的であったと考えてよい。

なお、3号墳は直線的な外縁【第11章 第1節1】を持つ古墳であり、その規模は2号墳を凌駕しており上記【3-(1)】に該当する。

直線的な外縁と名付けた構造を持つ古墳としても3号墳は重要である。本古墳群最大の円丘とその周りに掘られた本古墳群屈指の溝を持つ。さらにそれらを囲い込む六角形の外縁(外郭)が存在する。極めて幾何的な構造である。

ただし、墳丘自体が六角形の形状をとるのではない。あくまでも外縁が六角形である点が重要である。よく知られるところでは終末期古墳の奈良県明日香村マルコ山¹の墳丘は六角形である。しかし、3号墳のように外側の構造が六角形である古墳は、管見による限り知られていない。

次に注目しておきたいのが、六角形の一辺が1号墳と2号墳を経て3号墳に至る直線と平行な点である【第11章 第1節1-(10)】。おそらく意図したことであろう。いずれにせよ本古墳群の北西部における古墳築造にあたり、高度な測量技術が活用された可能性を指摘しておきたい。

(3) 7号墳、10号墳と4号墳

順列古墳Ⅱ【第13章 第4節2】を考えれば、3号墳の次に築造されたのが7号墳、そして10号墳である。平面積は3基の古墳の順に並ぶが、体積は10号墳が7号墳を凌駕している。その理由は横穴式石室が遺存しているためと推定できる【第12章 第2節3】。

順列古墳Ⅰ【第13章 第4節2】に属する4号墳と順列古墳Ⅱの7号墳、10号墳の2基との築造順序を考えてみたい。並列していないため前後関係を推定することは難しいが、4号墳、7号墳、10号墳の順、7号墳、4号墳、10号墳の順、7号墳、10号墳、4号墳の順の3通りが考えられる。

ここでは4号墳が直線的な外縁【第11章 第1節2】を持つ古墳の1基であることに注目し、3号墳、7号墳、4号墳、10号墳の築造順を想定したのが、【第91図4、5、6】である。²

また、10号墳の標高が1号墳それと同じ値であることにも注目しておきたい【第4章 第1節1-(8)】。

(4) 32号墳

直列古墳Ⅱ【第13章 第3節2】の最初の古墳である32号墳は、南端を限る(33号墳を除く)場所に位置する。その事実から北端・西端に位置する1号墳と似た性格を持つ。

本古墳群の南部で最初に出現したのが32号墳であって、以降、本古墳群の築造の範囲が広がるとともに、造墓活動が一段と活発化したと想定したい。

32号墳も3号墳と同じく直線的な外縁【第11章 第1節5】を持つ古墳である。同様な4号墳【第11章 第1節2】との関係を考える限り、32号墳の方が後出するものと考えられる。さらに7号墳、10号墳について、3基の古墳の陸橋の構造の変遷から7号墳、10号墳、32号墳の築造順が導き出される【第10章 第1節3】。

これらから【第91図7】に示したように、32号墳は10号墳に続いて出現したものと考えている。いずれにせよ第2グループにおける古墳築造の始まりと考えておきたい。

(5) 34号墳と36号墳

32号墳に続いて出現するのが直列古墳Ⅱの2番目の古墳である34号墳【第91図8】である。その次に36号墳が出現する【第91図9、第13章 第3節2】。

この34号墳と36号墳の間が画期になっている可能性がある。1号墳と10号墳の標高が228.1mで同じであることを述べた【3末尾】。そして【第91図8】の段階まで、1号墳をあわせた8基の古墳は標高228.1mを越えていない。なお、34号墳の標高は226.5mである。

¹ 公益財団法人 <http://asukabito.or.jp/spotDetail1.html>

² 3号墳、7号墳、4号墳、10号墳、そして続く32号墳の順は直線的な外縁を持つ古墳、持たない古墳、持つ古墳、持たない古墳、持つ古墳の順序となっている。案外、正しいのかもしれない。

36号墳に至って標高が228.6mと、本古墳群始まりの古墳である1号墳より高い位置に立地する古墳が出現した。36号墳の築造は1号墳という始祖の古墳が持つ縛りを、消し去る効力を持っていたと考えられないか。もちろん1号墳、10号墳の築造標高の一致が偶然の一致であるという考えもあり得る。

しかし、第1グループ17基の古墳は、全て1号墳、10号墳より低い標高に立地している。ある時期まで1号墳より高い位置に古墳が造られなかったのも事実である。この点に何かの意図を見出すことができないだろうか。

(6) その後の展開Ⅰ

本古墳群の北西部において、直列古墳Ⅰ【第13章 第3節1】、および順列古墳Ⅰ【第13章 第4節1】、Ⅱ【第13章 第4節2】の有力な古墳6基について、かつ、直列古墳Ⅱ【第13章 第3節2】の4基の合計10基を対象にして【第91図】を作成した。なお、同図の作成にあたり3次元だけでなく、時間的にも並ぶように工夫している。

その後、4号墳の後継墳である5号墳（順列古墳Ⅰ【第13章 第4節1】）、7号墳の後継墳である13号墳（順列古墳Ⅲ【第13章 第4節3】）、10号墳の後継墳である11号墳（順列古墳Ⅳ【第13章 第4節4】）、そして、21号墳を先頭とする順列古墳Ⅴ【第13章 第4節5】、26号墳をはじめとする順列古墳Ⅵ【第13章 第4節6】、30号墳を最初とする順列古墳Ⅶ【第13章 第4節7】のそれぞれが相前後して築造され、各々の後継墳の出現につながったと想定する。

(7) その後の展開Ⅱ

【第91図11】とよく似た図がある。【第12章 第3節 第36図】である。前者は古墳群形成の前半の様子を示しており、後者は古墳群形成後の様子を示している。

2つの図は北西と南西において該当する古墳が選ばれ、両者の間に比較的広い空間が存在している。選ばれた古墳は両者ともほぼ同じで、平面積や体積などの数値が大きな古墳が多く、一方、両者の間に生じた空間には大きな古墳はみられない。

前者の空間に築造された古墳の総体積を『10』とすれば、後者の地域に所在する古墳の総体積はほぼ『7』となる。さらに第3グループの古墳などを加えれば、その差はより小さくなる。前者では大きな古墳が短期間に連続的につくられたのに対し、後者では小さな古墳が短期間に何基か重複して築造されたのではないか。

(8) 直線的外縁を持つ古墳

19号墳と28号墳の存在に注目したい。ともに直線的外縁を持つ古墳で【第11章 第1節3、4】、所属する順列古墳の中で平面積と体積が前に並ぶ古墳よりも大きい。特別な古墳である。築造順位については、32号墳【第11章 第1節5】に次いで28号墳が、次に19号墳と想定している。

ところで直列古墳Ⅱ【第13章 第4節2】の先頭古墳である32号墳と、その後継の可能性がある順列古墳Ⅱに属する28号墳との間には30号墳、29号墳の2基の古墳が介在する。

4基の古墳が任意の期間(分かり易く言えば『世代』)を経た後、順次造られたとするならば、直線的外縁を引き継ぐ32号墳と28号墳の間は3世代分になる。各世代間の期間がかなり短かったにしても、直線的外縁を持つ古墳の地位の継承にはあまりに長すぎるのではないか。

ゆえに各古墳は、各々の規制を守りながらも短時間で築造されたと考えたい。そこには血縁

的關係というより、地縁的關係が重視されたとみておきたい。

(9) 第3グループ

第3グループの古墳については、ほとんど情報を持ち合わせていないし、それをみつけ出すこともできなかった。おそらく第1グループの者たちあるいは第2グループの関係者たちが、古墳の築造者であることは推測できる。

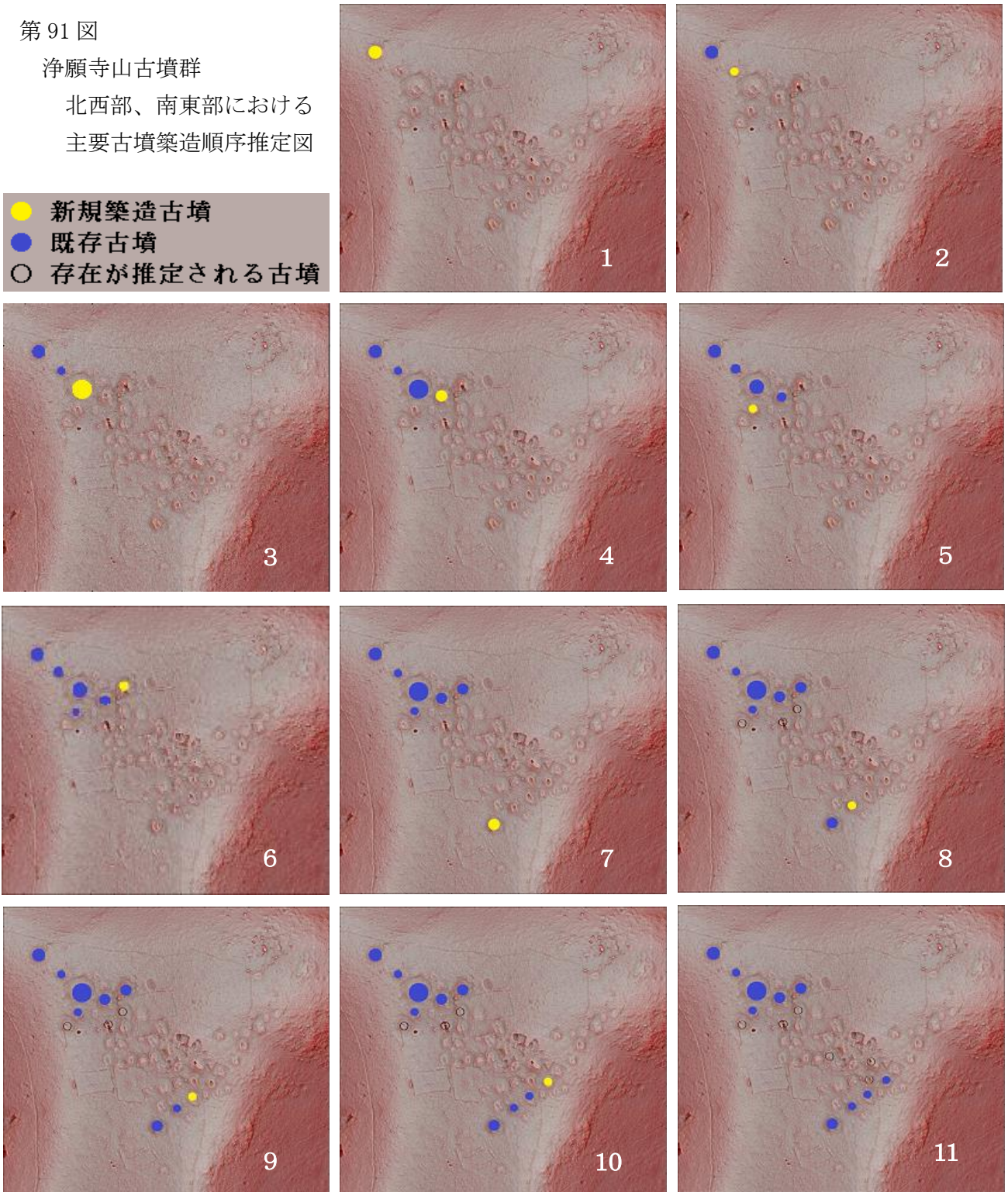
その理由は41号墳【第11章 第1節6】や45号墳【第11章 第1節7】という直線的な外縁を持つ古墳の存在にあると考えている。

第91図

浄願寺山古墳群

北西部、南東部における
主要古墳築造順序推定図

- 新規築造古墳
- 既存古墳
- 存在が推定される古墳



1. 1号墳築造

2. 2号墳築造

3. 3号墳築造

4. 7号墳築造

5. 4号墳築造

6. 10号墳築造

7. 32号墳築造

8. 34号墳築造

9. 36号墳築造

10. 38号墳築造

11. 直列古墳Ⅱ築造終了

あとがき

高松市役所において文化財業務を担当させていただいた筆者は、退職時、ご厚意により現在の高松短期大学秘書科に招いていただいた。第2の職場を与えていただいた関係者の皆様、同じ職場でご指導をいただいている同僚の皆様に厚くお礼を申し上げたい。

教員生活は新鮮でもあり、難しくもあった。現在9年目である。多くの学生との触れ合いは筆者自身を成長させていただいた。ありがたいと思っており、多くの卒業生、学生諸君にもありがとうと申し上げる。

来年度で10年の節目の年を迎える筆者は、授業などの業務にかまけて大学教員の職務の一つである研究はほとんど行ってこなかった。俗な言い方にはなるが、ここらで一発発起ということで本稿の執筆に至ったことになる。

さて高松市には史跡石清尾山古墳群がある。積石塚古墳、双方中円墳などの個性的な要素を持つ古墳群で、我が国屈指の古墳群であるのは間違いないであろう。同古墳群の史跡指定などの事務に従事させていただいた、私にとっては印象深い古墳である。

その石清尾山古墳群と同じ山塊に立地するのが、今回取り上げさせていただいた浄願寺山古墳群である。関係者が注目を集める香川県下最大の古墳群であるものの、山頂高く、雑木林に包まれているため謎の多い遺跡でもある。

この古墳群に注目したのは、高松市が作成した石清尾山塊の赤色立体図を拝見させていただいたことである。小さな古墳が群れかたまる様子に新鮮な驚きを感じた。私にとって大きな感動でもあった。

その後、大学からいただいている研究費を使用して、赤色立体図をもとに等高線図を作成することを思いついた。当初、猫塚古墳や石船塚古墳などの積石塚古墳の等高線図の作成が目的であった。成果の見通しがたたなかったためもあって、浄願寺山古墳群も上記の古墳の作成作業の付けたりとして対象に加えたに過ぎない。

事業完了直後、受託業者の方から浄願寺山古墳群の等高線図をいただいた時、どのように評価しているのかわからなかったが、その図が多く情報を持っていることは容易に理解できた。このときから自分に何ができるかを考えることにした。

まず考えたのは自分のできる範囲で、等高線図からデータを取り出すことである。各古墳の持つ要素を図面から得ることは、失敗とやり直しの連続であった。進んでは後退、何を目的としているのかわからない迷走もあったと思う。

およそ2年間の調査と、それに続く執筆であった。筆者にとっては初めての経験であった。迷い、行き詰まりなどには、筆者の一念発起を知るいつも妻恵子の励まし応援があった。その度に新しい道が開けてきたような気がした。ありがとうとお礼を言いたい。

本文は机上で得たデータを対象にした分析の書というべきかもしれない。そのためいろいろな面からデータを得るようにした。距離、面積、体積、角度などさまざまなデータ、さらに2つのデータを除したり、減したりした2次データも作成している。

それらの得たデータの分析は十分であったかという、甚だ心許ないと思っている。何故こうなると思ったことも少なくない。先がみえず途中で断念した分析もある。しかし、数値をもとに分析ができ、知りえたことは少なくないと思っている。

その是非については、実地による検証が必要となる。基本的には発掘調査の実施、また、あらたなデータの取得方法の登場であろう。そのときには、分析内容などが適正であるのかなどのご批判をいただきたいと思っている。

筆者の得たデータ、それをもとにした本稿が何処まで現実の浄願寺山古墳群に近いのか、それを知るのが楽しみである。

さて、本文では英文をお願いした同僚の井上浩巳准教授をはじめ、公開に至るまでご指導とご協力をいただいた関係教員、関係職員の皆様、また、ご教示、ご指導等をいただきました多くの文化財関係者にも同じく感謝の意を表したい。

最後に本年3月、急死した妻恵子の霊前に本稿を捧げる。ありがとう。やっと終わりました。

「石清尾山塊古墳群調査報告」記載の浄願寺山古墳群各古墳データ — I

G101-1

名称	所在地	所有形	地目	立地	墳丘				内部構造	開口主軸		石室全長	玄室			羨道		現 状	
					形態	長径	短径	高さ		方位	略方向		長さ	幅	高さ	幅	高さ		
浄願寺山1号墳	西春日町、飯田町	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	16.0m	11.0m	1.5m	不明	不明	不明	不明			不明		不明	墳丘中央部は深くえぐられ巨石が露出している。畑の境界の壁が墳丘を横断。	
浄願寺山2号墳	西春日町、飯田町	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	9.0m	6.0m	1.5m	横穴式石室 両袖式	N-42°-W 南東	560cm	405cm	135cm		75cm		不明	墳丘中央部は深くえぐられ石室基底部が露出している。	
浄願寺山3号墳	西春日町、飯田町	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	22.0m		2.0m	横穴式石室	N-42°-W 南東	推定 800cm 以上	400cm	228cm		不明		不明	墳丘中央部は削られ石室基底部は露出、羨道先端は破壊されている。	
浄願寺山4号墳	西春日町、飯田町	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	10.0m		1.5m	横穴式石室 両袖式	N-18°-W 南東	655cm		235cm		140cm		不明	墳丘中央部は削られ石室基底部は露出、羨道先端は破壊されている。	
浄願寺山5号墳	西春日町、飯田町	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	9.0m	6.0m	1.5m	横穴式石室	N-36°-W 南東	推定 600cm 以上		150cm		不明		不明	墳丘中央部は削られ石室基底部は露出、羨道先端は破壊されている。	
浄願寺山6号墳	飯田町	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	7.0m		0.5m	不明	不明	不明	不明			不明		不明	墳丘は削平されている。	
浄願寺山7号墳	飯田町	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	13.0m	10.0m	1.5m	横穴式石室	推定 N-12°-W	不明	不明			不明		不明	墳丘は削平され、石室の用材が露出している。最下部は残存しているらしい。	
浄願寺山8号墳	飯田町	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	10.0m	8.0m	1.0m	不明	不明	不明	不明			不明		不明	墳丘中央部に大きな盗掘堀あり。	
浄願寺山9号墳	飯田町	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	8.0m	7.0m	1.2m	横穴式石室	推定 N-20°-W	不明	不明			不明		不明	墳丘中央部に盗掘堀あり。石室の用材が若干露出。	
浄願寺山10号墳	飯田町	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳空堀	11.0m	8.0m	2.7m	横穴式石室	N-16°-W 南	740cm	355cm	160cm	160cm	100cm	110cm	不明	墳丘の周囲は若干削られ羨道の先端部は破壊されている。本古墳群中保存度は最も高い。	
浄願寺山11号墳	飯田町	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	12.0m	8.0m	1.5m	横穴式石室 片袖式	推定 N-20°-W	700cm	不明			不明		不明	墳丘中央部に石室の用材が散乱している。	
浄願寺山12号墳	飯田町	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	10.0m	8.0m	1.5m	横穴式石室	推定 N-28°-W	推定 600cm 以上	不明			不明		不明	墳丘中央部に盗掘堀あり。	

「石清尾山塊古墳群調査報告」記載の浄願寺山古墳群各古墳データ ーⅡ

G101-2

名称	所在地	所有形	地目	立地	墳丘				内部構造	開口主軸		石室全長	玄室			羨道		現 状	
					形態	長径	短径	高さ		方位	略方向		長さ	幅	高さ	幅	高さ		
浄願寺山13号墳	飯田町	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	9.0m		1.5m	横穴式石室	推定 N-20°-W		推定 750cm 以上	不明			不明		不明	墳丘中央部に石室の用材が露出、基底部は残存。
浄願寺山14号墳	飯田町	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	8.0m	7.0m	1.5m	横穴式石室	推定 N-10°-W		推定 600cm 以上	不明			不明		不明	墳丘中央部に盗掘堀あり。
浄願寺山15号墳	飯田町	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	8.0m	6.0m	1.0m	横穴式石室	推定 N-22°-W		推定 650cm 以上	不明			不明		不明	墳丘中央部に盗掘堀あり。石室の用材が露出。
浄願寺山16号墳	飯田町	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	7.0m		0.5m	不明	不明		不明	不明			不明		不明	わずかな盛りあがりのみせる
浄願寺山17号墳	飯田町	公有	山林	山頂の南面した傾斜地	円墳	9.0m		1.2m	横穴式石室	N-16°-W		推定 700cm 以上	不明			不明		不明	中央部に盗掘堀あり。
浄願寺山18号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	7.0m		1.5m	横穴式石室	N-18°-W 南		450cm	不明			不明		不明	盗掘を受け、石室の用材である安山岩の石塊が露出、羨道部先端破壊。
浄願寺山19号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	10.0m	9.0m	1.2m	横穴式石室	N-14°-W 南		650cm	不明			不明		不明	盗掘を受け、中央部に天井石らしきもの露出。
浄願寺山20号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	9.0m	7.0m	2.0m	不明	不明		不明	不明			不明		不明	比較的保存度良好。
浄願寺山21号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	10.0m	7.0m	1.5m	横穴式石室		南	750cm	不明			不明		不明	盗掘を受け、玄室部の天井石が露出。
浄願寺山22号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	9.0m	7.0m	1.5m	横穴式石室	推定 N-30°-W		推定 620cm 以上	不明			不明		不明	盗掘を受け、中央部に石室の用材が散乱。
浄願寺山23号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	8.0m		1.2m	横穴式石室	推定 N-16°-W		推定 727cm 以上	不明			不明		不明	盗掘を受け、中央部に石室の用材が散乱。
浄願寺山24号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	8.0m		1.2m	横穴式石室	不明		不明	不明			不明		不明	かつて畑であったため相当荒廃している。

「石清尾山塊古墳群調査報告」記載の浄願寺山古墳群各古墳データ Ⅲ

G101-3

名称	所在地	所有形	地目	立地	墳丘				内部構造	開口主軸		石室全長	玄室			羨道		現 状	
					形態	長径	短径	高さ		方位	略方向		長さ	幅	高さ	幅	高さ		
浄願寺山25号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	9.0m	7.0m	1.5m	横穴式石室	N-10°-E		580cm	不明			不明		不明	墳丘中央部に盗掘壕あり。 石室の用材散乱。
浄願寺山26号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	12.0m	9.0m	2.5m	横穴式石室	N-2°-W		810cm		140cm		不明		不明	巨大な安山岩の天井石が動かされ石室が露出している。
浄願寺山27号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	8.0m		1.0m	横穴式石室	N-24°-W		推定 560cm 以上	不明			不明		不明	かつて畑であったため墳丘は削平され石室基底部が露出。
浄願寺山28号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	10.0m		1.0m	横穴式石室	N-8°-W		不明	不明			不明		不明	かつて畑であったため墳丘は削平され石室基底部が露出。
浄願寺山29号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	9.0m	7.0m	1.2m	横穴式石室	不明		不明	不明			不明		不明	比較的保存度良好。
浄願寺山30号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	11.0m	9.0m	2.0m	横穴式石室	N-2°-W		700cm		155cm		不明		不明	盗掘を受け、石室露出。
浄願寺山31号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	9.0m	8.0m	1.2m	横穴式石室	N-26°-W		620cm	310cm	135cm		不明		不明	盗掘を受け、石室露出。
浄願寺山32号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	11.0m	9.0m	2.5m	横穴式石室 両袖式	N-36°-W		推定 810cm 以上	不明			不明		不明	盗掘を受け、石室露出。
浄願寺山33号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	7.0m	6.0m	1.0m	横穴式石室	不明		不明	不明			不明		不明	天井石らしきものの露出している。
浄願寺山34号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	10.0m	8.0m	2.0m	横穴式石室	N-0° 南		680cm		133cm		不明		不明	盗掘を受け、石室基底部露出。
浄願寺山35号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	7.0m		1.2m	横穴式石室	N-16°-W		580cm	不明			不明		不明	盗掘を受け、石室の用材散乱。
浄願寺山36号墳	飯田町	共有	山林	南面した傾斜地 (山頂部)	円墳	10.0m	8.0m	1.2m	横穴式石室	N-20°-W		780cm		155cm		不明		不明	盗掘を受け、石室露出、羨道部破壊。

「石清尾山塊古墳群調査報告」記載の浄願寺山古墳群各古墳データ —IV

G101-4

名称	所在地	所有形	地目	立地	墳丘				内部構造	開口主軸		石室全長	玄室			羨道		現 状	
					形態	長径	短径	高さ		方位	略方向		長さ	幅	高さ	幅	高さ		
浄願寺山37号墳	飯田町	共有	山林	山頂の南東に面する斜面	円墳	6.0m		1.0m	横穴式石室	N-16°-W		550cm	不明			不明		不明	盗掘を受け、石材散乱。
浄願寺山38号墳	西春日町南山浦	共有	山林	山頂の南東に面する斜面	円墳	10.0m	8.0m	1.5m	横穴式石室	N-0° 南		750cm	380cm	150cm		80cm		不明	盗掘を受け、石室露出、羨道部先端破壊。
浄願寺山39号墳	西春日町南山浦	共有	山林	山頂の南東に面する斜面	円墳	7.0m		1.2m	横穴式石室	N-20°-E		550cm	不明			不明		不明	盗掘を受け、石材散乱。
浄願寺山40号墳	西春日町南山浦	共有	山林	山頂の南東に面する斜面	円墳	9.0m	7.0m	1.2m	横穴式石室	N-0° 南		推定 660cm 以上	不明			不明		不明	
浄願寺山41号墳	西春日町南山浦	共有	山林	山頂の南東に面する斜面	円墳	8.0m		1.0m	横穴式石室	N-28°-W		不明	不明			不明		不明	中央部に盗掘壙あり。
浄願寺山42号墳	西春日町南山浦	共有	山林	山頂の南東に面する斜面	円墳	8.0m		1.2m	横穴式石室	N-10°-W		推定	不明			不明		不明	中央部に盗掘跡あり。
浄願寺山43号墳	西春日町南山浦	共有	山林	山頂の南東に面する斜面	円墳	10.0m	8.0m	1.2m	横穴式石室	N-12°-W		推定 700cm 以上	不明			不明		不明	中央部に盗掘跡あり、石材散乱。
浄願寺山44号墳	西春日町南山浦	共有	山林	山頂の南東に面する斜面	円墳	7.0m		1.2m	横穴式石室	N-5°-W		不明	不明			不明		不明	盗掘を受け、石材散乱。
浄願寺山45号墳	飯田町	共有	山林	山頂の南東に面する斜面	円墳	9.0m		1.0m	横穴式石室	N-8°-W		不明	不明			不明		不明	盗掘を受け、中央部に大きな穴あり。
浄願寺山46号墳	西春日町南山浦	共有	山林	山頂の南東に面する斜面	円墳	7.0m		1.2m	横穴式石室	N-4°-W		不明	不明			不明		不明	盗掘を受け、石材散乱。
浄願寺山47号墳	西春日町南山浦	共有	山林	山頂の南東に面する斜面	円墳	9.0m	8.0m	1.5m	横穴式石室	N-5°-W		不明	不明			不明		不明	盗掘を受け、石材散乱。
浄願寺山48号墳	西春日町南山浦	共有	山林	山頂の南東に面する斜面	円墳	8.0m	6.0m	1.2m	横穴式石室	N-14°-W		推定 500cm 以上	不明			不明		不明	盗掘を受け、天井石露出。

名称	所在地	所有形	地目	立地	墳丘				内部構造	開口主軸		石室全長	玄室			羨道		現 状	
					形態	長径	短径	高さ		方位	略方向		長さ	幅	高さ	幅	高さ		
浄願寺山49号墳	西春日町南山浦	共有	山林	南面した傾斜地（山頂部）	円墳	8.0m	6.0m	1.5m	横穴式石室	N-5°-W	不明	不明			不明		不明	盗掘を受け、石材散乱。	
浄願寺山50号墳	西春日町南山浦	共有	山林	南面した傾斜地（山頂部）	円墳			1.1m	不明	不明	不明	不明			不明		不明	石材散乱。	
浄願寺山51号墳	飯田町	公有	山林	山頂の台地	円墳	8.0m	6.0m	1.0m	横穴式石室	不明	不明	不明			不明		不明	安山岩の巨石が露出。地山の岩盤との識別が困難。	
浄願寺山52号墳	飯田町	公有	山林	山頂の台地	円墳	7.0m	5.0m	1.0m	横穴式石室	不明	不明	不明			不明		不明	安山岩の巨石が露出。地山の岩盤との識別が困難。	
浄願寺山53号墳	飯田町	公有	山林	南面した傾斜地	円墳	10.0m	9.0m	2.0m	横穴式石室	不明	不明	不明			不明		不明	中央部に盗掘墳あり、石塊が散乱。	
浄願寺山54号墳	飯田町	公有	山林	南面した傾斜地	円墳	8.5m	7.0m	1.5m	横穴式石室	不明	不明	不明			不明		不明	墳丘は削平され、原形をとどめていない。	
浄願寺山55号墳	西春日町南山浦	公有	山林	山頂南東部の突端	円墳	8.0m	8.0m	1.5m	不明	不明	不明	不明			不明		不明	墳丘上には石塊が散乱。	
浄願寺山56号墳	飯田町 西春日町南山浦	公有	山林	尾根上の鞍部	円墳	8.0m	6.0m	1.2m	不明	不明	不明	不明			不明		不明	墳丘は大半を失い、内部構造も失っている。尾根道が墳丘を縦断。	
浄願寺山57号墳	飯田町	公有	山林	尾根状小台地	円墳	8.0m		1.2m	不明	不明	不明	不明			不明		不明	中央部に若干のくぼみがあるが、比較的保存度良好。	

浄願寺山古墳群 1号墳～50号墳が本稿対象の古墳 51号墳～57号墳（網掛け部分）は非対象の古墳

浄願寺山古墳群 各古墳データ - I														G102-1		
古墳名称	立地標高	長径	短径	径比率	立地勾配	高さ	平面積	表面積	面積比率	両面積差	体積	体積/平面積	平面積区分	順位	体積区分	順位
浄願寺山1号墳	228.1m	19.62m	19.00m	96.8%	3.3度	2.20m	295.8㎡	305.8㎡	103.4%	10.0㎡	170.1㎡	0.58m	区画Ⅰ一下	2	大型古墳	2
浄願寺山2号墳	227.5m	15.60m	15.24m	97.7%	3.8度	1.50m	194.8㎡	201.2㎡	103.3%	6.4㎡	53.2㎡	0.27m	区画Ⅱ一上	4	中型古墳	9
浄願寺山3号墳	225.4m	25.77m	24.55m	95.3%	4.2度	2.60m	501.3㎡	514.4㎡	102.6%	13.1㎡	305.2㎡	0.61m	区画Ⅰ一上	1	大規模古墳	1
浄願寺山4号墳	224.3m	14.87m	14.72m	99.0%	2.3度	1.70m	171.2㎡	178.3㎡	104.2%	7.1㎡	60.1㎡	0.35m	区画Ⅱ一上	7	中型古墳	7
浄願寺山5号墳	223.1m	15.14m	12.33m	81.4%	2.8度	1.60m	147.6㎡	153.3㎡	103.9%	5.7㎡	51.4㎡	0.35m	区画Ⅱ一下	10	中型古墳	11
浄願寺山6号墳	224.5m	9.46m	9.01m	95.2%	6.3度	1.20m	71.7㎡	73.4㎡	102.3%	1.7㎡	13.3㎡	0.19m	区画Ⅲ一上	33	小型古墳	37
浄願寺山7号墳	226.1m	18.23m	15.58m	85.4%	4.0度	2.00m	227.0㎡	237.8㎡	104.7%	10.8㎡	108.6㎡	0.48m	区画Ⅰ一下	3	大型古墳	5
浄願寺山8号墳	227.6m	8.09m	7.65m	94.5%	3.7度	0.80m	61.6㎡	63.3㎡	102.7%	1.7㎡	8.4㎡	0.14m	区画Ⅲ一上	40	小規模古墳	43
浄願寺山9号墳	227.9m	9.44m	7.50m	79.5%	3.1度	0.80m	68.9㎡	70.4㎡	102.2%	1.5㎡	9.3㎡	0.13m	区画Ⅲ一上	36	小規模古墳	40
浄願寺山10号墳	228.1m	15.21m	14.85m	97.6%	5.3度	3.10m	182.1㎡	201.4㎡	110.6%	19.3㎡	113.3㎡	0.62m	区画Ⅱ一上	5	大型古墳	4
浄願寺山11号墳	226.7m	13.23m	11.58m	87.6%	6.4度	1.80m	127.6㎡	132.7㎡	104.0%	5.1㎡	49.7㎡	0.39m	区画Ⅱ一下	14	中型古墳	13
浄願寺山12号墳	226.1m	13.08m	10.50m	80.3%	7.1度	1.80m	115.8㎡	120.9㎡	104.4%	5.1㎡	41.2㎡	0.36m	区画Ⅱ一下	20	中型古墳	16
浄願寺山13号墳	224.6m	14.14m	12.13m	85.8%	5.2度	1.80m	139.3㎡	152.1㎡	109.2%	12.8㎡	39.6㎡	0.28m	区画Ⅱ一下	13	中型古墳	18
浄願寺山14号墳	224.1m	10.62m	9.11m	85.7%	5.0度	1.30m	81.2㎡	83.8㎡	103.2%	2.6㎡	23.4㎡	0.29m	区画Ⅲ一上	32	小型古墳	26
浄願寺山15号墳	225.5m	8.86m	7.33m	82.7%	6.2度	1.00m	60.4㎡	62.5㎡	103.3%	2.0㎡	13.4㎡	0.22m	区画Ⅲ一上	41	小型古墳	36
浄願寺山16号墳	224.6m	6.64m	6.21m	93.5%	7.3度	0.80m	42.6㎡	43.6㎡	102.5%	1.1㎡	7.0㎡	0.16m	区画Ⅲ一下	47	小規模古墳	46
浄願寺山17号墳	223.3m	11.89m	8.63m	72.6%	3.3度	0.80m	81.9㎡	83.9㎡	102.4%	2.0㎡	6.1㎡	0.07m	区画Ⅲ一上	30	小規模古墳	47
浄願寺山18号墳	223.9m	10.56m	10.42m	98.7%	4.3度	1.30m	81.5㎡	84.4㎡	103.6%	3.0㎡	23.6㎡	0.29m	区画Ⅲ一上	31	小型古墳	25
浄願寺山19号墳	225.4m	10.63m	10.45m	98.3%	6.4度	1.80m	90.7㎡	95.2㎡	105.0%	4.5㎡	35.5㎡	0.39m	区画Ⅲ一上	27	中型古墳	19
浄願寺山20号墳	226.8m	12.00m	9.18m	76.5%	9.3度	1.60m	83.2㎡	87.1㎡	104.7%	3.9㎡	17.1㎡	0.21m	区画Ⅲ一上	29	小型古墳	33
浄願寺山21号墳	228.6m	13.35m	12.11m	90.7%	5.1度	1.70m	120.4㎡	125.6㎡	104.3%	5.2㎡	44.6㎡	0.37m	区画Ⅱ一下	15	中型古墳	14
浄願寺山22号墳	229.5m	13.28m	9.45m	71.2%	7.2度	1.20m	110.5㎡	114.7㎡	103.8%	4.2㎡	22.5㎡	0.20m	区画Ⅱ一下	21	小型古墳	28
浄願寺山23号墳	231.2m	13.69m	9.60m	70.1%	6.5度	1.50m	118.3㎡	123.2㎡	104.1%	4.9㎡	39.8㎡	0.34m	区画Ⅱ一下	16	中型古墳	17
浄願寺山24号墳	228.5m	10.79m	10.19m	94.4%	7.4度	1.60m	97.2㎡	101.1㎡	103.9%	3.8㎡	27.9㎡	0.29m	区画Ⅲ一上	24	小型古墳	22
浄願寺山25号墳	230.6m	13.05m	10.67m	81.8%	9.1度	2.30m	117.9㎡	124.3㎡	105.4%	6.3㎡	20.1㎡	0.17m	区画Ⅲ一上	18	小型古墳	30

浄願寺山古墳群 各古墳データ Ⅱ													G102-2			
浄願寺山27号墳	立地標高	長径	短径	径比率	立地勾配	高さ	平面積	表面積	面積比率	両面積差	体積	体積／平面積	平面積区分	順位	体積区分	順位
浄願寺山26号墳	232.4m	17.81m	10.15m	57.0%	7.3度	1.80m	144.0㎡	152.7㎡	106.0%	8.7㎡	43.3㎡	0.30m	区画Ⅱ一下	12	中型古墳	15
浄願寺山27号墳	225.0m	9.57m	6.82m	71.3%	10.0度	1.30m	48.0㎡	50.0㎡	104.0%	1.9㎡	8.9㎡	0.19m	区画Ⅲ一下	44	小規模古墳	42
浄願寺山28号墳	226.9m	17.04m	13.14m	77.1%	6.1度	1.80m	168.1㎡	173.2㎡	103.0%	5.1㎡	52.7㎡	0.31m	区画Ⅱ一上	8	中型古墳	10
浄願寺山29号墳	229.1m	10.09m	8.19m	81.2%	5.6度	1.20m	66.8㎡	69.5㎡	104.0%	2.7㎡	16.6㎡	0.25m	区画Ⅲ一上	37	小型古墳	35
浄願寺山30号墳	230.1m	14.26m	13.60m	95.3%	4.8度	2.00m	156.6㎡	164.3㎡	104.9%	7.7㎡	72.3㎡	0.46m	区画Ⅱ一上	9	中型古墳	6
浄願寺山31号墳	225.6m	13.56m	10.64m	78.5%	4.3度	1.40m	118.3㎡	121.6㎡	102.8%	3.4㎡	32.6㎡	0.28m	区画Ⅱ一下	17	中型古墳	21
浄願寺山32号墳	224.0m	16.78m	12.83m	76.5%	4.5度	2.20m	178.7㎡	189.3㎡	106.0%	10.7㎡	114.2㎡	0.64m	区画Ⅱ一上	6	大型古墳	3
浄願寺山33号墳	222.7m	9.10m	8.61m	94.6%	8.7度	1.50m	63.4㎡	65.3㎡	103.1%	1.9㎡	16.9㎡	0.27m	区画Ⅲ一上	39	小型古墳	34
浄願寺山34号墳	226.5m	12.56m	11.52m	91.7%	5.5度	2.10m	116.7㎡	123.9㎡	106.2%	7.2㎡	59.6㎡	0.51m	区画Ⅱ一下	19	中型古墳	8
浄願寺山35号墳	227.2m	11.38m	9.67m	85.0%	4.1度	1.20m	89.2㎡	91.2㎡	102.3%	2.0㎡	24.0㎡	0.27m	区画Ⅲ一上	28	小型古墳	24
浄願寺山36号墳	228.6m	12.31m	10.83m	87.9%	3.2度	1.30m	95.8㎡	100.6㎡	105.1%	4.9㎡	27.3㎡	0.28m	区画Ⅲ一上	25	小型古墳	23
浄願寺山37号墳	229.5m	6.95m	6.84m	98.4%	4.2度	0.90m	40.1㎡	41.8㎡	104.1%	1.6㎡	5.2㎡	0.13m	区画Ⅲ一下	49	小規模古墳	48
浄願寺山38号墳	230.5m	14.49m	12.94m	89.4%	4.7度	1.80m	146.5㎡	153.6㎡	104.8%	7.1㎡	49.7㎡	0.34m	区画Ⅱ一下	11	中型古墳	12
浄願寺山39号墳	229.9m	8.28m	7.95m	96.1%	6.2度	0.90m	57.8㎡	59.0㎡	102.1%	1.2㎡	8.4㎡	0.15m	区画Ⅲ一上	42	小規模古墳	44
浄願寺山40号墳	230.1m	7.24m	7.09m	97.9%	4.8度	0.70m	44.2㎡	45.6㎡	103.1%	1.4㎡	9.1㎡	0.21m	区画Ⅲ一下	46	小規模古墳	41
浄願寺山41号墳	231.7m	12.55m	10.29m	82.0%	8.8度	1.90m	99.2㎡	102.9㎡	103.8%	3.8㎡	20.5㎡	0.21m	区画Ⅲ一上	23	小型古墳	29
浄願寺山42号墳	233.0m	9.93m	8.78m	88.4%	6.3度	1.10m	66.0㎡	68.4㎡	103.7%	2.4㎡	10.3㎡	0.16m	区画Ⅲ一上	38	小型古墳	38
浄願寺山43号墳	233.7m	12.22m	10.87m	88.9%	5.6度	1.60m	102.2㎡	107.1㎡	104.7%	4.8㎡	34.1㎡	0.33m	区画Ⅱ一下	22	中型古墳	20
浄願寺山44号墳	235.4m	7.98m	7.26m	91.0%	7.1度	1.10m	46.9㎡	48.4㎡	103.1%	1.5㎡	18.9㎡	0.40m	区画Ⅲ一下	45	小型古墳	31
浄願寺山45号墳	236.2m	9.60m	9.01m	93.8%	3.0度	1.00m	71.5㎡	74.1㎡	103.6%	2.6㎡	17.5㎡	0.25m	区画Ⅲ一上	34	小型古墳	32
浄願寺山46号墳	235.0m	10.15m	7.47m	73.6%	7.6度	1.10m	69.6㎡	71.7㎡	103.0%	2.1㎡	9.4㎡	0.13m	区画Ⅲ一上	35	小規模古墳	39
浄願寺山47号墳	234.8m	11.10m	9.99m	89.9%	7.7度	1.60m	93.9㎡	98.1㎡	104.5%	4.2㎡	22.9㎡	0.24m	区画Ⅲ一上	26	小型古墳	27
浄願寺山48号墳	235.9m	7.35m	6.10m	83.0%	8.5度	1.20m	40.7㎡	42.3㎡	103.9%	1.6㎡	5.0㎡	0.12m	区画Ⅲ一下	48	小規模古墳	49
浄願寺山49号墳	235.9m	8.31m	8.20m	98.7%	6.9度	1.10m	50.7㎡	52.1㎡	102.8%	1.4㎡	8.4㎡	0.17m	区画Ⅲ一上	43	小規模古墳	45
浄願寺山50号墳	238.0m	7.59m	6.27m	82.7%	6.4度	0.70m	36.8㎡	37.9㎡	102.9%	1.0㎡	2.7㎡	0.07m	区画Ⅲ一下	50	小規模古墳	50

浄願寺山古墳群 各古墳データ Ⅲ

G102-3

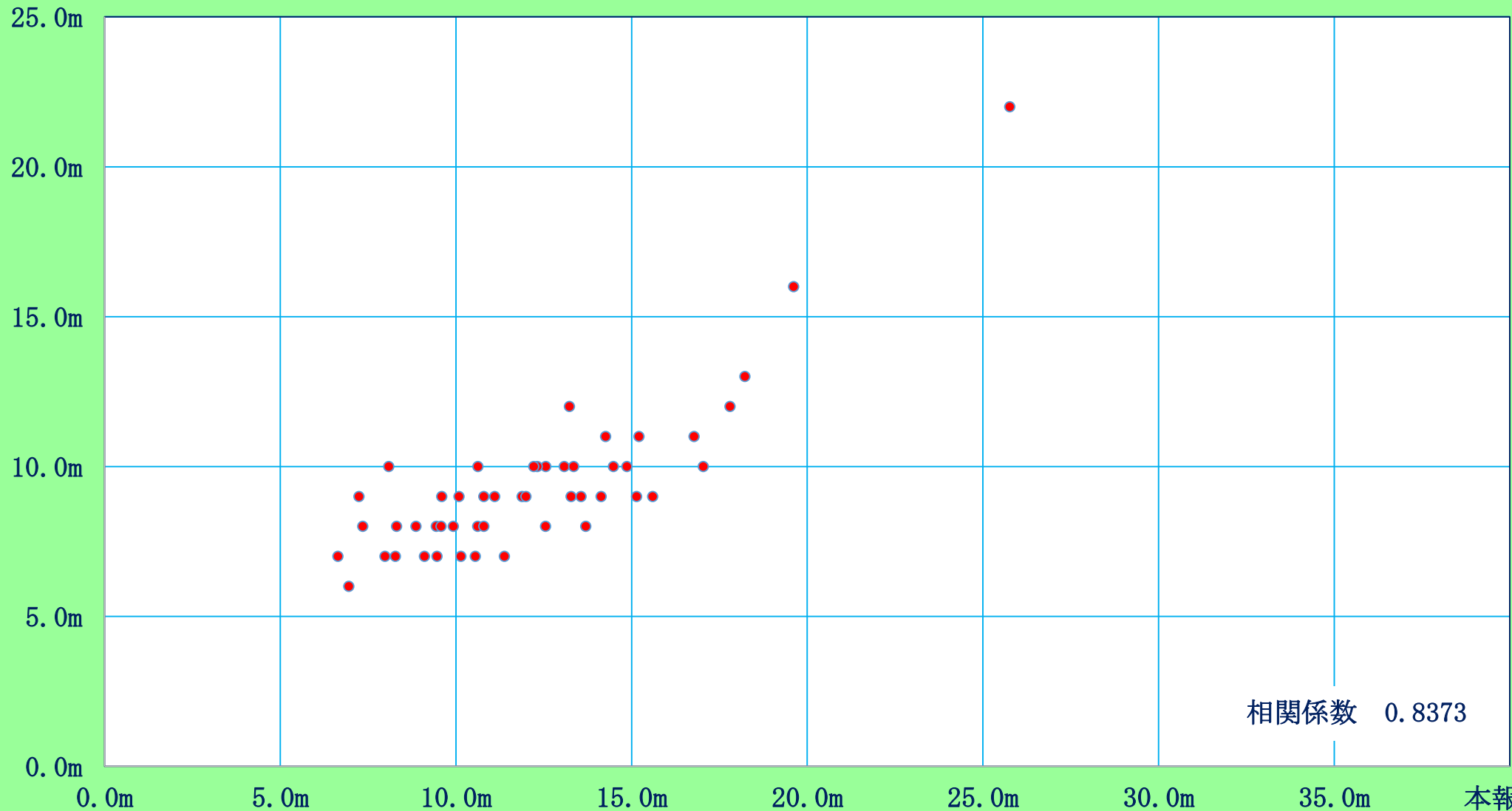
	立地標高	長径	短径	径比率	立地勾配	高さ	平面積	表面積	面積比率	両面積差	体積	体積／平面積	-	-
総合計	-	-	-	-	-	-	5,602.0m ²	5,838.9m ²	-	236.9m ²	1,994.7m ³	-	-	-
最大値	238.0m	25.77m	24.55m	99.0%	10.0度	3.10m	501.3m ²	514.4m ²	110.6%	19.3m ²	305.2m ³	0.64m	-	-
最小値	222.7m	6.64m	6.10m	57.0%	2.3度	0.70m	36.8m ²	37.9m ²	102.1%	1.0m ²	2.7m ³	0.07m	-	-
平均値	228.6m	12.11m	10.46m	86.8%	5.7度	1.49m	112.0m ²	116.8m ²	104.0%	4.7m ²	39.9m ³	0.29m	-	-
中央値	228.0m	11.94m	10.07m	88.2%	5.6度	1.50m	94.8m ²	99.4m ²	103.8%	3.9m ²	23.5m ³	0.27m	-	-

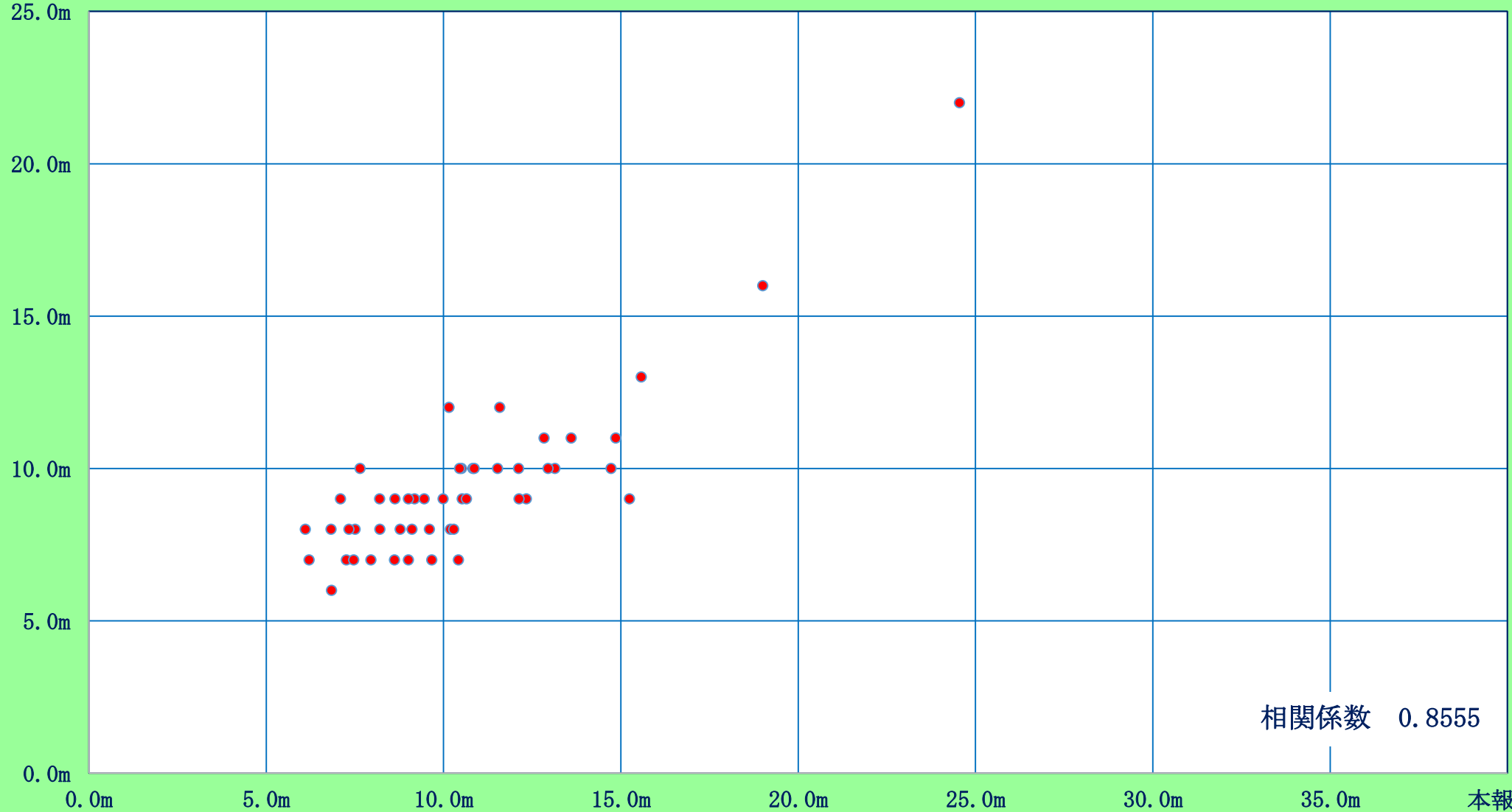
浄願寺山古墳群関係相関係数一覧

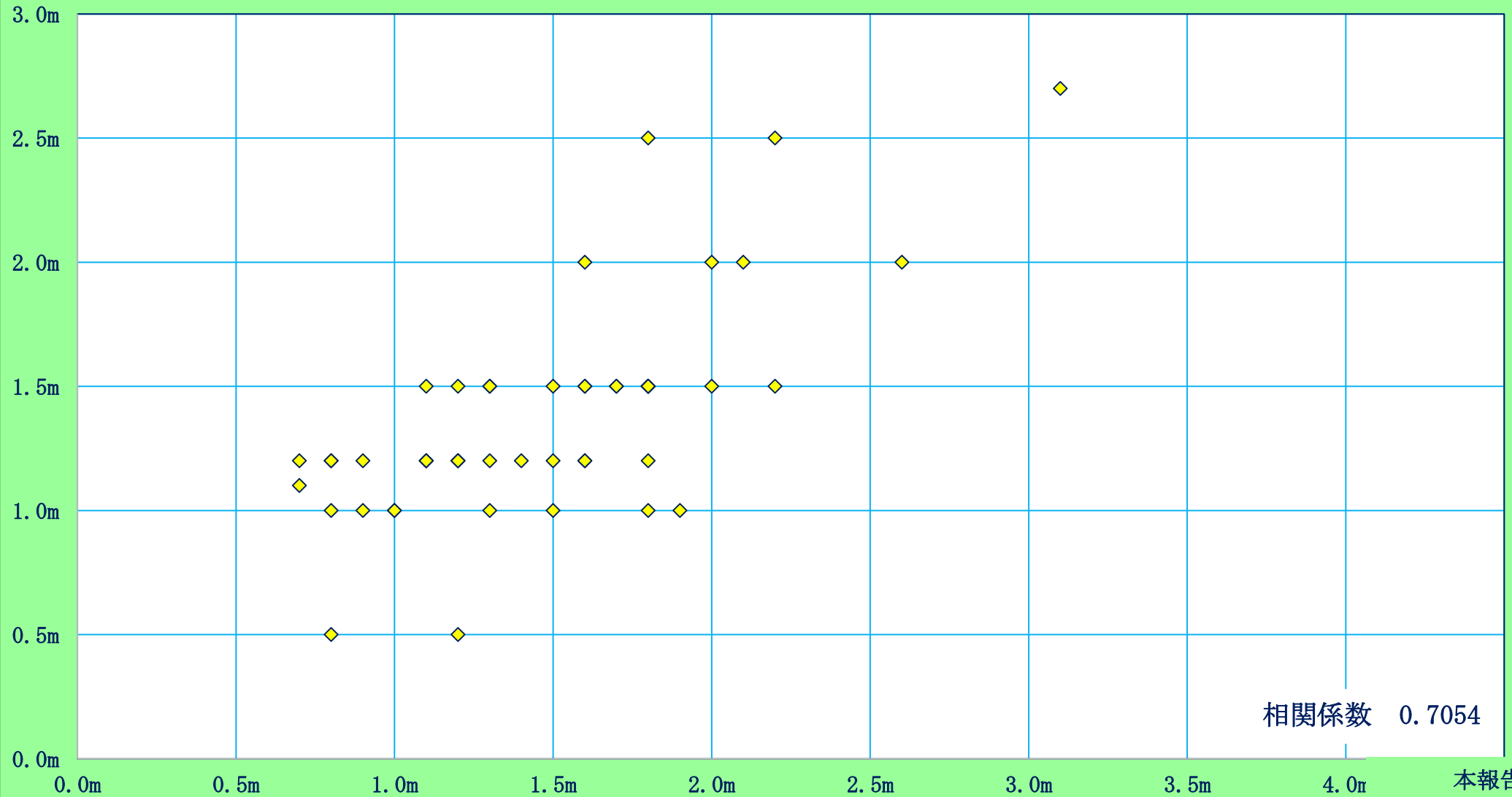
1	長径と短径の相関係数	0.9228	5	長径と体積の相関係数	0.8553	9	短径と体積の相関係数	0.9183	13	平面積と表面積の相関係数	0.9995
2	長径と高さの相関係数	0.7738	6	短径と高さの相関係数	0.7773	10	高さと平面積の相関係数	0.7166	14	平面積と体積の相関係数	0.9646
3	長径と平面積の相関係数	0.9344	7	短径と平面積の相関係数	0.9649	11	高さと表面積の相関係数	0.7321	15	表面積と体積の相関係数	0.9652
4	長径と表面積の相関係数	0.9381	8	短径と表面積の相関係数	0.9675	12	高さと体積の相関係数	0.7125			

浄願寺山古墳群

添付、表およびグラフ等







浄願寺山古墳群 各古墳 平面積概要					
	平面積 合計	平面積 割合	基 数	基 数 割合	平面積 平均
第1グループ	2,570.8m ²	45.9%	17基	34.0%	151.2m ²
第2グループ	2,290.4m ²	40.9%	22基	44.0%	104.1m ²
第3グループ	677.5m ²	12.1%	10基	20.0%	67.8m ²
所属なし	63.4m ²	1.1%	1基	2.0%	63.4m ²
合計 or 平均	5,602.0m ²	100.0%	50基	100.0%	112.0m ²

浄願寺山古墳群 各古墳 体積概要					
	体 積 合計	体 積 割合	基 数	基 数 割合	体 積 平均
第1グループ	1,073.0m ³	53.8%	17基	34.0%	63.1m ³
第2グループ	755.1m ³	37.9%	22基	44.0%	34.3m ³
第3グループ	149.7m ³	12.1%	10基	7.5%	15.0m ³
所属なし	16.9m ³	0.8%	1基	2.0%	16.9m ³
合計 or 平均	1,994.7m ³	100.0%	50基	100.0%	39.9m ³

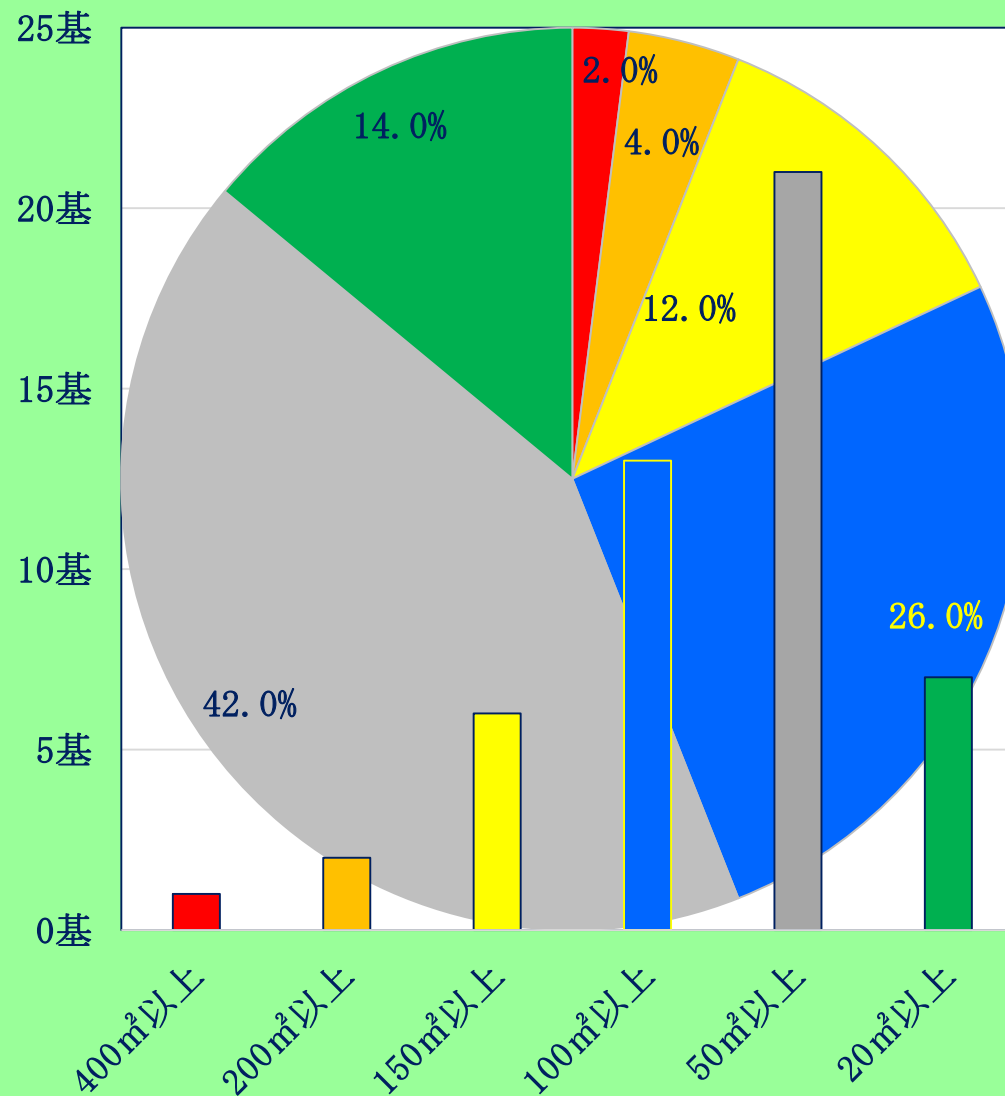
浄願寺山古墳群 平面積を基準とした区分（区画）

区分	基数	基数割合	平面積	平面積割合	古墳区分(区画)	古墳細分
400㎡以上	1基	2.0%	501.3㎡	8.9%	区画Ⅰ 3基 平面積小計 1,024.0㎡ 比率 18.3%	区画Ⅰ-上 1基 1基あたり平面積 501.3㎡
3号墳						
200㎡以上	2基	4.0%	522.8㎡	9.3%	1基あたり平面積 341.3㎡	区画Ⅰ-下 2基 1基あたり平面積 261.4㎡
1号墳、7号墳						
150㎡以上	6基	12.0%	1,051.5㎡	18.8%	区画Ⅱ 19基 平面積小計 2,676.6㎡ 比率 47.8%	区画Ⅱ-上 6基 1基あたり平面積 175.2㎡
2号墳、10号墳、32号墳、4号墳、28号墳、30号墳						
100㎡以上	13基	24.0%	1,625.1㎡	29.0%	1基あたり平面積 140.9㎡	区画Ⅱ-下 13基 1基あたり平面積 125.0㎡
5号墳、38号墳、26号墳、13号墳、11号墳、21号墳、23号墳、31号墳、25号墳、34号墳、12号墳、22号墳、43号墳						
50㎡以上	21基	44.0%	1,602.0㎡	28.6%	区画Ⅲ 28基 平面積小計 1,901.5㎡ 比率 33.9%	区画Ⅲ-上 21基 1基あたり平面積 76.3㎡
41号墳、24号墳、36号墳、47号墳、19号墳、35号墳、20号墳、17号墳、18号墳、14号墳、6号墳、45号墳、46号墳、9号墳、29号墳、42号墳、33号墳、8号墳、15号墳、39号墳、49号墳						
20㎡以上	7基	14.0%	299.5㎡	5.3%	1基あたり平面積 67.9㎡	区画Ⅲ-下 7基 1基あたり平面積 42.3㎡
27号墳、44号墳、40号墳、16号墳、48号墳、37号墳、50号墳						
合計	50基	100.0%	5,602.0㎡	100.0%		1基あたり平面積 110.9㎡

第1グループ／1～17号墳、第2グループ／18～32号墳、34～40号墳、第3グループ／41～50号墳、所属なし／33号墳

浄願寺山古墳群 平面積 基数と割合

区 画	基 数	基数割合
400㎡以上	1基	2.0%
200㎡以上	2基	4.0%
150㎡以上	6基	12.0%
100㎡以上	13基	26.0%
50㎡以上	21基	42.0%
20㎡以上	7基	14.0%
合計	50基	100.0%



浄願寺山古墳群 平面積 総面積と割合

区画	面積	面積割合
400㎡以上	501.3㎡	8.9%
200㎡以上	522.8㎡	9.3%
150㎡以上	1,051.5㎡	18.8%
100㎡以上	1,625.1㎡	29.0%
50㎡以上	1,602.0㎡	28.6%
20㎡以上	299.5㎡	5.3%
平均値	112.0㎡	
中央値	94.8㎡	
最大値	501.3㎡	
最小値	36.8㎡	
標準偏差値	76.5㎡	
合計	5,602.1㎡	100.0%

1,800.0㎡

1,600.0㎡

1,400.0㎡

1,200.0㎡

1,000.0㎡

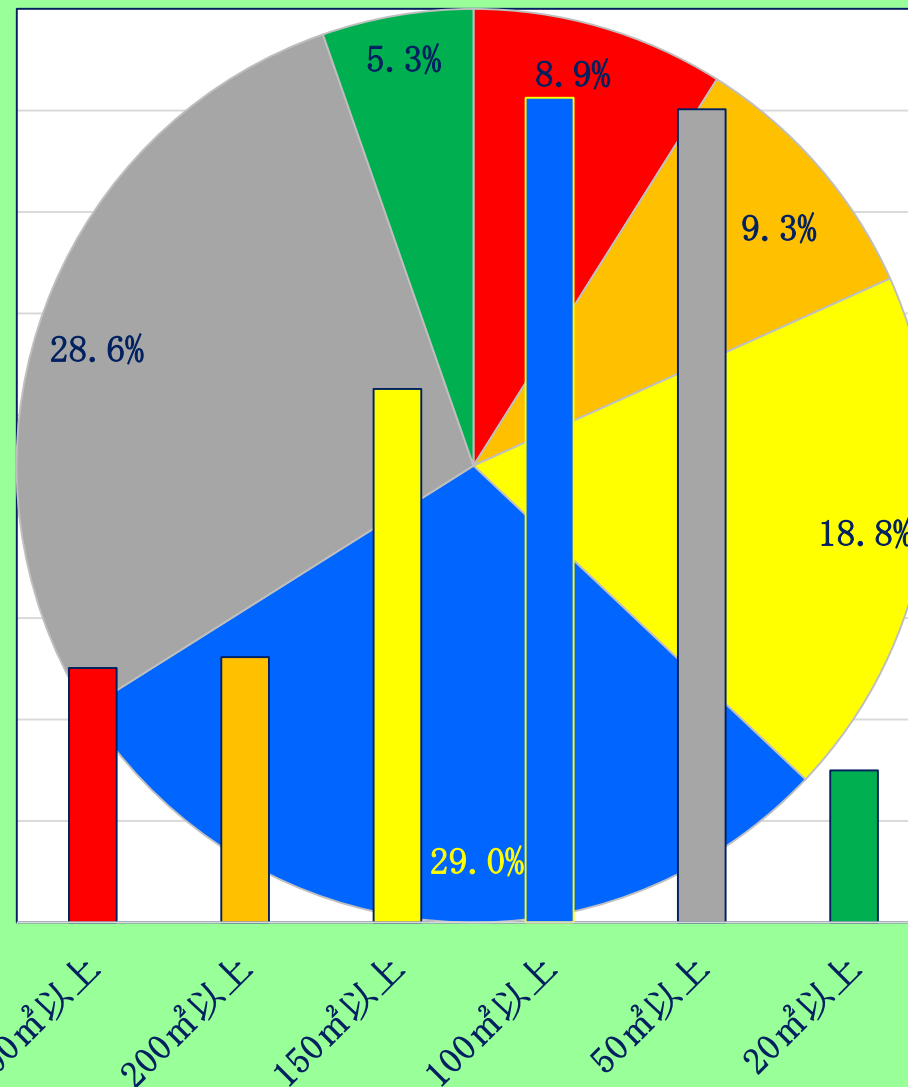
800.0㎡

600.0㎡

400.0㎡

200.0㎡

000.0㎡



ア 区画Ⅰ－上／1基

⇒ 大規模古墳／1基・・・ 3号墳

イ 区画Ⅰ－下／2基

⇒ 大型古墳／2基・・・ 1号墳、7号墳

ウ 区画Ⅱ－上／6基

⇒ 大型古墳／2基・・・ 32号墳、10号墳

⇒ 中型古墳／4基・・・ 30号墳、4号墳、2号墳、28号墳

エ 区画Ⅱ－下／13基

⇒ 中型古墳／11基・・・ 34号墳、5号墳、11号墳、38号墳、21号墳、26号墳、
12号墳、23号墳、13号墳、43号墳、31号墳

⇒ 小型古墳／2基・・・ 22号墳、25号墳

オ 区画Ⅲ－上／21基

⇒ 中型古墳／1基・・・ 19号墳

⇒ 小型古墳／14基・・・ 24号墳、36号墳、35号墳、18号墳、14号墳、47号墳、
41号墳、45号墳、20号墳、33号墳、29号墳、15号墳、
6号墳、42号墳

⇒ 小規模古墳／6基・・・ 46号墳、9号墳、8号墳、39号墳、49号墳、17号墳

カ 区画Ⅲ－下／6基

⇒ 小型古墳／1基・・・ 44号墳

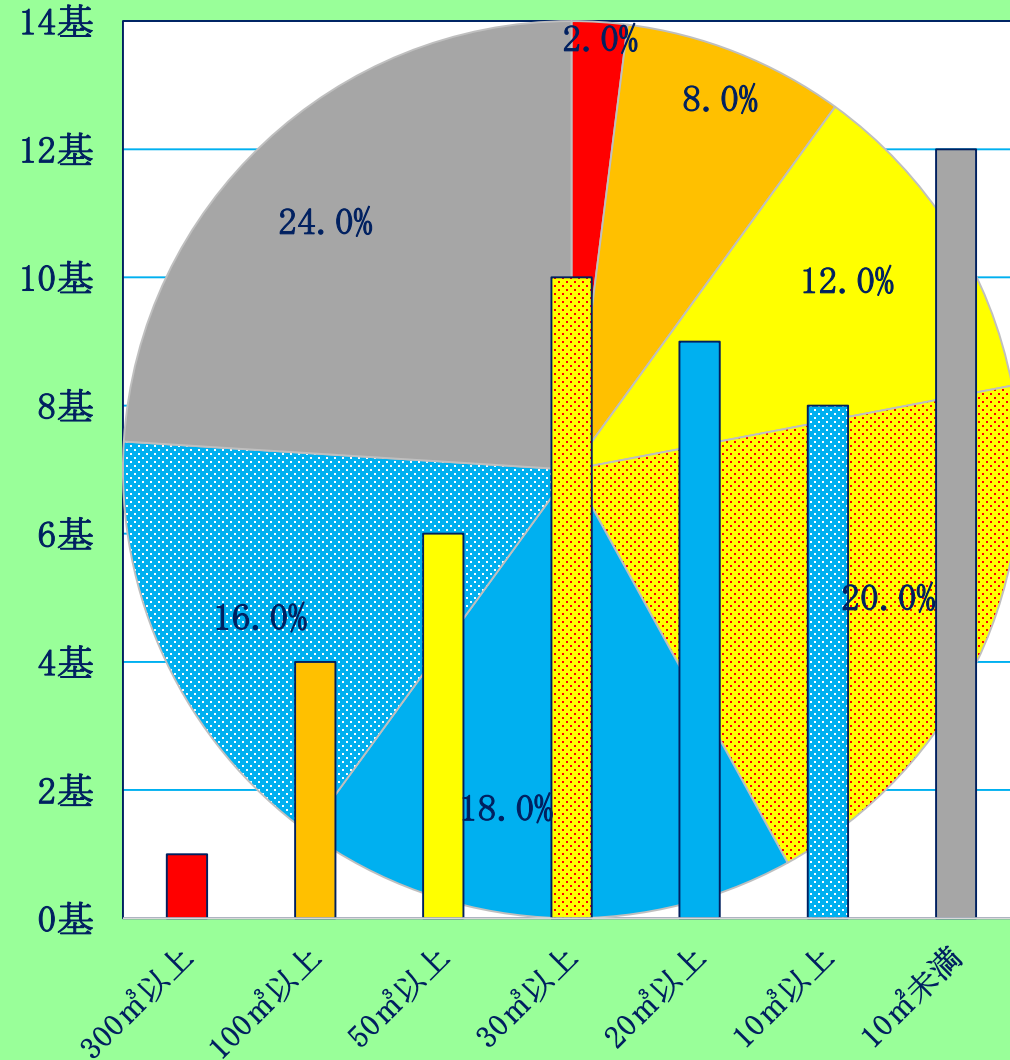
⇒ 小規模古墳／6基・・・ 40号墳、27号墳、16号墳、37号墳、48号墳、50号墳

浄願寺山古墳群 体積を基準とした区分

区分	基数	基数割合	体積	体積割合	古墳区分	古墳細分
300m ³ 以上	1基	2.0%	305.2m ³	15.3%	大型古墳 5基 体積小計 811.4m ³ 比率 40.7%	大規模古墳 1基 体積小計 305.2m ³ 比率 15.3%
3号墳						大型古墳 4基 体積小計 506.2m ³ 比率 25.4%
100m ³ 以上	4基	8.0%	506.2m ³	25.4%	中型古墳 16基 体積小計 759.4m ³ 比率 38.1%	第1グループ/1~17号墳 第2グループ/18~32号墳 34~40号墳 第3グループ/41~50号墳 所属なし /33号墳
1号墳、32号墳、10号墳、7号墳						
50m ³ 以上	6基	12.0%	349.4m ³	17.5%	小型古墳 29基 体積小計 424.0m ³ 比率 21.3%	小型古墳 17基 体積小計 319.3m ³ 比率 16.0%
30号墳、4号墳、34号墳、2号墳、28号墳、5号墳						
30m ³ 以上	10基	20.0%	410.0m ³	20.6%	小型古墳 12基 体積小計 104.8m ³ 比率 5.3%	小規模古墳 12基 体積小計 104.8m ³ 比率 5.3%
38号墳、11号墳、21号墳、26号墳、12号墳、23号墳、13号墳、19号墳、43号墳、31号墳						
20m ³ 以上	9基	18.0%	212.1m ³	10.6%		
24号墳、36号墳、35号墳、18号墳、14号墳、47号墳、22号墳、41号墳、25号墳						
10m ³ 以上	8基	16.0%	107.1m ³	5.4%		
44号墳、45号墳、20号墳、33号墳、29号墳、15号墳、6号墳、42号墳						
10m ² 未満	12基	24.0%	104.8m ³	5.3%		
46号墳、9号墳、40号墳、27号墳、8号墳、39号墳、49号墳、16号墳、17号墳、37号墳、48号墳、50号墳						
合計	50基	100.0%	1,994.7m ³	100.0%		

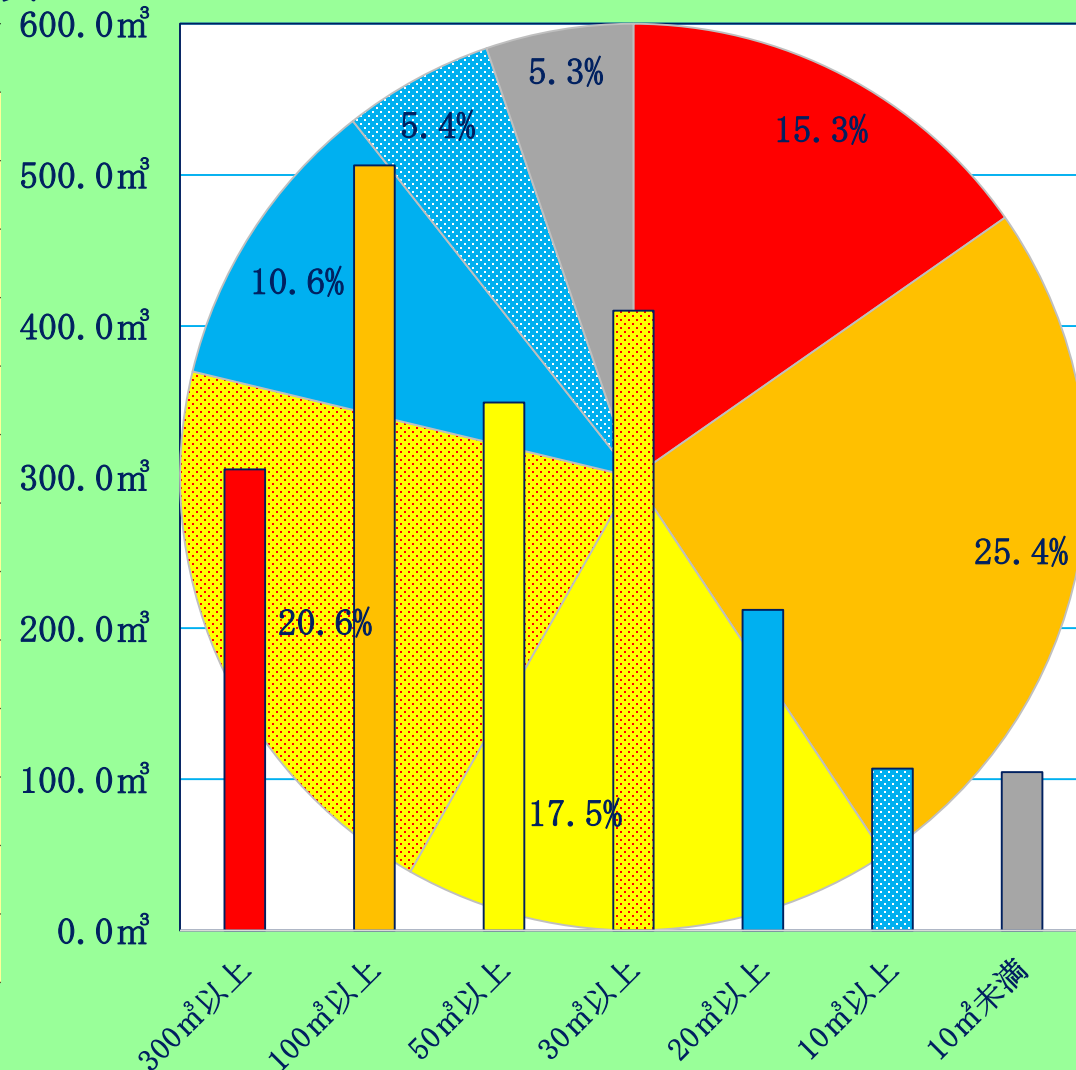
浄願寺山古墳群 体積区分 基数 割合

区分	基数	基数割合
300m ³ 以上	1基	2.0%
100m ³ 以上	4基	8.0%
50m ³ 以上	6基	12.0%
30m ³ 以上	10基	20.0%
20m ³ 以上	9基	18.0%
10m ³ 以上	8基	16.0%
10m ² 未満	12基	24.0%
合計	50基	100.0%



浄願寺山古墳群 体積区分 総体積

区分	体積	体積割合
300m ³ 以上	305.2m ³	15.3%
100m ³ 以上	506.2m ³	25.4%
50m ³ 以上	349.4m ³	17.5%
30m ³ 以上	410.0m ³	20.6%
20m ³ 以上	212.1m ³	10.6%
10m ³ 以上	107.1m ³	5.4%
10m ² 未満	104.8m ³	5.3%
平均値	39.9m ³	
中央値	23.5m ³	
最大値	305.2m ³	
最小値	2.7m ³	
標準偏差値	50.1	
合計	1,994.7m ³	100.0%



浄願寺山古墳群 体積を基準とした区分と平面積を基準とした区分の関係

ア 大規模古墳／1基

⇒ 区画Ⅰ－上／1基・・・ 3号墳

イ 大型古墳／4基

⇒ 区画Ⅰ－下／2基・・・ 1号墳、7号墳

⇒ 区画Ⅱ－上／2基・・・ 10号墳、32号墳

ウ 中型古墳／16基

⇒ 区画Ⅱ－上／4基・・・ 2号墳、4号墳、28号墳、30号墳

⇒ 区画Ⅱ－下／11基・・・ 5号墳、38号墳、26号墳、13号墳、11号墳、21号墳、
23号墳、31号墳、34号墳、12号墳、43号墳

⇒ 区画Ⅲ－上／1基・・・ 19号墳

エ 小型古墳／17基

⇒ 区画Ⅱ－下／2基・・・ 22号墳、25号墳

⇒ 区画Ⅲ－上／14基・・・ 41号墳、24号墳、36号墳、47号墳、35号墳、20号墳、
18号墳、14号墳、6号墳、45号墳、29号墳、42号墳、
33号墳、15号墳

⇒ 区画Ⅲ－下／1基・・・ 44号墳

オ 小規模古墳／12基

⇒ 区画Ⅲ－上／6基・・・ 17号墳、46号墳、9号墳、8号墳、39号墳、49号墳

⇒ 区画Ⅲ－下／6基・・・ 27号墳、40号墳、16号墳、48号墳、37号墳、50号墳

浄願寺山古墳群 高さに関する四指標

G311

古墳名	墳丘高さ～順位	面積比率～順位	両面積差～順位	体積/面積～順位
1号墳	4位	31位	6位	4位
3号墳	2位	44位	2位	3位
6号墳	34位	47位	41位	37位
7号墳	7位	11位	4位	6位
8号墳	45位	43位	40位	44位
9号墳	47位	49位	44位	46位
10号墳	1位	1位	1位	2位
13号墳	10位	2位	3位	24位
16号墳	45位	45位	49位	41位
17号墳	47位	46位	37位	50位
25号墳	3位	6位	13位	39位
26号墳	14位	4位	7位	19位
32号墳	5位	5位	5位	1位
34号墳	6位	3位	9位	5位
35号墳	32位	48位	35位	27位
37号墳	43位	19位	42位	47位
39号墳	43位	50位	48位	43位
40号墳	49位	35位	47位	34位
48号墳	34位	25位	43位	48位
49号墳	37位	42位	46位	40位
50号墳	50位	40位	50位	49位

浄願寺山古墳群 墳丘形状区分と属する古墳

G312

墳形区分等	属する古墳の名称	基数
円墳Ⅰ	1号墳①、2号墳①、3号墳①、4号墳①、6号墳①、10号墳①、18号墳②、21号墳②、30号墳②、33号墳④、34号墳②、44号墳③、45号墳③、49号墳③	14基
円墳Ⅱ	5号墳①、7号墳①、11号墳①、12号墳①、13号墳①、14号墳①、29号墳②、35号墳②、36号墳②、38号墳②、41号墳③、42号墳③、43号墳③	13基
長楕円形墳	9号墳①、27号墳②、28号墳②、31号墳②、32号墳②	5基
方墳Ⅰ	8号墳①、19号墳②、24号墳②、39号墳②、40号墳③	5基
方墳Ⅱ	15号墳①、37号墳②、47号墳③、48号墳③	4基
円墳、 方墳カ不詳	16号墳①、25号墳②	2基
長楕円形墳、 長方形墳カ不詳	17号墳①、20号墳②、22号墳②、23号墳②、46号墳	5基
不整形墳	26号墳②	1基
詳細不詳	50号墳③	1基

古墳名称の末尾に記載の数字は下記のとおり

① 第1グループの古墳、② 第2グループの古墳、③ 第3グループの古墳、④ 所属のない古墳
古墳名称にアンダーラインを引いた古墳は、墳形の可能性がやや低いと考えた古墳

浄願寺山古墳群 墳丘形状区分と基数

G313

		可能性の高いもの	可能性のやや低いもの		小計	合計Ⅰ	合計Ⅱ	合計Ⅲ
円墳	円墳Ⅰ	12基	円墳Ⅰカ	2基	14基	27基	32基	49基
	円墳Ⅱ	10基	円墳Ⅱカ	3基	13基			
長楕円形墳		3基	長楕円形墳カ	2基	5基	5基		
方墳	方墳Ⅰ	2基	方墳Ⅰカ	3基	5基	9基	9基	49基
	方墳Ⅱ	1基	方墳Ⅱカ	3基	4基			
円墳もしくは方墳について区分不可		—	円墳Ⅰ or 方墳Ⅰカ	2基	2基	2基	7基	49基
		—	長楕円形墳 or 長方形墳カ	5基	5基	5基		
不定形墳		—	—	1基	1基	1基	1基	
墳形不詳		—	—	1基	1基	1基	1基	1基

	基 数	比 率	総平面積	平面積 平 均	平面積 比 率	総体積	体積平均	体積比率
円墳Ⅰ、円墳Ⅱ	27基	54.0%	3,522.2m ²	130.5m ²	62.9%	1,428.7m ³	52.9m ³	71.6%
長楕円形墳	5基	10.0%	582.0m ²	116.4m ²	10.4%	217.7m ³	43.5m ³	10.9%
方墳Ⅰ、方墳Ⅱ	9基	18.0%	693.1m ²	77.0m ²	12.4%	180.3m ³	20.0m ³	9.0%
円墳Ⅰ or 方墳Ⅰ	2基	4.0%	160.5m ²	80.3m ²	2.9%	27.1m ³	13.5m ³	1.4%
長楕円形墳 or 長方形墳	5基	10.0%	463.5m ²	92.7m ²	8.3%	94.9m ³	19.0m ³	4.8%
不定形	1基	2.0%	144.0m ²	144.0m ²	2.6%	43.3m ³	43.3m ³	2.2%
墳形不明	1基	2.0%	36.8m ²	36.8m ²	0.7%	2.7m ³	2.7m ³	0.1%
合計	50基	100.0%	5,602.0m ²	112.0m ²	100.0%	1,994.7m ³	39.9m ³	100.0%

浄願寺山古墳群 横穴式石室推定開口方向概要

G315

西南西方向

1基

1号墳

南西方向

2基

24号墳、25号墳

南南西方向

1基

19号墳

南方向

8基

7号墳、11号墳、21号墳、23号墳、30号墳、38号墳、40号墳、43号墳

南南東方向

19基

4号墳、9号墳、10号墳、12号墳、13号墳、14号墳、15号墳、17号墳、22号墳、32号墳、
34号墳、35号墳、36号墳、37号墳、39号墳、41号墳、42号墳、45号墳、47号墳

南東方向

5基

2号墳、3号墳、5号墳、26号墳、31号墳

東南東方向

—

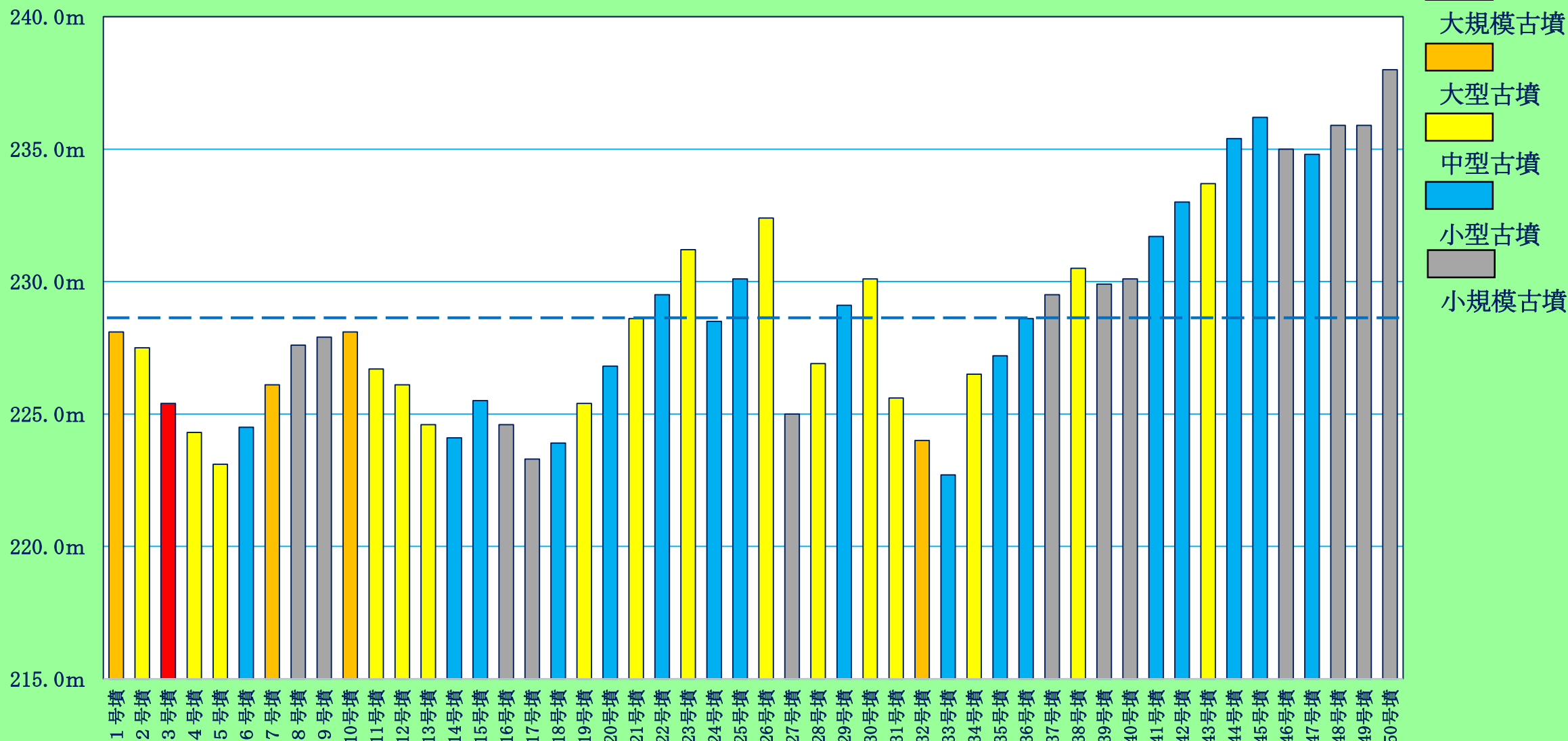
不明

14基

6号墳、8号墳、16号墳、18号墳、20号墳、27号墳、28号墳、29号墳、33号墳、44号墳、
46号墳、48号墳、49号墳、50号墳

浄願寺山古墳群 立地標高

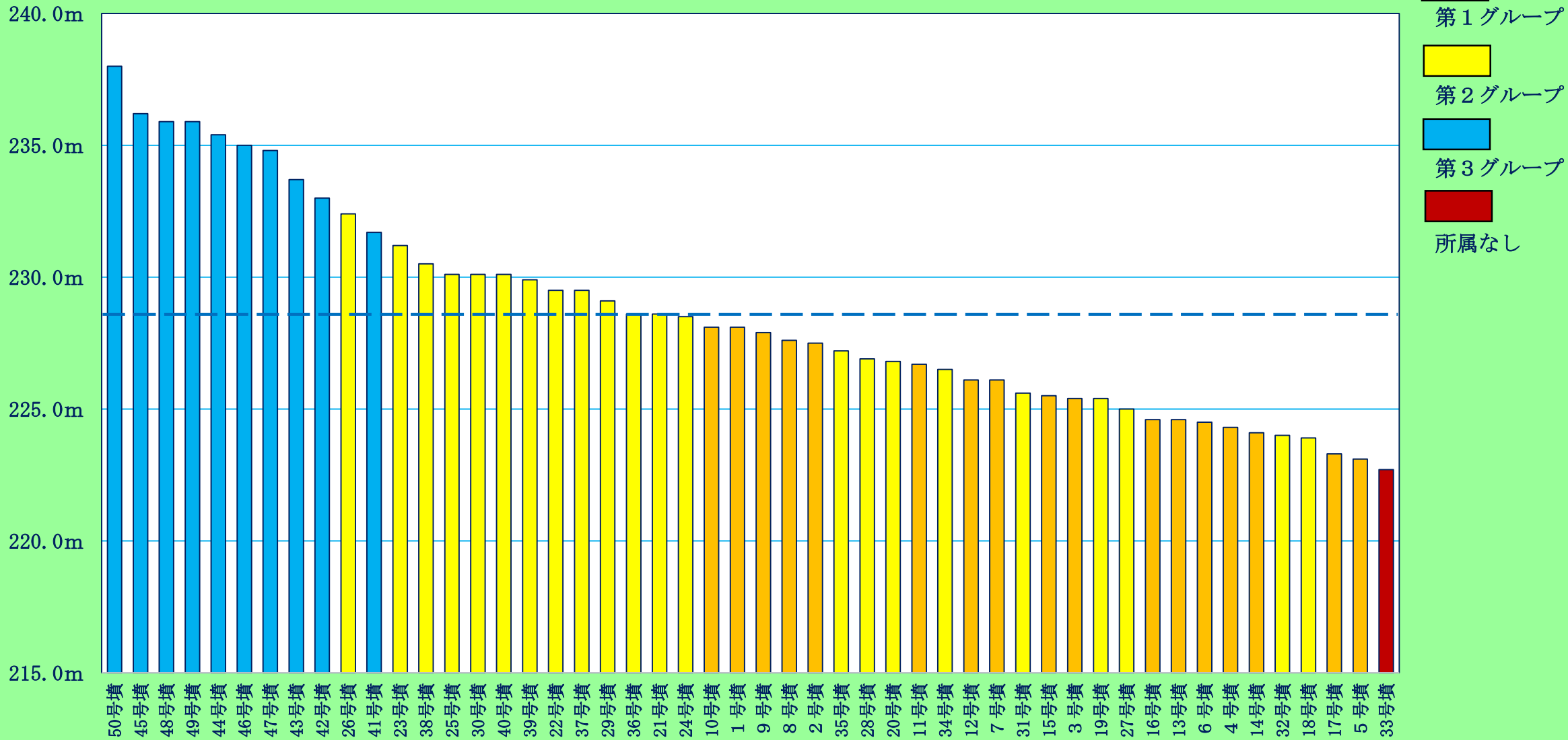
G401



各古墳が立地する標高を号順に並べた棒グラフである。(補助線／青色の破線は標高228.6m)

浄願寺山古墳群 立地標高比較

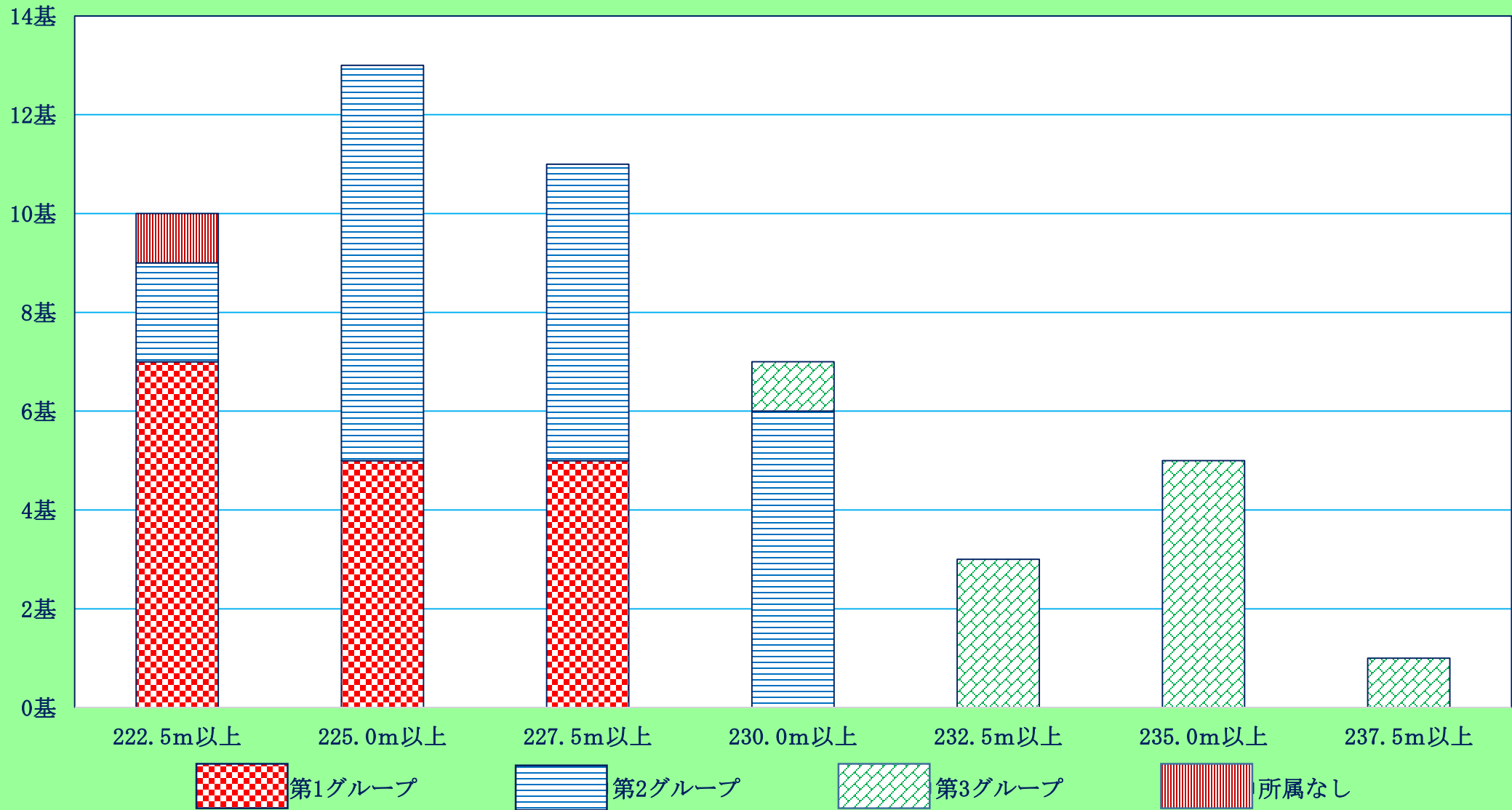
G 402



各古墳を立地する標高の順に並べた棒グラフである。(補助線／青色の破線は標高228.6m)

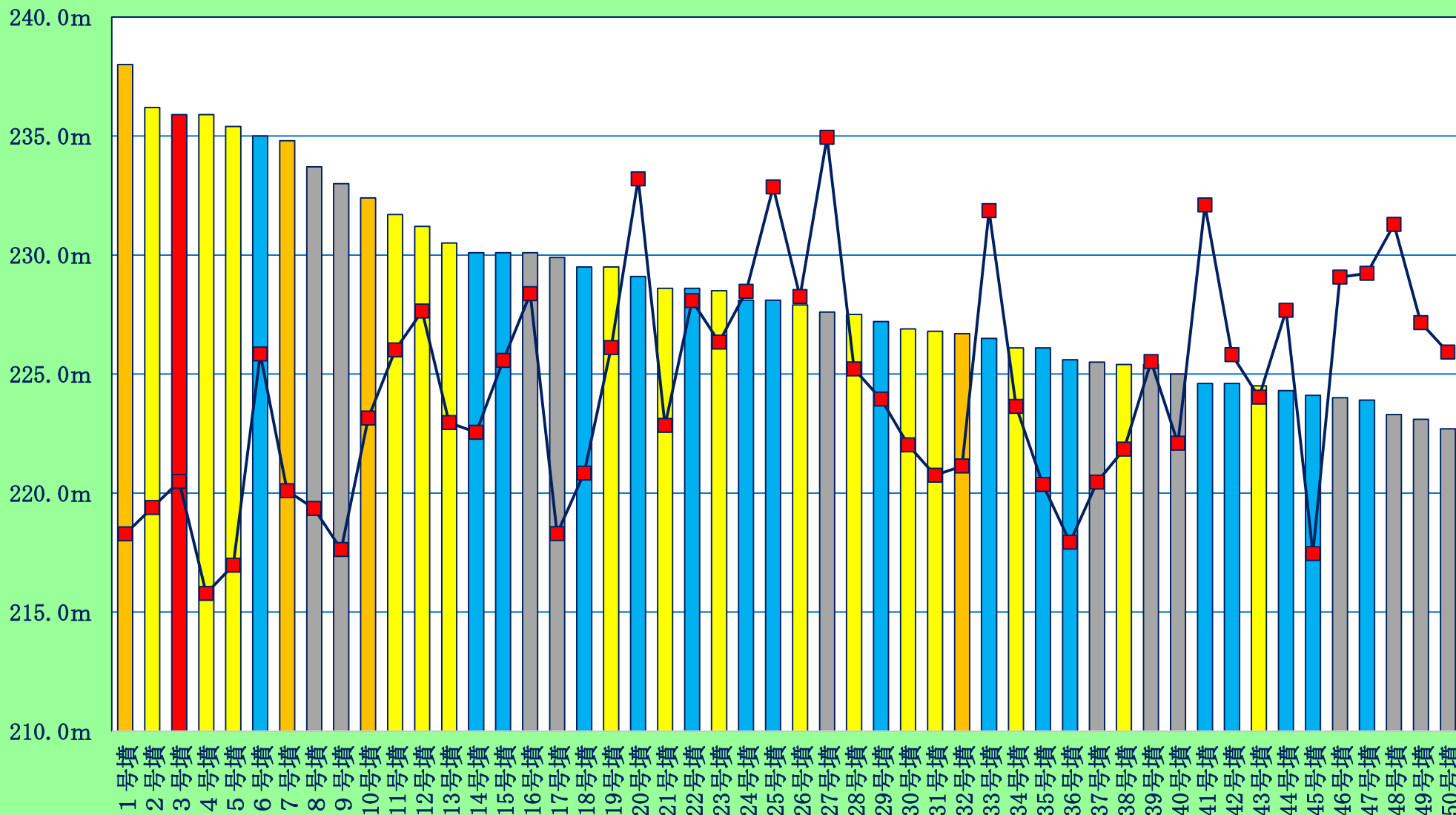
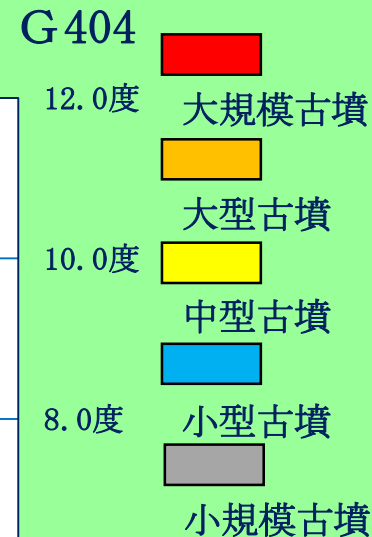
浄願寺山古墳群 立地標高基数

G403



各古墳の立地する標高を7段階に分割し、基数ごとに表示した棒グラフである。

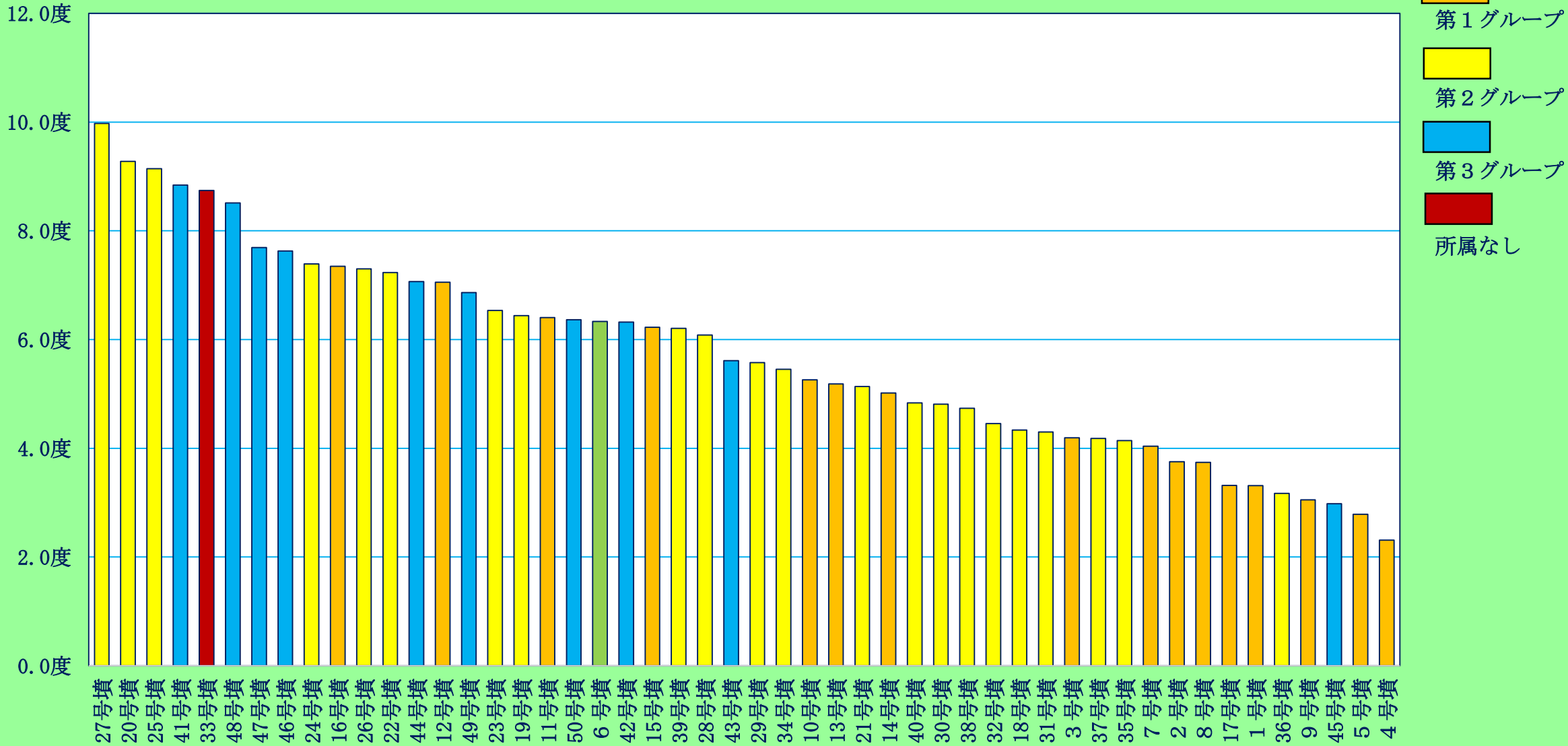
浄願寺山古墳群 勾配比較 I



各古墳の立地標高と勾配を号順に並べたグラフで、前者が棒グラフ。後者が折線グラフである。

浄願寺山古墳群 勾配比較 II

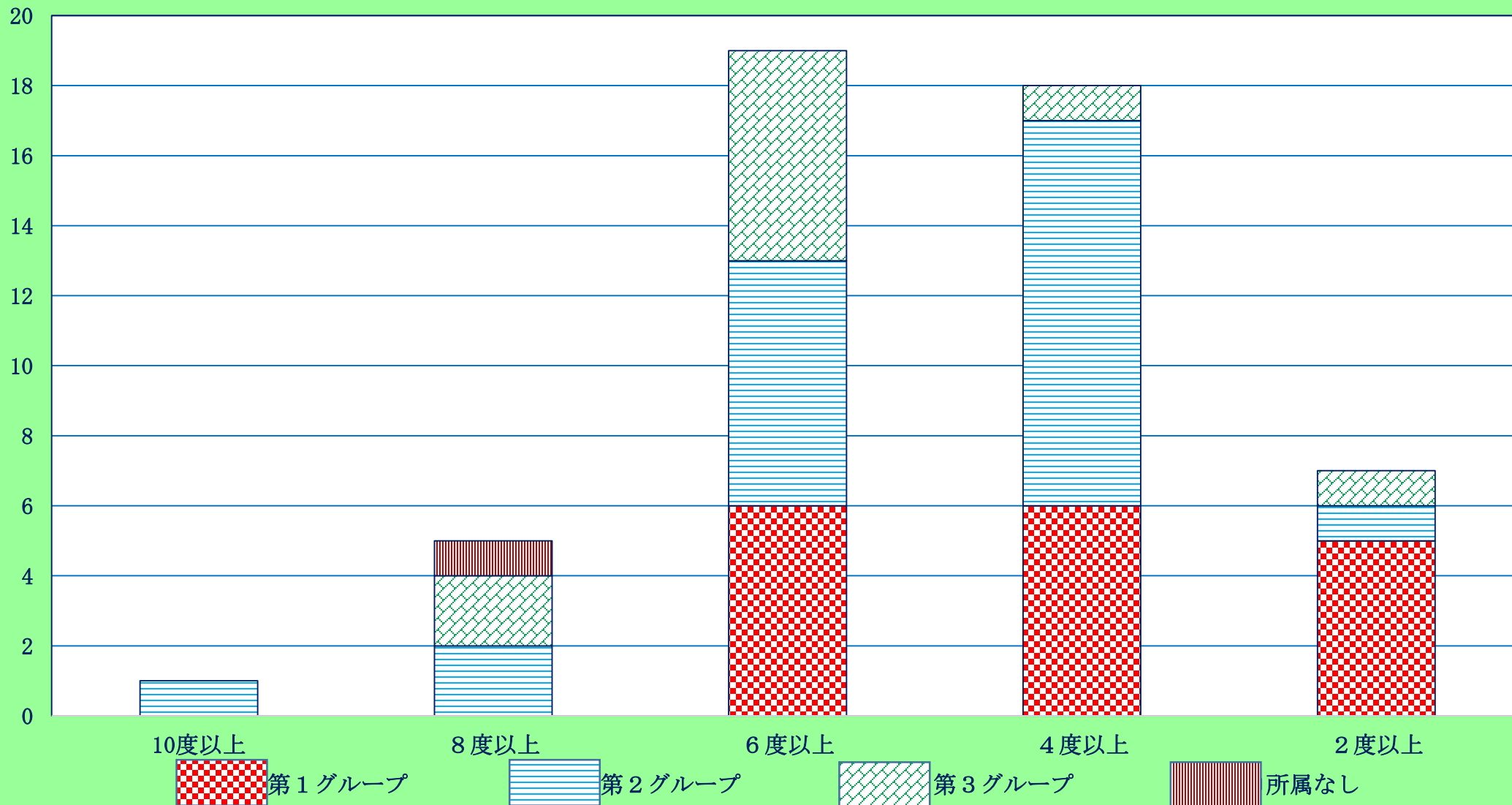
G405



各古墳の勾配を降順で並べた棒グラフで表した。

浄願寺山古墳群 勾配比較基数

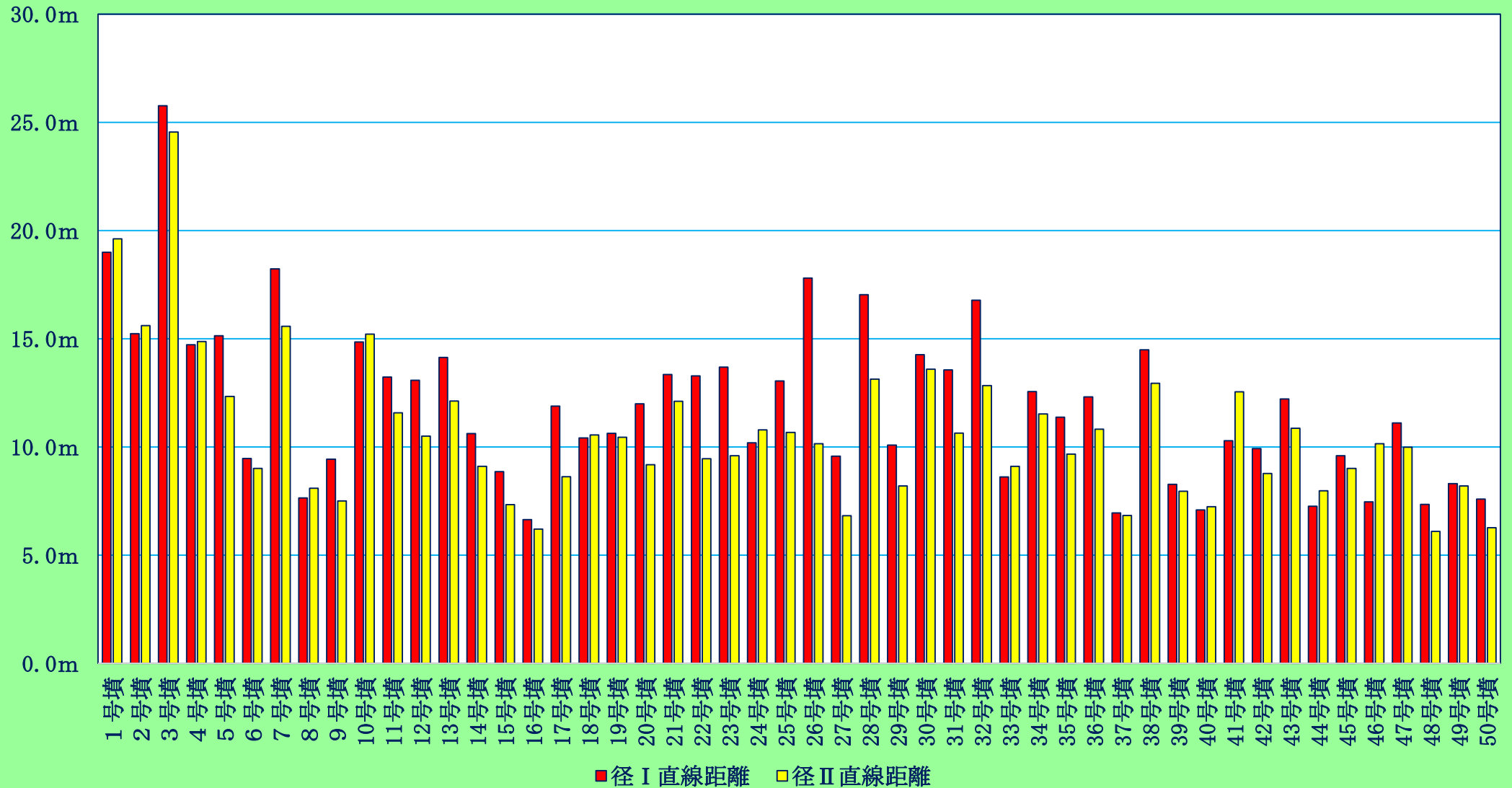
G 406



各古墳の勾配を5段階に分け、各々の基数を棒グラフで表した。区分は第9図と同じである。

浄願寺山古墳群 長径・短径比較 I

G407

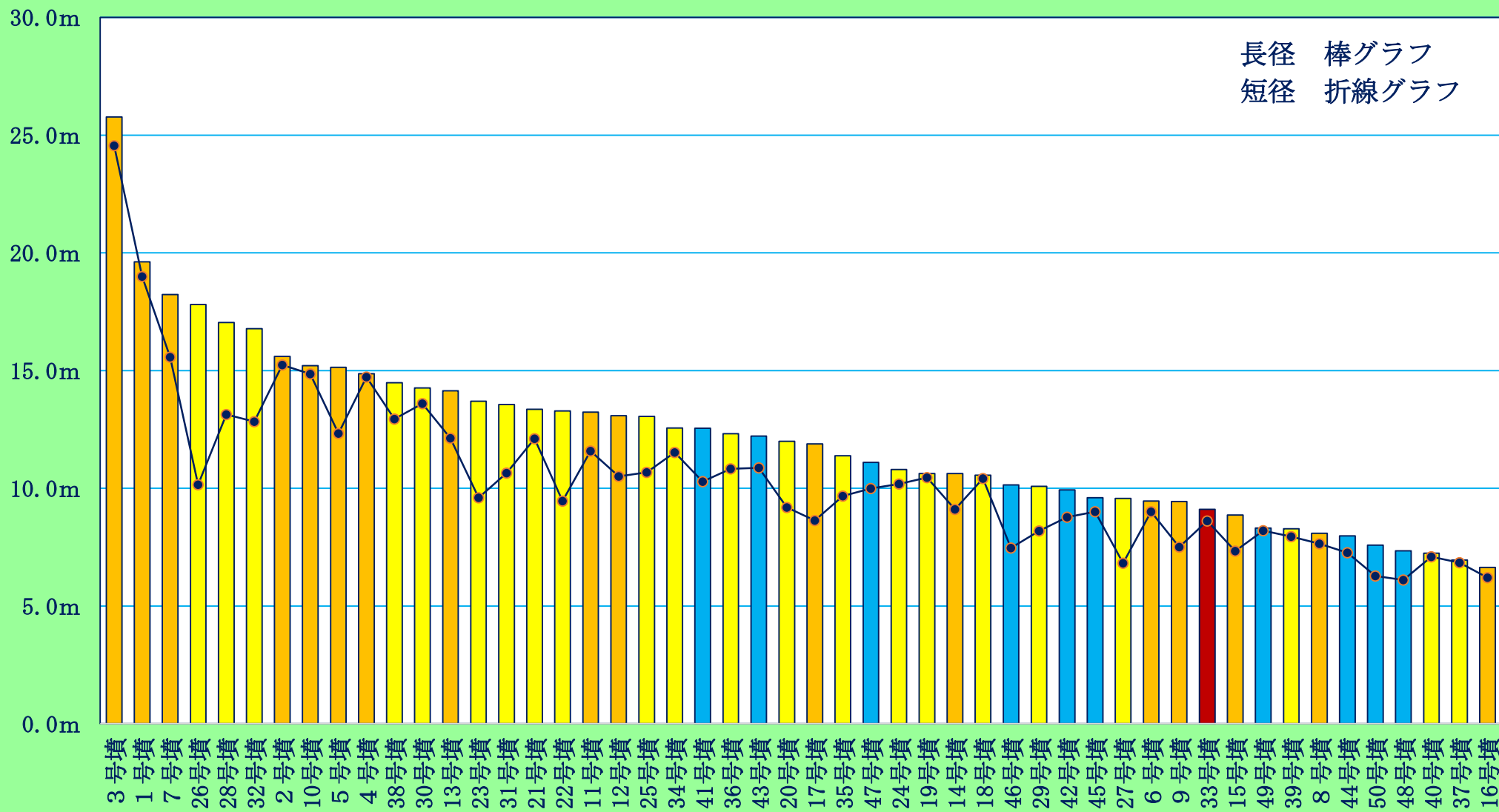


各古墳の2つの径を示す。表示は計測そのままの値である。実際には長い値を長径、短い値を短径とした。

浄願寺山古墳群 長径・短径比較Ⅱ

G408

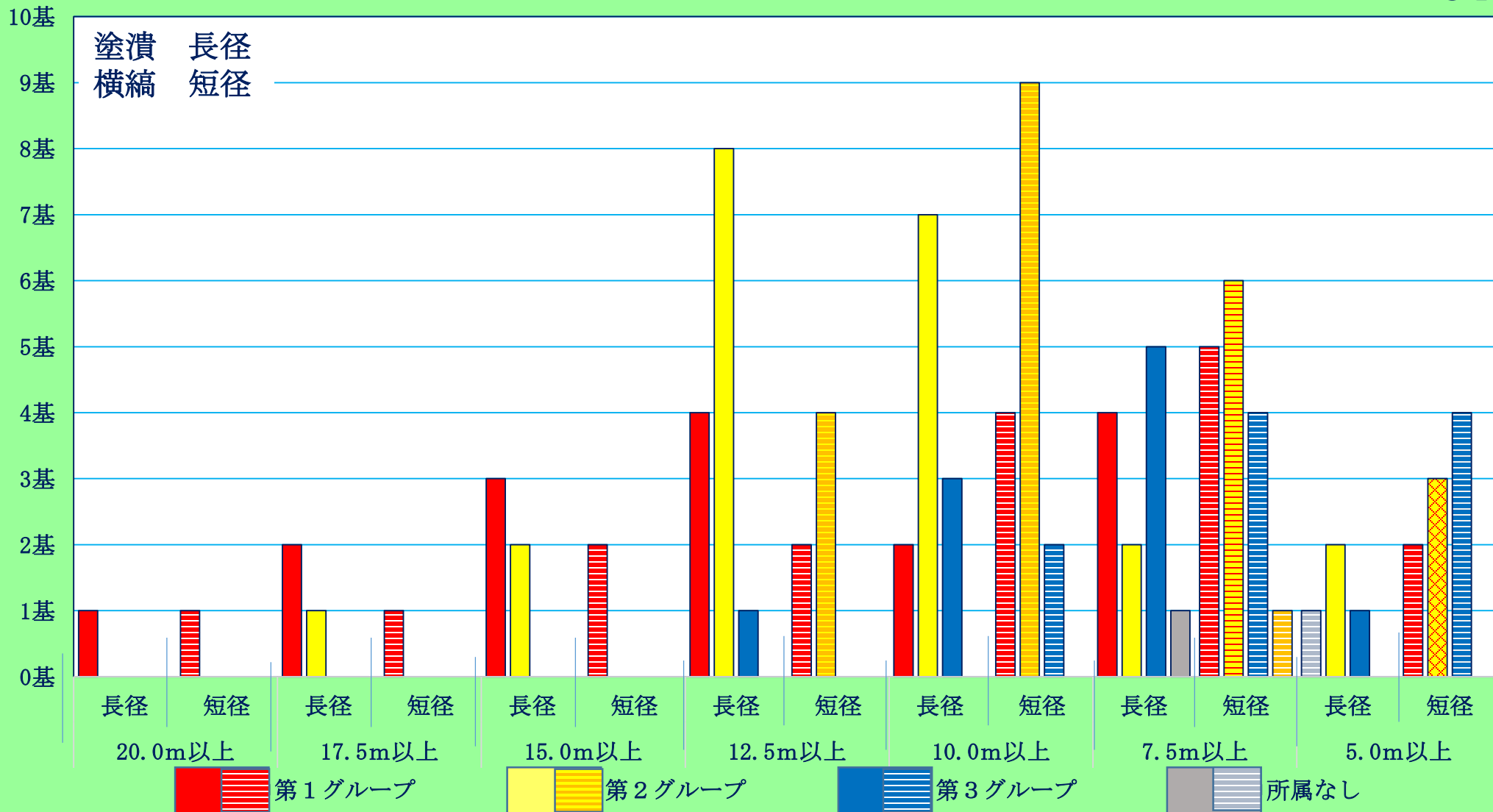
- 第1グループ
- 第2グループ
- 第3グループ
- 所属なし



各古墳の長径を降順で並べた棒グラフで表した。あわせて短径を折線グラフで表示した。

浄願寺山古墳群 長径・短径基数

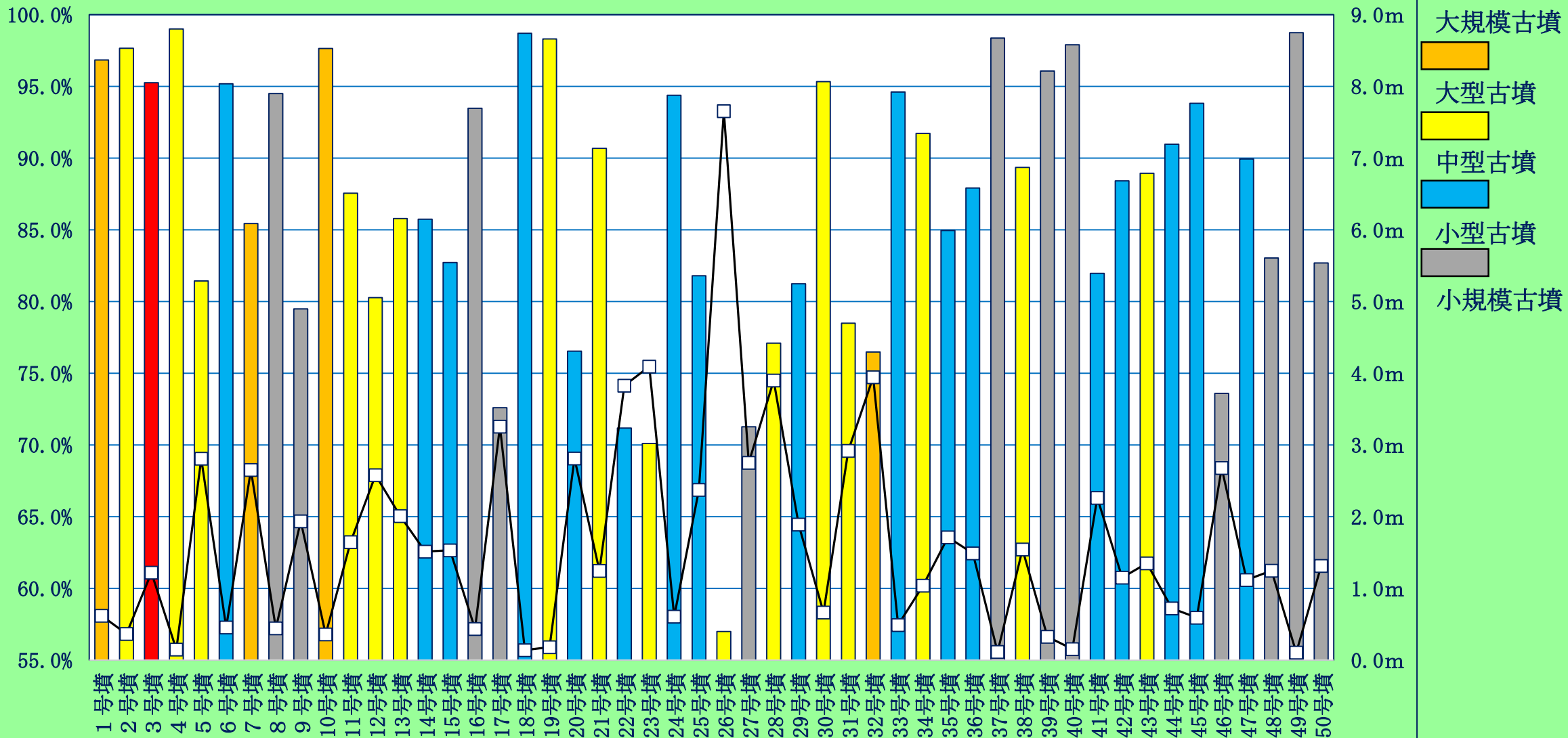
G409



各古墳の長径、短径を7段階に分け、グループ別に基数を棒グラフで表した。区分は第12図に準じた。

浄願寺山古墳群 短径／長径比率および差

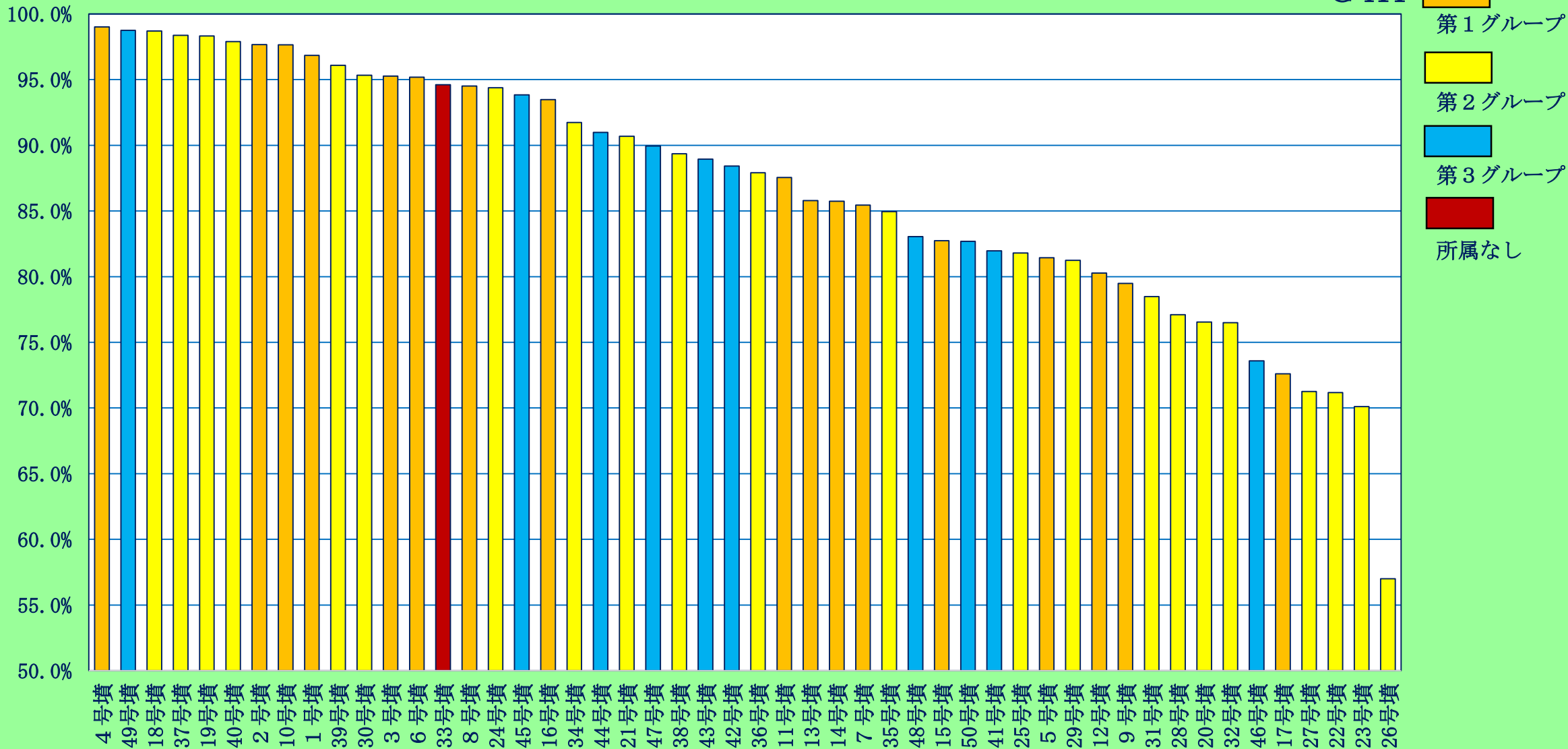
G410



各古墳の長径・短径比率の棒グラフと両径の差を示した折線グラフである。号順に並べている。

浄願寺山古墳群 短径／長径比率

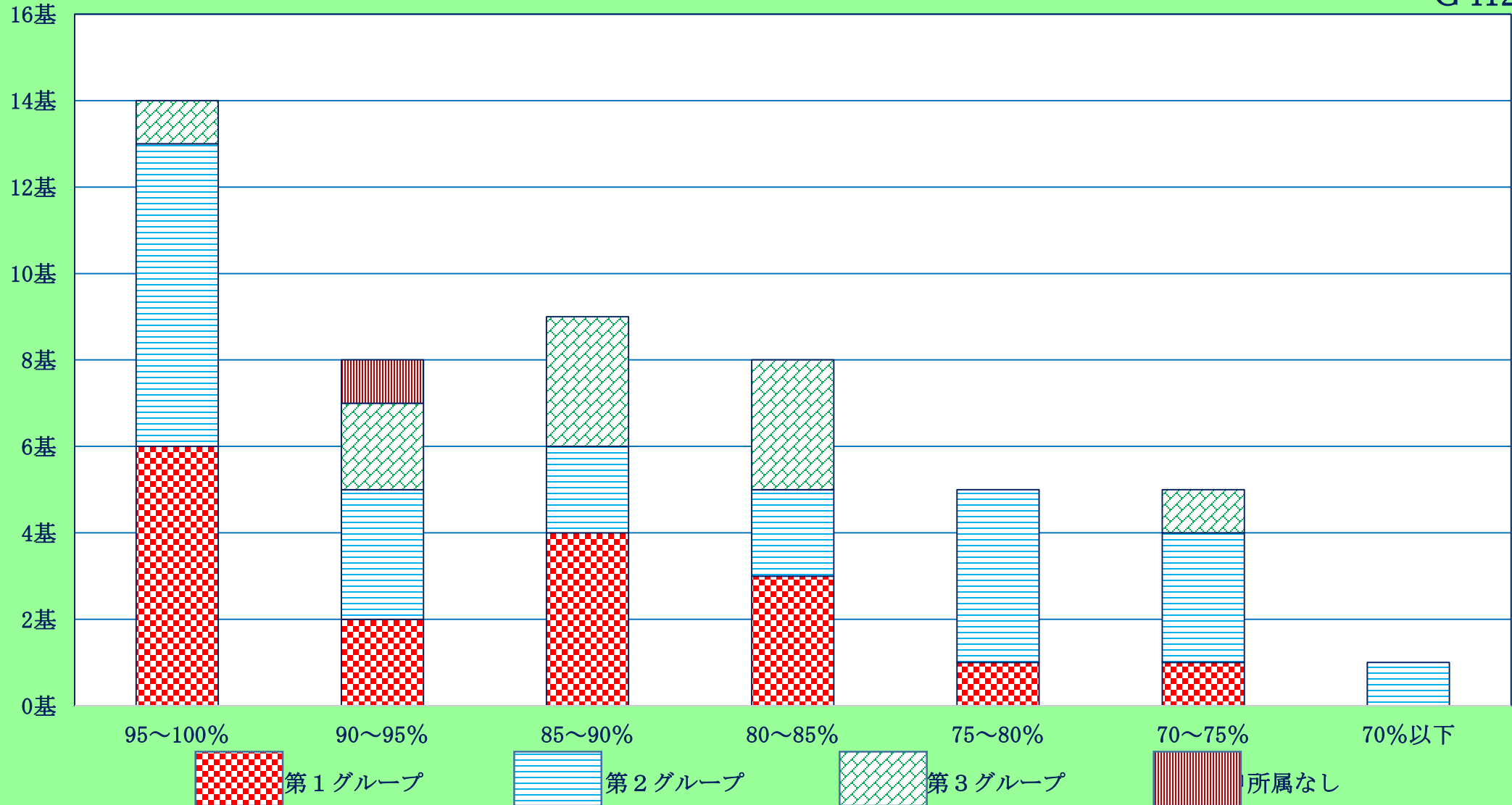
G411



各古墳の長径・短径比率を降順で並べ棒グラフで表した。

浄願寺山古墳群 短径／長径比率基数

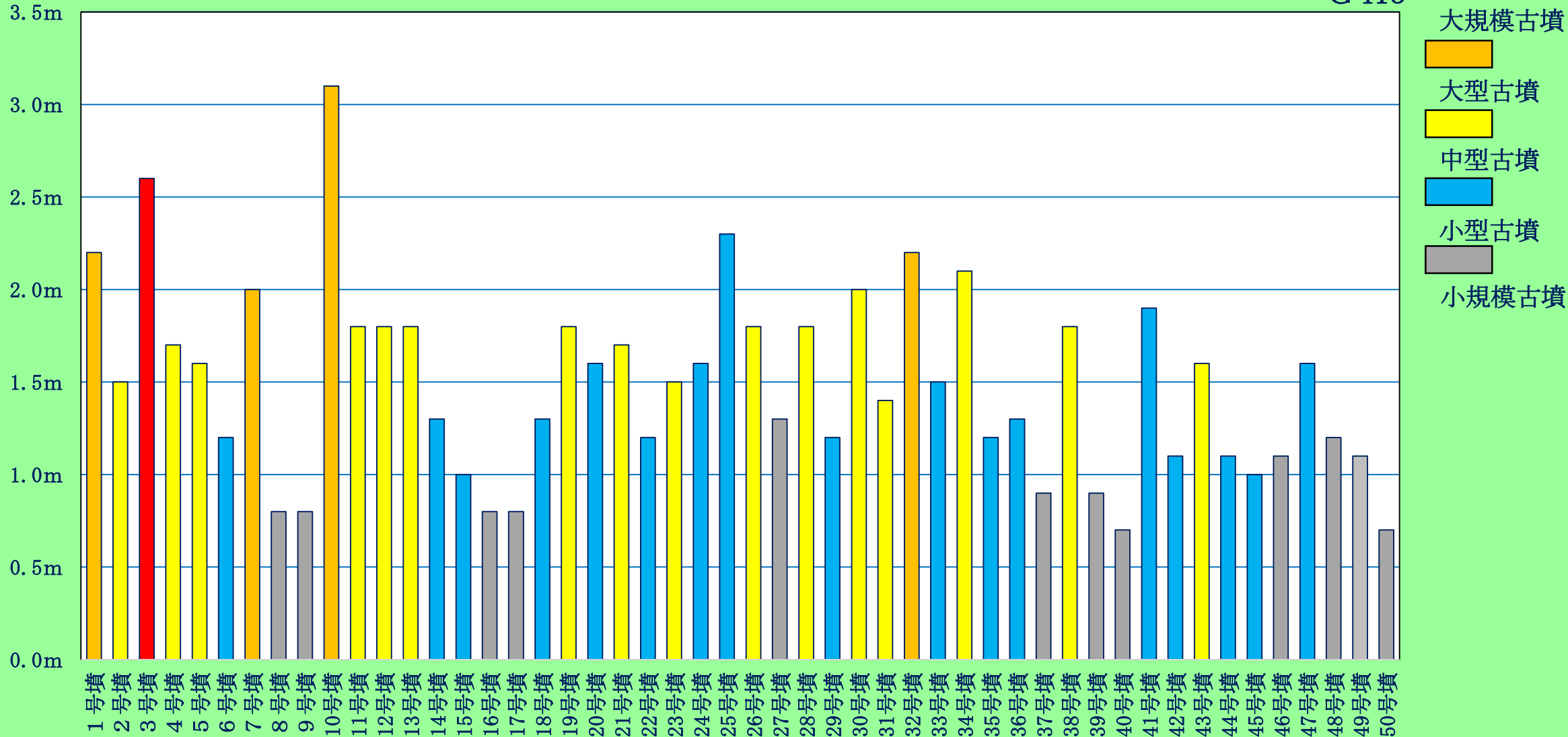
G412



各古墳の長径・短径比率を5段階に分け、基数を棒グラフで表した。区分は第11図と同じである。

浄願寺山古墳群 墳丘高さ比較 I

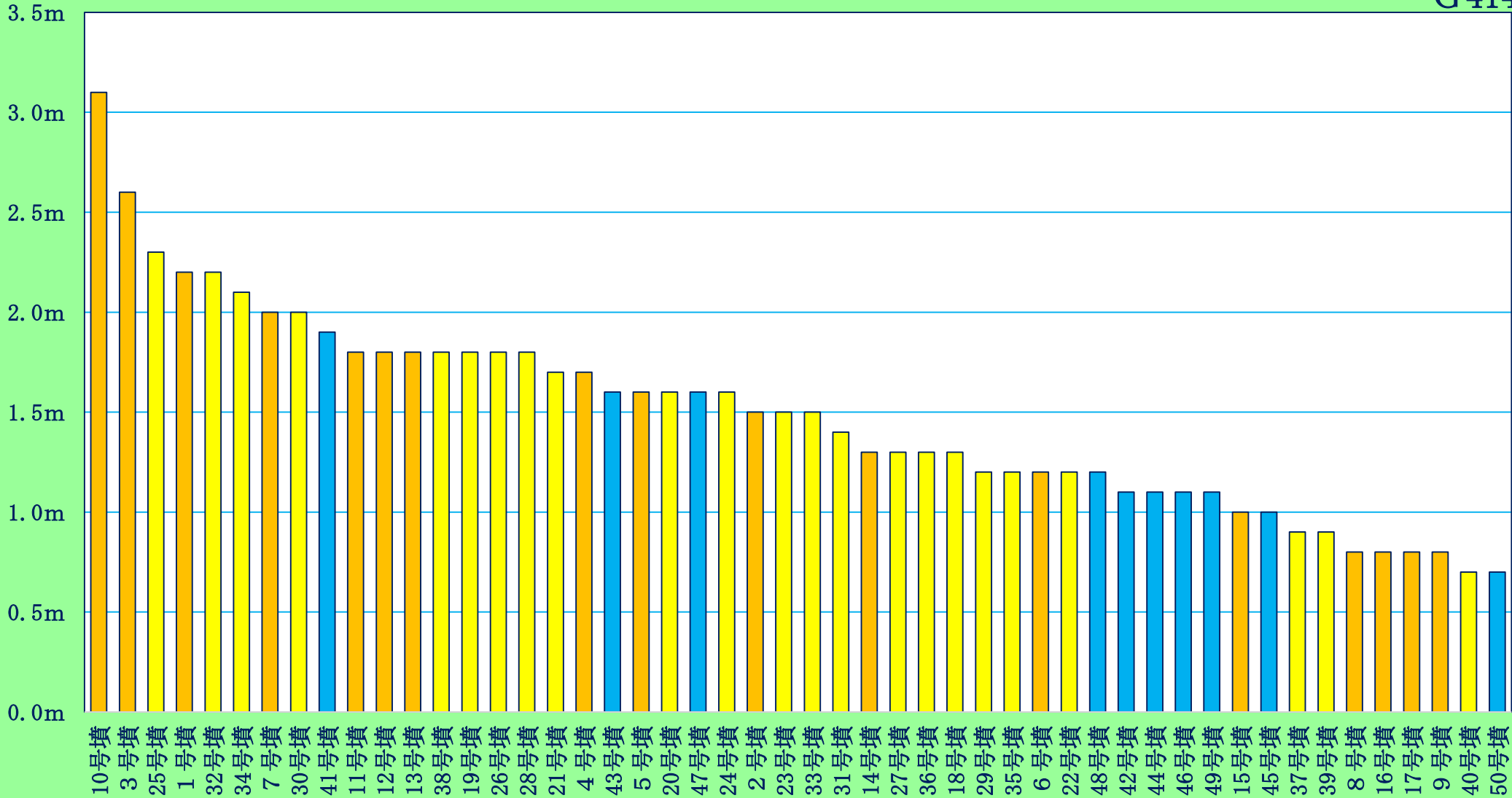
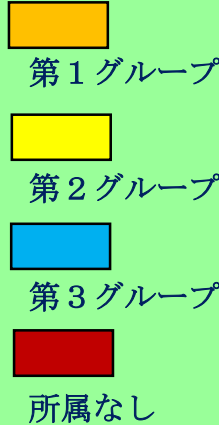
G413



各古墳の高さを号順に並べた棒グラフである。

浄願寺山古墳群 墳丘高さ比較Ⅱ

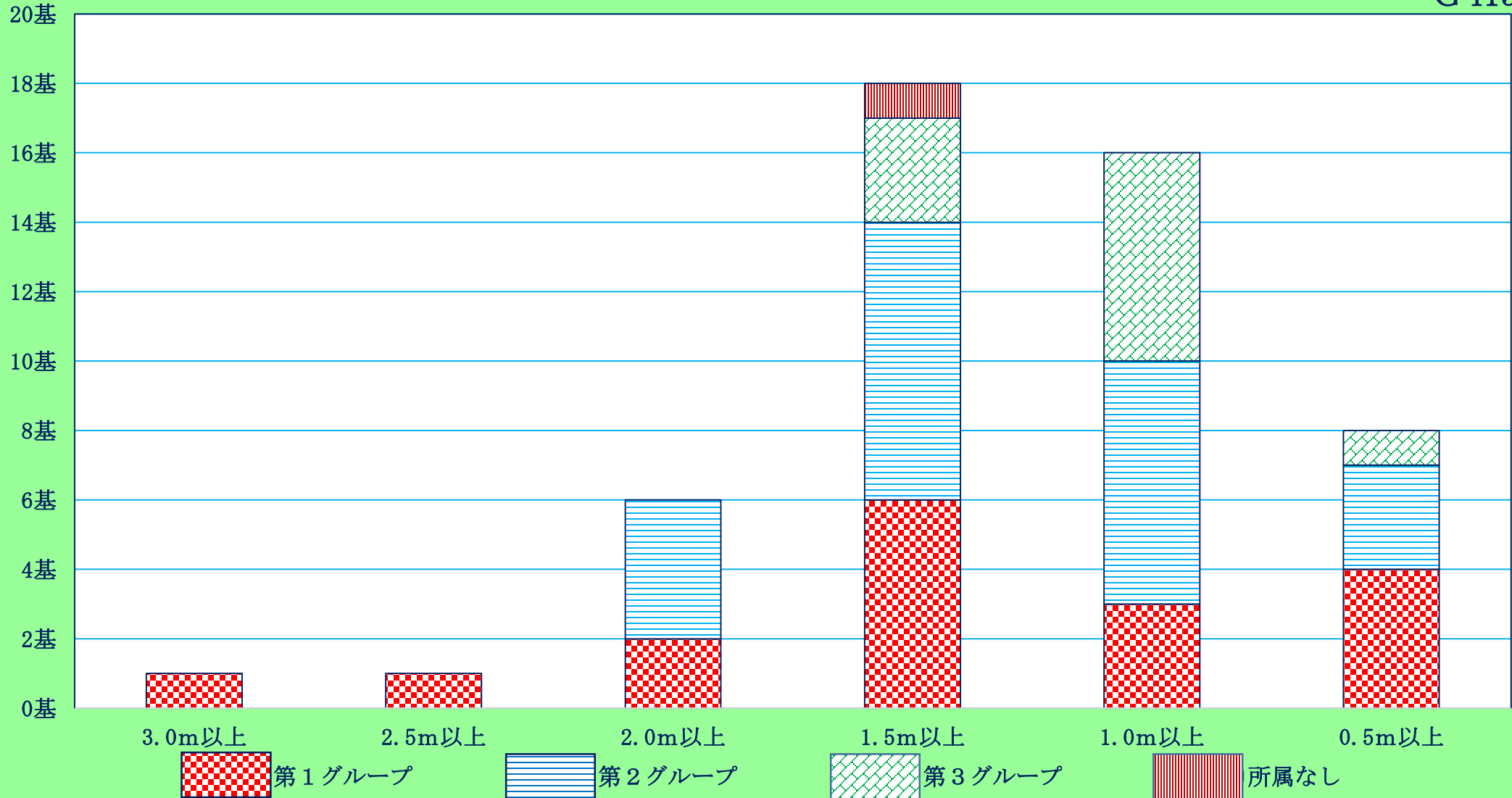
G414



各古墳の高さを降順に並べた棒グラフである。

浄願寺山古墳群 墳丘高さ基数

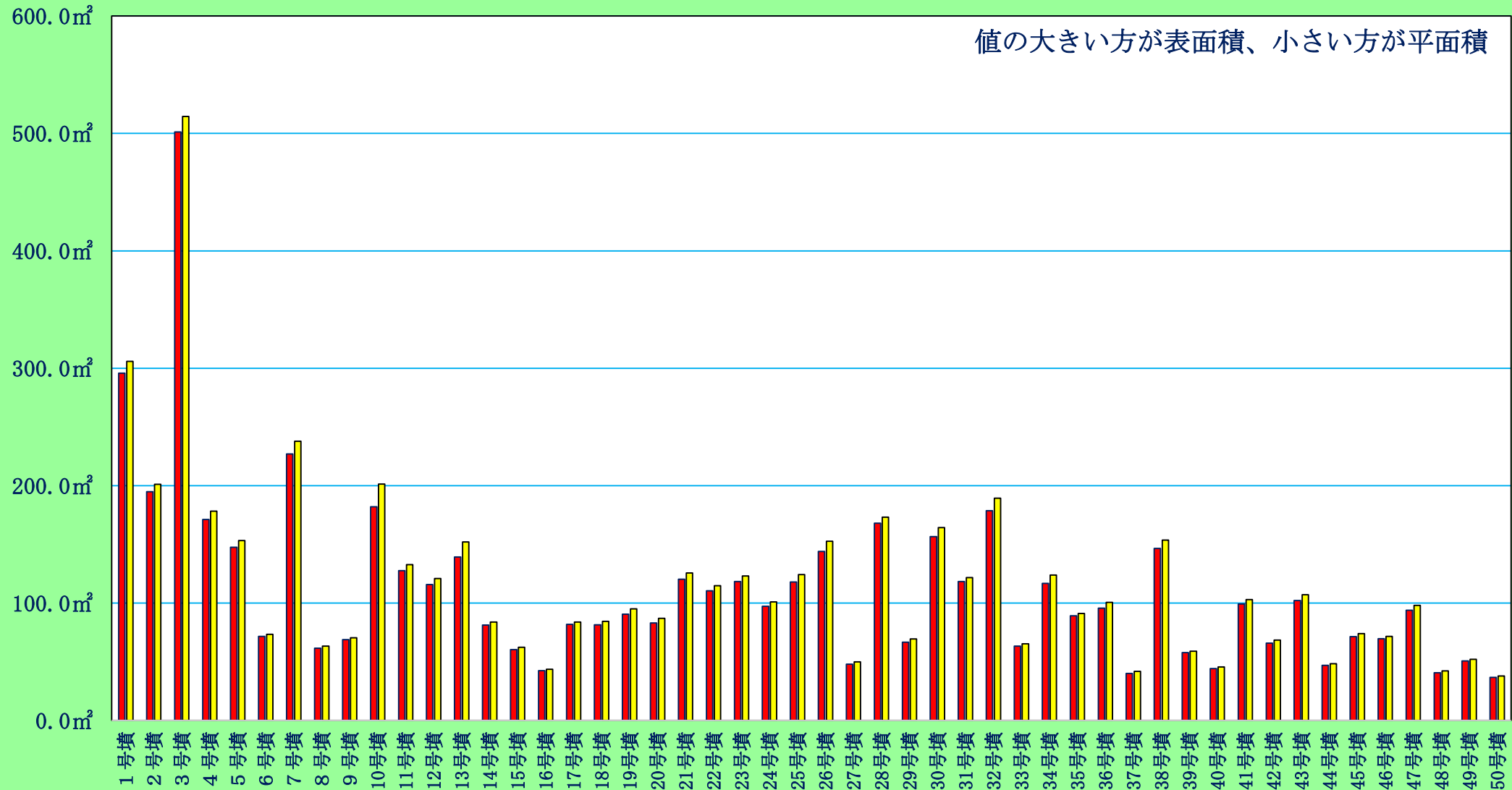
G415



各古墳の高さを6段階に分け、各々の基数を棒グラフで表した。区分は第13図と同じである。

浄願寺山古墳群 平面積・表面積比較 I

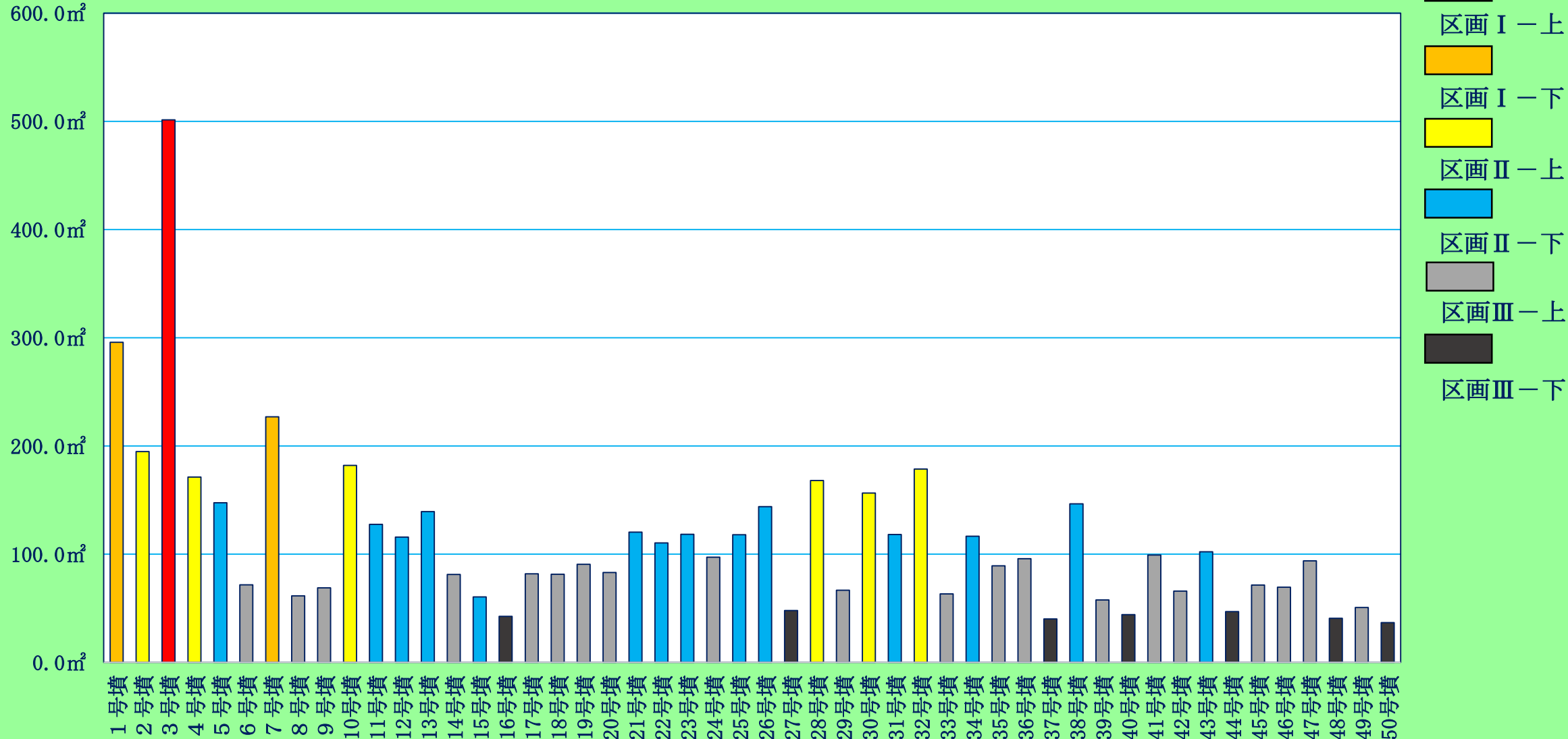
G416



各古墳の平面積・表面積の棒グラフである。号順に並べている。

浄願寺山古墳群 平面積

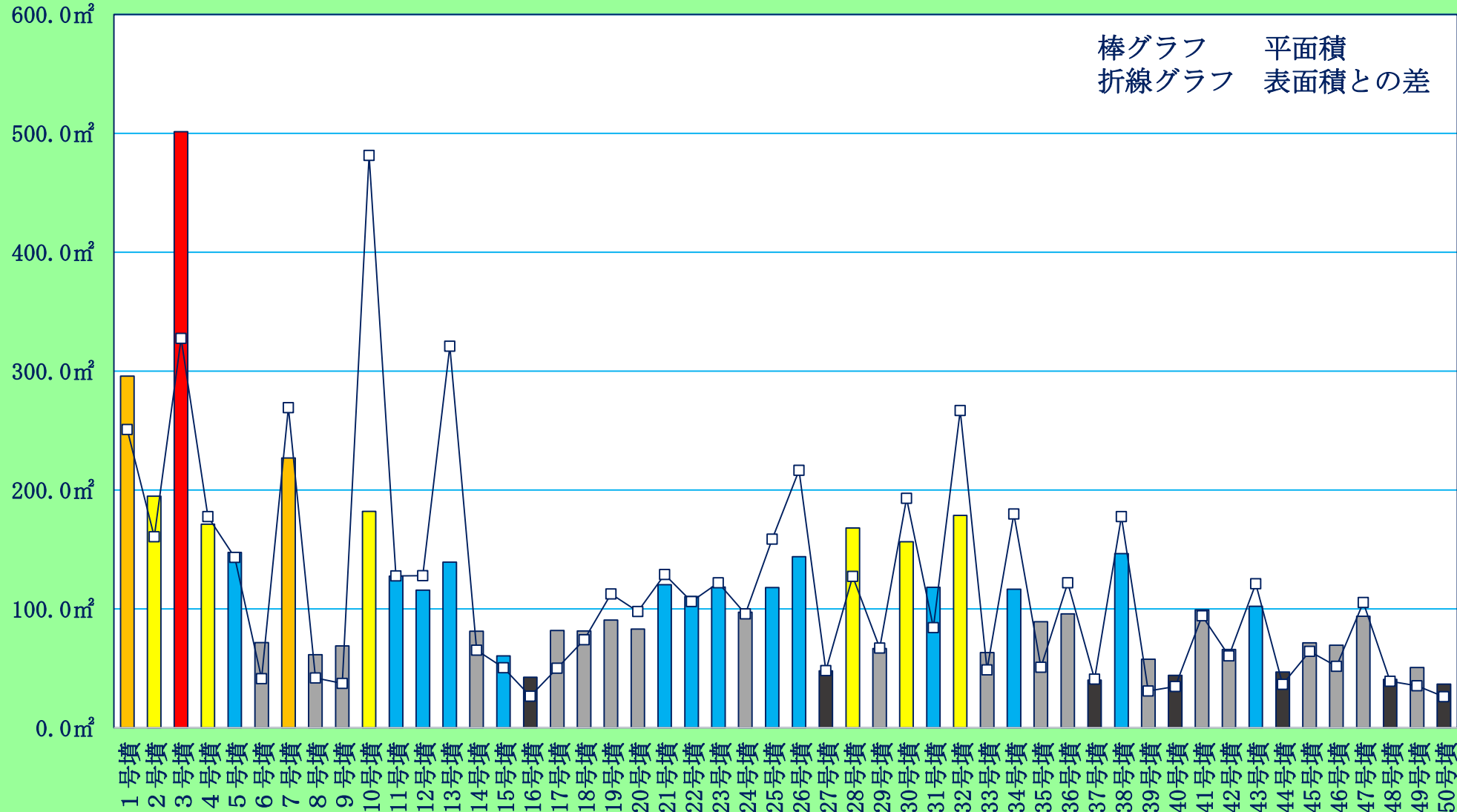
G417



各古墳の平面積を号順に並べた棒グラフ。

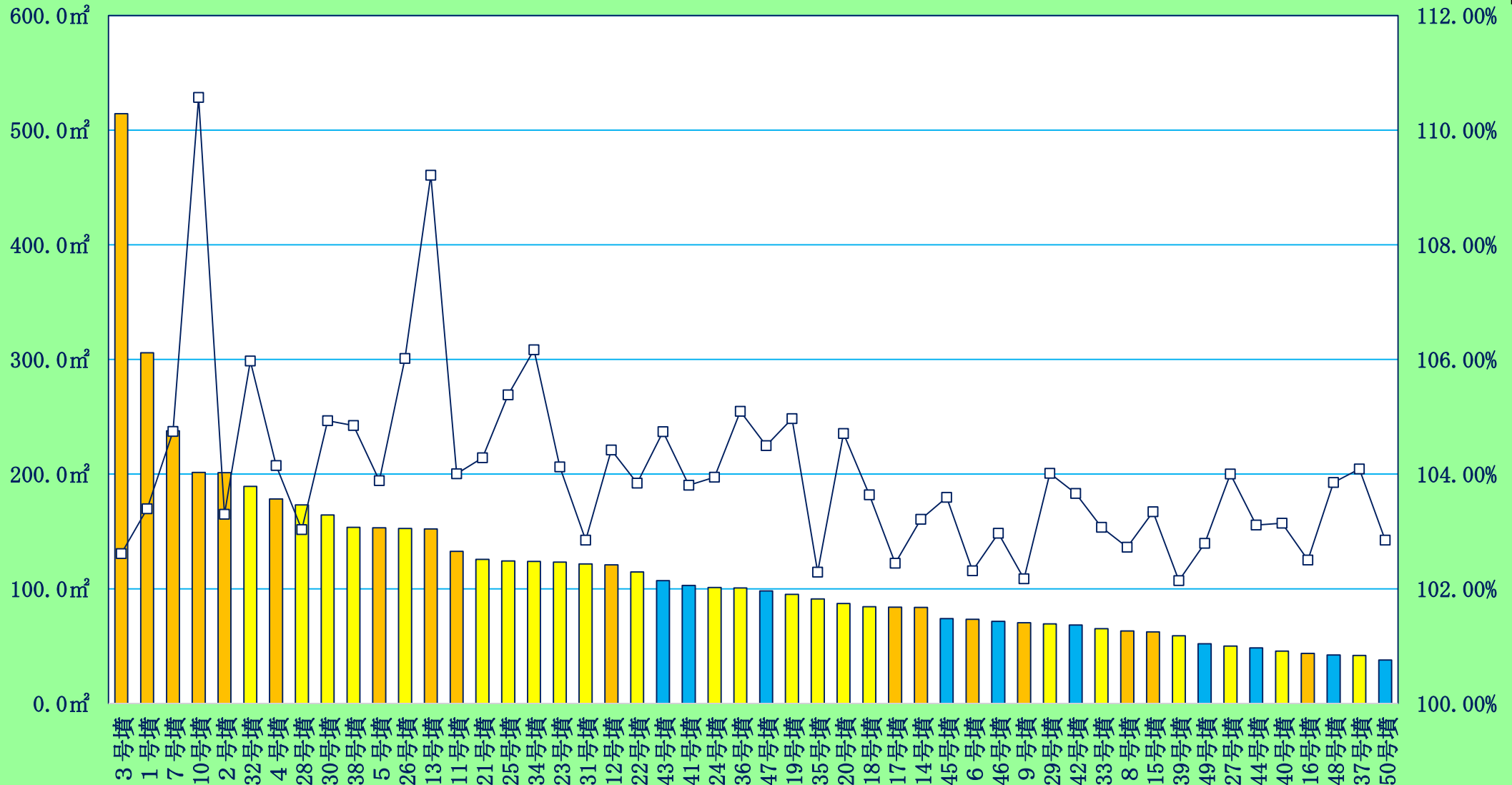
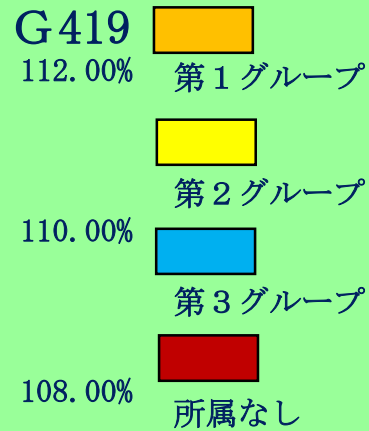
浄願寺山古墳群 平面積・表面積比較Ⅱ

- G418
- 24.0m² 区画Ⅰー上
 - 20.0m² 区画Ⅰー下
 - 16.0m² 区画Ⅱー上
 - 12.0m² 区画Ⅱー下
 - 8.0m² 区画Ⅲー上
 - 4.0m² 区画Ⅲー下
 - 0.0m²



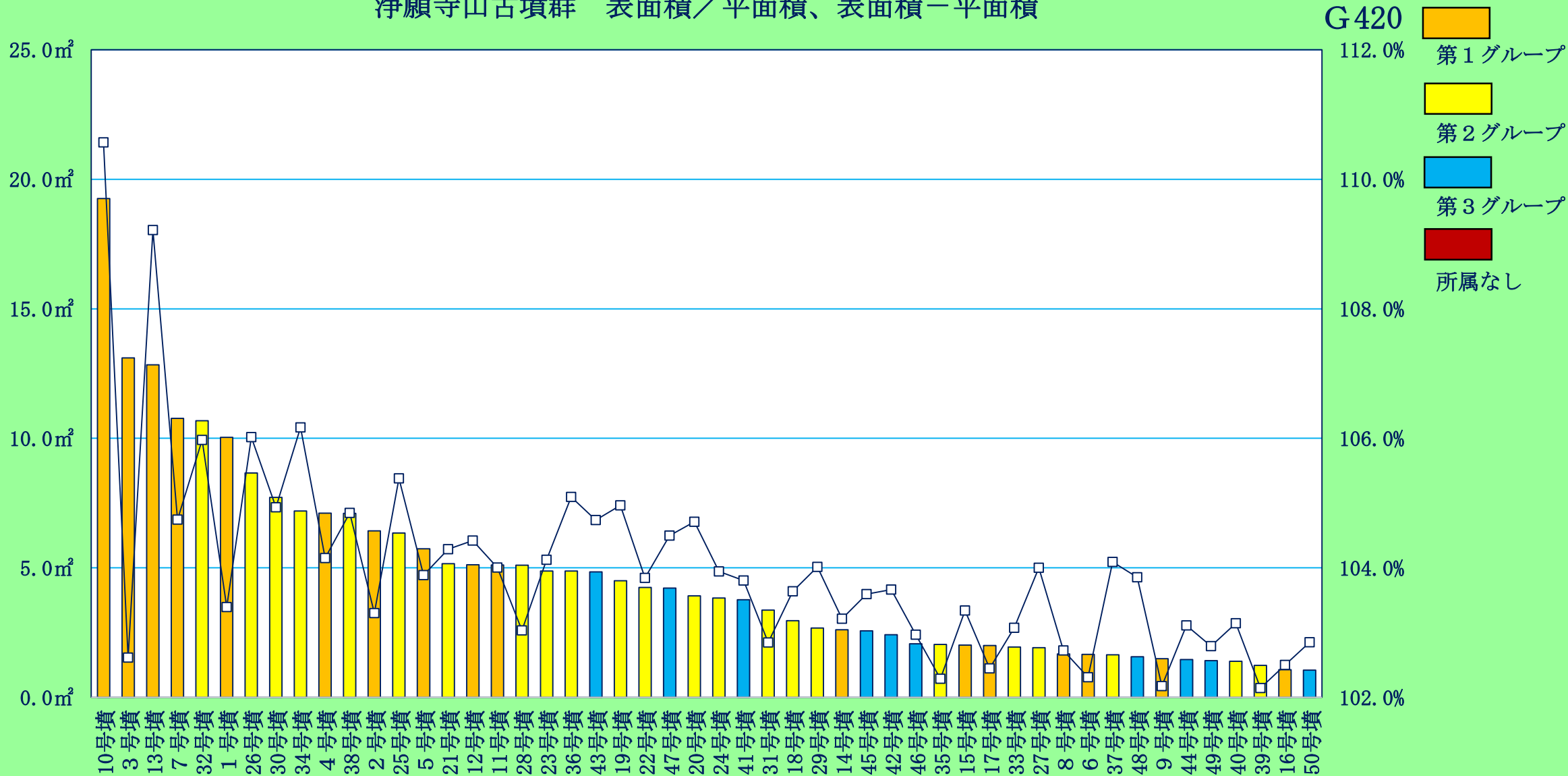
各古墳の平面積を号順に並べた棒グラフで、表面積と平面積の差について折線グラフで示した。

浄願寺山古墳群 表面積 表面積／平面積比率



各古墳の表面積を降順に並べた棒グラフで、表面積と平面積の百分率について折線グラフで示した。

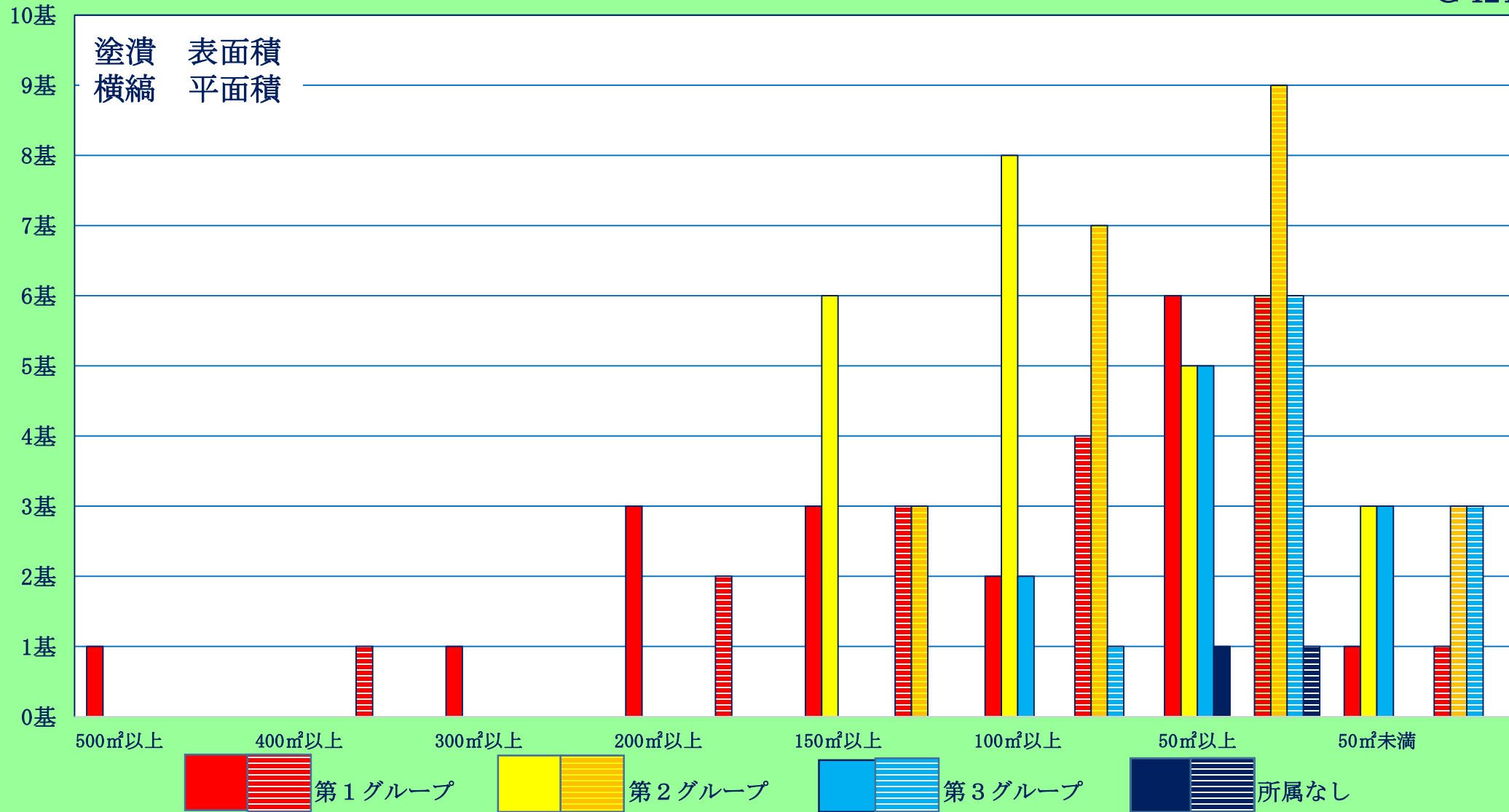
浄願寺山古墳群 表面積／平面積、表面積－平面積



各古墳の表面積と平面積の差を降順に並び、表面積と平面積の比率を折れ線グラフで示した。

浄願寺山古墳群 表面積、平面積基数

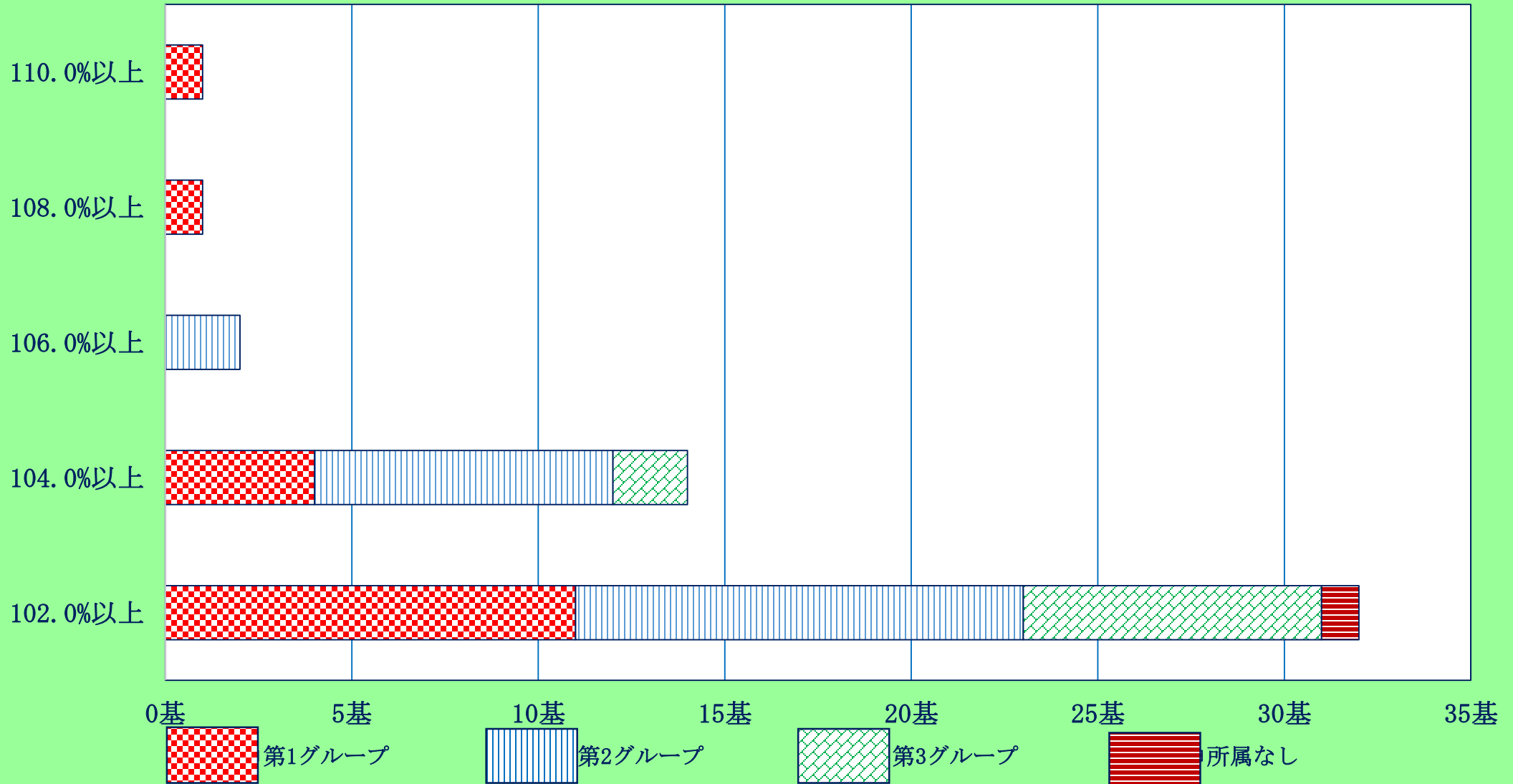
G421



各古墳の基数を表面積と平面積についてグループごとに棒グラフで表示した。

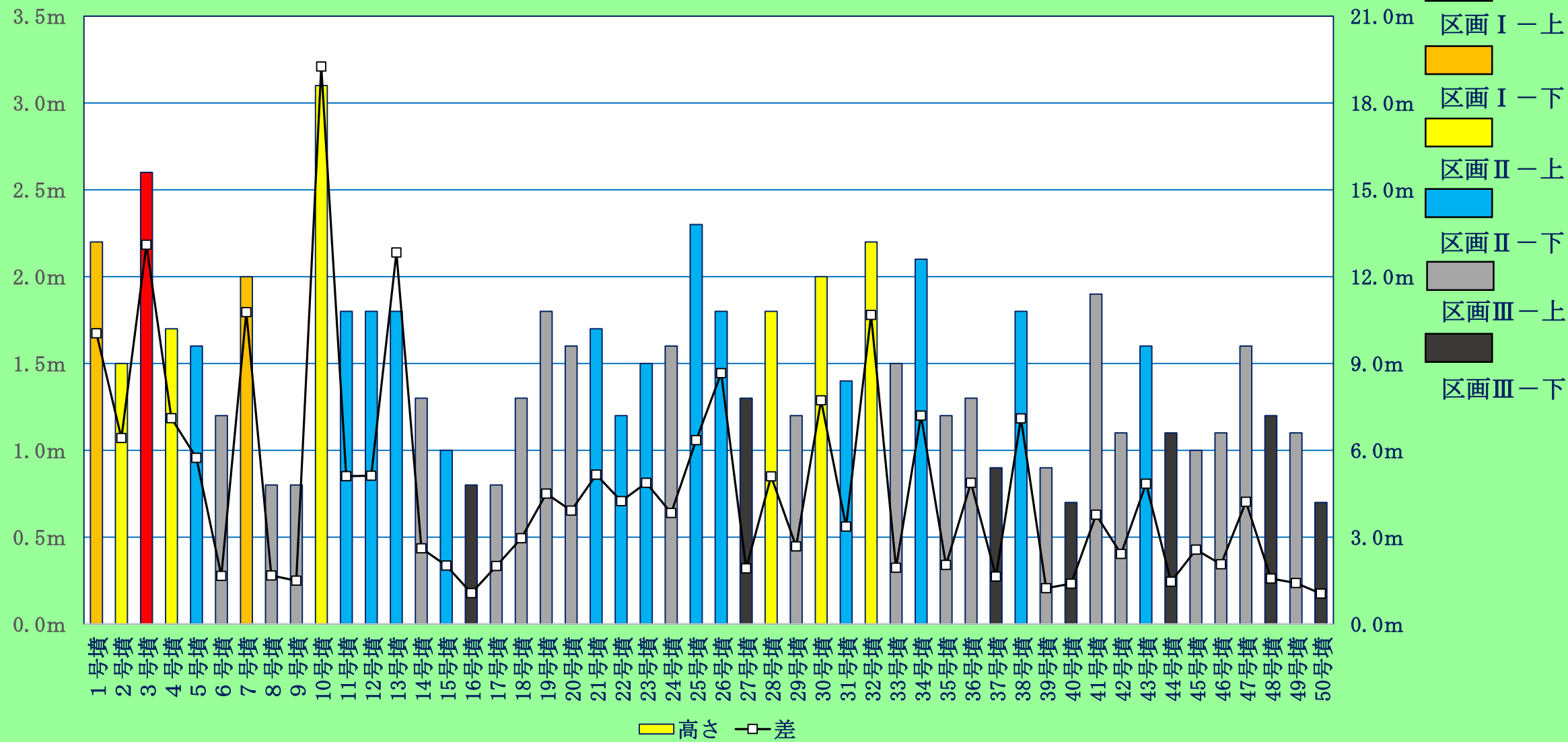
浄願寺山古墳群 表面積／平面積基数

G422

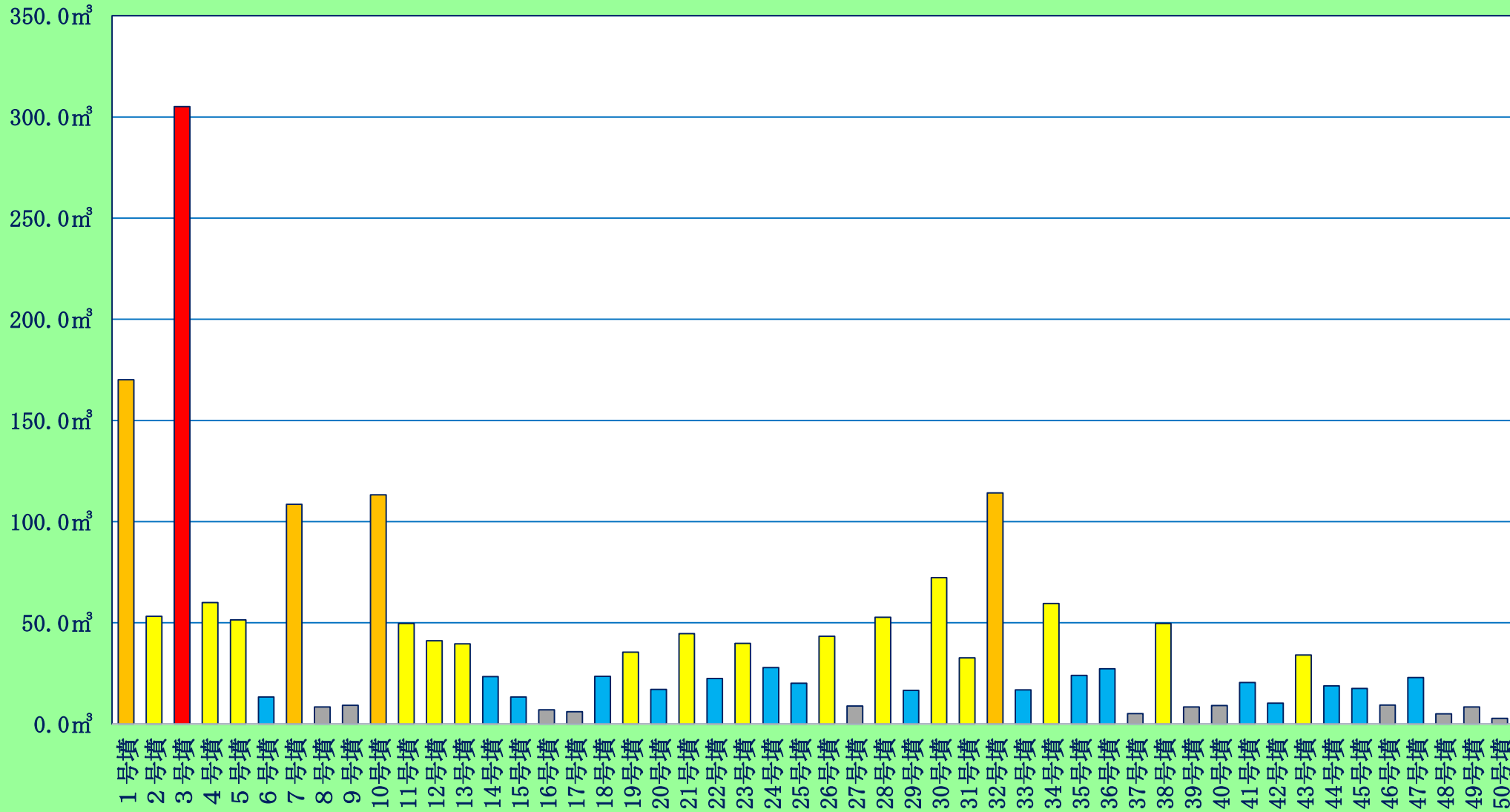
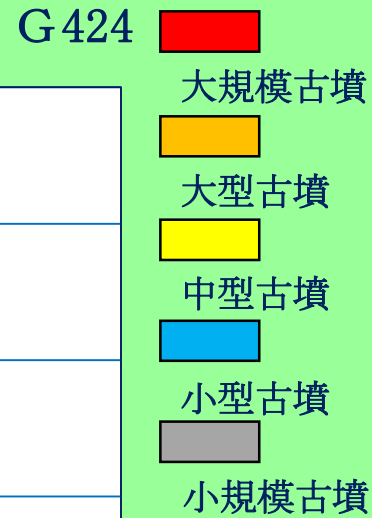


各古墳の表面積／平面積比率を基数に分け棒グラフで表示した。

浄願寺山古墳群 平面積－表面積 高さ



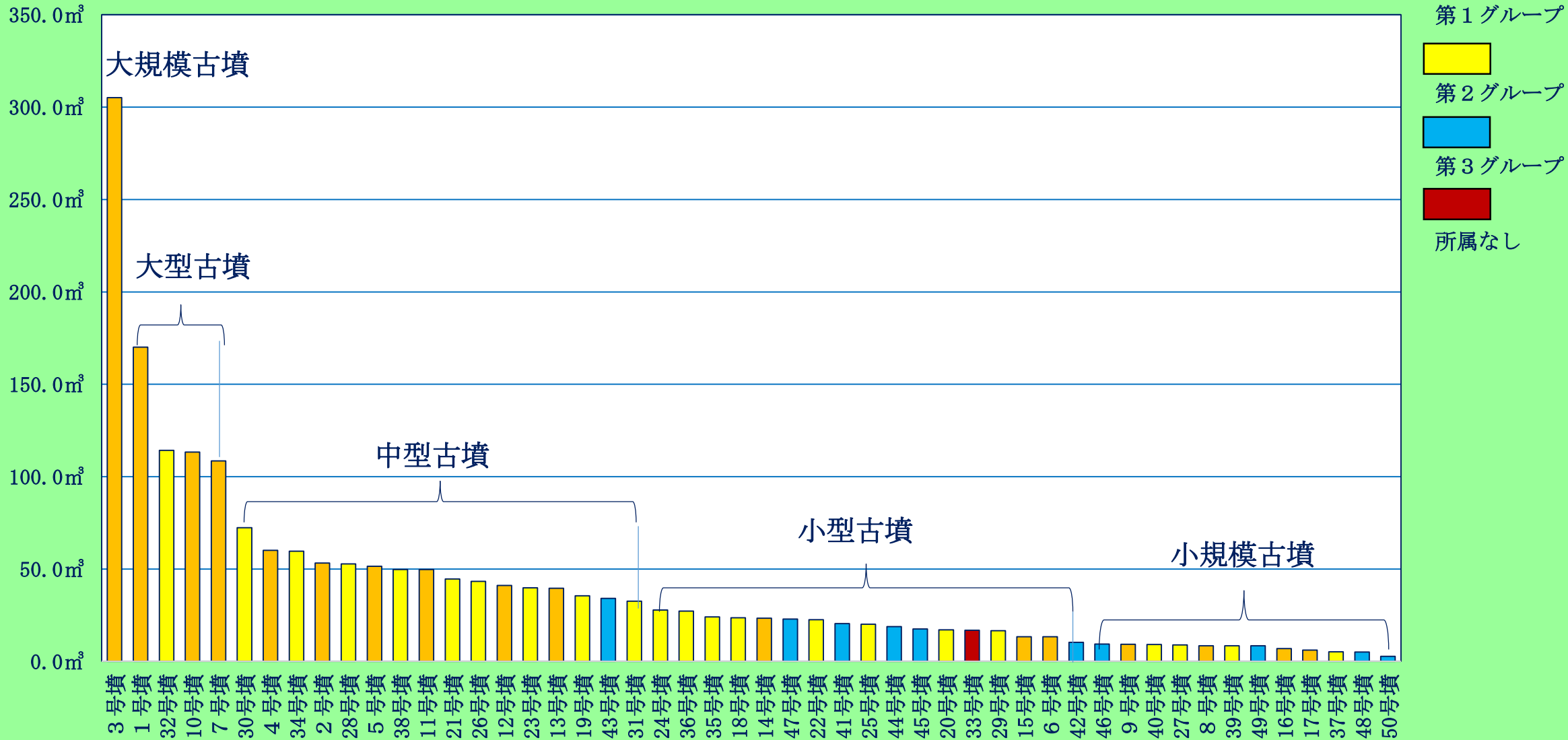
浄願寺山古墳群 体積 I



各古墳の体積の値を号順に並べた棒グラフである。

浄願寺山古墳群 体積Ⅱ

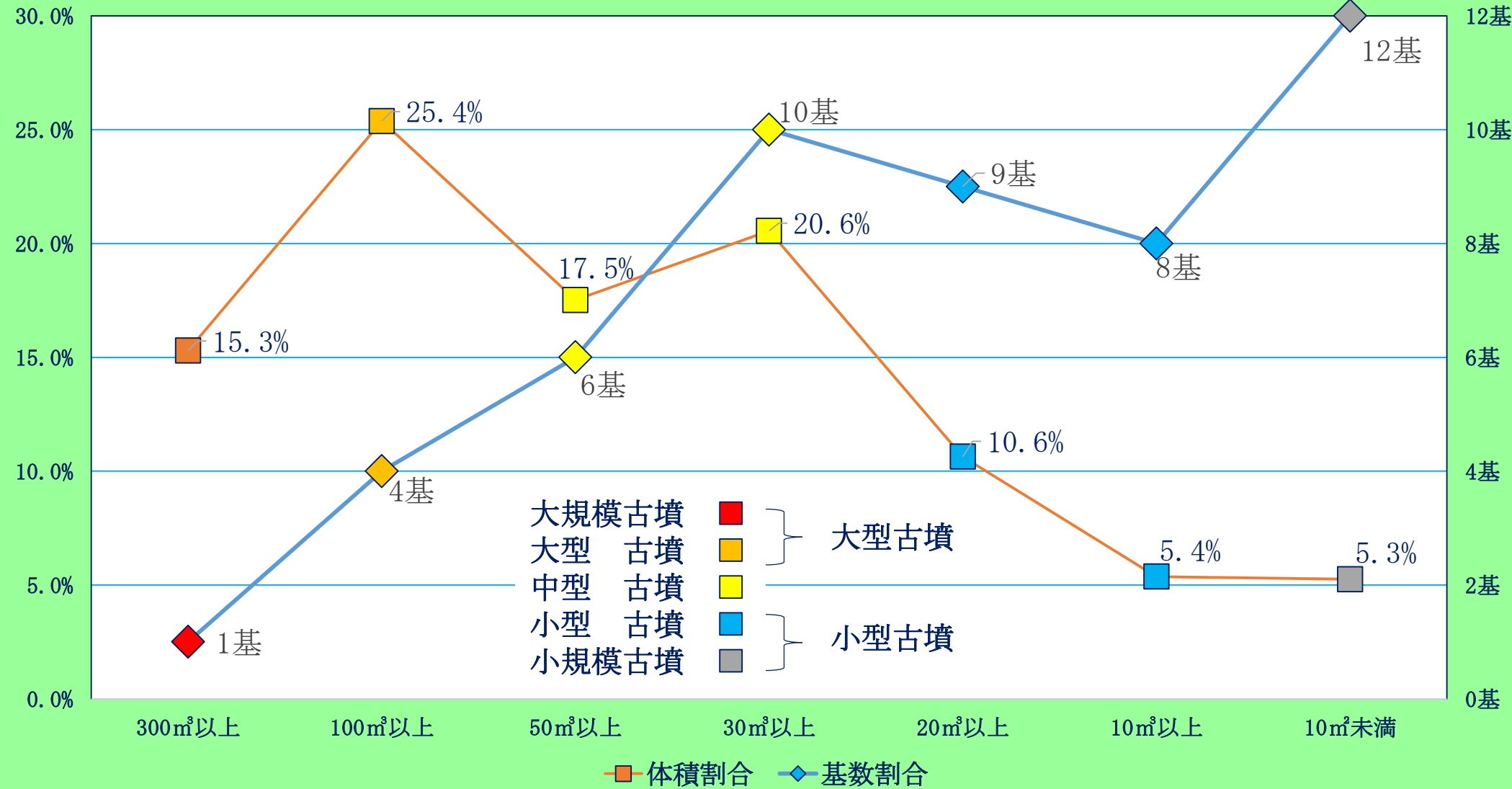
G425



各古墳の体積の値を降順に並べた棒グラフである。

浄願寺山古墳群 基数と総体積比較

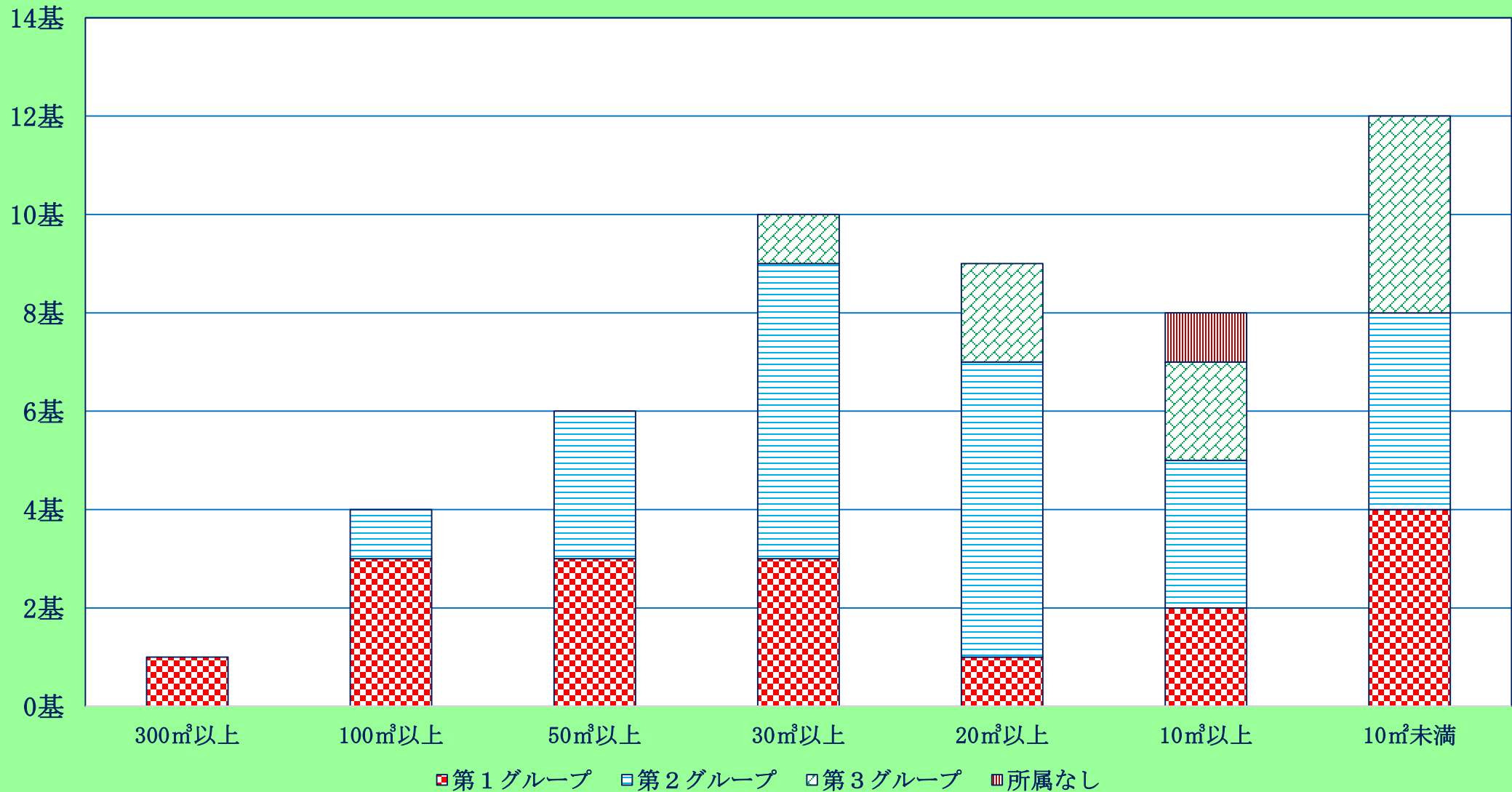
G426



各古墳の体積および基数の比率を表した折れ線グラフである。

浄願寺山古墳群 体積基数

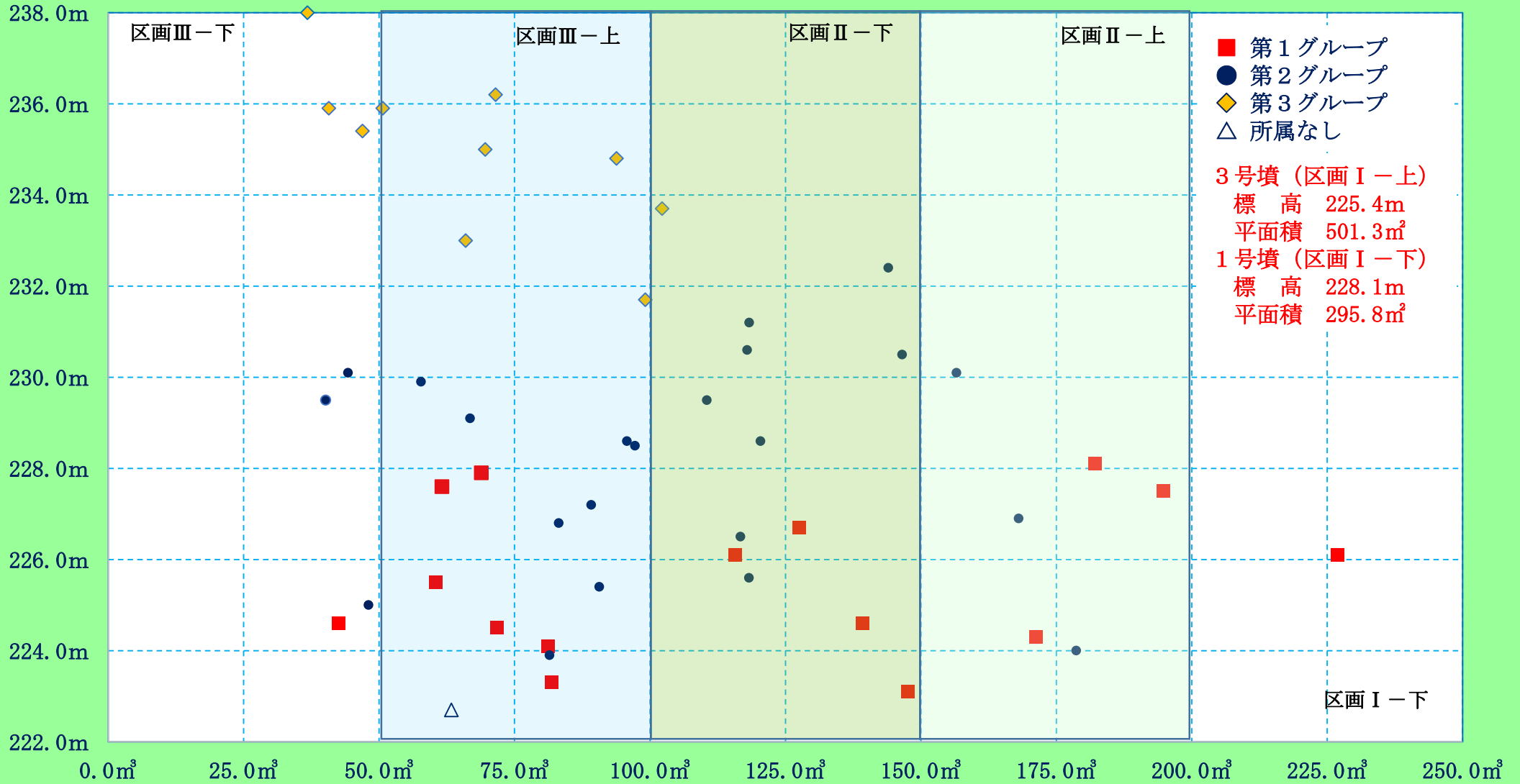
G427



各古墳の体積の値を区分ごとに基数で表した棒グラフである。グループごとにも分けている。

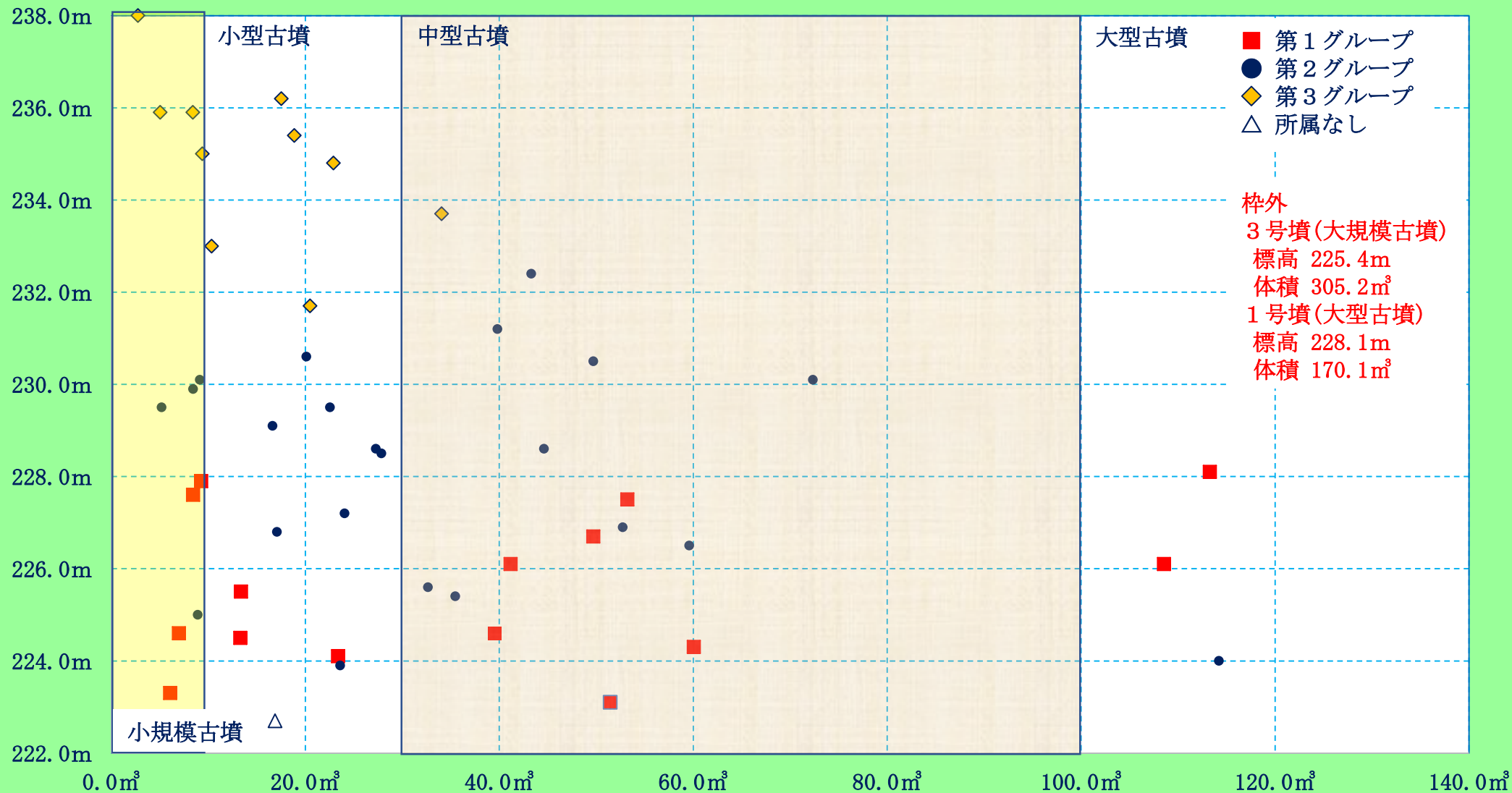
浄願寺山古墳群 立地標高・平面積比較

G428



浄願寺山古墳群 立地標高・体積比較

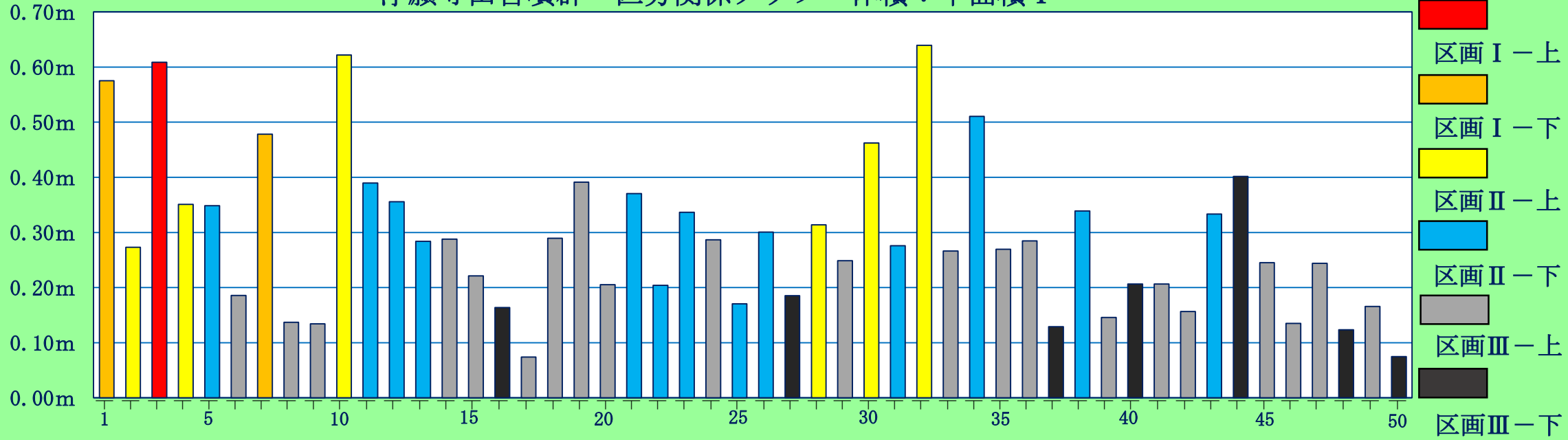
G429



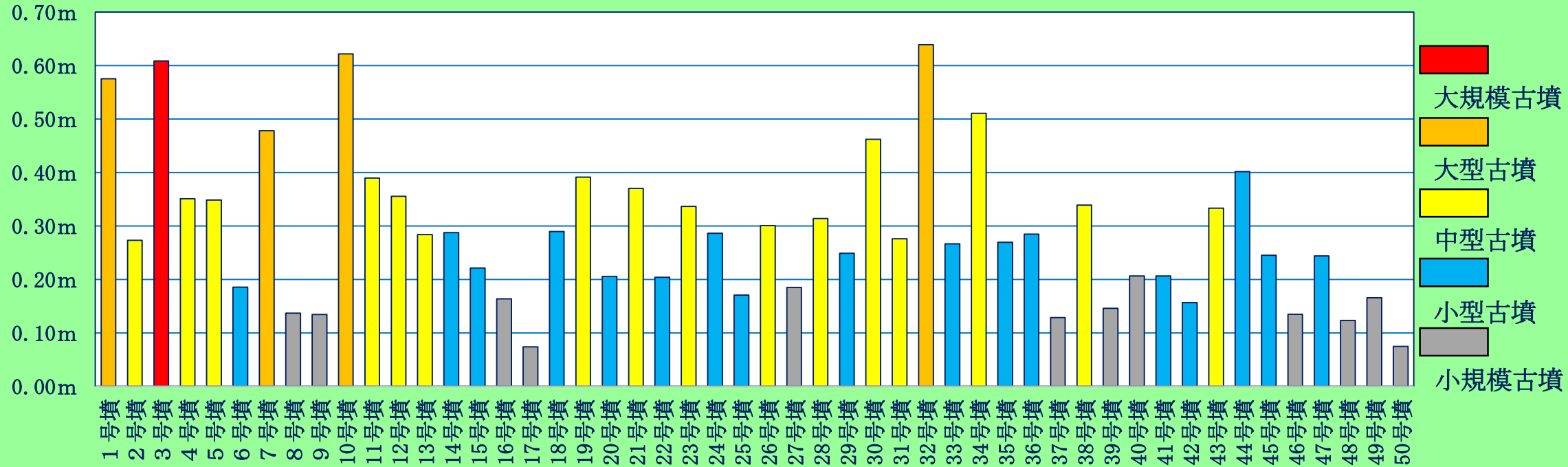
浄願寺山古墳群 区分関係グラフ 体積÷平面積 I

G431

「平面積を基準とした区分との対比」



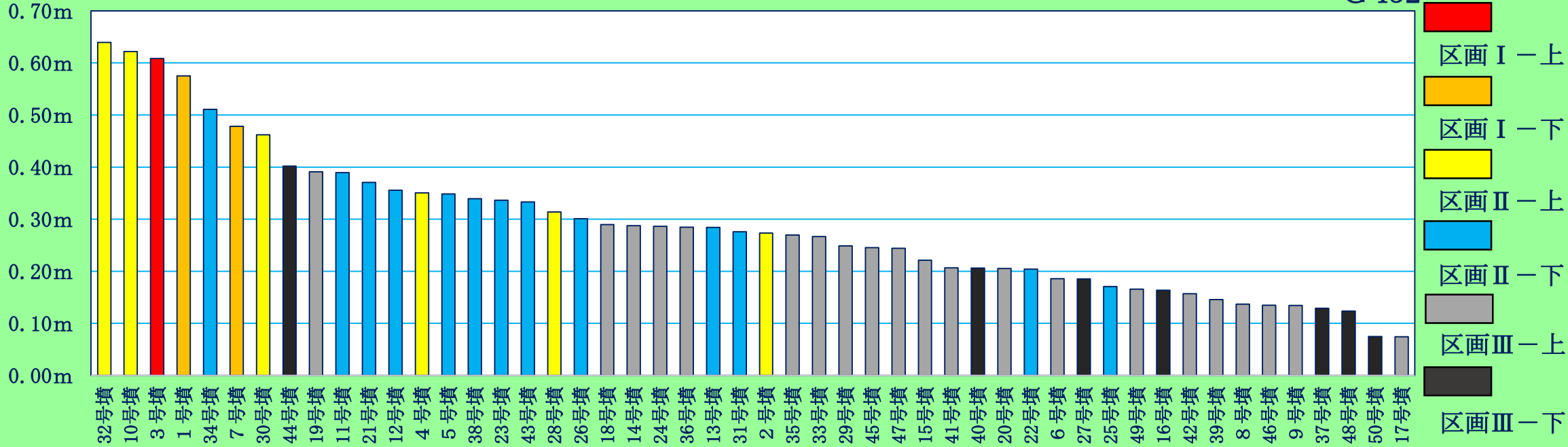
「体積を基準とした区分との対比」



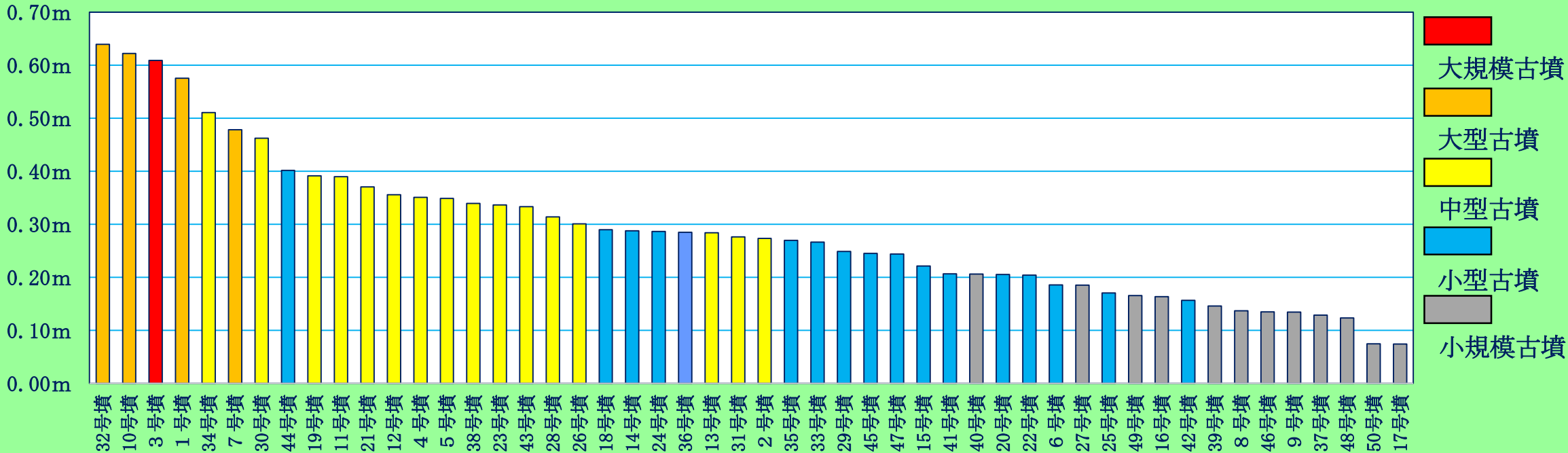
浄願寺山古墳群 区分関係グラフ 体積÷平面積Ⅱ

G432

「平面積を基準とした区分との対比」



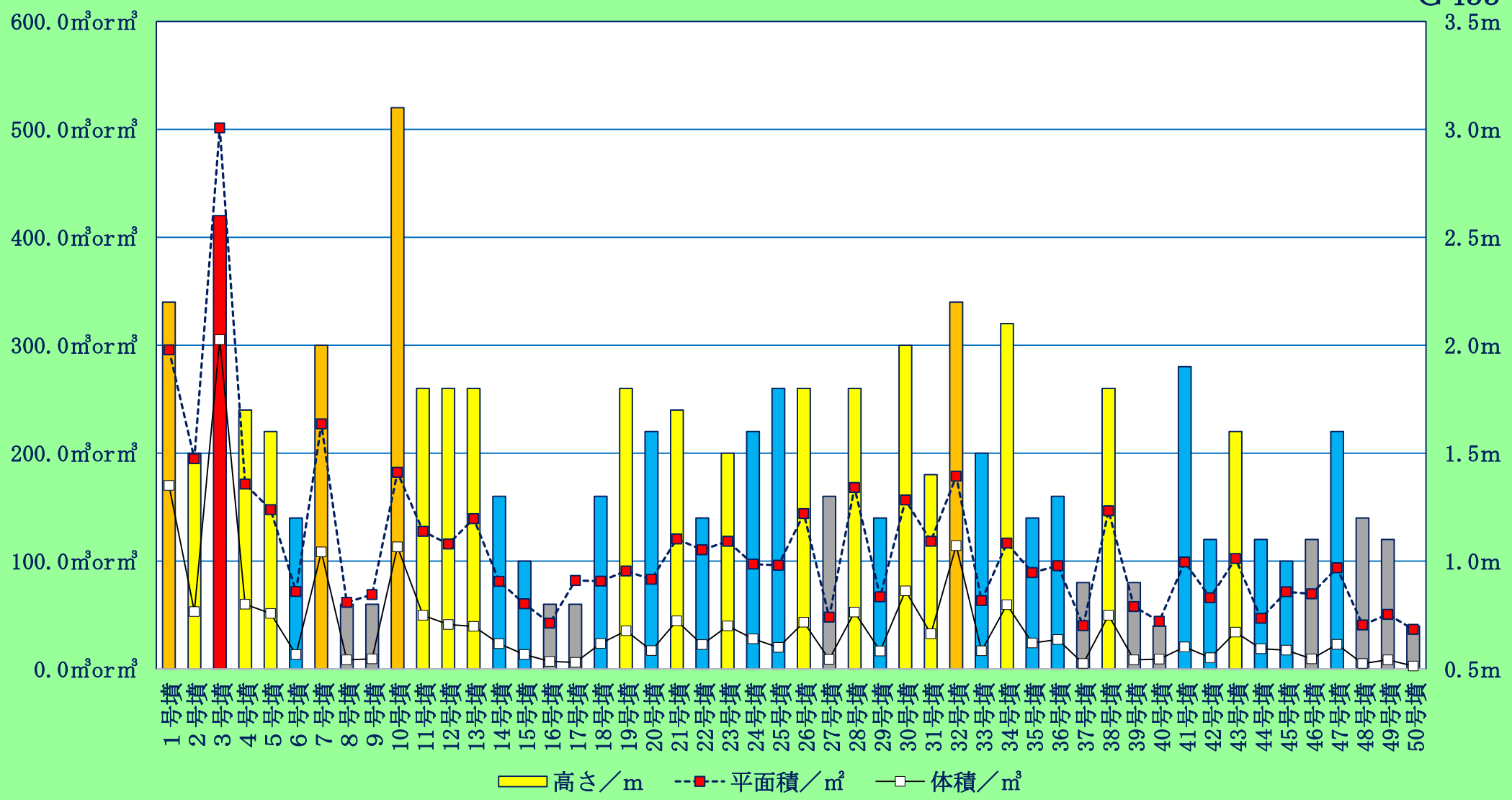
「体積を基準とした区分との対比」



浄願寺山古墳群 高さ、平面積、体積比較

G433

- 大規模古墳
- 大型古墳
- 中型古墳
- 小型古墳
- 小規模古墳

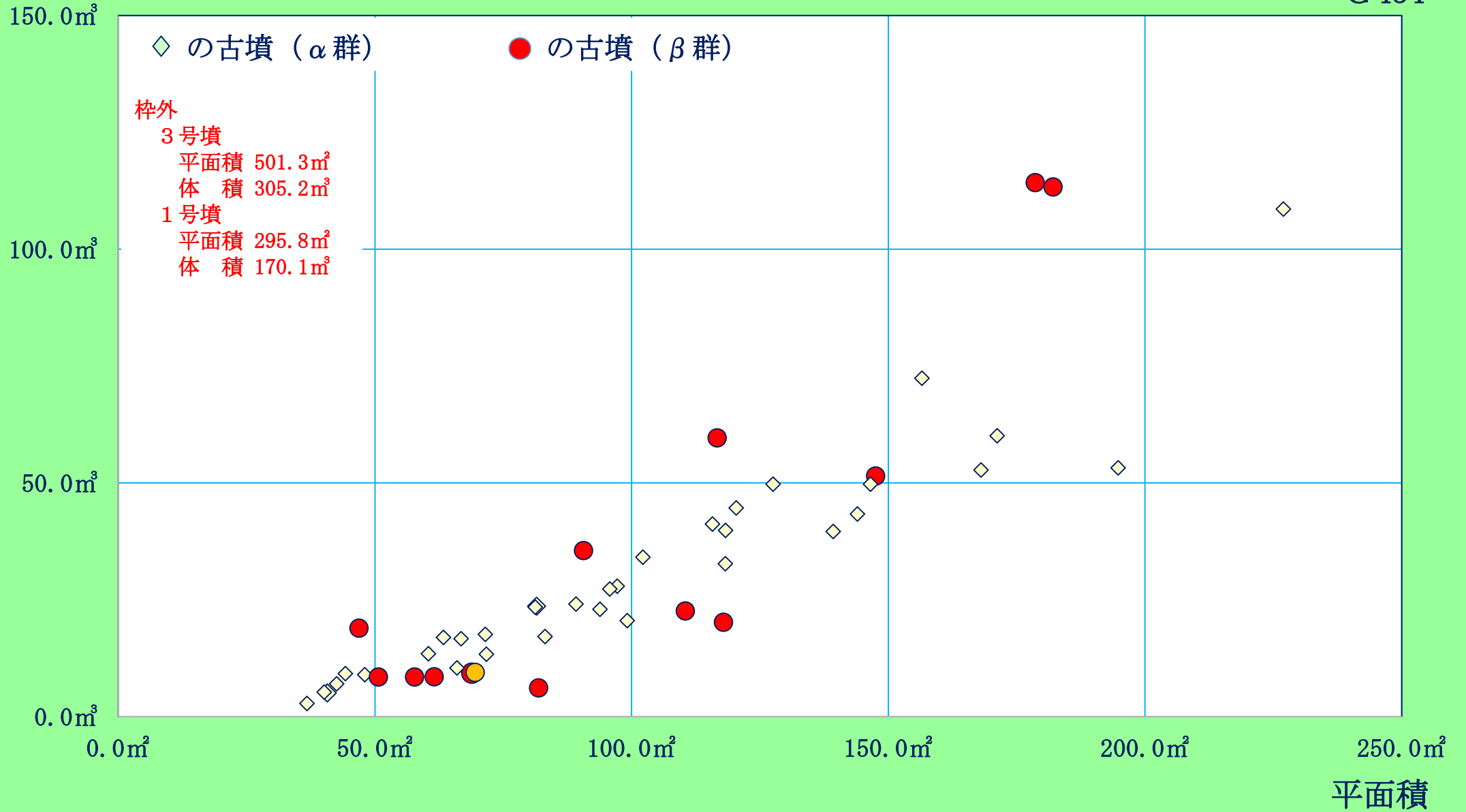


各古墳の高さ（棒グラフ）、平面積、体積（折線グラフ）を各々の数値を号順に並べた。

体積

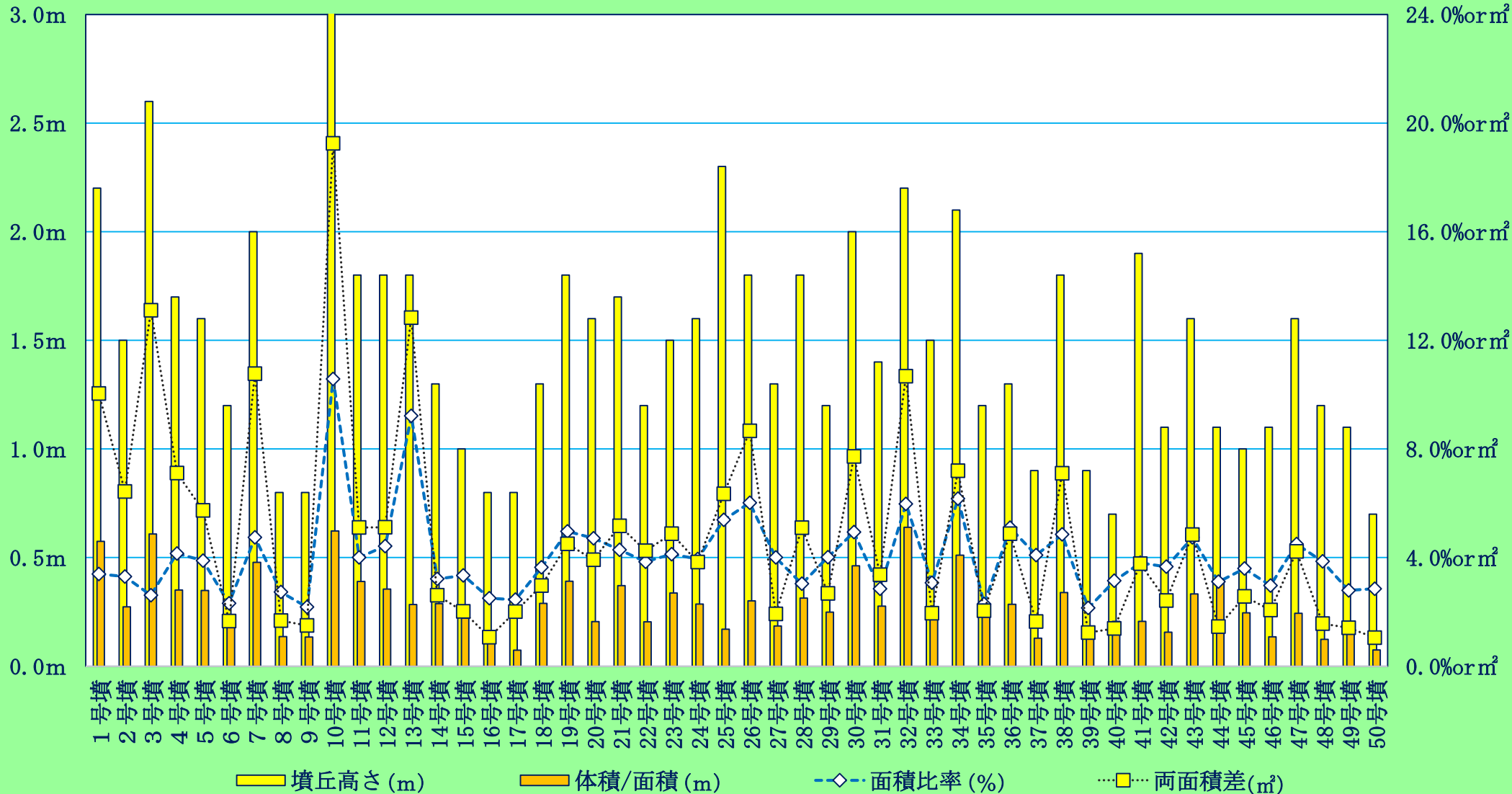
浄願寺山古墳群 平面積と体積

G434



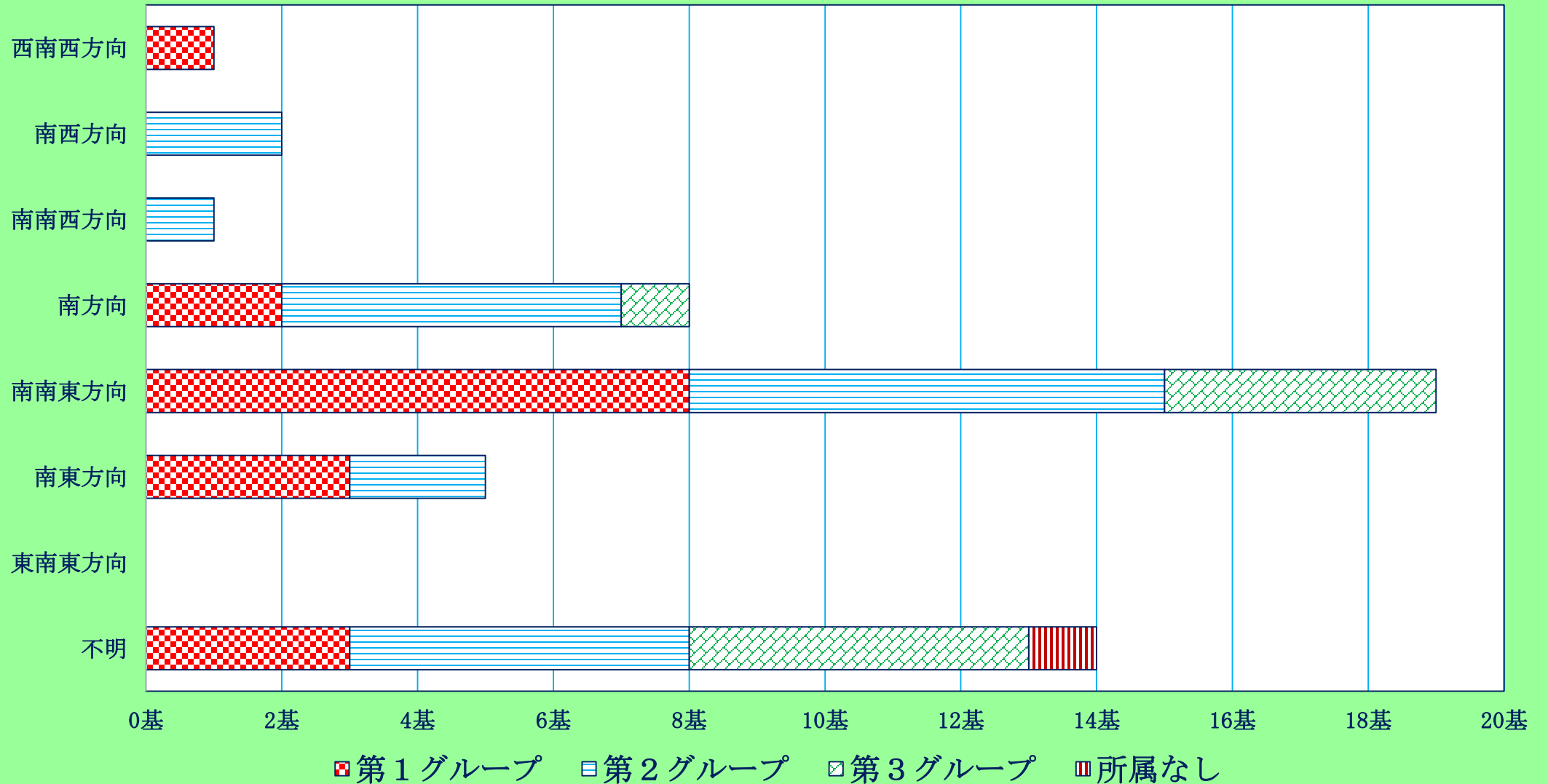
浄願寺山古墳群 高さに関する数値

G435



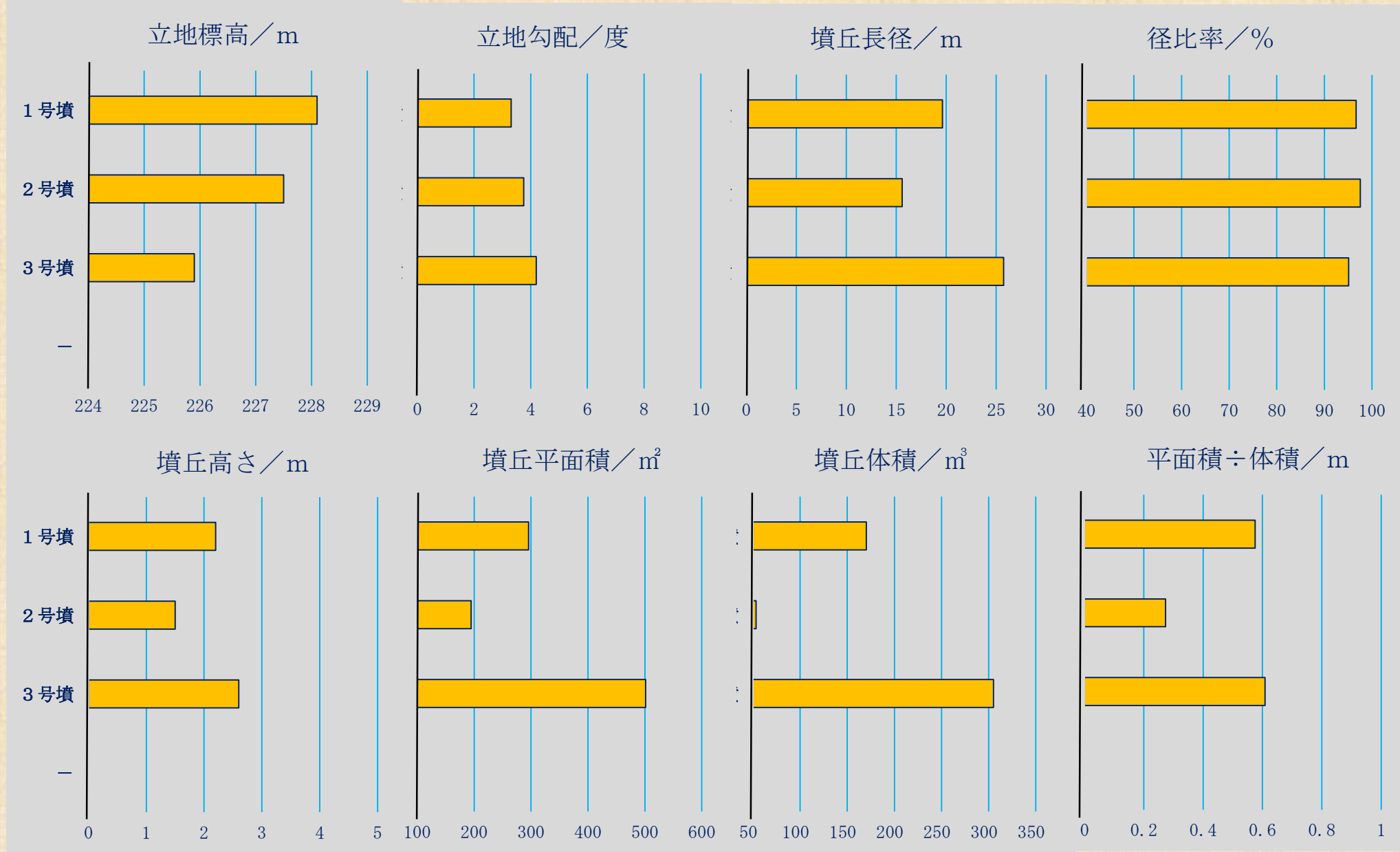
浄願寺山古墳群 横穴式石室推定開口方向

G436

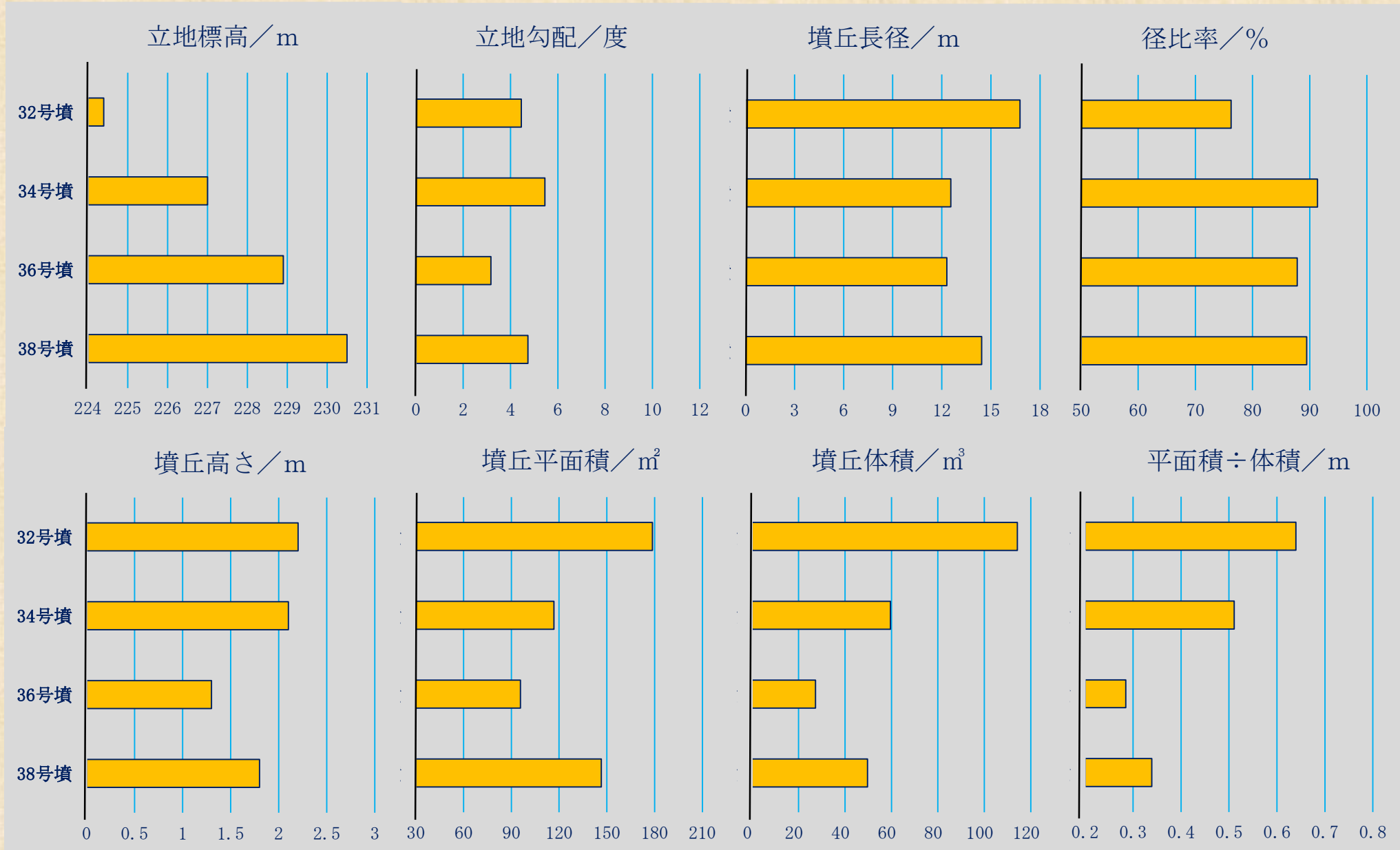


各古墳の横穴式石室の概ねの開口方向を横棒グラフで示した。

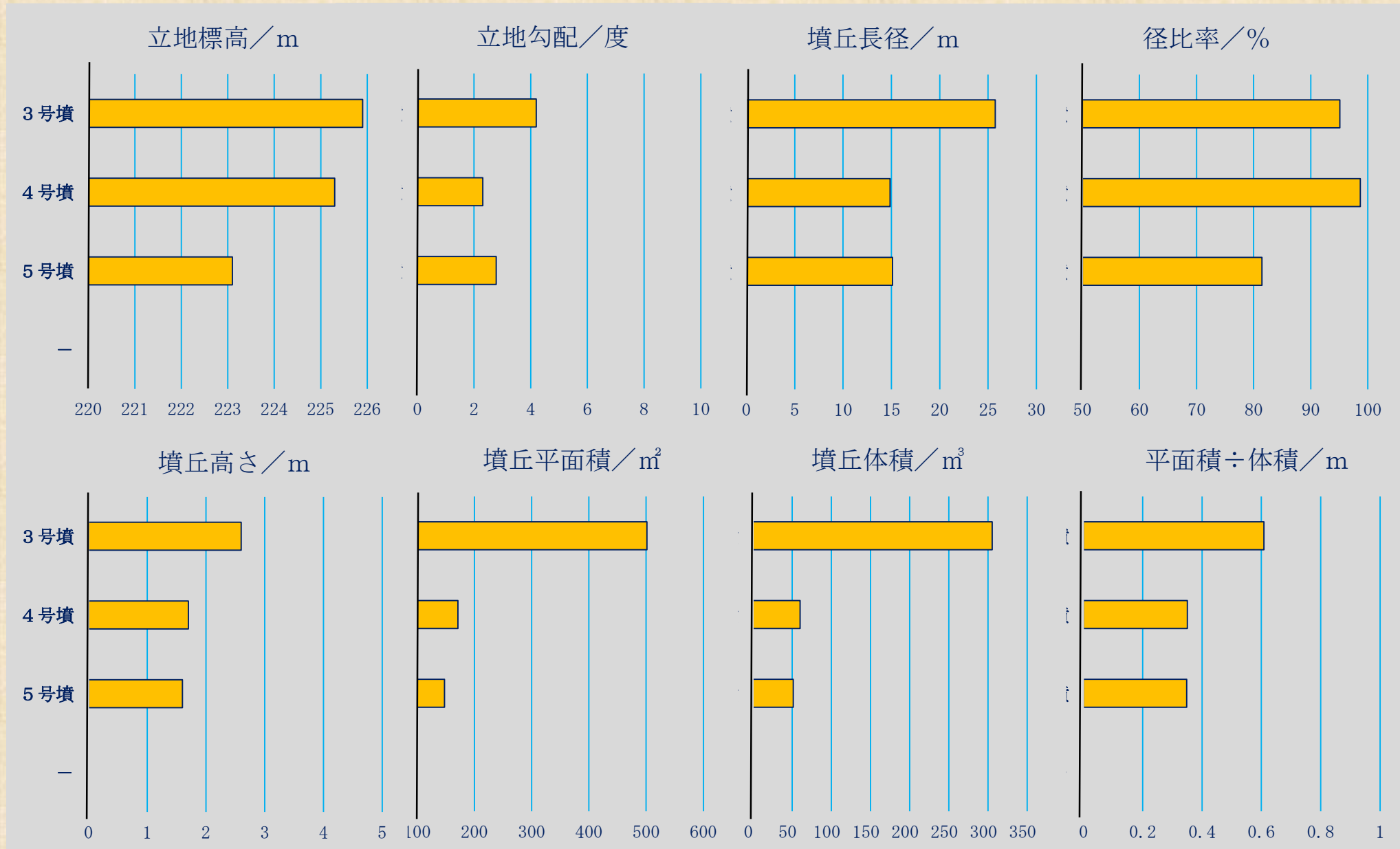
直列古墳 I (1号墳、2号墳、3号墳)



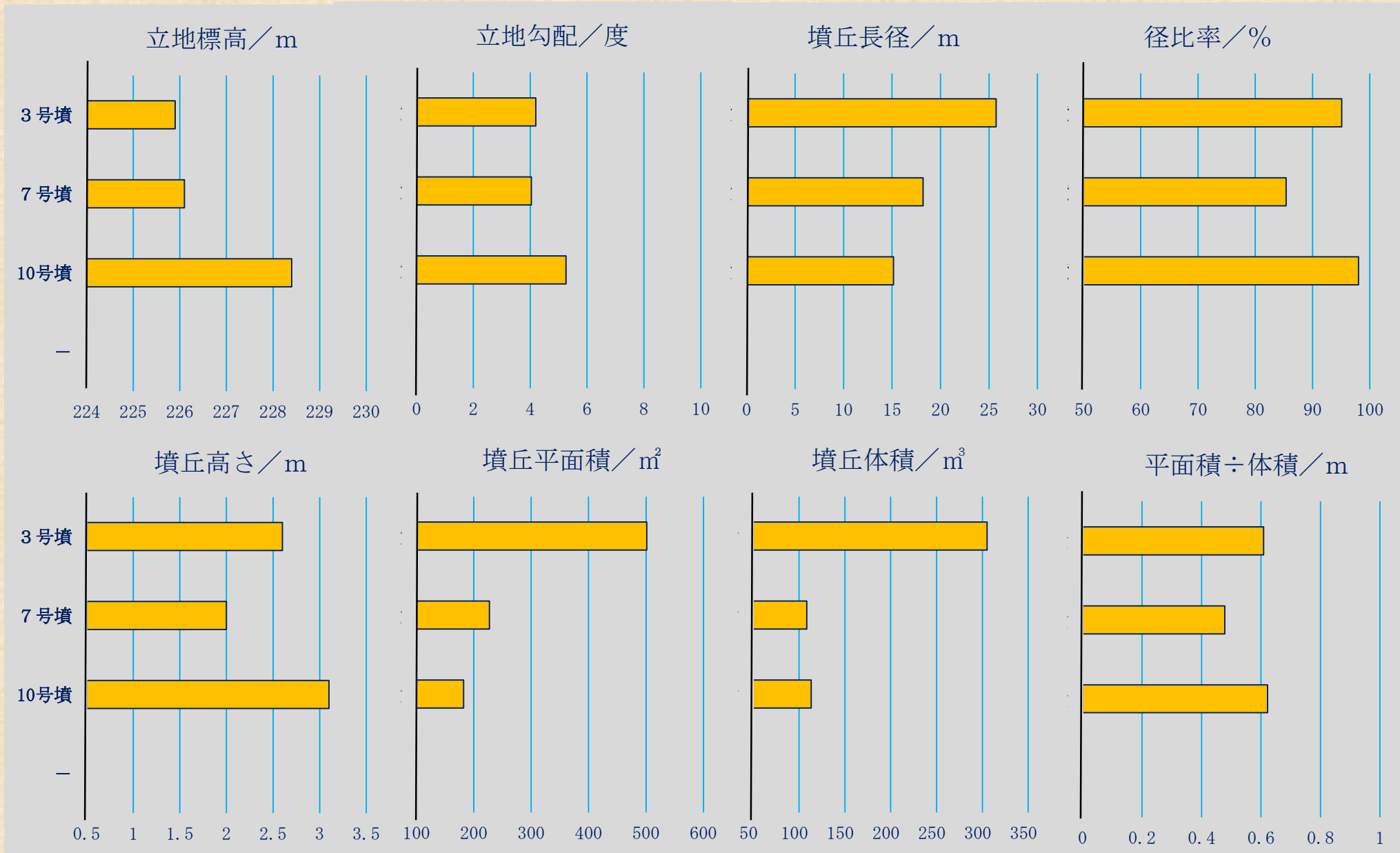
直列古墳Ⅱ（32号墳、34号墳、36号墳、38号墳）



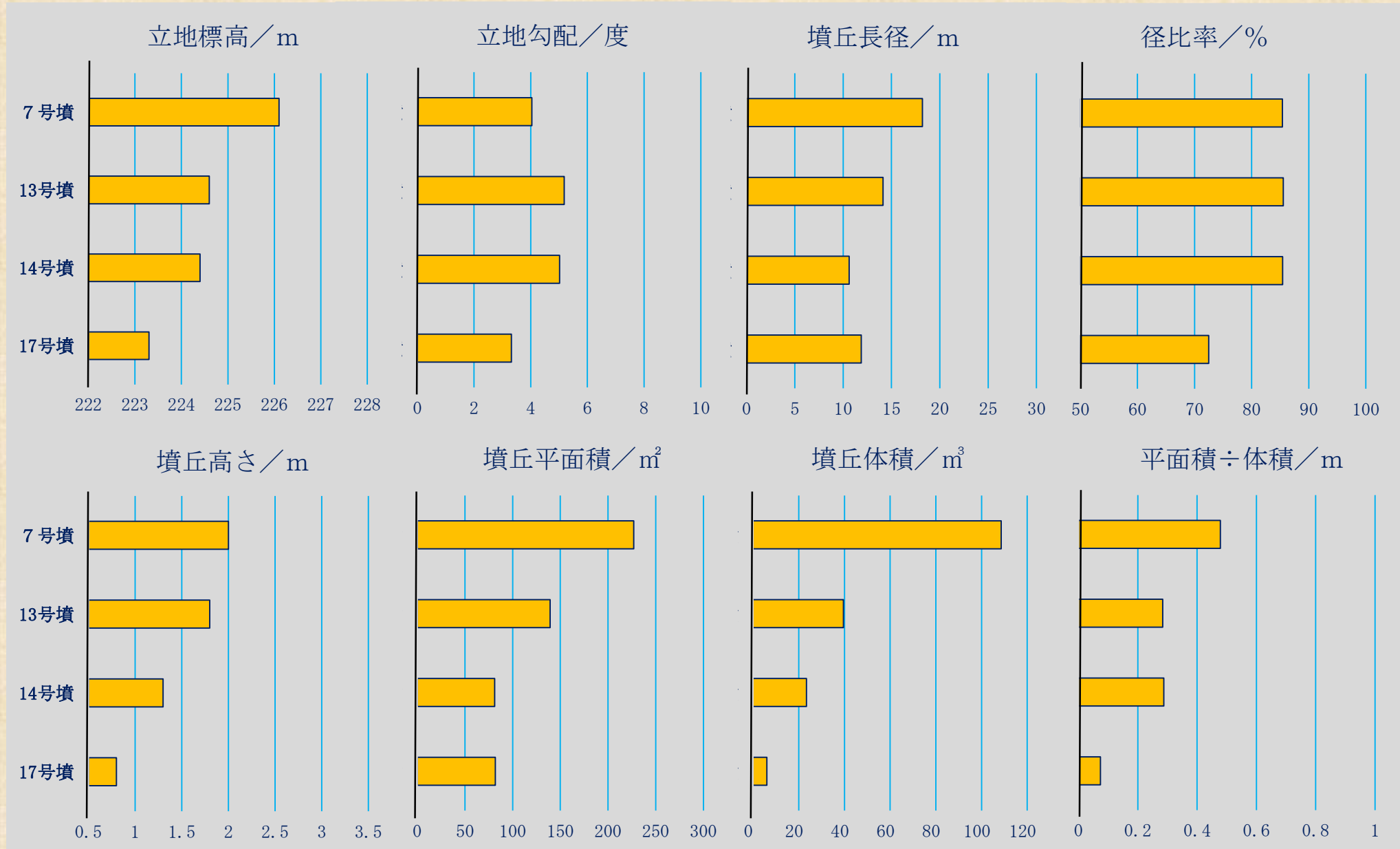
順列古墳 I (3号墳、4号墳、5号墳)



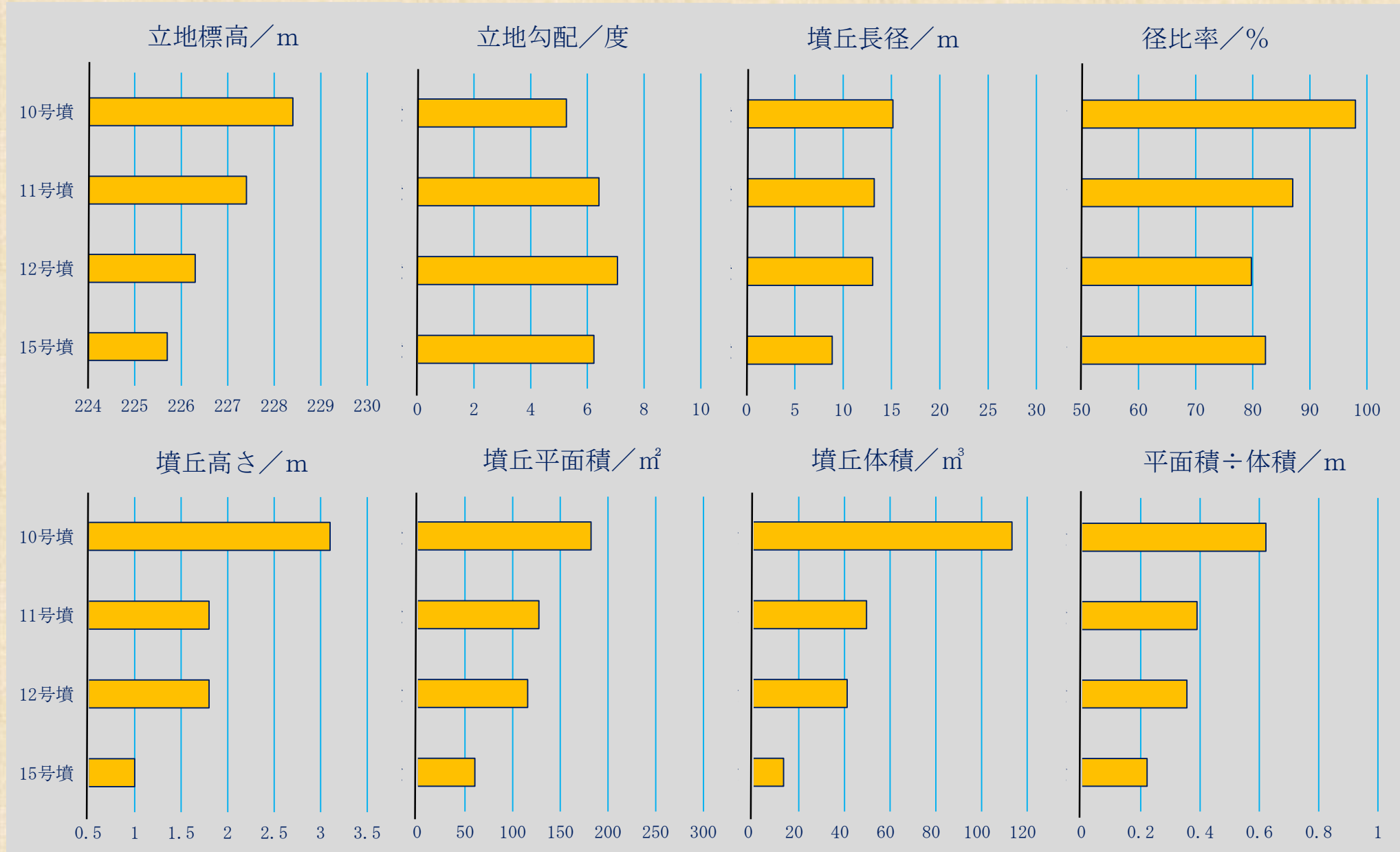
順列古墳Ⅱ（3号墳、7号墳、10号墳）



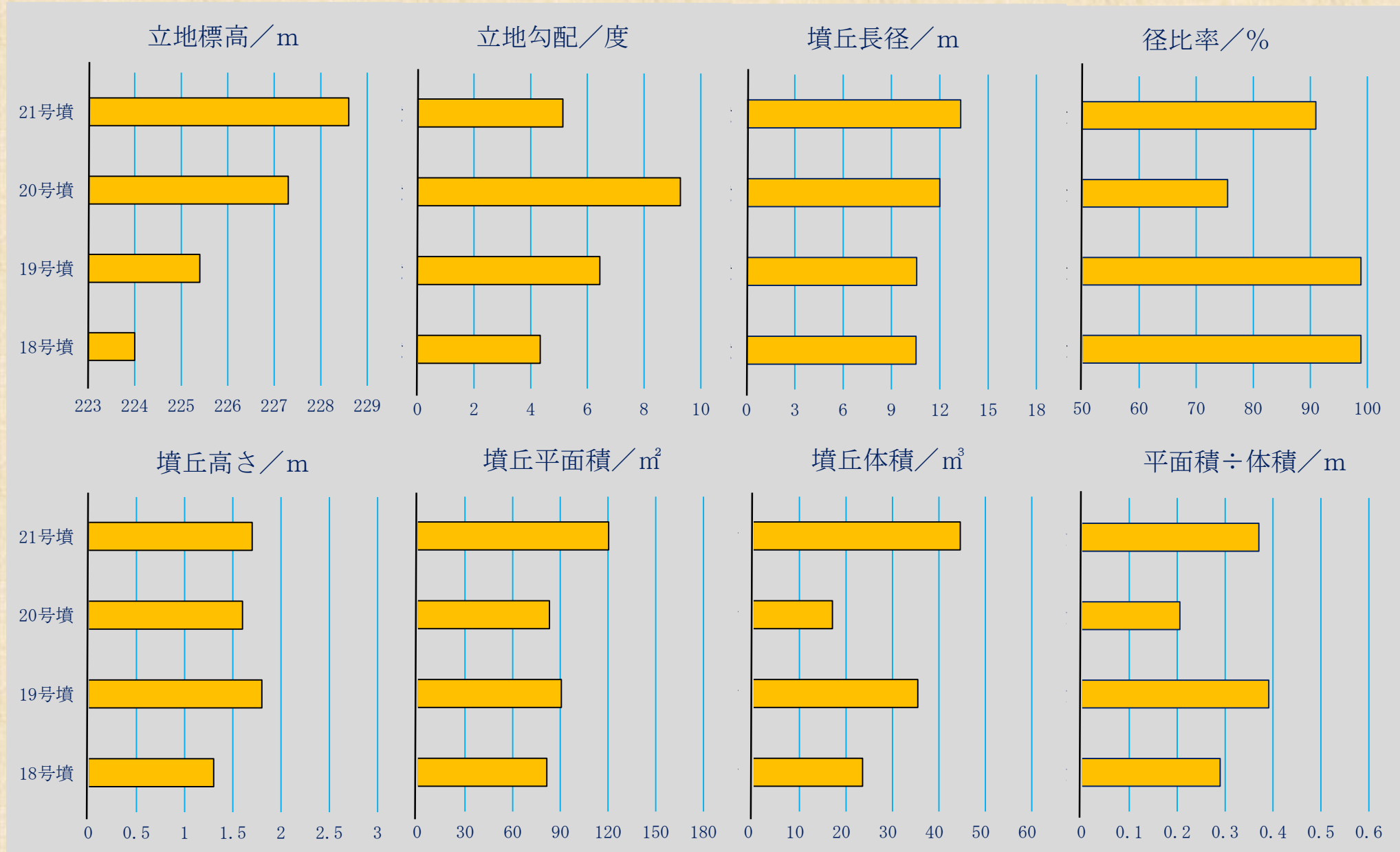
順列古墳Ⅲ（7号墳、13号墳、14号墳、17号墳）



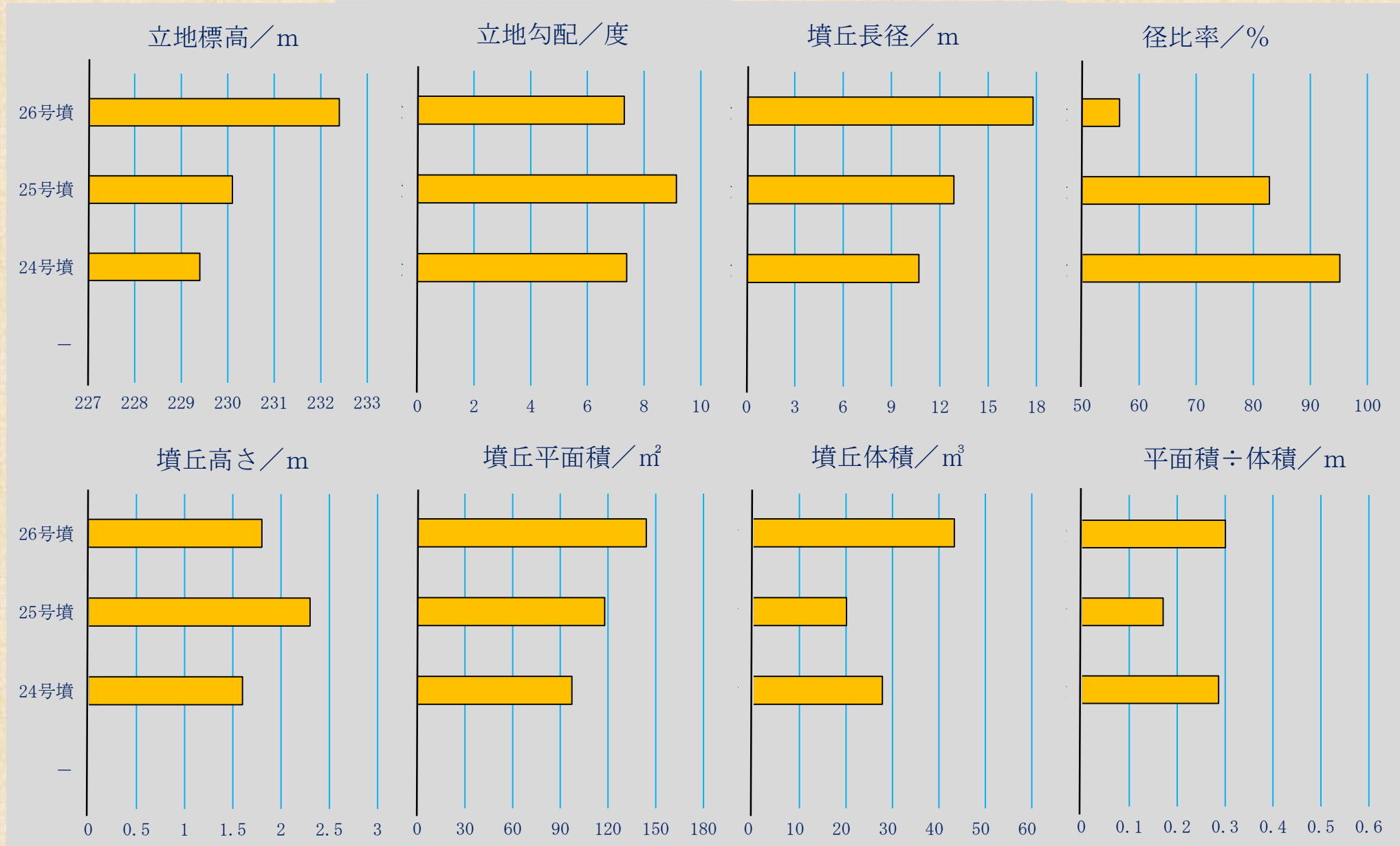
順列古墳Ⅳ（10号墳、11号墳、12号墳、15号墳）



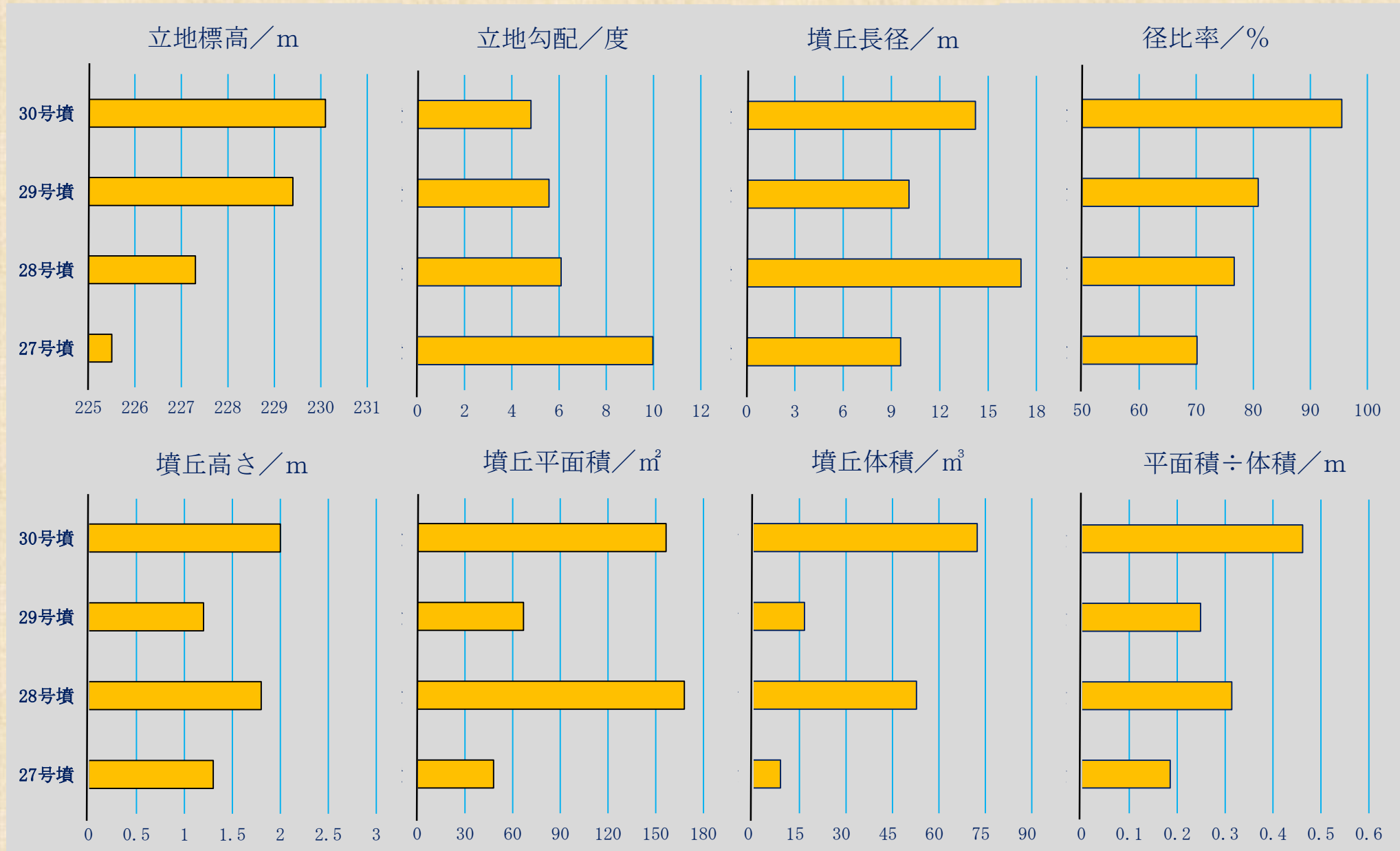
順列古墳V (21号墳、20号墳、19号墳、18号墳)



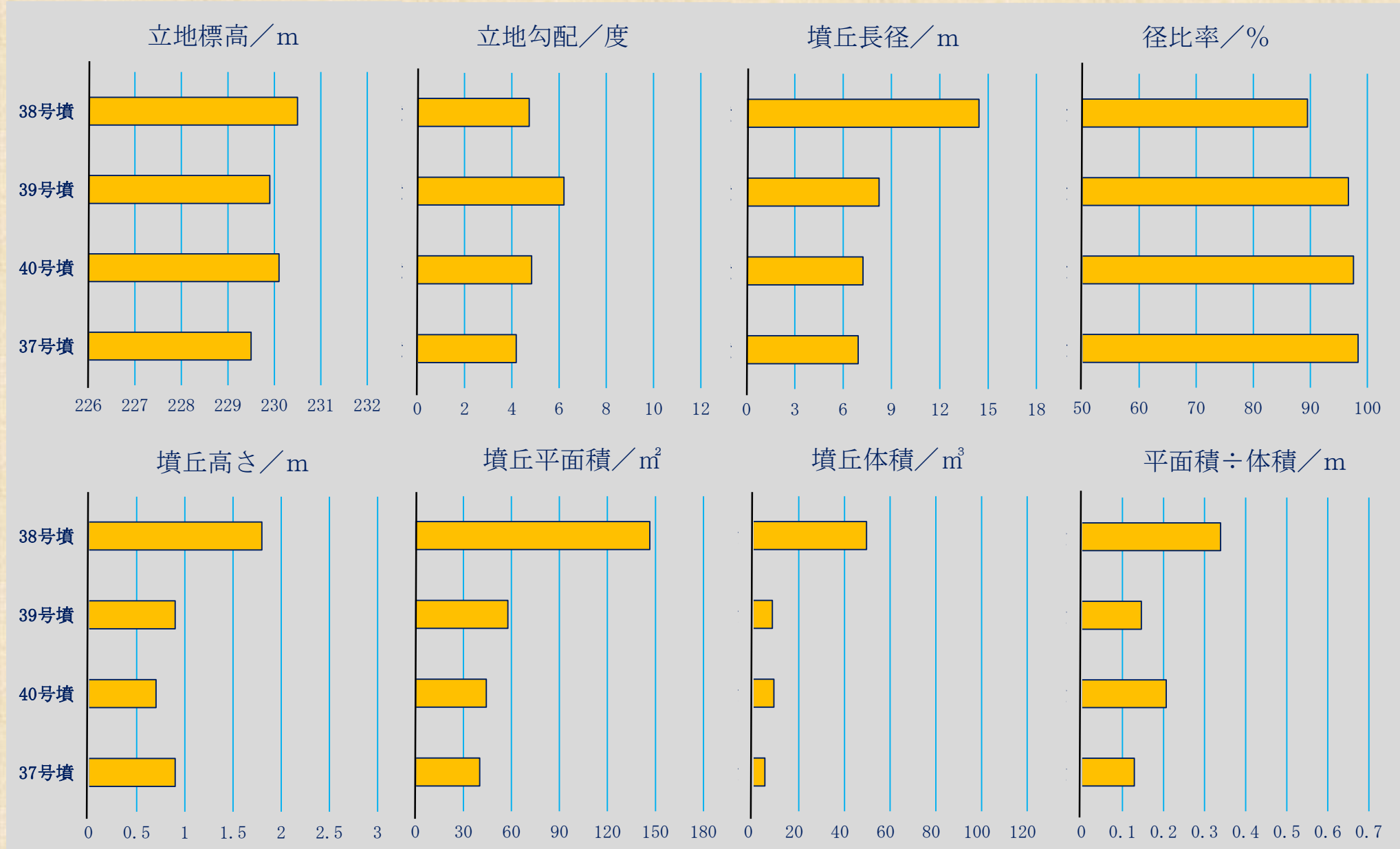
順列古墳Ⅵ (26号墳、25号墳、24号墳)



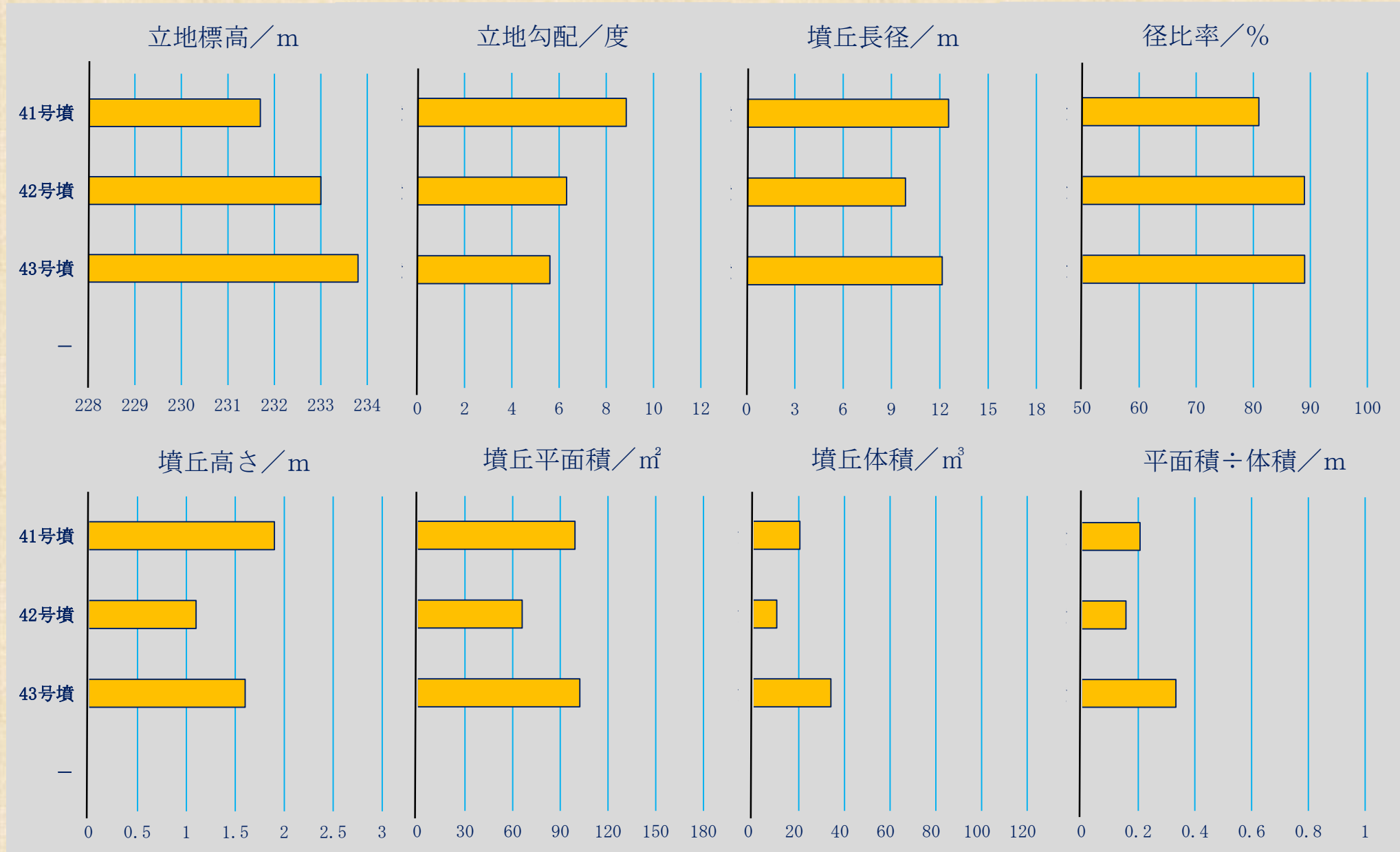
順列古墳Ⅶ (30号墳、29号墳、28号墳、27号墳)



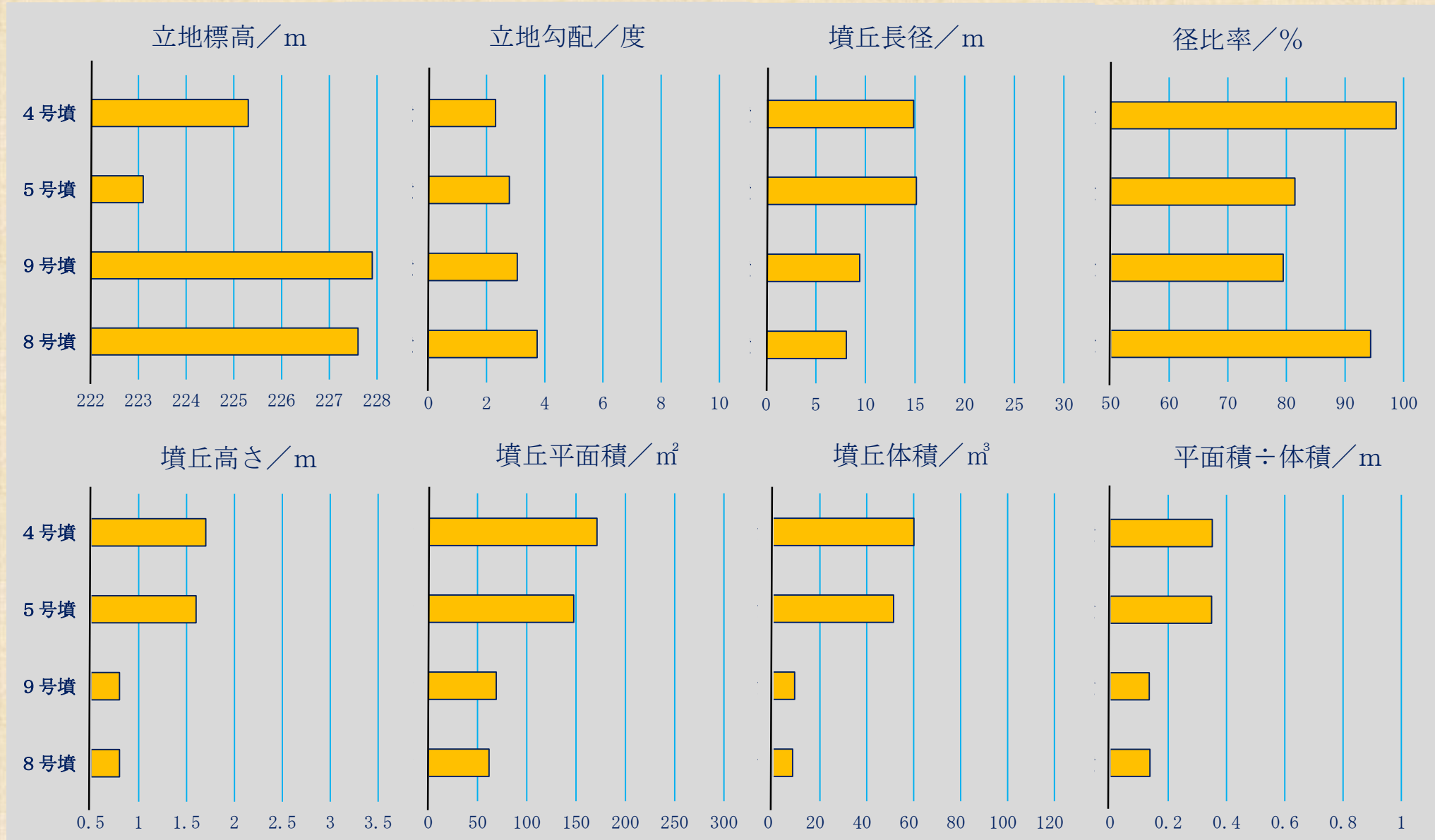
並列古墳 I (38号墳、39号墳、40号墳、37号墳)



参考 I (41号墳、42号墳、43号墳)



参考Ⅱ（4号墳、5号墳、9号墳、8号墳）



参考Ⅲ (30号墳、26号墳、21号墳)

